

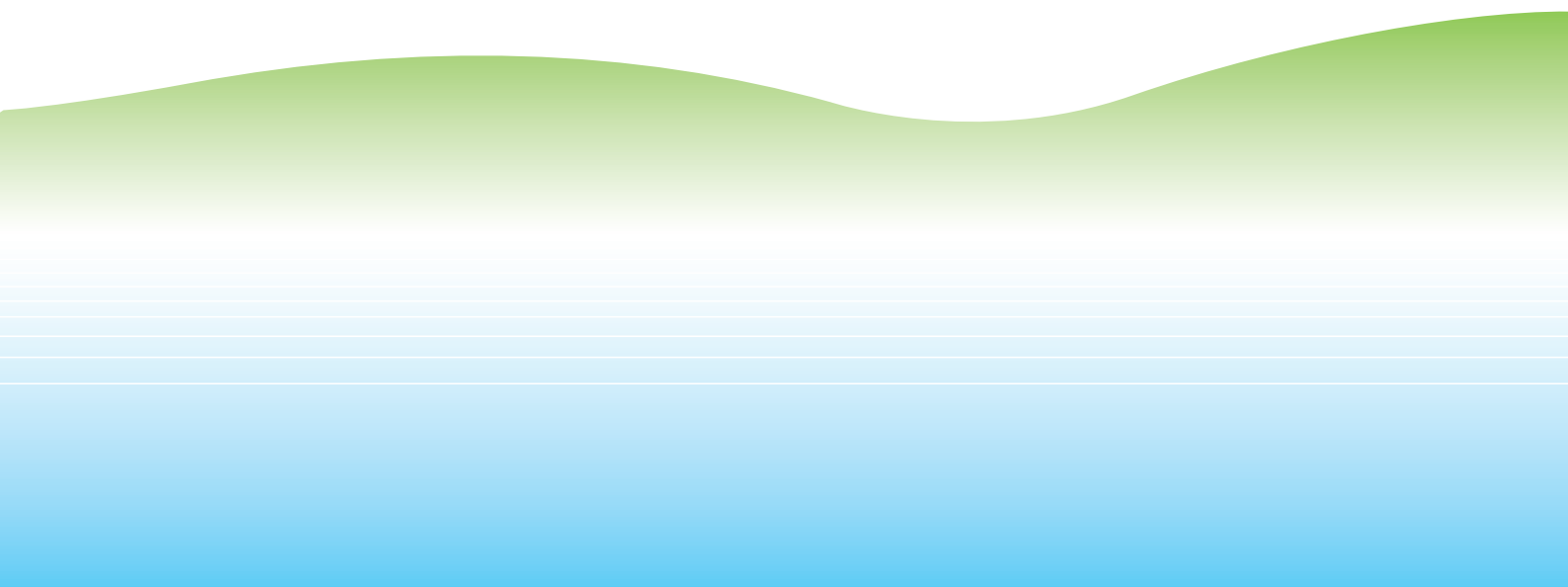
年報

京都大学フィールド
科学教育研究センター

Annual Report

Field Science Education and Research Center,
Kyoto University

No.6 2008



年 報

京都大学フィールド科学教育研究センター

第 6 号

2 0 0 8

目次

組織.....	1
教育研究部.....	2
1. フィールド研活動の記録	
(1) 主な取り組みの紹介	
1) 海域陸域統合管理学研究部門の発足.....	4
2) 神戸大学・京都大学合同市民公開講座「人と海のかかわり～人・社会・自然を考える～」.....	6
3) 第5回時計台対話集会「森里海のつながりを生物多様性から考える」.....	7
4) 徳山試験地の檜皮剥皮実験林.....	9
5) 海洋観測研究実習船「ヤンチナ」完成.....	10
6) 各学会で「森里海連環学」関連シンポジウム開催.....	11
7) 京の子どもへ夢大使派遣事業.....	13
8) 全学共通科目（リレー講義）.....	14
①海域・陸域統合管理論 ②森里海連環学 ③森林学 ④水圏生物学入門 ⑤アンケート結果	
9) 森里海連環学実習.....	20
①実習A「芦生研究林－由良川－丹後海コース」 ②実習B「紀伊半島の森と里と海」	
③実習C「夏の北海道実習」 ④アンケート結果	
10) 少人数セミナー.....	30
①C. W. ニコル“アフアンの森”に学ぶ ②フィールド実習“森は海の恋人”	
③木造校舎を造る：木の文化再生へ ④河口域の生態学 ⑤海岸生物の生活史 ⑥海洋生物の多様性	
⑦魚類心理学入門 ⑧原生的な森林の働き ⑨森のつくりだすもの	
⑩森里海のつながりを清流古座川に見る ⑪森林の再生と動態 ⑫豊かな森をめざして！	
⑬節足動物学入門 ⑭環境の評価 ⑮お魚好きのための魚類研究入門 ⑯アンケート結果	
(2) 外部資金の獲得状況.....	53
(3) 2008年度 フィールド科学教育研究センターにおける主な取り組み（日記）.....	56
2. 各施設における活動の記録	
(1) 各施設の活動概要	
1) 芦生研究林.....	61
2) 北海道研究林.....	62
3) 和歌山研究林.....	63
4) 上賀茂試験地.....	64
5) 北白川試験地.....	65
6) 徳山試験地.....	65
7) 紀伊大島実験所.....	66
8) 舞鶴水産実験所.....	67
9) 瀬戸臨海実験所.....	68
(2) 各施設を利用した学生実習等.....	69
(3) 各施設を利用した社会連携教育および野外学習等.....	72

3. フィールド研教職員の活動の記録

(1) 新人紹介.....	75
長谷川 尚史 准教授	
伊勢戸 徹 特定助教	
向井 宏 特任教授	
佐藤 真行 特任准教授	
(2) フィールド研関連事業における活動	79
(3) 研究成果.....	88
(4) 教育活動.....	111
(5) 学会等における活動.....	117
(6) 社会貢献活動.....	119
(7) 国際活動.....	125

4. 資料

(1) 職員配置表.....	129
(2) 常設委員会名称及び委員一覧	130
(3) 全学委員会等.....	130
(4) 運営委員会.....	131
(5) 協議委員会.....	131
(6) 新聞・雑誌等に掲載された記事	132
(7) 各施設利用者数.....	135
(8) 人事異動.....	136
(9) 規程の改正等.....	136

● ● ● 組織 ● ● ●

■ センターの組織

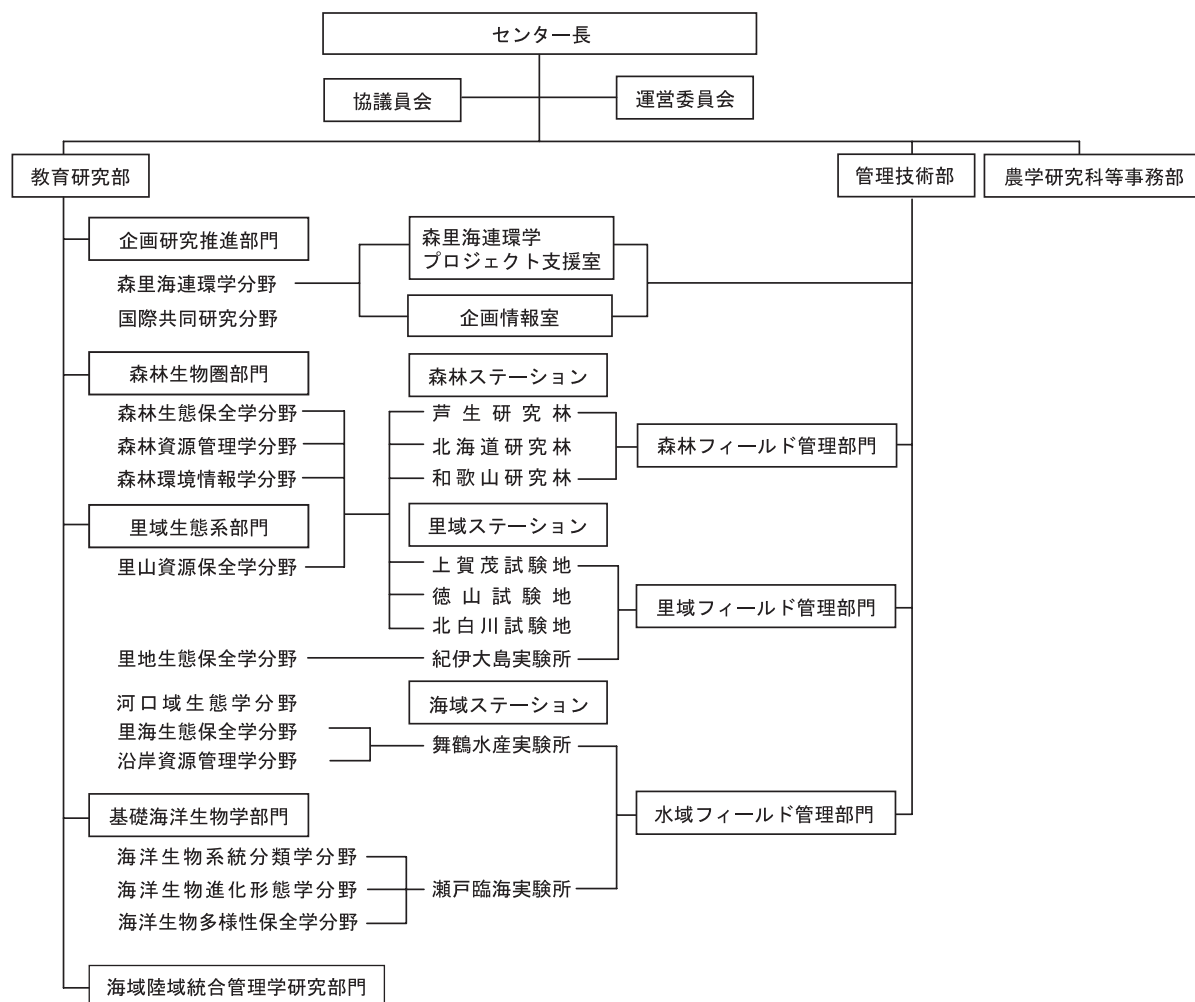
教育研究部と管理技術部からなる。センター本部は本学北部キャンパスに置かれ、森林、里域、海域の各ステーションを構成する9の施設が、太平洋側から日本海側に至る近畿圏を中心に広域に位置する。

■ 教育研究部

企画研究推進部門、森林生物圏部門、里域生態系部門、基礎海洋生物学部門、海域陸域統合管理学研究部門（2008年10月新設）の5部門、13分野から構成されている。森－里－海の連環を軸とした教育・研究を進める。

■ 管理技術部

森里海連環学プロジェクト支援室、企画情報室と、森林、里域、水域の3フィールド管理部門、9施設からなる。フィールドの管理・運営および基礎情報の収集、情報管理、技術開発、教育研究支援を行う。



● ● ● 教育研究部 ● ● ●

企画研究推進部門

森里海連環学分野と国際共同研究分野から構成される。センターが共通の理念の下に機能的に統合化され、森－里－海連環学の創出を目指す。さらに、国際的にもオープンな組織へ自己革新するための役割を担う。とくに、来るべき環日本海時代を展望した日・中・韓の国際共同研究や、異質気候帯における比較研究のための東南アジア熱帯域における共同研究の展開を図る。

森里海連環学分野

森林域、里域および沿岸海洋域を対象として、隣接する生物圏相互の関連に焦点を当てた研究部門間の共同研究を促進する。多様な共同研究を基礎に、森－里－海の連環に関する研究プロジェクトを企画し、全国の関連研究機関との連携の下、新たなフィールド科学の創出と展開を図る。

国際共同研究分野

東アジアならびに東南アジアを主なフィールドとして、陸域と海域の連環を柱とした地球環境問題に関する国際共同研究を展開し、海外における連携拠点の構築を図る。当面は、世界規模で展開される沿岸域の生物多様性の総合調査（NaGISA・CoML）のリーダーとしての活動を通じて、国際共同研究の基盤を固める。

森林生物圏部門

本部門では、森林科学ならびに森林資源科学に関する大学院レベルの多岐にわたるフィールド研究ならびに教育が行われている。具体的には、森林資源情報学の統合的理解とシステム解析、自然環境や生態的構造、社会経済的状况に基づく森林景観の機能的評価と空間ゾーニング技術、持続的森林資源管理技術の体系化、林学的観点からの森林資源上の持続性と生態系としての生産性の向上、が含まれる。

森林生態保全学分野

森林生態系が示す種・個体（遺伝子）、個体群、群集、集水域、景観といった階層性に注目し、各階層における多様性とシステムの形成維持メカニズムや多様な森林生物種の生活史の解明を主とした教育研究を行う。また野外操作実験を実施し、森林生態系の保全と生物資源の持続的な再生利用のための手法の提示も目指す。

森林資源管理学分野

森林が有する環境、生物、文化としての資源の機能を評価し、これに基づく森林資源の持続的な管理理論の構築と管理技術についての実践的な教育研究を行う。特に当面の課題としては、近年、フィールド研が木文化プロジェクトとして展開しつつある、管理圧の低下から荒廃しつつある人工林・二次林の持続的管理手法の確立に向けた研究を行う。

森林環境情報学分野

持続可能な森林管理に向けて、環境影響評価基準・指標の定量化、GIS／GPSによる森林利用機能区分、LCI／LCAによる環境低負荷型生産技術、森林認証・ラベリング等を中心とした実践的・問題解決型研究を展開する。

里域生態系部門

山間部から沿岸部に至る広く、変化に富む地域は、人間の関与が様々な強度で継続しており、自然と人間の相互作用、もしくは人間と自然との共生によって生み出される特有の生態系を形成する。この生態系には、農業、林業、水産業という人間の生活を維持するために必要な基本的な生業による二次的自然が含まれるほか、居住域としての農山漁村や都市も含まれる。これらの人間が与えるインパクトを把握することは、現在の地球環境問題の本質の把握にも通じるものであり、本部門ではそのために不可欠な人間－自然相互作用環の解明を多くの視点から実践し、その共生システム構築のための教育研究を行う。

里山資源保全学分野

生活圏に接する森林において、人間との相互作用により成立した生態系の特性や機構を明らかにするとともに、多面的なアプローチから、生物多様性および森林の保全、森林と人間との新たな共存に向けた幅広い教育研究を行う。

里地生態保全学分野

人里と一部に里山と里海を含む、いわゆる里地に分布する攪乱依存性植生ならびに攪乱依存性植物の起源と歴史および生態的特性を明らかにし、それらの管理保全体系ならびに持続的利用に関する考察を行う。

河口域生態学分野

陸域と海域の接点にあたる河口域は、多くの海洋生物の再生産に極めて重要な場であり、生物多様性の宝庫でもある。しかし、一方では人間の生活と生産活動の様々なインパクトが集積する場所でもある。有明海などのモデル的な河口域を対象に、資源生物学的ならびに保全生態学的教育研究を行う。

里海生態保全学分野

陸域からの影響も含めた沿岸域の環境特性を把握し、生息する資源生物の生産生態との関係を解明する。とくに、藻場、砂浜域、干潟域などでの仔稚魚の分布、行動、摂餌、成長、生残等を明らかにし、魚介類の成育場としての里海の役割を定性、定量的に評価する。

沿岸資源管理学分野

若狭湾西部海域をフィールドとして主要な資源生物の個体群動態を研究し、海洋環境構造や海況変動の影響を明らかにする。さらに、資源生物の分類と生活史・生態特性を調べ、それらの資源変動機構の解明に取り組む。

基礎海洋生物学部門

本部門では、主に温帯性海産無脊椎動物を材料として用い、分類学・進化生物学・発生生物学・生理生態学・生物地理学といった様々な基礎生物学的な研究教育活動を、分子レベルから生態系レベルにわたって広範囲に展開している。更にその研究フィールドを熱帯域・北方域へと地球規模に広げながら、環境生物学や保全生物学といった応用的な領域へと、その研究教育活動の内容を拡大している。

海洋生物系統分類学分野

系統分類学は、生物の多様性を認識する基本であり、1922年の瀬戸臨海実験所の創設以来、連綿と続けて来た研究分野である。海洋生物の多様性は非常に高く、多くの未知の事柄が残されている。このような多様性の包括的な解明を目指して教育研究を行う。

海洋生物進化形態学分野

形態観察は、生物の多様性を認識するために必須の作業である。本分野では、最新の装置を用いた精密な比較・機能形態学的研究や、分子生物学的手法による形態形成のメカニズムを解明する研究と教育を行う。

海洋生物多様性保全学分野

海洋生物の多様性を保全するために、多様な生物が環境の変動に対してどのように反応するのかを明らかにするとともに、瀬戸臨海実験所島島実験地における30年以上にわたる長期観察や、地球規模の環境変動を把握するための国際共同研究の中核的役割を果たす。

海域陸域統合管理学研究部門

センターが推進してきた森里海連環学を研究と教育に生かし、学問分野として確立すること、そして、この考え方を実践し、行政や市民の運動に浸透させることを目的とし、日本財団からの提案と助成によって2008年10月に発足した。

●●● 1. フィールド研活動の記録 ●●●

(1) 主な取り組みの紹介

1) 海域陸域統合管理学研究部門の発足

海域陸域統合管理学研究部門 向井 宏 特任教授

京都大学フィールド科学教育研究センターは2003年に発足し、部局の教育・研究の柱として、森から海までの生態学的なつながりを解明する「森里海連環学」の創生をめざした。日本財団は、「森里海連環学」の視点を高く評価し、全学共通教育科目として森里海連環学を基礎として陸域と海域の総合的な生態系管理を教育する「海域・陸域統合管理論」に対して、2005年度より助成を開始した。また、2006年度には、同様に全学共通教育科目である「森里海連環学」、およびこれらをフィールドで実体験させる「森里海連環学実習」についても助成を決定した。さらに、2007年度には、上記助成科目の教科書として、「森里海連環学－森から海までの統合的管理をめざして」を京都大学学術出版会から刊行した。このような京大フィールド研と日本財団のつながりの中で、これまでの森里海連環学に関する教育・研究をさらに充実させることを目的として、日本財団より助成部門の提案があった。

日本財団からの提案と助成によって、2008年10月から「海域陸域統合管理学研究部門」が発足した。当部門には教員を2名配置し、特任教授に向井 宏、特任准教授に佐藤真行が着任した。そのほか、教務補佐員に杉本亮が採用されたが、2009年3月いっばいで退職、福井県立大学に就職した。さらに、事務補佐員として麻生佳穂里がいる。

この研究部門は、フィールド科学教育研究センターが進めている森里海連環学を研究と教育に生かし、学問分野として確立すること、この考え方を教育し、行政や市民の運動に浸透させることを目的としている。沿岸域の統合的管理を進めるためには、陸上生態系と沿岸生態系の相互作用を明らかにし、しかも人間の関わり方を生態系との関係から考えていくことが必要と考えられる。沿岸域の統合的管理という言葉はいろいろな意味で使われているが、当部門で目指す統合管理とは、森里海連環学にほかならず、その統合管理の指標として、沿岸の生物多様性を保全することを目的としている点で、これまでの統合的沿岸管理では語られてこなかった分野を目指している。

上記の目的のために、海域陸域統合管理学研究部門ではいくつかの河川とその流域および沿岸域を対象とした森里海連環学の研究を行っている。2008年現在では、由良川と別寒辺牛川についての研究が行われた。今後仁淀川での研究をフィールド研の木文化社会創出プロジェクトと関連させて行う予定であり、また、ダムの問題に関して、新たなフィールドを計画中である。

一方、教育の面では、「海域陸域統合管理学」「森里海連環学」「森林学」を一般教養教育としてフィールド研教員らの協力を得て実施し、当部門がそのマネジメントを行った。また、森里海連環学実習として、A. 由良川、B. 古座川、C. 別寒辺牛川を対象として、別寒辺牛川は京都大学北海道研究林－北海道大学厚岸臨海実験所、古座川は北海道大学和歌山研究林－京都大学紀伊大島実験所を拠点に、一般教養教育として北海道大学と合同で実習を行った。

また、当部門では、森里海連環学を一般社会にも発信するために、二種の市民講座を行った。一つは神戸大学と合同で行った合同市民公開講座で、2008年度は二度行った（次項参照）。一方、地方で地元の人と一緒に流る流域の森里海連環を考える地域連携講座を2009年3月に北海道厚岸で行った。厚岸町では同様の講座としては過去最高の聴衆が参加したといわれ、厚岸町でのその後の河畔林植樹などの行事でも参加者が急激に増加するなど、地域連携講座の効果を感ぜさせる結果となった。

当部門では、森里海連環学を通じた生物多様性のための統合的沿岸域管理についてより最新の研究に根差した学術的知見に関する意見交換の場を設けるという意図をもって、2008年11月から、「海域陸域統合管理学セミナー」を毎月1回の頻度で開催している。このセミナーは、教員・研究員、院生・学部生を問わず、また文系・理系を問わず、多様な人々が自発的に参加し、各自の学術研究の成果を吟味し合い、自由闊達に意見交換して、「海域陸域統合管理学」という新たな学問領域を開拓しようとするものである。第1回は杉本亮による「内湾域の富栄養化と物質循環～伊勢湾を例にして～」、第2回は佐藤真行による「環境の経済分析とプロジェクト評価」、第3回は向井 宏による「バナナとエビとジュゴン」と題する話題が提供された。さらに、第4回は鎌内宏光（フィールド研・研究員）の「森林生態系と海洋生態系が河川に与える影響」、第5回は三田村 啓理（情報学研究科・助教）の「バイオリギングで観る水圏生物の行動」で

あった。当部門は既存の学術分野の境界を超えた取り組みを指向しており、その前提となる相互理解のためにも、このセミナーは一定の役割を果たすだろうと期待している。少しでも関心のある方はぜひ一度、参加していただきたい。

さらに、当部門は近い将来、アジアに向けて人材育成の拠点を目指しており、その足がかりに、2010年1月に統合沿岸域管理に関する国際シンポジウムを開催することを決めて、その実行委員会をセンター長を委員長として発足させ、準備を始めている。(肩書等は当時のもの。以下同様。)



森里海連環学実習Cにおける実習風景（北海道標茶・厚岸）



地域連携講座（北海道厚岸町・3月）



京都大学フレーム構法（仮称）による連携研究推進棟



第4回海域陸域統合管理学セミナー（2月）

2) 神戸大学・京都大学合同市民公開講座 「人と海のかかわり～人・社会・自然を考える～」

海域陸域統合管理学研究部門 佐藤 真行 特任准教授

日本財団の助成を受けて、京都大学フィールド科学教育研究センター（フィールド研）は2008年度に、神戸大学大学院海事科学研究科と合同で2回の市民公開講座を行った。同年度にフィールド研は、海域陸域統合管理学研究部門を発足させ、海洋・沿岸海域の健全な環境保全、そしてそれに連環する陸域の適切な管理を目指して教育と研究の推進を開始した。フィールド研が目指す森里海の連環には様々な主体が含まれるため、大学内だけの活動に留まらず、政府、市民団体、企業など関連する諸主体との積極的な連携も重要となる。とりわけ、これら主体を直接支えている市民から十分な理解を得ることがすべての基盤になると考え、今年度は京都市で市民公開講座を2回行った。

第1回は「海上輸送と生物多様性」をテーマに行われた。海域における人間行動として、特に船舶による物資の輸送に着目し、それがいかに海洋の生物多様性に影響を与えているかが解説された。そこでは、貿易の拡大に伴う海上輸送の急増、それが引き起こす海域生態系に与える諸問題が議論された。第2回は「河川・海洋における化学物質の管理」をテーマとして開催された。第1回には船舶の塗装などに使う化学物質の問題などにも議論が発展していたため、テーマには連続性があった。河川を通じて海域に与える人間活動の影響として、医薬品の使用など市民の行動が積み重なって起こる問題などが取り上げられ、水質保全についての一人一人の関わりが身近なものとして理解が深められた。1回目には約70名、2回目には約60名が参加した。いずれの回も、講演者からの分かり易い解説と参加者からの積極的な質疑応答が得られた。アンケートの集計結果によると、各回の参加者は高い満足をもって帰宅されたことがわかる。

第1回 『海上輸送と生物多様性』

日時：2009年1月31日(土) 13:30～16:30 /会場：メルパルク京都

講演1「船舶バラスト水問題」 三村 治夫（神戸大学大学院海事科学研究科）

講演2「密航する海の生物たち：外来海洋生物の日本での現状と対策」 岩崎 敬二（奈良大学教養部）

パネルディスカッション 三村 治夫、岩崎 敬二、山下 洋（京都大学フィールド研）、石田 廣史（神戸大学大学院海事科学研究科）、司会 向井 宏（京都大学フィールド研）

第2回 『河川・海洋における化学物質の管理』

日時：2009年3月14日(土) 13:30～16:30 /会場：メルパルク京都

講演1「日常生活に由来する新しい汚染」 田中 宏明（京都大学大学院工学研究科）

講演2「海で意図的に使用される化学物質は環境に安全か？」 岡村 秀雄（神戸大学大学院海事科学研究科）

パネルディスカッション 田中 宏明、岡村 秀雄、吉岡 崇仁（京都大学フィールド研）、石田 廣史（神戸大学大学院海事科学研究科）、司会 佐藤 真行（京都大学フィールド研）



里山資源保全学分野 長谷川 尚史 准教授

今回の時計台対話集会は三部構成で行った。白山義久フィールド研センター長と尾池和夫京都大学総長の挨拶で開会し、第一部の講演会では、京都大学の卒業生であり、国民森林会議会長を務められている只木良也名古屋大学名誉教授から「原生林も里山も地域の宝」、北海道大学厚岸臨海実験所長時代に京都大学と北海道大学との合同学生実習「森里海連環学実習」を創設された向井宏北海道大学名誉教授から「水と砂の流れと生物多様性」と題して、それぞれ講演をいただいた。両氏の長年の貴重な研究成果に加え、これからの自然との付き合い方について、ご自身の豊富なフィールド経験を交えた大変奥行きのある話題提供を通し、生物多様性の定義と意義、さらにその幅の広さについて考える上で重要な基調講演となった。第一部終了後には長めの休憩を取り、多くの参加者に同時開催のフィールド研および生態研の施設と研究紹介に関するパネル展示をご覧いただいた。

時間の都合で詳細な議論には至らなかったが、芦生や舞鶴などフィールド研の有するフィールドでの生物多様性の変化や、琵琶湖での生態系の変化、琵琶湖－淀川水系での地域住民や自治体、各種団体を含めた流域ガバナンス（統治）の取り組みなど、最先端の研究や社会貢献に関する興味深い話題が提供された。

最後に高林純生生態研センター長に挨拶いただき、第5回時計台対話集会は閉会した。今回の時計台対話集会は、これまでと違ってややアカデミック色の強いものになり、当初は集客が疑問視されたが、最終的に280人も参加者に来場していただいた。話題が絞りきれなかったことなど反省点も多々あるが、これらは次回以降の時計台対話集会で改善していきたいと考えている。





白山 フィールド研センター長の挨拶



尾池和夫 総長の挨拶



パネルディスカッションの様子



質問に答える向井 宏 北海道大学名誉教授(右)と
只木 良也 名古屋大学名誉教授



高林 生態研センター長の挨拶



パネル展の様子

4) 徳山試験地の檜皮剥皮実験林

森林資源管理学分野 坂野上なお 助教

1997 年、徳山試験地（山口県周南市徳山）のヒノキ人工林に^{ひわだ}檜皮剥皮実験林が設置された。設置目的は、文化財建造物などの屋根葺き材として使われる檜皮＝ヒノキの樹皮をヒノキ立木から採取することが、ヒノキ材の成長や材色にどのような影響を及ぼすのか、を明らかにすることである。この実験林を利用した研究は、京大フィールド研と東京大学、北海道大学、九州大学および文化財保護に関わる研究者らからなる研究組織により受け継がれ、現在は東京大学新領域創成科学研究科の山本博一教授を代表とする科学研究費助成金(基盤研究(A))「文化財建造物の保存に必要な木材及び植物性資材の安定確保の基礎的要件に関する研究」の一部として進められている。徳山試験地のほか東大の千葉演習林、北大の和歌山研究林、九大の福岡演習林での同様の実験結果と併せて、分析がおこなわれている。

まず、檜皮の採取作業について説明しておこう。檜皮の採取は、専門の職人が木製のへらを使って、ヒノキの立木から樹皮を剥いて行うものである。このとき職人は、形成層を傷つけないよう注意を払いつつへらを入れて檜皮を剥いてゆく。剥皮直後のヒノキは、真っ赤な薄皮にのみ覆われた、暗い林の中でひととき目を引く姿である。剥皮作業は、概ね樹齢 80 年以上の大径木に対して行われ、いったん剥皮を行ってから十年ほど経つと樹皮が再生し、ふたたび檜皮の採取が可能になる。伝統的には、檜皮剥皮を専門とする職人＝^{もとかわし}原皮師が、立木所有者に檜皮を採取する許可を得て剥皮を行い、ある場所での剥皮作業が終わると、また別の山に移りその山の所有者の許可を得て檜皮を採取する、というようにして檜皮を集めていたようである。

ところが近年、剥皮作業によって木部の成長が阻害されるのではないかと、材色が悪くなって、最終的に伐採して木材を販売する際に安い値で売らなければならないのではないかと不安を感じる立木所有者もいて、檜皮の剥皮に協力が得られにくくなっている。檜皮で葺かれた屋根は、数十年に一回は葺き替えが必要である。日本の重要文化財建造物のうち檜皮葺は 700 棟余りあり、これらの葺き替えに必要な檜皮を確保するのが困難ともなれば、文化財建造物を保存・維持していくための障害となりかねない。檜皮剥皮が立木にどの程度影響を及ぼすのかを科学的に検証したうえで、もし木部の成長や材色への影響がないことが明らかになれば、檜皮採取に消極的な立木所有者に懸念を払拭してもらえ、ひいては文化財の保存・維持のため、檜皮の安定供給への道を拓くことができよう。檜皮剥皮実験林の設置には、このような背景があった。

これまでの研究成果によると、檜皮剥皮によって木部の肥大成長が抑制されることはないことが示唆され、材色への影響もないことがわかっている。剥皮直後、樹幹表面のへらを差し入れた部分に傷跡のようなものがみられたが、7 年後にはその痕跡は消えていた。また剥皮された樹幹の所々に樹脂滲出が観察されたが、光学顕微鏡での観察によれば、それらの部位に傷害組織や特異な構造は観察されず、師部への剥皮の影響もとくにないと考えられている。

参考：木造建造物文化財の為の木材及び植物性資材確保に関する研究 平成 17-19 年度科学研究費補助金（基盤研究(A) (1) 研究成果報告書）



檜皮剥皮実験林。右端の標識は実験木（剥皮、済み）
中央の標識は対照木（剥皮せず）を示す。



剥皮直後のヒノキの木肌。マジックの印は、剥皮の際、最初に
へらが入った位置を示している。

5) 海洋観測研究実習船「ヤンチナ」完成

海洋生物多様性保全学分野 白山 義久 教授

2008 年 7 月 11 日に、京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所の海洋観測研究実習船「ヤンチナ」の完成披露会が行われた。

先の実習船「ヤンチナ」は 1988 年に建造され、21 年にわたり瀬戸臨海実験所で教育・研究に活躍してきた。しかし、近年は老朽化も進み、パワー不足で速度が出ないなど利用海域が田辺湾内に限られていた。そうしたことから、平成 19 年度全学協力経費により代船の建造が認められ、2009 年 3 月に完成、「ヤンチナ」と命名され 4 月から既に近海を航行している。ウィンチの設置により使える海洋測器がふえ、速度が上がったので串本湾など新たな海域をカバーできるようになった。

今回この「ヤンチナ」の勇姿を関係者に見てもらおうと、尾池総長、松本理事、東山理事を始め京都大学関係者、田辺海上保安部、和歌山県教育センター学びの丘、白浜ロータリークラブ、白浜ライオンズクラブ等地元関係者、瀬戸臨海実験所研究員、大学院生、OB の皆さんも参加して完成披露会が盛大に行われた。

なお、「ヤンチナ」という船名は、アサガオガイの学名 *Janthina janthina* に由来している。この巻き貝は粘液で作ったうきぶくろを持ち、その浮力を使って生涯水面で過ごす。絶対に沈まないことから、この動物の名前を船名にしている。



新造船ヤンチナ



完成披露会の様子（尾池総長）

6) 各学会で「森里海連環学」関連シンポジウム開催

里海生態保全学分野 山下 洋 教授

京大フィールド研が中心的な役割を果たし、平成 20 年度に開かれた 4 学会で「森里海連環学」に関するシンポジウムを開催したので以下に紹介する。

1.

2008 年 7 月 2-8 日に、SGP INTERNATIONAL CONFERENCE ON SUSTAINABLE AGRICULTURE AND ENVIRONMENT と題する国際会議が北海道大学において実施された。この中で、フィールド研は生態学研究センターと共同で、Adaptive Management of Biodiversity というシンポジウムを開催した。本シンポジウムに関連した基調講演を Australian Institute of Marine Science の Dr. Ian POINER に依頼し、海域の生物多様性に関する国際研究プロジェクトである、Census of Marine Life について講演をいただいた。分科会（シンポジウム）では、フィールド研・生態研のほか、北海道大学の仲岡雅弘教授の講演や Encyclopedia of Life プロジェクトの主任研究員によるプロジェクトの概要などの講演があった。このシンポジウムを通して、国内での生物多様性研究の現状と課題ならびにこの研究内容と「森里海連環学」との関連について、参加者全員の相互理解が深まった。

2.

岩手県立大学で開催された日本生態学会第 56 回大会では、北大・北方生物圏フィールド科学センター 仲岡雅裕教授、京大・フィールド研 向井宏教授、白山義久教授を企画者として、シンポジウム「森・里・海のつながりを探る：陸域研究者と海域研究者の連携に向けて」が 2009 年 3 月 19 日に開催された。本シンポジウムは、「沿岸環境関連学会連絡協議会（沿環連）」シンポジウムの一環としても位置づけられていた。会場はかなり広がったが、若い学会員を中心に多数の参加者があり、活発な質疑が行われた。京大フィールド研を核とした多様な活動により、森里海連環学に代表される複合する生態系間の連環機構の研究が、これからの学問分野として極めて重要であることの認識が、学会という枠を越えて広がりつつあることが明確に示された。

コメンテーター：中静透（東北大）、灘岡和夫（東工大）、鎌内宏光（京大）

1. 天塩川プロジェクト；流域生態系機能と土地利用変化の関係／柴田英昭（北大フィールドセンター）、Nina Ileva（北大環境）、佐藤冬樹（北大フィールドセンター）、上田宏（北大フィールドセンター）
2. 半閉鎖的内湾における陸域起源有機物の河口域生態系への寄与／富永修（福井県立大生物資源）
3. 天竜川・遠州灘流砂系の土砂動態／佐藤慎司（東工大）
4. 京大フィールド研の森里海連環学と教育研究活動／山下洋（京大フィールド研）
5. 気仙沼での漁業者の実践について／畠山重篤（気仙沼「牡蠣の森を慕う会」）／京大フィールド研

3.

平成 21 年度日本水産学会春季大会（東京海洋大学）では、田中克京大フィールド研名誉教授と山下洋が共同で、森里海連環学関連の口頭発表を集めて、同学会第 10 会場において 2009 年 3 月 28 日午前 9 時から午後 5 時まで、「森と里と海のつながり」という冠を付けた発表を 30 題連続で行った。京都大学の他、北海道大学、高知大学、福井県立大学、北里大学、広島大学、高知県水産試験場、新日本製鐵などの研究者が講演を行い、このうち、京大フィールド研と共同研究者の講演は 14 題であった。130 名収容できる会場は、当日の最初の発表から終了まで常にほぼ満席に近く、大盛会であった。また、水産学会の懇親会では、東京海洋大学学長の高井陸雄先生から、フィールド研の試みが本大会における最も注目される内容として紹介された。今回の発表をもとに、北海道大学北方生物圏フィールド科学センターの上田宏教授と田中克名誉教授が監修者となり、「森と里と海のつながり」シリーズの刊行が計画されている。

1. 森里海連環学の誕生と今日的意義／田中 克（京大フィールド研）
2. 森里海連環学を誕生させた「森は海の恋人」／田中 克（京大フィールド研）・畠山重篤（森は海の恋人）
3. 夏季の有明海筑後川の高濁度汽水域における粒状有機物の動態－流量変動の影響－／鈴木啓太（京大院農）他

4. 有明海特産ツノナガハマミ *Hyperacanthomysis longirostris* の水平分布と個体群動態／鈴木啓太（京大院農）他
5. 和歌山県古座川におけるカジカ小卵型仔稚魚の回遊生態／三輪一翔（京大院農）他
6. 若狭湾に流入する河川の環境と底生藻類相／福井くにこ（パシフィックコンサルタンツ）他
7. 由良川水系における懸濁態有機物と土地利用との関係／鈴木健太郎（京大フィールド研）他
8. 由良川河口域の物理・化学・基礎生産過程／笠井亮秀（京大院農）他
9. 由良川河口域におけるスズキ仔魚の成長と生残／Md. Shahidul Islam（京大フィールド研）他
10. 由良川河口域におけるスズキ仔稚魚の食性および回遊／富士泰期（京大院農）他
11. 由良川河口域におけるニホンハマミの食性／秋山 諭（京大フィールド研）他
12. Consumption of organic matter by benthic communities determined by stable isotope analysis from downstream of Yura River to offshore of Tango Sea（安定同位体比分析による由良川下流～丹後海におけるベントスの有機物利用）／Antonio Emily（京大フィールド研）他
13. 由良川に生息するメイオベントスのセルロース分解能の検討／豊原治彦（京大院農）他
14. 木製魚礁の集魚効果の持続性と近隣の魚類相への影響／益田玲爾（京大フィールド研）他
15. 福井県小浜湾において陸域起源有機物を利用する底生生物のスクリーニング／佐藤専寿・富永 修（福井県大生物資源）
16. 天塩川における上流から河口までの栄養塩・アミノ酸動態／Ileva Nina Y（北大院環境科学）他
17. 天塩川における流域生態系機能と土地利用変化の関係／柴田英昭（北大フィールド科学セ）他
18. 天塩川感潮河口域の環境特性とシジミ生産／門谷 茂（北大院水産・環境）他
19. 横浪林海実験所前海面におけるイシサンゴ類の分布とチョウチョウオ科稚魚の加入／平田智法（宇和島市）他
20. 魚類を介した海藻藻場とマングローブ域とサンゴ域のつながり／中村洋平（高知大院黒潮）他
21. 高知県仁淀川における森林土壌から河川水へ供給される栄養塩の特徴および微細藻類によるその利用／深見公雄（高知大）他
22. 高知県仁淀川河口域における環境モニタリング／林 芳弘（高知水試）他
23. 鉄鋼スラグと腐植物質による藻場造成技術／中川雅夫（新日鉄）他
24. 鉄鋼スラグ等施肥海域の Fe 濃度分布について／加藤敏朗（新日鉄）他
25. 藻類の生育に及ぼす鉄の効果に関する研究／植木知佳（北大院水）他
26. マレーシア・マタンマングローブ域の水産生物によるマングローブ起源有機物の利用／田中勝久（国際農研セ）他
27. ダムによる流下有機物の変化が下流域の水生生物に与える影響／朝日田 卓（北里大海洋）他
28. 太田川河口域における魚類生産と餌起源の季節変化～河川・河口・海域の比較～／三代和樹（広大生物生産）他
29. 太田川河口域における物理環境と仔稚魚群集～人工河川と天然河川の比較～／井上慎太郎（広大生物生産）他
30. 広島湾太田川河口域におけるスズキ仔稚魚の出現・成長および生残状況の人工・天然河川間比較／岩本有司（広大竹原ステーション）他

4.

また、2009 年 3 月 28 日には、第 120 回日本森林学会のテーマ別シンポジウムとして「森林と河川のつながり：物質循環、生物多様性、土地利用に関する最近の研究」が京都大学（吉田南 1 号館）で以下の通り開催された。

1. 仁淀川流域における河川水質の集水域間の変動と流下過程での変化－炭素・窒素を中心に／福澤 加里部（京大フィールド研）他
 2. 富士川水系を流下する陸上有機物の代謝と海洋への輸送／岩田 智也（山梨大工）他
 3. 河川の流下に伴う食物網の炭素窒素安定同位体比の変化－仁淀川の例／鎌内 宏光（京大フィールド研）他
 4. 寄生者が駆動する森林から河川へのエネルギー供給／佐藤 拓哉（奈良女子大共生科学セ）他
 5. 人工林流域における樹冠から河川生物への餌資源の供給／井上 幹生（愛媛大院理工）他
- コーディネータ：鎌内 宏光（京大フィールド研）・福澤 加里部（京大フィールド研）・佐藤 拓哉（奈良女子大共生科学セ）

7) 京の子どもへ夢大使派遣事業

河川域生態学分野 田川正朋 准教授

「京の子どもへ夢大使派遣事業」は、京都府教育委員会の事業として平成 17 年度よりスタートしたもので、京都府内（主に京都市以外）の小学校、中学校に大学教員などが赴き、出張授業を行うものである。私が依頼されたのは、そのうちの「科学探偵士」であるが、フィールド科学教育研究センターでは、竹内典之名誉教授と益田玲爾准教授も授業を担当された。以下、田川の担当分について記述する。

2008 年度は、向日市立第 4 向陽小学校 3 年生（11 月 18 日）、京都府立洛北高校附属中学校 1 年生（11 月 29 日）、および福知山市立成仁小学校 5 年生（12 月 11 日）の計 3 校にて授業をおこなった。

一人に一つずつ、ヒラメ仔稚魚の固定サンプルの入ったガラスビンを配布し、これをルーペで観察してもらいながら、魚の発生過程や天然海域での生態について、スライドを併用しながら説明をしていく形式をとった。サンプルの中には、ほんの 2 ミリ程度しかない孵化直後の卵黄仔魚、まだ体の左右が対称な形をした仔魚、親と同じく左右非対称な形へと変態した後の稚魚などが入っている。授業の開始時にこのサンプルを配布するが、どの小学校・中学校でも一様に「何これ?」「小さいい!」と声上がる。教室は一時、一気に騒がしくなるが、こうなればこちらの思うつぼある。まず、中に入っている魚の数を当てさせるが、2mm の卵黄仔魚を魚とは考えず数え落とす子供が多い。また、何種類の魚が入っているかを当てさせるが、形があまりにも違うため全部がヒラメとはほとんどの子供が思わない。こういったやりとりをするうちに、大学生とは異なり純真な小中学生はこちらのペースに徐々に引き込まれ、スライドと話に集中する。

この授業の最後には、魚の赤ちゃんの海での生残率について話す。ヒラメなどでは大人になって子供を残せるのは 1 千万尾に 2 尾程度しかいない。この比率を人間に当てはめると、人口が約 250 万人の京都府は全滅、東京都で 2 人くらいしか子供を残すまで生き残るものはいない。他はすべて死ぬ。マンボウではさらに 1 桁以上も厳しい、といった話を。小中学生からの感想文を読むと、「人間に生まれて良かった」、「これからは魚を残さずに食べます」などの素朴な言葉がならんだ。

出張先が遠方の場合には一日がかりにはなるが、純粋に楽しんで授業を聞いてくれる小中学生相手に話ができたことは、とても楽しく、また、やりがいを感じた。



科学探偵士での授業風景



小学生が各自ルーペでサンプルを観察する

8) 全学共通科目（リレー講義）

①海域・陸域統合管理論

海洋生物多様性保全学分野 白山 義久 教授

「海域・陸域統合管理論」は、リレー講義形式により、2008年10月3日から2009年1月9日まで13回、吉田南総合館共北27号室（金曜日3限目13:00～14:30）において開講された。対象は、文系、理系を問わず1回生以上のすべての学年とした。講師、内容は以下の通りである。

- | | | | |
|-----------|--------------|----------------------|--|
| (1) | 10/3 | イントロダクション | － 白山義久（フィールド研・教授） |
| (2) (3) | 10/10, 10/17 | 沿岸海洋学の基礎 | － 向井 宏（フィールド研・特任教授） |
| (4) (5) | 10/24, 10/31 | 河川管理と沿岸海洋との連環 | － 萱場祐一（独）土木研究所自然共生研究センター長） |
| (6) (7) | 11/7, 11/14 | 森里と沿岸海洋との連環 | － 柴田昌三（フィールド研・教授）
－ 山下 洋（フィールド研・教授） |
| (8) (9) | 11/28, 12/5 | 森里海の持続的な経済マネジメントシステム | － 有路昌彦（アマタ株式会社持続可能経済研究所・主席研究員） |
| (10) (11) | 12/12, 12/19 | 沿岸管理と法律 | － 磯崎博司（明治学院大学・教授） |
| (12) (13) | 12/25, 1/9 | 統合的沿岸環境管理論 | － 松田 治（広島大学・名誉教授） |

受講者の人数は45名と昨年よりも残念ながら大幅に減少した。受講者の学部分布状況を見ると、理科系が21名（農学部、理学部、工学部、医学部、総合人間学部）、文科系は24名（経済学部、文学部、法学部、教育学部）であり、文科系学部生の関心の高さが顕著であった。とくに、経済学部の学生が14名を占めて学部別ではトップであり、講義がめざす「将来の経済界を支える学生に統合管理の基礎知識を修得させる」という目標が達成されつつあるといえよう。一方、理科系では農学部が圧倒的多数を占めており、他学部へのさらなる浸透の努力が必要であると考えられた。学年の分布を見ると、1回生が24名、2回生以上が21名となっており、高学年の割合が今年度は減少した。

登録した45名のうち、合格して単位を得たものは24名で合格率は53.3%であった。従来出席を重視しすぎて、採点が甘いという批判があり、今年度は毎回提出させているレポートを厳正に採点したが、このような結果となった。また本講義は大学コンソーシアム京都に開放されている。今年度は2名が登録し、うち1名が単位を取得した。講義の最終回にアンケート形式で収集した結果をみると、「本講義により知的に刺激された」が84%、「内容をよく理解できた」が88%、「国土の環境管理に関する問題点が理解できた」が76%など、今回の講義に対する学生の評価は非常に高いものであった。



②森里海連環学—森里海のつながりと分断—

里海生態保全学分野 山下 洋 教授

リレー講義形式により、2008年10月3日から2009年1月9日まで13回、吉田南総合館共北27号室（金曜日4限目14:45～16:15）にて開講された。対象は、文系、理系を問わず1回生から4回生までとした。また、成績は出席および各回の講義の最後に実施する小テストの成績を総合して評価した。

受講者の人数は112名であり、学部の分布状況を見ると、理科系は28名（農学部13、医学部10、薬学部3、総合人間学部1、工学部1）、文科系は83名（経済学部45、文学部15、法学部15、教育学部8）、立命館大学（経済学部）1名であった。2007年度は、理科系と文科系の受講生割合がほぼ同じだったが、今年度は文科系の受講生が全体の75%と非常に多かった。人数制限を行った影響や、カリキュラムにおける他の理系必須科目等との競合なども考えられるが、本科目の趣旨からは文系・理系半々程度が望ましい。本科目では、環境経済学的視点の重要性を強調しているが、そのせいであろうか、経済学部の受講生が顕著に多かったことが注目される。一方、環境変化に直接関係することになる工学部からの受講生は1名であった。例年、工学部、理学部の受講生が少ないことから、シラバスにおいて、環境修復など理工学的視点をさらに取り入れることを検討し、地球環境を考えるうえでの基礎的教養科学をわかりやすく伝える工夫の必要がある。学年の分布を見ると、1回生が84%を占めた。将来の方向性に自由度があり知識旺盛な学生が、この講義をきっかけとして環境や生態系を広い視野で見ることの重要性を認識することを期待している。最後に、フィールド研社会連携教授として内容豊かで大変おもしろい講義を提供くださった畠山重篤氏、C.W. ニコル氏に御礼申し上げます。

- | | | | |
|------|-------|-----------------------|----------------------------------|
| (1) | 10/3 | 森と里山の生態 | — 柴田昌三（フィールド研・教授） |
| (2) | 10/10 | 森里海間の物質循環 栄養塩 | — 徳地直子（フィールド研・准教授） |
| (3) | 10/17 | 森里海間の物質循環 ミネラル成分 | — 中野孝教（地球研・教授） |
| (4) | 10/24 | 森里海間の物質循環 水と土砂 | — 中島 皇（フィールド研・講師） |
| (5) | 10/31 | 森林の利用と保全 | — 芝 正己（フィールド研・准教授） |
| (6) | 11/7 | 森里海の連環と経済 | — 浅野耕太（人間・環境学研究科・教授） |
| (7) | 11/14 | 里海の生態と保全 | — 山下 洋（フィールド研・教授） |
| (8) | 11/28 | 森の恵みと海の恵み | — 畠山重篤（牡蠣の森を慕う会代表、フィールド研・社会連携教授） |
| (9) | 12/5 | 河口域の物質循環 栄養塩 | — 藤原建紀（農学研究科・教授） |
| (10) | 12/12 | 森から未来をみる | — C.W. ニコル（作家、フィールド研・社会連携教授） |
| (11) | 12/19 | 河川生態系の構造と機能 | — 竹門康弘（防災研・准教授） |
| (12) | 12/25 | 流域環境における人間・自然相互作用系の研究 | — 吉岡崇仁（フィールド研・教授） |
| (13) | 1/9 | 沿岸海洋域の生態 | — 白山義久（フィールド研・教授） |



中野孝教 総合地球環境学研究所教授



畠山重篤 社会連携教授

③森林学

森林生態保全学分野 徳地 直子 准教授

近年の生活様式の変化や、地球規模での環境変動は、身近な近郊林だけでなく遠隔地にある森林生態系にも大きな変化をおよぼしている。この講義では、森林について、森林をとりまく社会情勢、林業の現状、森林の生態学的把握、森林の生み出す機能、森林をよりよく利用するための方策など、多方面から森林を解析し、総合的に森林に対する理解を深めることを目的としている。講義の形式は、森林を考える場合、自然科学の面のみならず、林業などを含んだ人間とのかかわりを考えることが欠かせないため、各分野の専門の教員によるリレー講義としている。

講義では、まず、安藤信准教授により日本の森林・植生の特徴について紹介された。次いで、柴田昌三教授により日本の森林の現状や、里山など人との関わりの深い森林について講義がなされた。これらの森林が成立する過程や維持機構について、寄元道徳助教が森林のダイナミズムと樹木の生態について紹介し、中島皇講師により森林と水・土（2回）の関係について述べられた。さらに徳地直子によりそれらが生み出す森林生態系の機能（2回）について考えた。また、今後の森林とのかかわりの上で、重要な森林政策について農学研究科国際農林経済学の川村誠准教授が講義され、芝正己准教授により森林のエコラベルについて、長谷川尚史准教授により森林資源の利用（2回）、坂野上なお助教による木材の消費・流通システムが紹介され、森林の持続可能な利用について考察を加えた。さらに吉岡崇仁教授により環境意識と流域管理に関する総合的な講義が行われた。



④水圏生物学入門

海洋生物進化形態学分野 宮崎 勝己 講師

前年度に引き続き、全学共通科目として「水圏生物学入門」を、前期（木曜・4限）に提供した。

担当講師はほぼ前年度からの引き続きであったが、生態学研究センター教授であった永田俊先生の転出に伴い、同センター准教授の陀安一郎先生に今年度の講師を依頼した。またこれまで13回の開講であったのが、今年度は14回となったため、これまで最終回にまとめて行っていた宮崎による講義及び全体総括を、2回に分ける事で対応した。それぞれの講師の先生は、「水の世界」とそこに生息する様々な生き物たちの関係性について、様々な視点からの解説・論究を行い、レポートやアンケートの結果からも、受講生の満足度の高さはこれまで同様高かったことが、うかがえる。

前年度問題となった、教室の容量の問題と不正レポート疑惑の問題については、前者については最大教室（定員 376 名）を確保した事で、後者についてはレポート用紙を一人一枚ずつ厳密に配布する事で、今年度は特に問題は生じなかった。

本年度は、以下の順番・題名で講義を行った。（各講師の所属・役職はいずれも当時のもの）

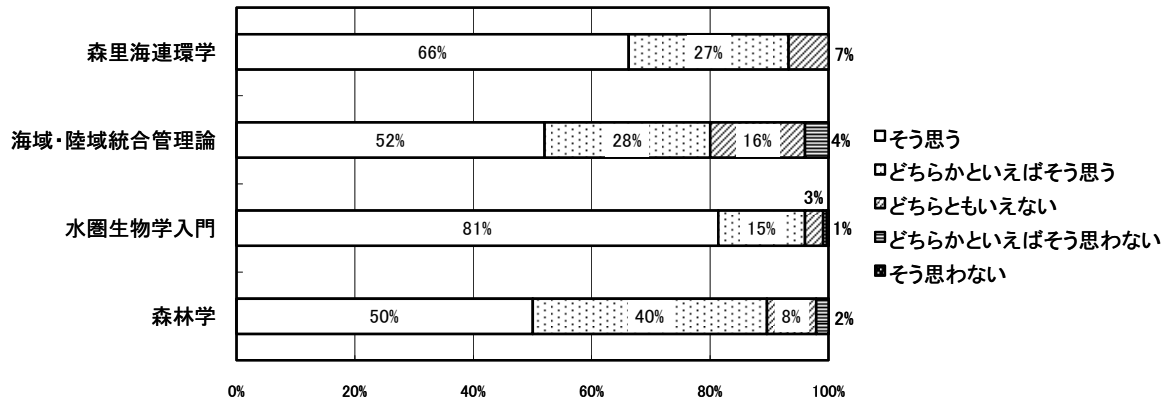
- | | |
|-------------------------|-----------------------------|
| (1) 水圏生物学入門オリエンテーション | － 宮崎勝己（フィールド研・瀬戸臨海実験所・講師） |
| (2) 潜水調査の可能性と限界 | － 益田玲爾（フィールド研・舞鶴水産実験所・准教授） |
| (3) 渚の自然史 | － 加藤 真（人間・環境学研究科・教授） |
| (4) 海産生物の生き残り機構 | － 山下 洋（フィールド研・舞鶴水産実験所・教授） |
| (5) 琵琶湖集水域の生態学 | － 陀安一郎（生態学研究センター・准教授） |
| (6) クラゲの生物学 | － 久保田信（フィールド研・瀬戸臨海実験所・准教授） |
| (7) 魚の初期生活史：小さな卵から大きな体へ | － 田川正朋（フィールド研・河口域生態学分野・准教授） |
| (8) 水圏の植物学：磯焼けと藻場造成について | － 鰐坂哲朗（農学研究科・助教） |
| (9) 深海の生物学 | － 白山義久（フィールド研・瀬戸臨海実験所・教授） |
| (10) 日本海と太平洋：生物の分布と環境 | － 上野正博（フィールド研・舞鶴水産実験所・助教） |
| (11) 川と海を移動するエビ類の生物学 | － 大和茂之（フィールド研・瀬戸臨海実験所・助教） |
| (12) ウミグモの生物学 | － 宮崎勝己（フィールド研・瀬戸臨海実験所・講師） |
| (13) サンゴの生物学 | － 深見裕伸（フィールド研・瀬戸臨海実験所・助教） |
| (14) 水圏生物学入門総括 | － 宮崎勝己（フィールド研・瀬戸臨海実験所・講師） |



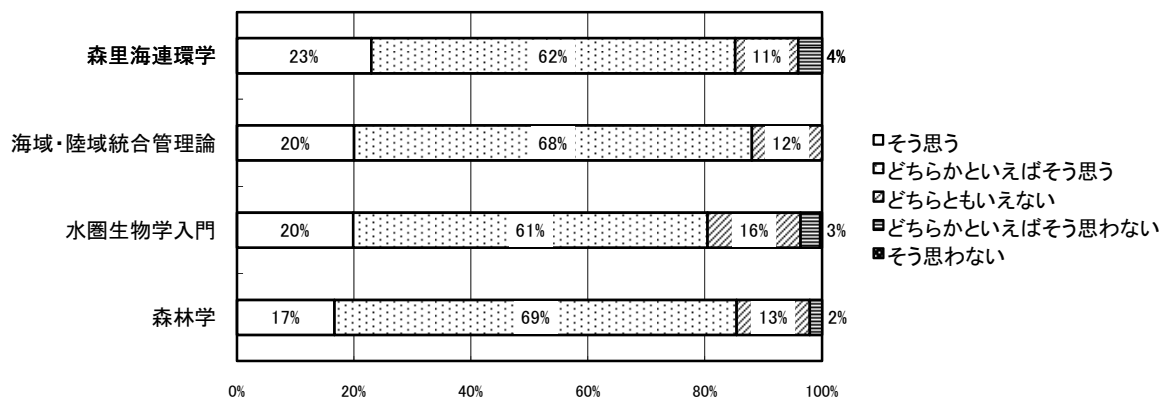
⑤全学共通科目に対するアンケート結果

このアンケートは、フィールド科学教育研究センターのリレー講義を今後より充実したものにしていくため、学生の率直な意見を求めたものである。有効回答者数は、森里海連環学：74名、海域・陸域統合管理論：25名、水圏生物学入門：327名、森林学：48名であった。以下、設問ごとに、集計結果をグラフで表示した。

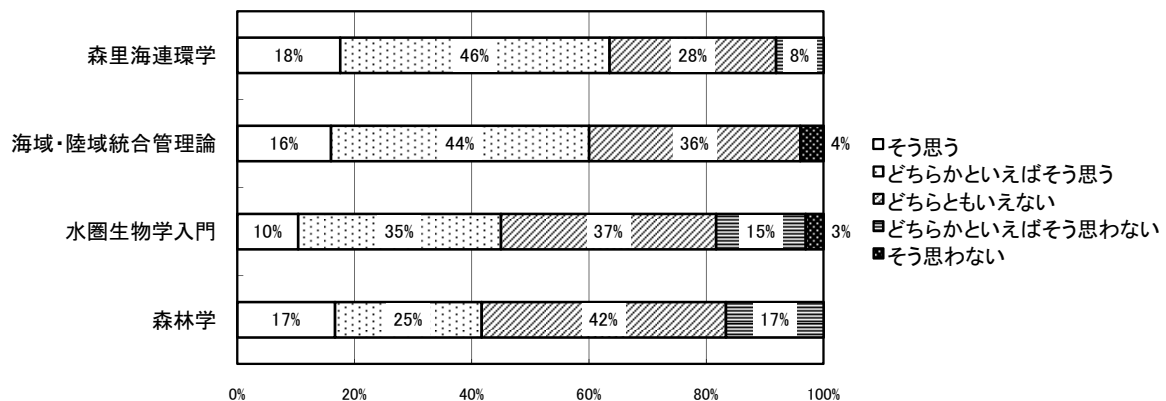
○この授業にはほとんど出席した



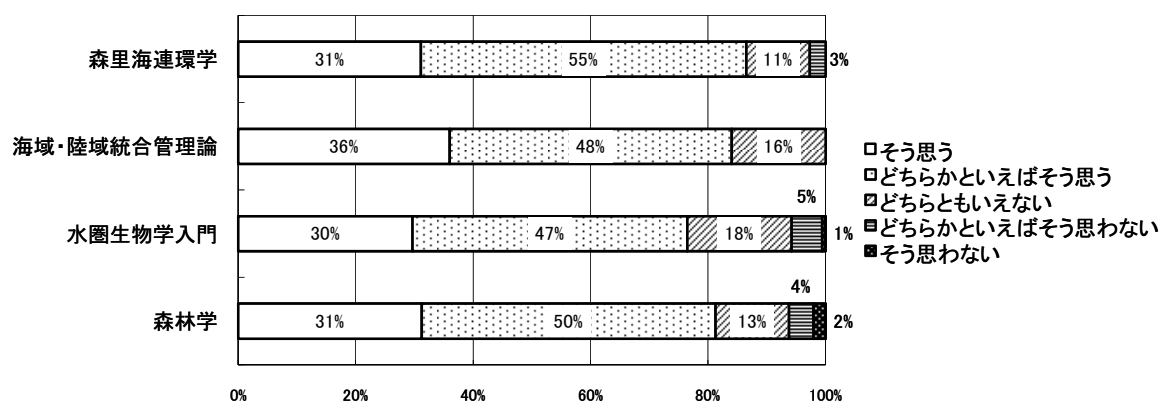
○この授業の内容はよく理解できた



○この授業は体系的であった



○この授業で知的に刺激された

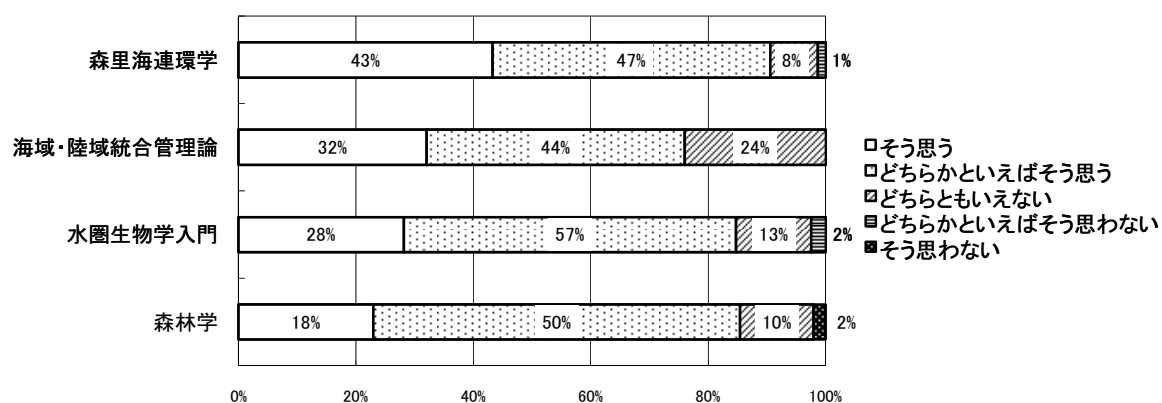


○この授業で森から海までのつながりの機構と問題点がよく理解できた(森里海連環学)

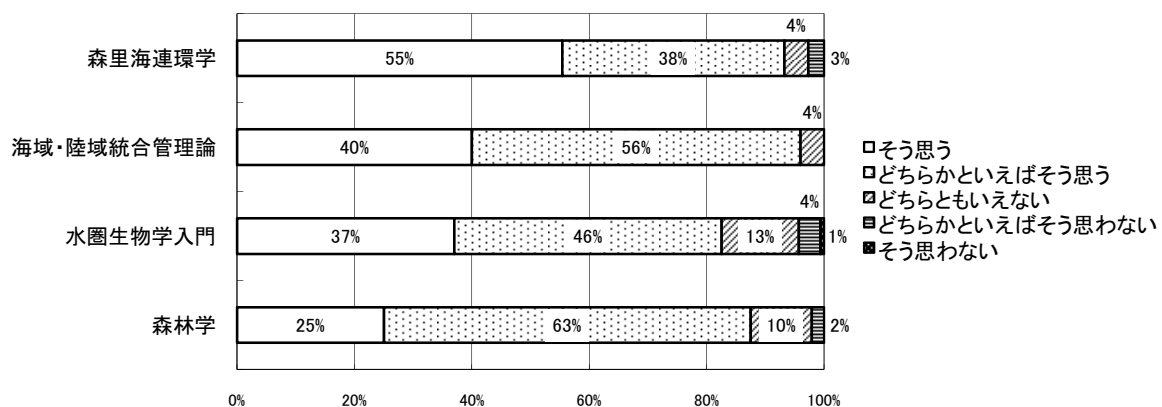
この授業で国土の環境管理に関する問題点がよく理解できた(海域・陸域統合管理論)

この授業で水圏にすむ生物の特性や生きざまなどがよく理解できた(水圏生物学入門)

この授業で森林の機構と問題点がよく理解できた(森林学)



○この授業は自分の学習にとって有益であった



9) 森里海連環学実習

① 森里海連環学実習A「芦生研究林ー由良川ー丹後海コース」

里海生態保全学分野 山下 洋 教授

京都府の北部を流れる由良川は、京都大学芦生研究林を源流とし若狭湾の西部（丹後海）に注ぐ。本実習では、森林域、里域、農地、都市などの陸域の環境が、由良川の水質、生物多様性、沿岸域の生物環境にどのような影響を与えているかを分析し、川を通した森から海までの流域を生態系の複合ユニットとして、科学的に捉える視点を育成することを目的とした。芦生研究林、大江山と舞鶴市内の人工林における森林構造観察、由良川に沿って源流域から和知、綾部、福知山を経由して河口域までの水質（水温、塩分、電気伝導度、溶存酸素、COD、硝酸態窒素、アンモニア態窒素、懸濁物質）調査、魚類、水生昆虫などの水生生物調査および土地利用様式の調査を行った。陸域から河川への物質流入、源流域から河口までの水圏環境の変化と水生動物の群集構造や多様性との関係进行分析し、森林管理や人間活動との関係も含めて考察した。実習に参加した学生は7名（農学部5名、経済学部2名）であった。今年度は、芦生研究林内の実習において、従来の杉尾峠～長治谷～下谷のコースではなく、櫃倉谷川に沿って上流へ沢登りをするコースをとった。シャワークライミングとなり危険が伴うため、NPO 法人芦生自然学校の指導のもとに移動と調査を行った。今年度は参加者数が少なかったことから、来年度は十分に参加者を集められる時間的余裕を持って、実習参加の募集とガイダンスを早めに実施すべきことが反省点であった。日程と実習内容は以下の通りである。

8月5日（火）

京大農学部発芦生研究林へ移動（バスの中でガイダンス）、芦生研究林、由良川源流域（櫃倉谷）調査、講義「芦生研究林の構造」

8月6日（水）

由良川上中流域調査（芦生～綾部）、講義；「由良川流域の里山と農村」

8月7日（木）

舞鶴市の人工林と大江山の人工林観察、由良川下流域調査、標本分析及びデータ解析法の説明

8月8日（金）

水質分析、魚介類・水生昆虫・汽水性無脊椎動物同定、データ解析、レポート作成

8月9日（土）

レポート作成と研究報告会、反省会の後京都大学農学部へ移動



刺網による魚類採集（犀川）



水質分析（舞鶴水産実験所）

②森里海連環学実習B「紀伊半島の森と里と海」

里地生態保全学分野 梅本 信也 准教授

本実習は、紀伊半島南部に広がる古座川流域と串本湾岸域に指交展開する自然域と里域（里海，里地，里川，里山，里空）を対象に，フィールド調査の理論と実践的手法を体感させ，現地観察や聞き取り，各域から得られるサンプルのデータ分析に基づいて，地域連環の諸相について考究する実習である。今回で6回目である。2008年度もフィールド研・紀伊大島実験所を活動拠点とし，古座川最上流域に位置する北海道大学北方生物圏フィールド科学センター和歌山研究林と共催で行われた。9月19日（金）から9月25日（木）に開催した。北海道大学学生1回生10名（文学部生2名，経済学部生1名，理学部生3名，農学部生2名，水産学部生2名），京都大学学生8名（総合人間科学部生2名，農学部生1名，文学部生1名，理学部生1名，経済学部生1名，工学部生1名，薬学部生1名）が参加した。担当職員は北大側が，准教授1名，技術職員1名，京大フィールド研側が准教授2名，講師1名，助教2名，教務補佐員1名であった。准教授と教務補佐員は前半で帰京した。日程と実習内容は以下の通りである。

- 19日（金） JR 紀勢線周参見駅に11時37分に集合，北大マイクロバスに乗車，北大和歌山研究林見学，古座川流域ならびに串本湾岸域を巡検後，紀伊大島実験所に到着，15時半から全体のガイダンス，「古座川合同調査報告集」や「地域フィールドガイド」など資料配布，参考テーマ提供，仮の班分けを行った。
- 20日（土） 里域および自然域各系およびその相互連環性を把握し易いテーマを作成，それぞれの担当教員と共に実習に入った。一部は北大和歌山研究林に向かい，宿泊調査。取り組んだテーマは「水質から見た森と川の関係」「古座川流域における動植物の変化と文化その関係」「エビ類から見た森里海連環」「古座川流域における水質の諸相」「古座川の水生動物から見た連環様式」であった。
- 21日（日）～23日（火） テーマ別に調査，分析，検証，作戦会議，議論を行った。22日午後には，古座川本流と最大の支流が合流する河川敷で合同調査と野外ミニ講義を行った。23日には中間報告会を実施した。
- 24日（水） 紀伊大島実験所で調査結果を分析し，仮報告書を作成。チームごとに調査内容の発表を行い，森里海連環学的立場からの活発な質疑応答が展開された。
- 25日（木） 片付け，報告書・アンケート用紙提出，記念撮影，解散。



古座川本流上流部・平井地区での生物相ならびに水質調査



古座川中流部の民家里庭での聞き取り調査風景

③森里海連環学実習C「夏の北海道実習」

森林資源管理学分野 吉岡 崇仁 教授

2008年8月29日から9月4日に森里海連環学実習Cを実施した。この実習は、京都大学フィールド科学教育研究センターの北海道研究林標茶区と北海道大学北方生物圏フィールド科学研究センターの厚岸臨海実験所を拠点とし、森から沿岸までの生態系の間および人間活動との連環を野外観測によって学ぶものである。今年度は、京都大学理学部・農学部・総合人間学部・文学部・法学部の1～3回生、北海道大学工学部・農学部・水産学部の1回生、計16名の受講生が参加した。昨年度と比べてより幅広い学部からの参加であった。担当教員は、北海道大学北方生物圏フィールド科学センターから3名、京都大学フィールド科学教育研究センターから6名が参加した。また、両大学大学院生のTA、京大フィールド科学教育研究センター北海道研究林標茶区および北大北方生物圏フィールド科学センター厚岸臨海実験所の職員の方々にお世話になった。

実習の概要

実習課題は、京大フィールド研の北海道研究林（標茶区）での「水源域の森林・土壌調査」（樹木の識別、天然林の毎木調査、天然林の土壌調査、天然林と人工林の比較）、「牧草地の土壌調査」、別寒辺牛川流域での「上流（自然）域の水質・水生生物調査」、「中流（牧草地）域の水質・水生生物調査」、「下流（湿原）域の水質・湿原堆積物調査」、厚岸湖での「水質・水生生物と河口域の湿原堆積物調査」と北大北方生物圏フィールド科学センター厚岸臨海実験所での「水生生物の同定と魚類の食性解析」であった。

実習は4-5名ずつの班構成とし、実習前の講義、現場での実習、実習後のデータ整理、レポート作成に加え、最終レポートとして、各班にそれぞれ「森」「川」「海」「里」という異なる場の視点にたって森里海の連環について考察することを課した。2007年度の実施内容と比べて講義時間を短縮して、実習時間及びデータ整理時間等にゆとりを持たせた。このことにより、教員やTAとの質疑応答の時間や自学自習の時間も少しは増えたことから、森里海連環学の視点からのレポートでは、新鮮な感覚で実習中に得たデータと経験とがうまくまとめられていた。今年度は、水質調査に関して、あらかじめ異なる環境において試料水を採取しておき、それを用いて鉄、硝酸塩イオン、リン酸塩イオン、ケイ酸、化学的酸素要求量（COD）のパックテストによる測定練習をしてから、野外での実習を行った。実習中には採取できない生活排水の影響を受けた試料の測定値も参考にすることで、最終レポートを充実できた実習生もいた。また、今年度は、林産物利用・流通を専門とする教員を担当者に加えたことから、最終レポート発表会での質疑応答において、幅広い討論ができた。



天然林における毎木調査

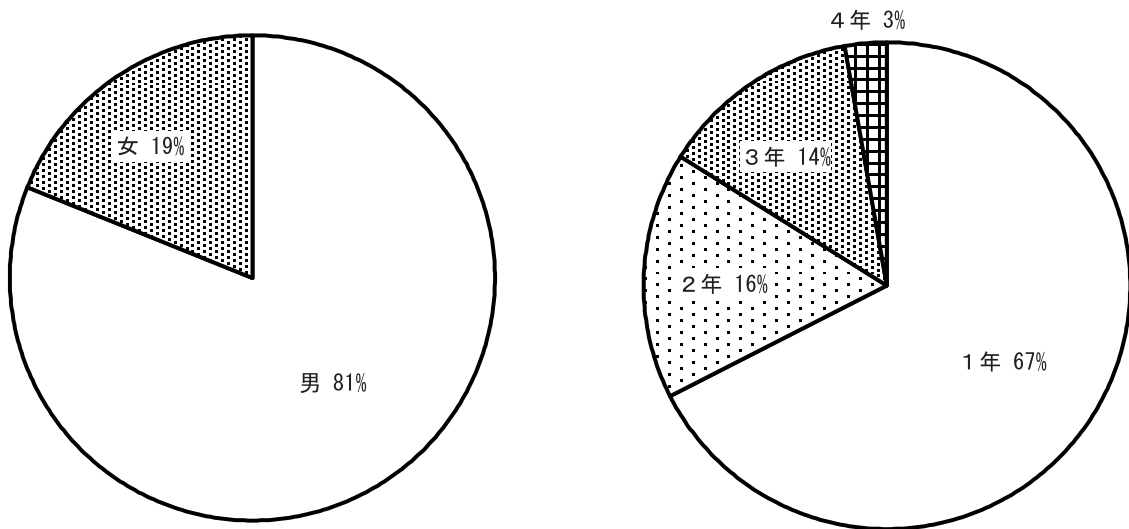


別寒辺牛川流域での水生生物採取

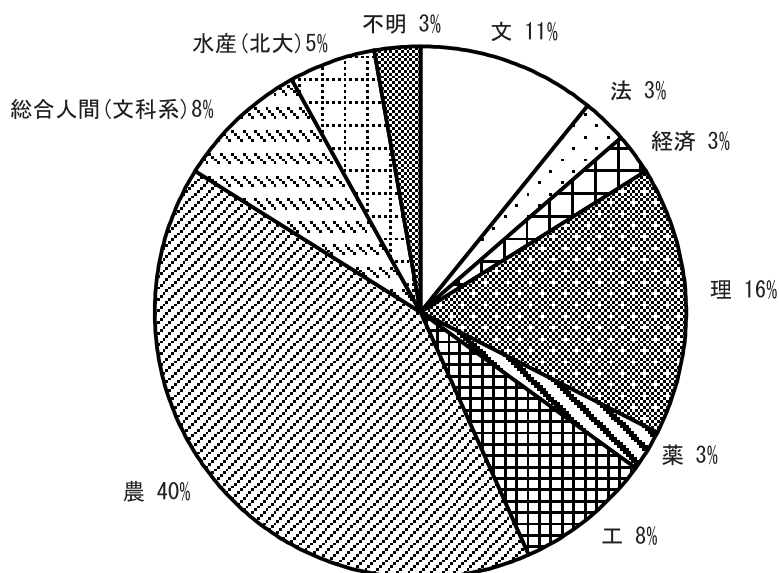
④森里海連環学実習（ABC）に関するアンケート

このアンケートは、フィールド科学教育研究センターの森里海連環学実習を今後より充実したものにしていくため、学生の率直な意見を求めたものである。アンケートは10設問からなっており、有効回答者数は37名であった。以下、設問ごとに、集計結果をグラフで表示した。なお集計には有効回答のみを用いた。

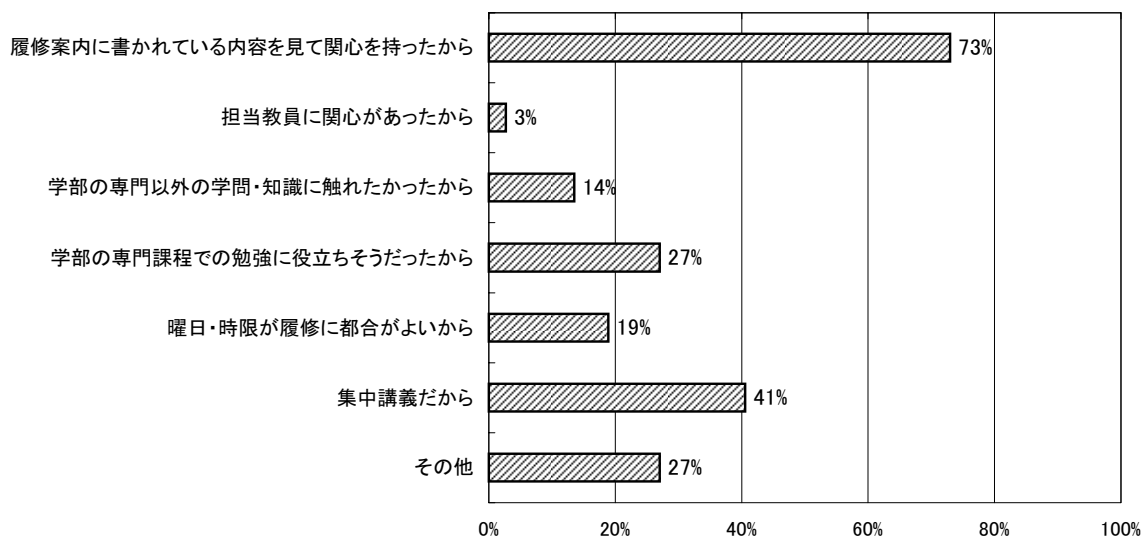
Q1 あなたの性別と学年を答えて下さい。



Q2 あなたの所属学部を答えて下さい。



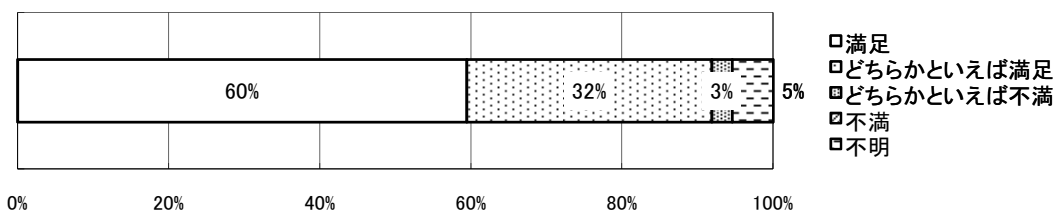
Q3 この実習を受講することにした理由を答えて下さい。(複数回答可)



「その他」・・・何か実習に参加したかったから(A) ・旅行も兼ねて(A)
 ・友人に誘われたから(B) ・和歌山の自然に触れたかったから(B)
 ・自然が好きだから、人と交流するのが好きだから(B) ・和歌山に行けるから(B)
 ・先輩に勧められたから(C) ・他大学と合同だったから(C)
 ・単位取得のため(C) ・厚岸臨海実験所に行きたかったから(C)

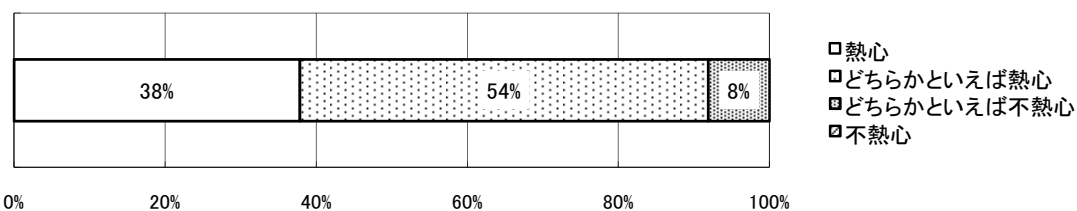
Q4 この実習を受講しての感想をうかがいます。

(1) この実習の授業内容に満足していますか。

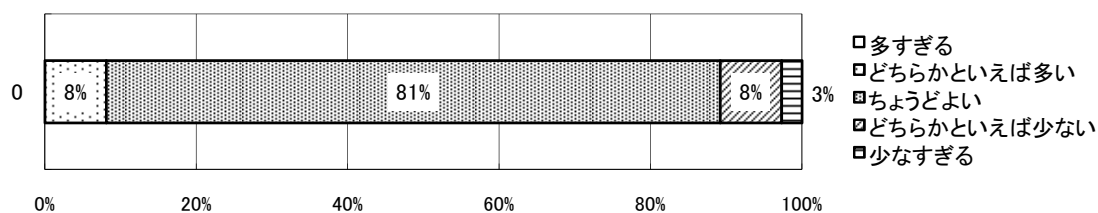


不満を選んだ理由・・・雨のせいで、期待していたようなデータを取ることができなかった。

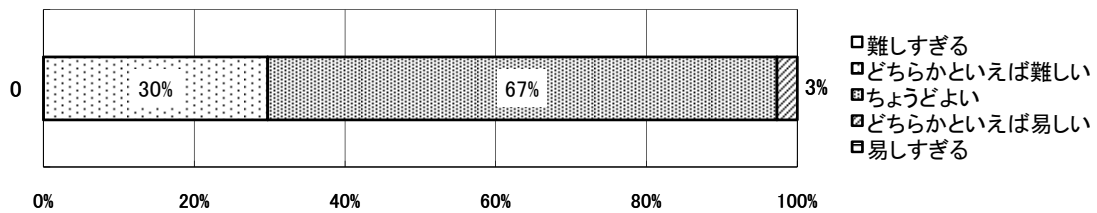
(2) あなた自身の受講姿勢はどうだったと思いますか。



(3) この実習の学生数についてはどう思いますか。

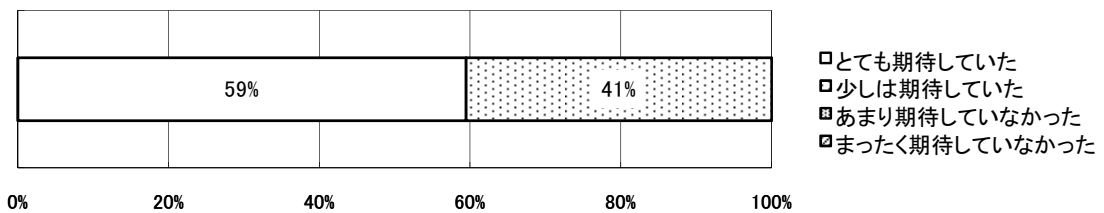


(4) 授業の難易度はどうでしたか。

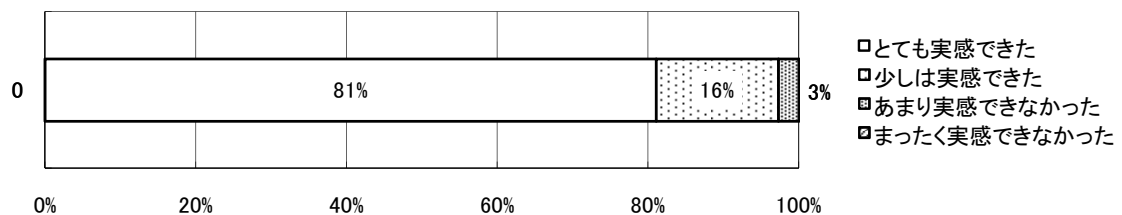


Q5 森里海連環学実習の授業形式についてうかがいます。

(1) この実習を受講する前、講義などの授業よりも多くのものが得られることを期待していましたか。

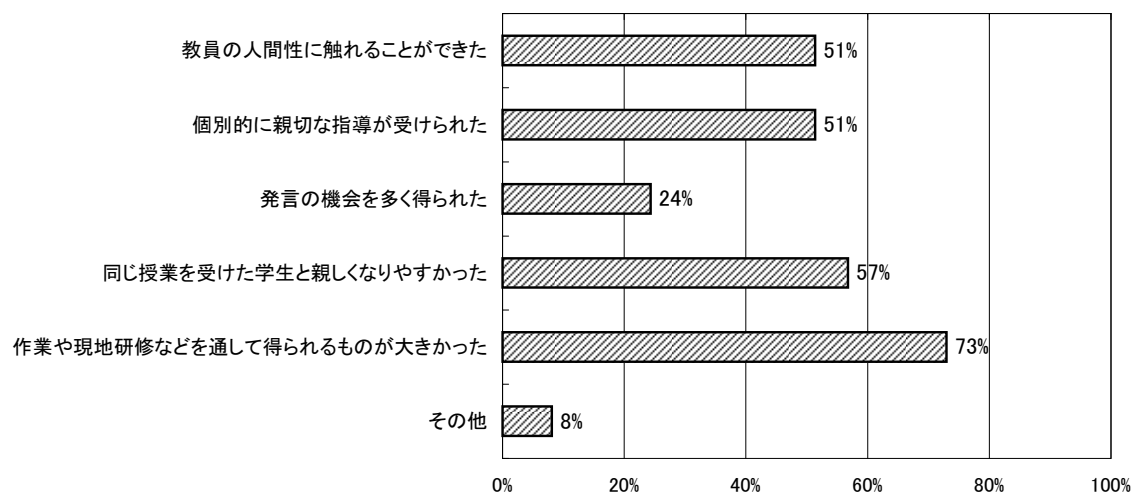


(2) では、実際に受講してみて、この実習でしか得られないものがあると実感できましたか。



(3) 前問(2)で「とても実感できた」または「少しは実感できた」を選んだ方にうかがいます。

この実習でどのような点がよかったと思いますか。(複数回答可)

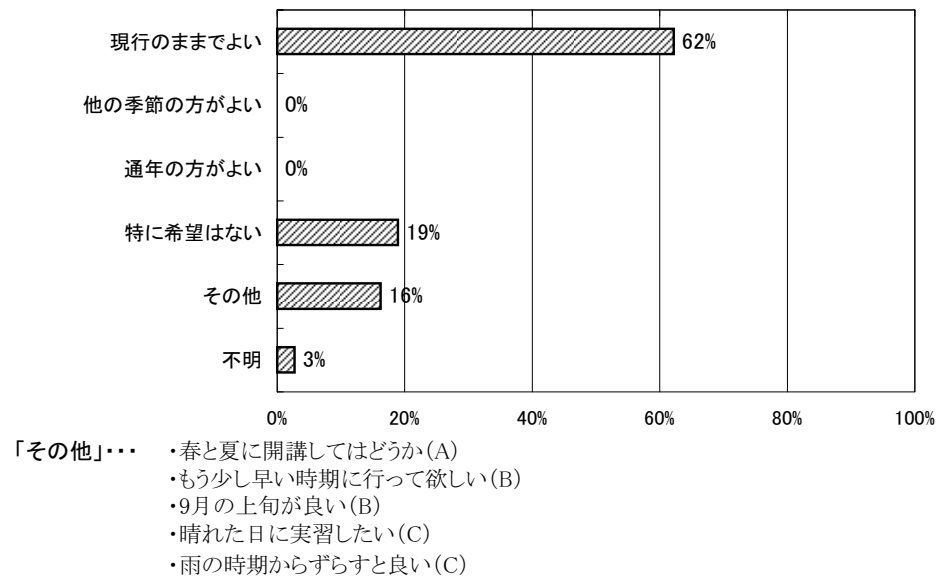


「その他」・・・

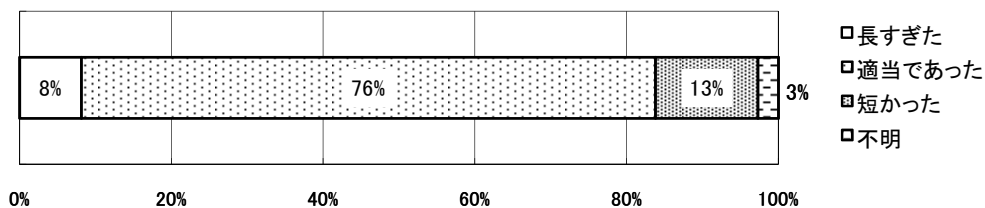
- ・集団生活の仕方を覚えた(B)
- ・本州にない自然に触れることができた(C)
- ・私は哲学を専門にしようとしているが、自然科学の分野においてどのように真理が得られるかということについて少しばかり思うところがあった(C)

Q6 森里海連環学実習の実施方法等についてのご意見をうかがいます。

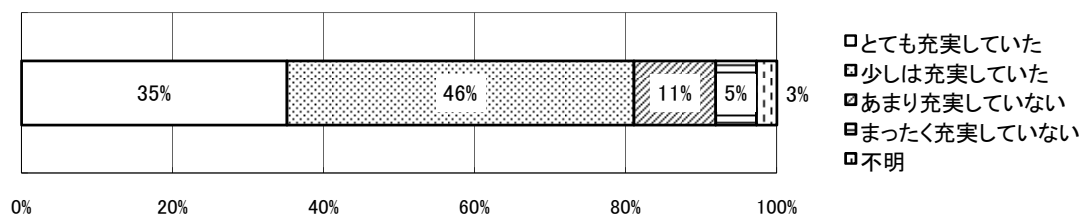
(1) 今回の実習の開講時期についてはどう思いますか。



(2) この実習の実施期間についてどう思われますか。

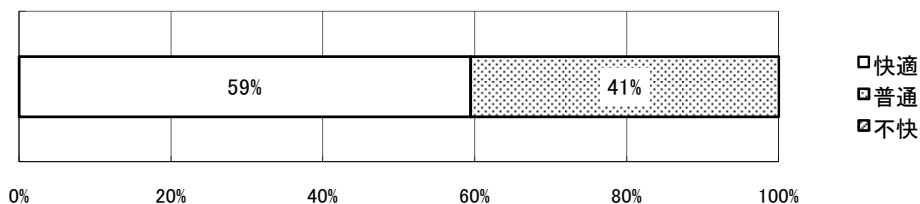


(3) この実習の実施場所の実験設備や実験器具についてどう思われましたか。

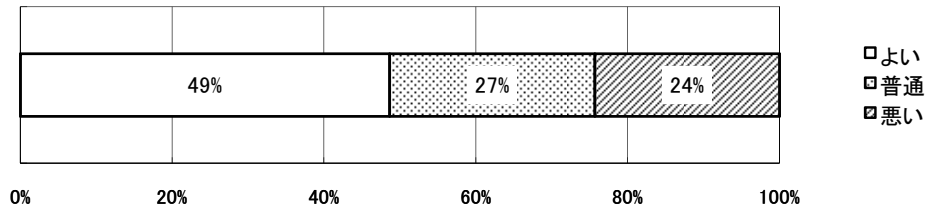


(4) この実習の宿泊についてうかがいます。

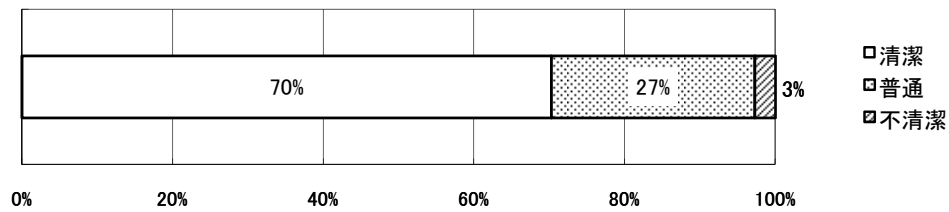
・ 共同の宿泊生活は



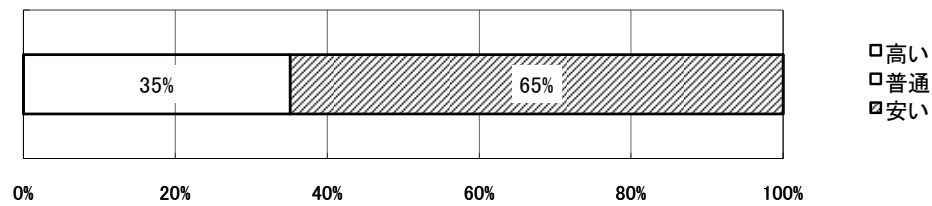
・宿泊施設の整備は



・宿泊施設の寝具は



・宿泊施設の経費は



(5) 宿泊施設や食事について、何かご意見やご要望があれば自由に記入して下さい。

〈A〉

・朝はサンドイッチ以外のものが良い。

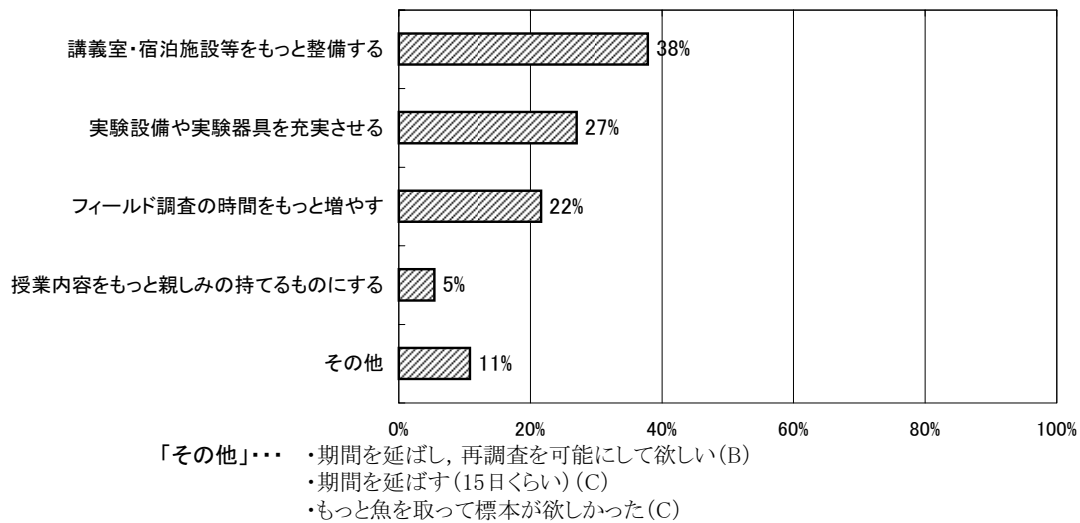
〈B〉

- ・食器棚はきれいだが、厨房の煩雑さを改善してほしい。
- ・洗濯機や炊飯器の使い方がわかりにくかった。
- ・トイレの流しかたがわからなかった。
- ・風呂、トイレの整備が必要。
- ・パソコンや顕微鏡の数を充実させてほしい。

〈C〉

- ・厚岸の晩ご飯には改善の余地あり。
- ・弁当を改善して欲しい。
- ・食堂以外に皆で集まれるところがほしい。
- ・ドライヤーが欲しい。
- ・トイレ、風呂の改修をしてほしい。1人1台パソコンがほしい。
- ・厚岸の宿泊施設がもう少しきれいだと良い。

Q7 今後、実習をさらに充実させるためには、どのようにすれば良いと思いますか。(複数回答可)



Q8 森と海のように全く異なった生態系が本来は不可分につながっていることや、そのことが地球環境問題に深く関わることについて、何か得るものがありましたか。自由に記入して下さい。

〈A〉

- ・森里海のつながりは奥が深い。
- ・同じ生物が連続分布していることを実感できた。魚の種類が流れるように変わっていく様子が伺えた。
- ・森と海が川を介してつながっていること、川が連続しながら次々と変化していく様子は、こうして実際にフィールドに出なければ得られないことだと思った。
- ・一本の川を下るということはなかなかできないことで、その中で得るものは多かったと思う。川に沿って走りながら見ていたが、一本の川がどんどん太くなる様子は圧巻だった。森から町、海に至るまでをつなぐ川はすごく大きな役割を持っているのだと思った。

〈C〉

- ・農業によるN流出と河川・海とのつながりが分かり良かった。
- ・森に大変興味を持っていたが、それしか見ていなかった。森林が土壌、川、里、湖、海がなければ存在しないということを知り、もっと視野を広くしたいと思った。
- ・水質調査や魚の種の調査によって、その水質が種の多様性に関わっていることなどが分かった。
- ・森から流れてくる物質を海が利用する流れは、とても重要なことが分かった。森の生態系、海の生態系という個別の生態系でなく、全体を含めた大規模な生態系を考えることも必要だと感じた。
- ・森、里、川、海を一帯のものとして考えるという考え方が身についた。
- ・森、里、川、海と人間が分けて呼んでいるものも、本来は一つの自然だと言うことを感じました。全てを総合的に考えることで初めて見えてくるものがたくさんあると思うので、こういった視点は今後ますます重要になってくると思う。
- ・森、里、川、海のどれかを優先させることができなく、何かを優先させたり、何かを欠すると生態系が崩れてしまうということ。
- ・森と海が繋がっていることは以前から知っていたが、実際に魚類を捕らえたり、「里」の視点も含めて考察したのは楽しかった。
- ・自分が思っていたより密接に関わっていることが分かりためになった。
- ・連環学を知るきっかけになったし興味ももった。連環が不可欠であることの一部でも理解できたと思う。
- ・パックテストを用いて、源流から湖まで調査した結果が自然や人の影響を適切に表していて、化学による自然界の人の活動における影響を考えることができて、今後役立つと思った。

Q 9 今回受講された実習について、何かご意見やご希望があれば自由に記入して下さい。

〈A〉

- ・不慣れな河川での実習や発表で親切に指導していただきました。
- ・調査地をできる限り似たようなポイントで統一して欲しい。過去のデータと比較をしてもおもしろいと思う。
- ・刺し網や地引網、シャワークライミングなど一人ではできないことも体験できて楽しかった。来年以降もこういう感じで良いと思う。

〈C〉

- ・土壌学について詳しく知ることができて良かった。
- ・とても充実した時間を過ごすことができた。
- ・スケジュールはもう少しゆったりが良い。
- ・北海道で投網を打たせて欲しい。
- ・とても充実した1週間だった。フィールド実習は疲れるけど、とても楽しく興味深かった。
- ・道東の自然を満喫できました。欲を言えばもっと、特に川において、フィールドワークをしたかった。
- ・非常にためになりました。ありがとうございました。
- ・先生方にとっても親切に指導していただき、今後、自分がどのようなことをしていくかについて充分に考えることができました。

Q10 当センターのホームページにアクセスしたことがありますか。内容についてどう思われますか。

- ・施設の写真をもっと多くして欲しい。
- ・見づらい。
- ・少し説明が少ない

10) 少人数セミナー

①C. W. ニコルの“アフアの森”に学ぶ

里山資源保全学分野 柴田 昌三 教授

2008 年度の本少人数セミナーは、農学部から 4 名、文学部、法学部および工学部からそれぞれ 1 名、の合計 7 名（男女比 5 : 2）を迎えて実施した。前年度同様、5 月に説明会を、7 月のアフアの森訪問の前に京都での予習会を、それぞれ催した。しかし、2008 年度の登録者は体育会系のクラブ活動をしている学生が数名おり、夏は活動の中心となる季節であることから、彼らは合宿、帝大戦などのクラブ活動の合間を縫って参加する結果となった。そのため、予習会に出席できない学生や、信州に遅れて合流する学生などがおり、必ずしも統制のとれたポケゼミとはなりにくかった。なお、本年度の補助は 2008 年 5 月に新戦力としてフィールド研に採用された長谷川准教授にお願いした。

ポケゼミ本番は 8 月 7 日～12 日に行った。アフアの森の訪問に先立っては、これも前年同様、長野県環境保全研究所、戸隠森林植物園、戸隠奥社を訪問し、地域の学習と植生に対する理解を深めた。学生達が待望するアフアの森では、ニコルさん、松木さん、財団の石井さんが待っていてくださった。前年に比べて、石井さんの重要性が高まりつつあることが、そこここから感じられる再会であった、

ニコルさんはこの年もお元気で、学生たちと我々スタッフを温かく迎えてくださった。昨年同様、初日は森の案内と学生たちとのディスカッション、二日目は黒姫に近い新潟県側にある妙高山中腹の原生森林の訪問とアフアの森の説明、最終日はアフアの森での森林管理の体験がアフアの森での実習であった。学生たちはニコルさんとのディスカッションを楽しむ努力をしながら、徐々にニコルさんやその他のスタッフの皆さんとの交流を深めていった。最後までうち解ける雰囲気まで到達することはできなかったが、長谷川准教授の献身的なバックアップで、なんとかニコルさんとの交流が深められたように考えている。

なお、本年度は前年同様、「ラボランドくろひめ」に宿を求めたが、宿側の都合で、通常貸し出しているロッジを借りることはできなかった。代わって提供された建物は、20 年以上前にニコルさんが黒姫に拠点を構える前に滞在していた鴻来坊という建物であった。これは大変趣のある建物であったが、老朽化が進みつつあることから、学生達からは好評を得ることはできなかったようである。一方、この鴻来坊にニコルさんをお迎えして語り合うことができた飲み会（昨年とは異なり、本年度はシカ刺しがメインディッシュであった）は、学生たちに少なからずインパクトを与えたようであった。なお、学生の一人は楽しく飲み過ぎて翌日は強度の二日酔いとなったが、これもご愛敬であろう。



アフアの森でのニコルさんの講話



近くの川で近自然工法を批判する松木さん

②フィールド実習“森は海の恋人”

海洋生物多様性保全学分野 白山 義久 教授

2008 年度フィールド実習「森は海の恋人」を、8 月 19 日から 24 日まで（移動日を含む）宮城県気仙沼市唐桑町にある水山養殖場と南三陸町自然環境活用センター（志津川ネイチャーセンター）において実施した。宿泊には、民宿を利用した。

参加者は定員一杯の 6 名（文学部 2 名，法学部 1 名，工学部 2 名，経済学部 1 名）であった。そのうち 2 名は女性であった。講師として，畠山重篤氏（京大フィールド研社会連携教授・水山養殖場）とそのご子息の畠山信氏，並びに横浜康継氏（南三陸町自然環境活用センター所長・筑波大学名誉教授）の参加を得た。また前年同様気仙沼高校の高橋誠子氏（気仙沼高校教諭）と斉藤繁氏（気仙沼高校教諭）および気仙沼高校自然科学部の生徒 5 名も参加した。またフィールド研が協定書を交わしている NPO 法人エコロジー・カフェの会員が 3 名参加した。また NaGISA プログラムの一環であるので，NaGISA プロジェクトの特定有期雇用教員である伊勢戸徹助教が参加した。さらに NaGISA プロジェクトを支援してくれている日本財団の和田真氏も参加した。

8 月 20 日には NaGISA プロトコルにもとづく岩礁域のフィールド調査を，南三陸町において実施した。サンプリング終了後は，サンプル処理として海藻サンプルの分類・同定・重量測定，1mm のフルイでのマクロベントスサンプルの解析（分類・同定・計数）と 0.063mm フルイを用いたメイオベントスサンプルの作成を行った。

8 月 21 日はまず気仙沼に移動し，午後から畠山氏による森里海の連環に関する講義を受講した。また白山も海洋酸性化などの海洋の諸問題に関する講義をした。

8 月 22 日は，畠山氏の案内で気仙沼湾・大川水系を見学した。特に森は海の恋人運動の原点である牡蠣の森の見学は学生にとって大変意義深いものとなった。しかし見学だけでは物足りないということで，来年度からはぜひとも植林をしたいということになった。

8 月 23 日には，早朝に気仙沼漁港を見学し，その後水山養殖場の養殖いかだから，もっとも岩礁性生物の多様性が高い養殖カキのサンプルを採集した。その後，サンプル処理として，1mm のフルイでのマクロベントスサンプルを作成した。昼食後は，海草も場のマクロベントスを，ドレッジを用いて採集した。

学生には，初体験のことが多く，森里海の連環について強い印象を持ったものと考えられた。また，高校生との触れあいもあり，その他にも地元の方々への歓迎も受けて，充実した 6 日間を過ごすことができたものと評価している。



参加者全員の記念撮影



南三陸町で実施した NaGISA サンプリングの風景

③木造校舎を造る：木の文化再生へ

森林環境情報学分野 芝 正己 准教授

2008 年度新入生向け少人数セミナー（ポケゼミ） “木造校舎を造る：木の文化再生へ（Significance of Realizing Wooden Building in the Campus）”（B 群，2 単位，教員 4 名によるリレー講義）の科目名で開講した本ゼミは，4 月中旬のガイダンスからスタートし，本部での講義（毎火曜日 5 限目，旧演習林建物内の四明会会議室及び北白川試験地内 j. Pod 実験構造物）と関連施設の野外見学・実習等を組み合わせて実施された。

本講義の目的は，シラバスで謳っているように，－ わが国は優れた森林国でありながら国産の木材はほとんど活用されていない。一方，増え続ける人口は都市に集中し，限られたエネルギーを著しく浪費している。この都市と森林が抱える問題の一元的な解決の“切り札”は木造建築の普及である。京都大学の歴史を築く半永久的木造校舎の建築を目標に新たな木の文化を考える－を，「森里海の連環」を教示しつつ具現化することにある。

今回の受講生は，法学部（1 名），経済学部（1 名），工学部（5 名），農学部（1 名）の 8 名（男性 6 名，女性 2 名）であった。講義・実習の内容構成及び担当教員は以下の通りであった。

〔講義内容・担当〕

1. 問題提起 森は海の恋人-森と里と海のつながり（田中 克 名誉教授）
2. 里山の歴史と日本人のつきあい（柴田 昌三 教授）
3. 里山の現状とこれに対する新たな動き，海外における森林荒廃（柴田 昌三 教授）
4. 世界の森林・日本の森林－その役割と利用（芝 正己 准教授）
5. 日本の林業のこれから（芝 正己 准教授）
6. 自分の個室空間から都市までを木で作っていく楽しみ（小林 正美 教授）
7. 世界の木製都市，日本の木製村（小林 正美 教授）

〔野外実習・見学内容〕

フィールド研上賀茂試験地でのヒノキ伐採・木材加工作業の体験実習，京都府立植物園での樹木実習，京都大学構内の古い木造施設（旧演習林事務室，吉田寮など）や新たな木造工法（j. Pod 工法）による施設（国際交流セミナーハウス，北白川試験地内 j. Pod 実験構造物）の実地見学を行った。

これに対する学生からの感想として，「森里海の各領域における環境問題の現状とその潜在的な連続性が何となくわかって来た」，「建築工法が利用間伐の促進による森林管理の適正化に寄与することが j. Pod からわかった」，「将来にも有効資源であるタケの特徴とその活用法が理解できた」，「樹木の特徴とその役割の知見が得られた」，「講義と野外実習・見学による組み合わせで，内容が具体的に理解できた」等々，本セミナーの目的とする部分も随所に見られた。



上賀茂試験地林内でのチェーンソーによる伐倒作業



上賀茂試験地における帯鋸を使った製材加工作業

④河口域生態学入門

里海生態保全学分野 山下 洋 教授

受講生は法学部1名，工学部1名，理学部1名，農学部4名の計7名であった。2008年4月，5月に5回の講義を行い，6月に舞鶴水産実験所において実習を実施した。講義内容としては，フィールド研の紹介に始まり河口域の構造，通し回遊生物の生態，河口域における生物生産構造，沿岸海洋域における生物生産構造，森・里・川・海のつながりとフィールド研の森里海連環学について，などである。河川を通した陸域と沿岸域のつながりについて，非常に密接な相互関係のあることを，多様な視点から理解してもらえたと考えている。6月6日～8日にかけて，由良川河口域で実習を行った。まず，由良川の支流の中でも清流として有名な宮川，および宮川と本流の合流点から河口域まで見学し，下流域，河口域，海側の海岸域において，環境測定と小型巻き網を用いた幼稚魚採集調査を行った。幼稚魚採集では，アユ，ヒラメ，ボラ，スズキ，ウグイ，ヒイラギ，イシガレイ，ヒメハゼの8種が採集された。これらの稚魚を実験室に持ち帰り，種の同定方法などについて学習した。また，夜には舞鶴水産実験所内で実験所所属の大学院生とともにバーベキューを行い，新入生と大学院生の交流を図った。来年度の課題として，できれば河川調査時に水質パックテストを行い，硝酸態窒素，アンモニア態窒素，COD，珪酸などが，支流の清流から河口までの間に変化する様子なども観察したいと考えている。さらに，刺網によるアユ採集の解禁が7月1日であることも考慮し，実習を解禁以降に実施することも検討する必要がある。



全員集合（由良川河口）



海側調査(神崎浜)スズキやヒラメが採れた

⑤海岸生物の生活史

海洋生物系統分類学分野 久保田 信 准教授

ポケゼミ「海岸生物の生活史」は、10名（農学部男子4名女子2名、経済学部男子3名、医学部女子1名）の参加を得て、自然環境に恵まれ風光明媚な白浜町（和歌山県）に所在し、無脊椎動物や魚類の飼育展示で伝統ある水族館（開館78年）を有する瀬戸臨海実験所の周囲の海岸において、実地授業を実施した。主な講義・実習の実施内容は：(1) 知られざる無脊椎動物の海洋での多様性の解説と、固定標本をはじめビデオ・図鑑・DVDなどでの学習と採集後、形態や行動など観察・スケッチ・同定；(2) 磯浜観察（番所崎）；(3) 漂着した生物の観察（番所崎・実験所“北浜と南浜”）；(4) 瀬戸漁港での観察；(5) 磯浜や漁港で観察できにくい動物群が水族館で飼育展示されているので、それらの観察；(6) プランクトンの観察（瀬戸臨海実験所北浜で、プランクトンネット曳きサンプル）；(7) 反省会（オリジナル曲「地球の住民、動物篇」、「ベニクラゲ音頭」、「エディアカラのクリーチャー」、「生命の星」、を含む海洋生物曲の紹介）であった。多様な動物群を自然にあふれた現場で実地実習する有効性はもとより、専攻の異なるもの同士が寝食も共にすることは有意義である。しかし、整った設備と廉価な宿泊施設使用料の滞在費の負担（1万円弱）は決して重くない。日本最古で質のよい温泉で、よく動きまわったフィールドワークの疲労も吹き飛ばせるメリットや卓球での親交もあった。

少人数セミナー受講後の学生の感想の一部を紹介する。「自然を身で感じることの素晴らしさ、風や日光や海水の冷たさを体で受けとめ、生物の尊さを教えてくれるものは何よりも自然そのものと交わる時間や経験で、好きになったことをもとに新しいことを次へと活かしてゆく理想の学習スタイルでした。いつか自分の好きなものが見つかる気がしました。」「同じタイドプール内に多くの動物門がいて面白く、海水が美しく多くの生物が育成している白浜の良さがわかりました。」「図鑑でしか見たことがなかったいろいろな動物を見つけ、存在も知らなかった生物、様々な動物の歌、人々、かけがえのない経験になり、勉強以外でも素晴らしい体験ができました。GWをつぶしてでもとる価値があり、後輩たちにも是非勧めたいです。」「貴重かつ最高の5日間を有難うございました。」「種の同定の大変さをつくづく感じました。初めて見る生物だらけでじっくり見つめて観察していると時がたつのを忘れてしまいました。生物は、実に、本当に奥が深いです。」



実習の様子



講師と実習参加者

⑥海洋生物の多様性

海洋生物多様性保全学分野 白山 義久 教授

ポケゼミ「海洋生物の多様性」は、瀬戸臨海実験所での実習形式のポケゼミである。実習は、8月2日から8月7日まで5泊6日の日程で、瀬戸臨海実験所において実施した。実習内容としては、1. 磯観察、2. メイオベントスの採集と観察、3. スキンダイビングによるメガベントスの目視観察、4. 見釣り、5. 南方熊楠記念館の見学、6. 水族館の見学の6項目を実施した。

今年度の本実習の参加者は、6名（教育学部1名、経済学部1名、理学部1名、農学部1名、工学部1名、総合人間学部1名）であった。登録者は定員一杯の10名であったが、試験期間が変則的に設定されていたため、試験期間と重複が発生してしまい、4名の学生が参加できなくなってしまった。来年度は、試験期間をうまく避けられるように日程を調整したい。

本実習は、協定書を交わしているNPO法人エコロジー・カフェ（エコカフェ）との協力事業という位置づけでもあり、その会員も参加した。具体的には、上記実習内容2・3・5・6は、エコカフェの会員も一緒に現場と実験室の作業を行った。

また、実習時間外のアクティビティも多数行い、そのなかでも学生とエコカフェ会員とは、充実した交流をした。特に夜のバーベキューにおいて、エコカフェの方々（社会人）と学生との交流は、どちらにとっても有意義なものとなったようである。

学生にはやはり実習の方が講義よりインパクトが強い。しかし講義が全くなかったことは、ガイダンス不足という面も発生させていることがわかった。来年度は、実習中心にするが、多少現地で講義もするような方向で実施したいと考えている。また、エコカフェとの連携は、学生にとってもよい機会となったので、今後も続けていきたい。

エコカフェにとっては、会員が本当の自然に触れる機会を得たことに満足感があつたようである。特にスキンダイビングとメイオベントスの観察はどちらも普通にはできないものだったため、貴重な体験となり、今後も実習に継続して参加したい意向である。



磯観察を実施した時の、参加者全員を交えた記念撮影



当日は非常に暑い天候だったため、磯の貝類が太陽に熱せられた岩盤を避けるように、積み重なる様子が観察された。

⑦魚類心理学入門

沿岸資源管理学分野 益田 玲爾 准教授

ポケゼミを担当するようになって5年目になった。本年度は募集人数10人ちょうどの参加で始まった。実習に先立って行った講義のタイトルは以下の通りである。

- 第1回 研究の道具としてのスキューバ潜水
- 第2回 群れ行動の発達心理学
- 第3回 魚類心理学を栽培漁業に活かす
- 第4回 魚の行動から海の資源の未来を読む
- 第5回 回遊魚の行動学
- 第6回 研究というゲームの楽しみ方

講師自身の研究成果を中心に1時間弱の講義を行い、その後フリーディスカッション、さらに簡単なレポートを書いてもらい、このレポートをもとに次回の講義を組み立てるという構成をとった。第6回には「プレゼンテーションの奥義」というコーナーも設け、講師が一番最近に行った学会発表を例に、口頭発表やポスター発表の技術を伝授した。

実習では、7月4日金曜日に学生らが舞鶴水産実験所に到着し、まずガイダンスを行った。講義で地産地消や食の安全の話もしていたので、朝食と夕食は、極力舞鶴産の素材を使って自炊することにした。土曜日は、市内の三浜海水浴場にてフィールド実習を行った。午前中は調査用ネットで稚魚を採集し、午後はシュノーケリングで砂地や岩場の魚や無脊椎動物を観察した。昼食とシャワーは、当地の海浜施設「ととのいえ」を利用した。帰りにスーパーの鮮魚コーナーで食材としての魚について理解を深めたのち、夜は実験所の院生らとともにバーベキューを楽しんだ。翌日曜日には西舞鶴の京都府漁連を見学した。実習の直前にNHKの特番「海の日特集・魚が消える」の取材があり、実習生たちが三浜の海水浴場で網を曳く様子も撮影されたが、放映された番組ではその場面はカットされており、実習生たちは悔しがっていた。



写真1 舞鶴市三浜の岩場にて、シュノーケリングにより採集したアメフラシとともに撮影。



写真2 西舞鶴の京都府漁連にて、水揚げされた魚の小ささに驚く実習生たち。

⑧原生的な森林の働き

森林環境情報学分野 中島 皇 講師

今年度も5月、6月に1回ずつ北部キャンパスで1コマセミナーを、6月22日(日)には上賀茂試験地で1dayセミナーを、7月に芦生研究林で後述の合宿形式セミナー(2泊3日)を行った。当初は定員10名の申込みがあったが、実際には8名(男6, 女2)(学部別: 文1, 医1, 工1, 農3, 総人2)の参加となった。フレッシュな新入生諸君がフィールド(森林)に出て、自ら体験し、自然と人間の関わり方に興味を持つようになることがこのセミナーの目的である。

芦生での集中セミナーは、7月11日(金)の広河原バス停集合で始まった。しかし、待てど暮らせど芦生からの迎いのバスが来ない。不審に思って公衆電話から芦生に電話をすると、「そんな迎えには行っていない。」とのこと。何かの手違いのよう。芦生からすぐに車を回してもらい、京都からの車にも分乗して事なきを得た。天気も上々なので、昼食後は本流沿いのトロッコ道をタケヤクリ(芦生研究林の本体)まで行くことにした。境界の大きなスギに直面し、皆絶好の足慣らしができたようだ。夕食のお好み焼きと焼きそばはポケゼミとしては初めての試みだったが、なかなか手際よく作っていた。夜は、芦生研究林の概要説明と研究林が抱える問題点を話し合った。

7月12日(土) 今日も天気は上々。にぎりめしを作って出発した。大面積・長期調査プロットと暖温帯と冷温帯の移行帯についての説明を受けながら上がっていく丹波高地。杉尾峠下で車をおりてブナの林に入っていく。途中にあったミズナラはカシノナガキクイムシによるナラ枯れの被害をうけていて、フラス(虫の出した木屑)がハッキリ見られた。学生たちは「こんな穴で木は死んでしまうのか。」「こんなに大きな木が、案外もろいものだなあ。」と木・虫・菌の関係に驚いたようすであった。続いて、由良川最源流部の上谷を栃の洞に入ったり、クルミを拾ったりしながら長治谷まで下って行った。上谷量水堰では流量観測に挑戦した。多くの学生が裸足になって川に入り興奮気味に測定を行っていた。下谷では大カツラ、二次林と人工林を観察し、幽仙谷では天然林からの流出物を回収し、宿舎に持ち帰った。夕食は鍋。夜は大学院生の研究紹介に対して、心地よい疲れに居眠りしながらも、耳は起きていて興味はあるようで、質問の時間はなかなかの盛況であった。

7月13日(日) 前日調査を行った流量データをレポートにまとめた。流出物の中にあった各自が気に入った木の葉と水棲昆虫をデッサンし、レポートとともに提出した。最後に宿舎・食堂の片付けとフィールド研からのアンケートを書いてセミナーは終了となった。感想文には、芦生の森に触れた興奮が率直に表現され、期待通り・想像以上などそれぞれの気持ちが書かれていた。また、共同生活の醍醐味を挙げる受講者もいた。

自分たちで「めし」を作り、量の問題を含めて評価することは、なんでもお金を出しさえすれば、手に入る現代社会においては大変貴重な経験であると言えるのかな……。まあ、そんなにたいしたものではないだろう……。



ナラ枯れしたミズナラを観察



上谷での流量観測

⑨森のつくりだすもの

森林生態保全学分野 徳地 直子 准教授

森は有形・無形のさまざまなものを私たちにもたらしてくれるが、森の実際の姿や森の作り出す機能の創出のためにどのようなしくみがあるのか、よく知っているとはいえない。このポケゼミ“森のつくりだすもの”は、森に入って、森にふれ、さまざまな森の性質をとらえることを目的としている。

本セミナーは、和歌山研究林において夏季休業期間中に行われる。和歌山研究林はフィールド研の他の研究林においても特に集落から離れた自然にめぐまれた地域にあり、また人工林率の高い森林である。そのため、以前は人工林の育成に関する林学教室の実習が行われていた。このような特徴を生かし、自然の森林を体験するだけでなく、現在産業として厳しい状態にある林業についても考えるきっかけとしてもらいたいとカリキュラムを立てている。今年度は特に、森と川のつながりを重視し、和歌山研究林内の河川での魚類の調査も行い、以下のようなスケジュールとなった。

- 第一日目 研究林を源流のひとつとする有田川の下流地点に集合し、上流に向かって河川水をサンプリング・調査しながら研究林にはいる。
- 第二日目 和歌山研究林が設置されて以来手付かずで残されている貴重な天然生林とそれを取りまく人工林内を散策し、樹木の識別を通して自然の営みを見つけ、天然林、人工林のそれぞれの特徴を学習する。研究林内の河川において、電気漁具を用いて魚類相とその食性について調査する。
- 第三日目 森林における森と川のつながりを、川に生息する魚類の採取とその胃内容物から考える。また、人工林を管理することの重要性を学び、実際に間伐体験を行う。

終了後にレポートを提出してもらい、学んだことや感じたことなどをまとめてもらっているが、「自然の中に存在する様々な仕組みにあらためて驚き、感動した」、「専門的な授業を受けたい思っていた時期にこのポケゼミに参加できてよかった」などの意見があり、これから大学で学んでいく学生に森林生態系のしくみや森林と人との関わりについて少し何かを感じてもらえたのではないかと考えている。



⑩森里海のつながりを清流古座川に見る

里地生態保全学分野 梅本 信也 准教授

2008年8月25日（月）から29日（金）まで古座川流域における里域系連環をメインテーマにしたポケゼミが行われた。初日と最終日は晴だったが、中3日間は生憎の天候だった。参加予定者10名のうち、諸事情で3名が欠席した。うち2名は無断欠席であった。

初日はガイダンス、「古座川合同調査報告集・第1, 2巻」などの資料配布のあと、中流域に位置する古座川一枚岩、支流小川の中流域にある滝の拝カメ穴、古座川本流下流部の高池の虫喰岩といった合計3つの古第三紀の地質学的サイトを重点的に見学しながら、今回の調査対象地域である古座川流域の概観、地形、気象、植生、土壌、生物相、文化相を把握させた。今年度の実習は聞き取りと観察によって、ハレ食文化における現状と課題を探るもので、具体的には古座川流域特産のサンマ寿司と正月料理である雑煮の地域内多様性とその成立要因と歴史の変容を明らかにすることがテーマであった。

そこで、第2日はポケゼミ補助者の院生を含め各班2名ずつに別れ合計4班を結成、まずは下流域の西向、中湊、高池、宇津木、月野瀬、高瀬、合計6地区を訪問、聞き取り調査を行い、聞き取り参考シートを手がかりに情報提供者ごとの基礎カルテを作成した。時間の制約もあり地区当り4~5名の情報提供者から聞き取りを行った。学生にとって初体験の調査法でもあり、方言の問題もあり、学生同士も親密でないなど、最初は馴れない風であったが、次第にチーム精神が発揮され、相手の心と同調させる話法も体得され、順次調査技術が向上した。

第3日目は中流域の明神、一雨（いちぶり）、相瀬、蔵土（くろづ）、三尾川（みとがわ）、長迫の合計6地区を訪問、同様の作業を行った。第4日には七川ダム上流域の佐田、添野川（そいのがわ）、下露、平井の合計4地区を訪問、同様の作業を行った。この日の午後からは全基礎カルテを集結、細部点検後に人数分を複製し、情報の共有化をはかり、基礎カルテ集とした。分量はA4またはA3サイズで厚さ1cmにも達した。このカルテ集をもとに森里海連環、食文化、地域性、歴史変容といったキーワードで表現されるレポートを各自毎に作成した。結論から言えば、古座川流域にはサンマの捌き方法に背開きと腹開きという2類型が認められ、類型分布と河口からの距離との間に明瞭な地理的傾斜が確認された。また、雑煮料理については流域における多様性に乏しく、醤油&鳥肉出汁が基本の関東型と判定されたが、モチ形状については関西型であった。

第5日目は、宿泊施設の片付け、レポートやアンケートを提出させ、10時半に解散と相成った。気恥ずかしさや消極性が有意に感じられる初日とは打って変わり、例年通りではあるが、日に日に各学生の顔や言動にパワーがみなぎっていくのが指導教員として嬉しく思われた。



参加者（タフォニ浸食の虫喰岩で）



聞き取り調査の様子（佐田地区で）

⑪森林の再生と動態

森林資源管理学分野 安藤 信 准教授

京都市市街地周辺林，奥山の芦生研究林，その中間に位置する北山・八丁平湿原周辺の天然林・二次林を踏査・調査し，森林帯，地形，遷移過程の違いに伴う種組成や林分構造の違い，そしてその動態について講義・実習を行った。セミナーは4，5月の土・日・祝日を中心に行った。

○4月25日（金）：ガイダンス 昼休みを利用して日程・準備・注意事項を説明した。

○4月26日（土）：森林の再生と動態とアカマツ林の更新 森林の遷移と更新の違い，階層構造，遷移に伴う種組成・多様性・成長の変化，さらに京都市周辺の森林の近年の変化について，データをもとに紹介し，院生による現在行っているアカマツ林の再生に関する研究報告，北白川試験地での樹木識別法についての講義を行った。その後，大文字山で樹木識別実習を行うとともに，京都市市街地周辺の山々を覆っていたアカマツ林のマツ枯れの影響とその後の遷移について説明した。アカマツ林再生のための施業を行った国有林内の試験地において，マツ林の更新を促す地表処理について解説し，発生稚樹の確認，稚樹の成長に影響を及ぼす上層の残存木の調査を行った。

○4月27日（日）：冷温帯二次林の地形，攪乱の違いによる林相の変化 北山・八丁平の地形・攪乱の歴史が異なる二次林の林分構造と動態やシカによる森林被害に関する講義を行った。現地では，固定調査地の林分構造，遷移の違いを確認するとともに，ヒノキが多い林分で直径成長量調査を行い，樹高の測定法を学んだ。

○4月29日（祝）：シイ林の拡大と種多様性（その1） シイなど照葉樹の分布が拡大している東山・清水山のシイを伐採した林分にプロットを設定し，残存する落葉樹やヒノキの直径，樹高の毎木調査を行った。

○5月4日（祝）～5月5日（祝）：冷温帯天然林，二次林の林分構造と動態 芦生研究林において，天然林を構成する樹種とその動態，二次林の更新について講義を行った。伐採後50年を経過した林分等の毎木調査及び16haの天然林大面積調査地の見学を行い，冷温帯の天然林，二次林の林相の違いとともに，急傾斜地で巨木を対象に調査を行うフィールド調査の難しさを体験した。

○6月1日（日）：シイ林の拡大と種多様性（その2） 8年前に小面積に皆伐した施業地内で，更新してきた樹木の毎木調査を行い，陽樹と陰樹の成長と種の多様性の回復について学んだ。

今年度は天候や受講生4名の都合によって6日間の野外実習の日程調整が難しく，5月後半から7月前半に3日間の補講を行った。本セミナーでは農学研究科森林育成学研究室D3の呉初平君，M1の中村真介君，4回生の後藤元保君，農学部3回生の森岡信博君が協力してくれた。



⑫豊かな森をめざして！

森林環境情報学分野 芝 正己 准教授

2008 年度新入生向け少人数セミナー（ポケゼミ） “豊かな森をめざして！（The Way to a Richer Forest）” の科目名で開講した本ゼミは、5 月初旬のオリエンテーションからスタートし、本部での 4 回の講義（毎火曜日 5 限目：講義の合間にフィールド研関連施設の見学を含む）と 1 泊 2 日の芦生研究林での野外体験実習を行った。今回の受講生は、文学部（1 名）、工学部（1 名）、農学部（4 名）、総合人間学部（2 名）の 8 名（男性 3 名、女性 5 名）であった。

本講義の目的は、地球規模で問題となっている世界の森林の状況、日本での森林の保全・利用の現状を対比させながら、環境-経済-社会面からみた森林資源管理のあるべき姿を分野の異なる受講生全員で模索議論することである。21 世紀に向けて森林を持続的に管理し、その多面的な機能を発揮させるためには、従来の専門領域に止まることなく、異分野間の連携を図ることが必要であり、そのためにも、隣接する領域やこれまで無関係だと考えられてきた分野についての正確な知識の習得が求められている。その具現化として「森里海の連環」を教示しつつ、以下の内容構成で解説した。

- 講 義
- 1：諸外国の森林・日本の森林の特徴について
 - 2：森林の利用と保全のバランス
 - 3：新たな森林の管理－豊かな森へ
 - 4：総括と討論

野外体験実習 7 月 3 日（木）～5 日（土）芦生研究林

野外体験実習の初日は、昼過ぎに JR 園部駅西口に集合、芦生研究林のマイクロバスで「園部・日吉：郊外の土地利用や森林風景」、「美山町：由良川沿いの景観と土地利用、茅葺きの里」等を順次見学しながら研究林までのほぼ 1 時間半のコースを移動した。

翌 4 日は、芦生研究林の技術職員の支援を得て、内杉谷から長治谷までのコースを移動しながら、「暖温帯林から冷温帯林への森林の変化」、「シカの食害地やクマ剥ぎ木」、「カシノナガキムシ被害木」、「溪畔林の植生」等を観察した。さらに、由良川本流に沿ったトロッコ軌道敷を、樹木識別を行いながら、灰野集落地跡まで散策した。最終日の 5 日は、後片付け、レポート作成後、初日の逆コースを経て JR 園部駅で解散した。今回の芦生実習には、4 回生 1 名が TA として参加したが、初めて訪れた受講生に対して施設の利用法や食事の準備等きめ細かに教示補助してくれた。わずかな芦生での滞在であったが、フィールドでしか得られない何かを全員が感じ取ってくれたような気がする。彼らのこれからの学生生活に期待したい。



芦生研究林由良川本流沿いでの樹木識別風景



芦生研究林構内での記念写真

⑬節足動物学入門

海洋生物進化形態学分野 宮崎 勝己 講師

昨年度に引き続き、少人数セミナー「節足動物学入門」を、京大本部地区における二回の講義と、瀬戸臨海実験所における実習を組み合わせる形で行った。受講生は定員一杯の6名であったが、クラブ等の理由による実習不参加が相次ぎ、最終的には理学部1名、農学部2名の、計3名と半減したのは、非常に残念であった。

講義及び実習は、ほぼ前年度と同様の内容で行った。第一回目の講義では、オリエンテーションとして、概要説明、自己紹介、今後の日程調整を行い、二回目の講義では、節足動物の生物学について概説的な講義と、ある無脊椎動物学の英語の教科書から、節足動物の特徴をまとめた部分を抜き出したものを配布し、その和訳を宿題として課した。

実習は瀬戸臨海実験所にて四泊五日で行った。初日のオリエンテーションと所内見学の後、中三日間で、捕虫網を使った陸生節足動物の採集、簡易ツルグレン装置を使った土壌性節足動物の採集、磯採集による海洋性節足動物の採集、打ち上げ海藻からの葉上性節足動物の採集をそれぞれ行った。採集した節足動物は出来る限り細かく同定し、最終日に同定結果と採集方法に基づき、生息環境との関連と生活域の進化について論じさせるレポートを課した。最終的な成績は、出席回数、英文和訳の宿題、実習レポートと、全体的な受講態度とを総合して、判定した。

また今年度は、大阪大学の臨海実習と日程が重なったが、様々な形で学生間の交流が図られ、受講生には好評であった。



実験所近くの番所崎における磯採集風景



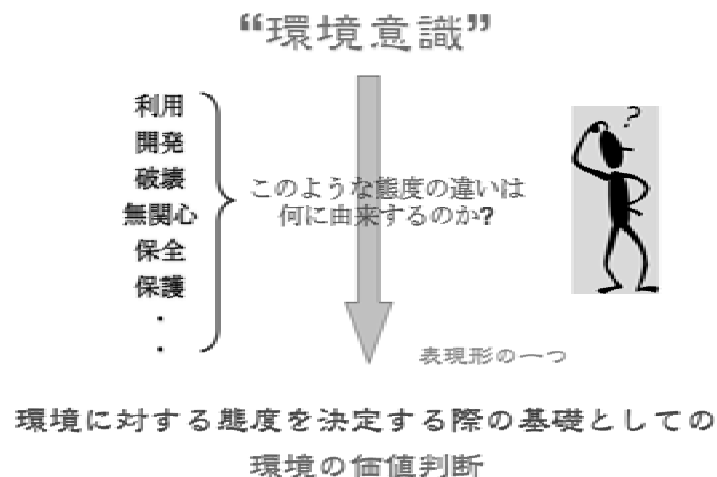
土壌性節足動物採集用の手作りの簡易ツルグレン装置

⑭環境の評価

森林資源管理学分野 吉岡 崇仁

少人数セミナー「環境の評価」は、A・B群（人文・社会科学系科目群と自然科学系科目群にまたがる科目）のセミナーとして開講し、自然環境を評価することの意味について、自然科学的、社会科学的側面から解説と討論の形式で実施した。受講生は、工学部6名、経済学部2名、理学部1名の合計9名であった。

「環境を評価する」とはいったいどういうことかという点について、環境の持つさまざまな価値を人間が認識し、自らの態度や行動を決定する際には、その環境の価値を判断している、という枠組み設定（図参照）に基づいて議論を進めた。



⑮お魚好きのための魚類研究入門

河口域生態学分野 田川正朋・中山耕至

京都大学農学部において8回の講義と実習を行い、フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所において2泊3日のフィールド実習を実施した。実際に手を動かしながら、かつ議論しながら進めるため募集人数を6名に制限した。抽選により男子学生6名（農2，理2，法1，総人1）が受講生となった。京都での講義は全員が皆勤であったが、舞鶴での実習は都合のつかなかった学生が1名いたため、5名の参加であった。

京都での講義と実習（月曜4限）

第1・2回目：魚について、考えられる限り多様な「問い」をブレインストーミング様式で発してもらった。

第3・4回目：ゼブラフィッシュ受精卵の卵割を実体顕微鏡下で見てもらった。また、各自が受精卵を自宅に持ち帰り、発生経過を観察した。翌週に全員のデータを集計し、データの分析法や結果の考え方について討論をおこなった。

第5・6・7回目：種名の決定法や外部形態の観察法のトレーニング、及び、各種臓器や胃内容物の観察も試みた。これらに基づき、その魚の生き様を各自に推測してもらい、パワーポイントを使って発表会形式で討論を行った。

第8回目：舞鶴での実習に備えてのガイダンス。ピーターセン法による資源量調査の基礎知識などを講義した。

舞鶴での実習（8月6日から8月8日）

8月6日：宮津エネルギー研究所水族館を訪問し、水槽裏側の設備や繁殖水槽について飼育担当の吉田氏から説明を受けて見学した。舞鶴水産実験所では、益田准教授から飼育設備の説明をうけた。また、標本館の見学を行った。

8月7日：由良川河口付近にてケタ網採集を行った。採れた魚類のうち、マハゼおよびマゴチについて標識再捕を行い、資源量を推定した。安全のため全員にウェットスーツを着用してもらったが、一方で暑さのため体力を消耗した。

8月8日：上野助教と佐藤船長のお世話になり、緑洋丸にて由良浜沖で深度別のケタ網採集を行った。また、魚群探知機や海洋観測機器の説明を受けた。昼食後に最終ミーティングを行い2時過ぎに実験所をあとにした。

もともと「お魚好き」の学生を集めたことによって、魚という研究対象への集中力を持続させることが出来たと思う。自分の頭を使ってもらふことと、普段は見ることのできないものを実際に見てもらふことに重点をおいた。受講人数を6名としたため抽選で涙をのんだ学生もいたと聞が、ゼミとしての効果を維持できる人数を考慮するとやむを得ないように感じる。何よりも事故もなく良い雰囲気の中で1学期間のゼミを終了できたことに満足している。



由良川河口付近でのケタ網による採集

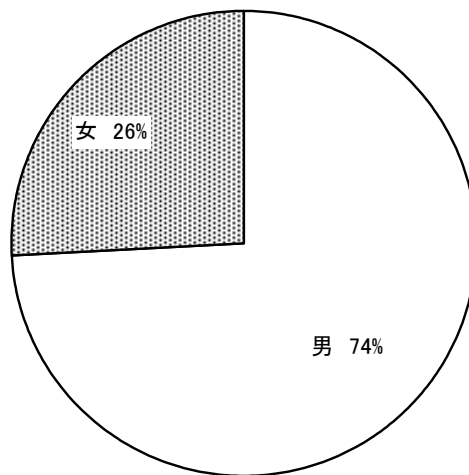


緑洋丸での深度別ベントス採集

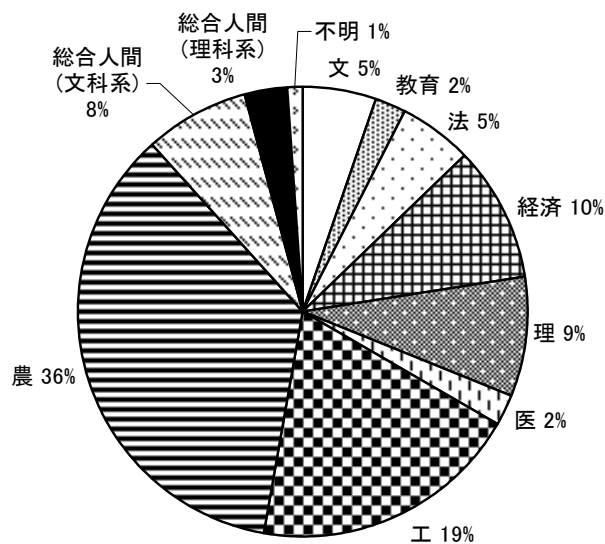
⑩少人数セミナーに関するアンケート

このアンケートは、フィールド科学教育研究センターの少人数セミナーを今後より充実したものにしていくため、学生の率直な意見を求めたものである。アンケートは9設間からなっており、有効回答者数は93名（芦生研究林，紀伊大島実験所，舞鶴水産実験所，瀬戸臨海実験所，その他の施設）である。以下，原則として設間ごとに，集計結果をグラフで表示し，百分率を添えた。

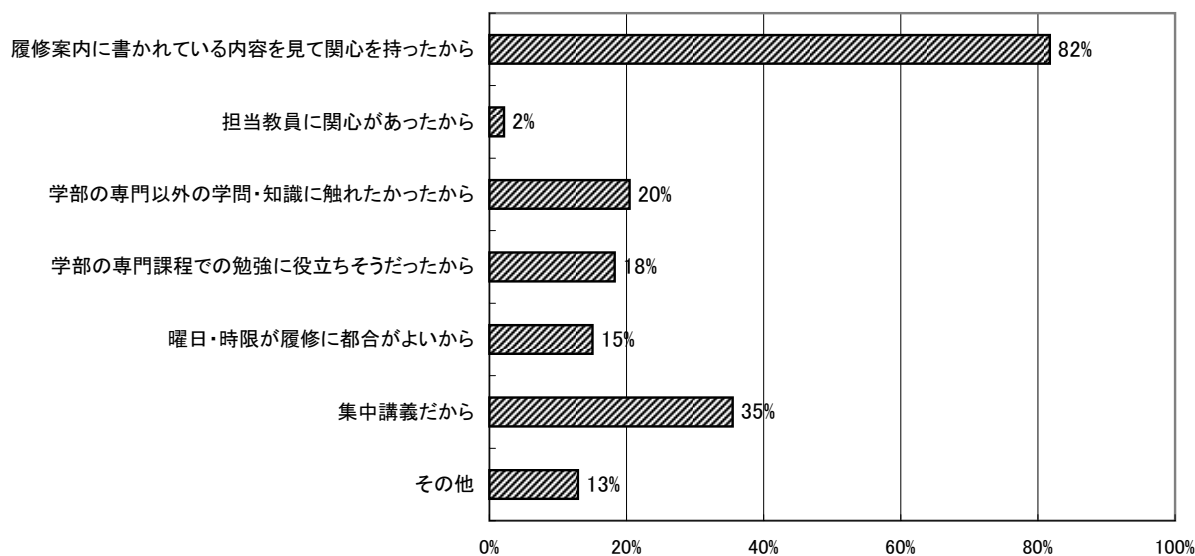
Q1 あなたの性別を答えて下さい。



Q2 あなたの所属学部を答えて下さい。



Q3 このセミナーを受講することにした理由を答えて下さい。(複数回答可)

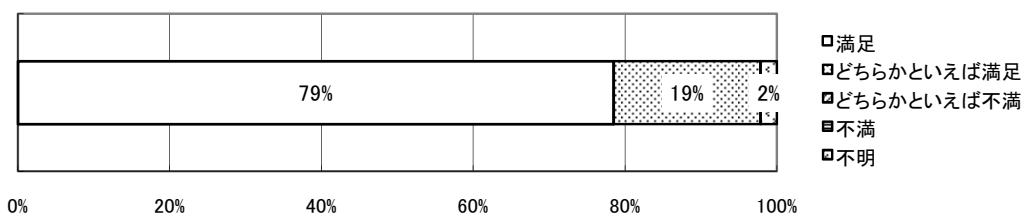


「その他」・・・

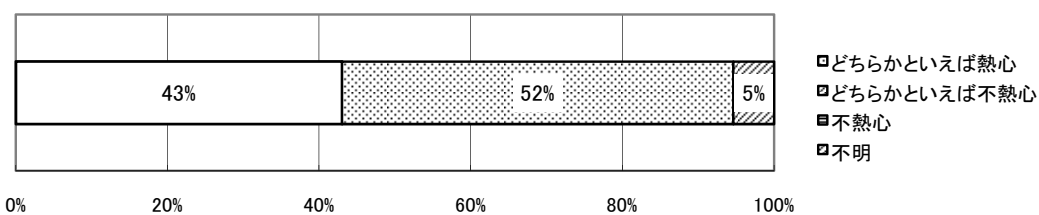
- ・学内ではできない講義を受けたかったから
- ・楽しそうだったし、興味があったから
- ・宿泊を伴うから
- ・B群の授業で、文系でもついて行けそうだったから
- ・フィールドワークがあったから
- ・ベニクラゲに興味があったから
- ・先輩に楽しいと聞いたから
- ・ニコルさんに会ってみたかったから
- ・カブトムシに会えそうだったから

Q4 このセミナーを受講しての感想をうかがいます。

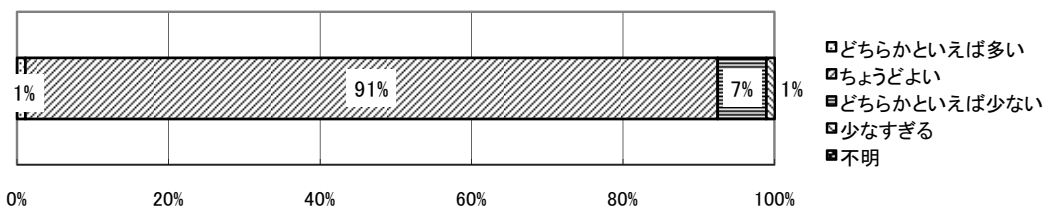
(1) このセミナーの授業内容に満足していますか。



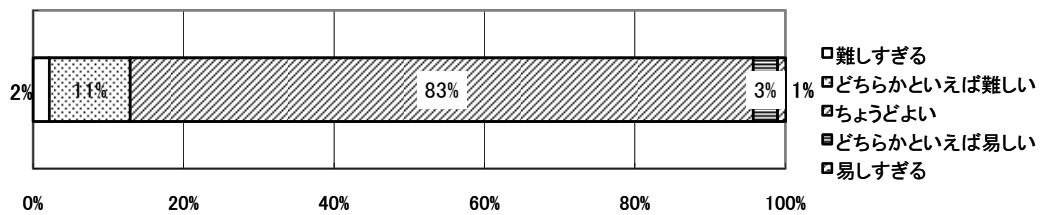
(2) あなた自身の受講姿勢はどうだったと思いますか。



(3) このセミナーの学生数についてはどう思いますか。

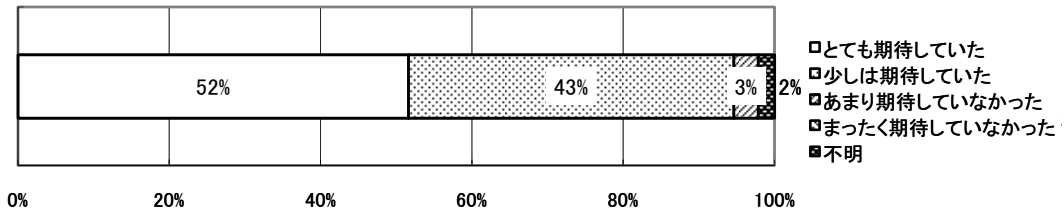


(4) 授業の難易度はどうでしたか。

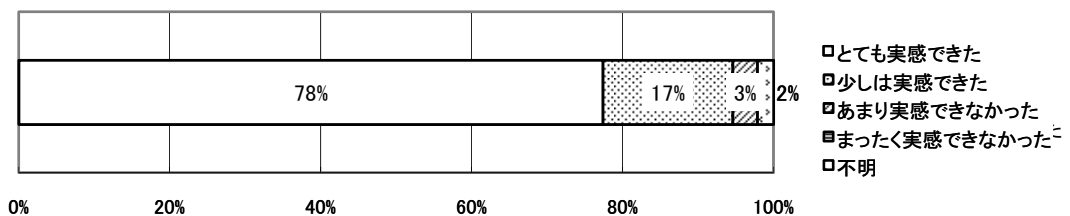


Q5 少人数制の授業形式についてうかがいます。

(1) このセミナーを受講する前、講義のような大人数形式の授業よりも多くのものが得られることを期待していましたか。

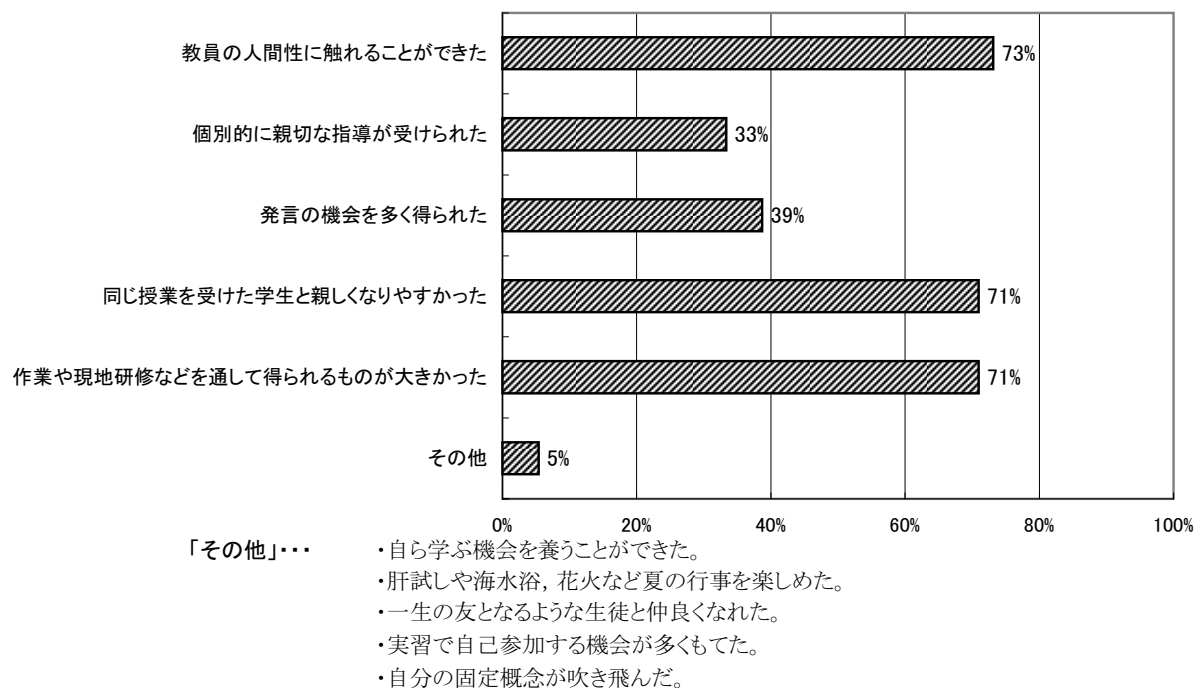


(2) では、実際にこのセミナーを受講してみて、少人数形式でしか得られないものがあると実感できましたか。



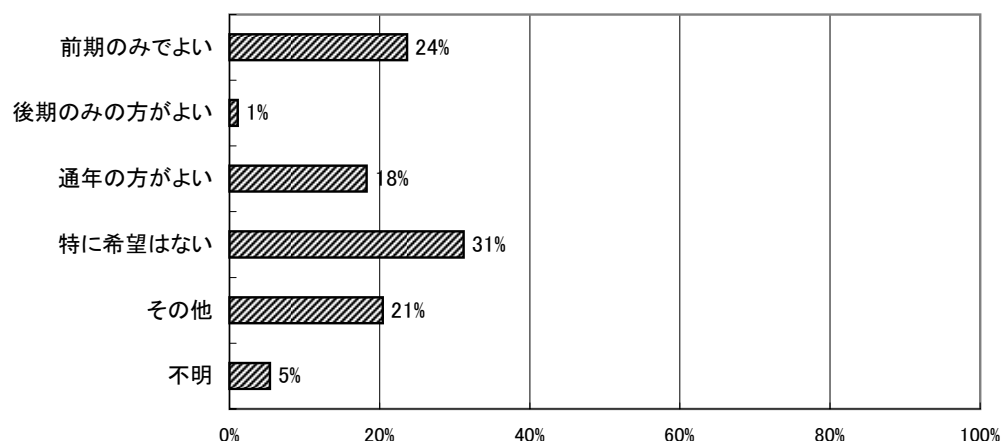
(3) 前問(2)で「とても実感できた」または「少しは実感できた」を選んだ方にうかがいます。

少人数形式の授業でどのような点がよかったと思いますか。(複数回答可)



Q6 少人数セミナーの実施方法等についてのご意見をうかがいます。

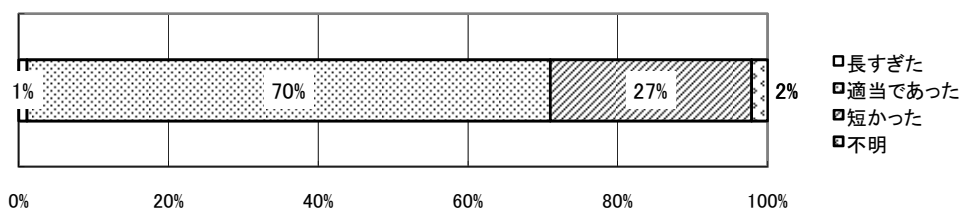
(1) 少人数セミナーは前期のみの開講となっていますが、この開講時期についてはどう思いますか。



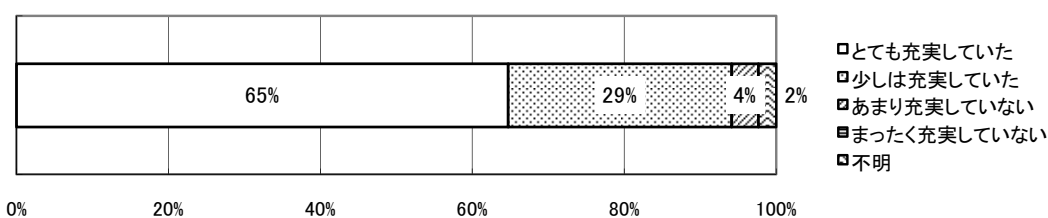
「その他」・・・

- ・前期と後期どちらでも受講できると良い。
- ・楽しいので、前期も後期も参加したかった。
- ・1回生だけでなく2回生以降も受講できると良い。
- ・毎年開催して欲しい。
- ・テスト前はしんどいので、やめて欲しい。
- ・実習は2週間が良い。

(2) このセミナーの実施期間についてどう思われますか。

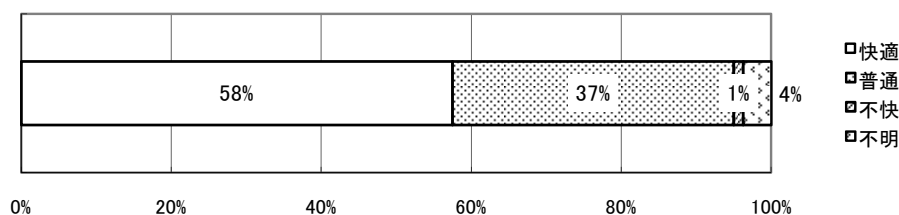


(3) このセミナーの実施場所の実験設備や実験器具についてどう思われましたか。

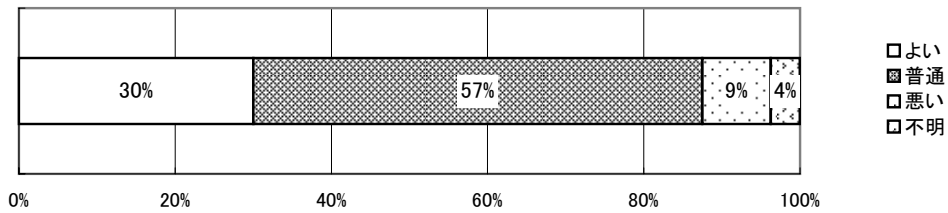


(4) このセミナーの宿泊についてうかがいます。

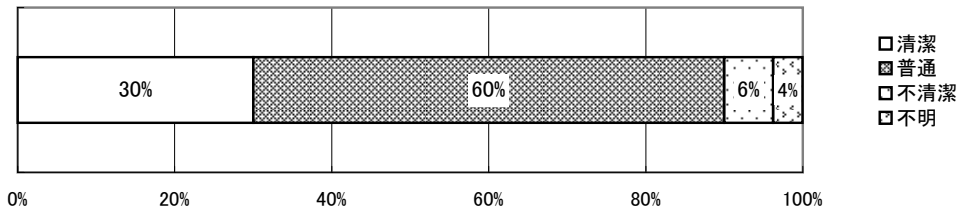
・ 共同の宿泊生活は



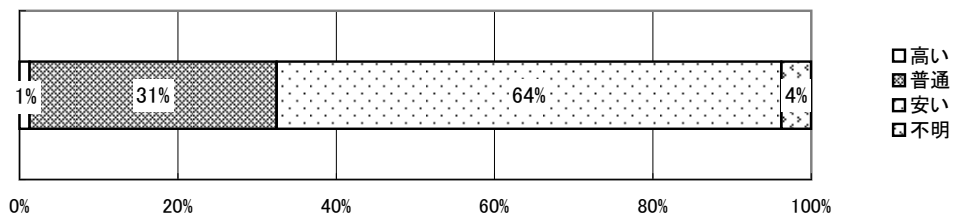
・ 宿泊施設の整備は



・ 宿泊施設の寝具は



・ 宿泊施設の経費は



(5) 宿泊施設や食事について、何かご意見やご要望があれば自由に記入して下さい。

【芦生研究林】

- ・ 枕がすごく高く硬かった。
- ・ 森にトイレが欲しかった。
- ・ シーツのサイズが合わない。
- ・ 携帯が圏外なのは、ツライ。
- ・ 虫が多かったため、網戸などの防虫対策をしっかりと欲したい。
- ・ みんなで寝て、みんなで食事でできて、とても楽しかった。
- ・ 満足です。

【紀伊大島実験所】

- ・ 鍋料理が良かったと思う。語り合いの場、というものは大切だと痛感した。
- ・ 施設は良かったが、食事は何ともいえない感じだった。

【舞鶴水産実験所】

- ・ 食事がおいしかった。
- ・ 朝食400円は高い。
- ・ できれば宿泊費を無料にして欲しい。
- ・ シャワーが一人ずつしか使えないのは不便だった。
- ・ 食事はおいしかったが、風呂はもう少し充実させた方がよい。
- ・ 大浴場を作って欲しい。
- ・ 虫が多かったため、ちょっと困った。
- ・ ムカデが多かったため怖かった。

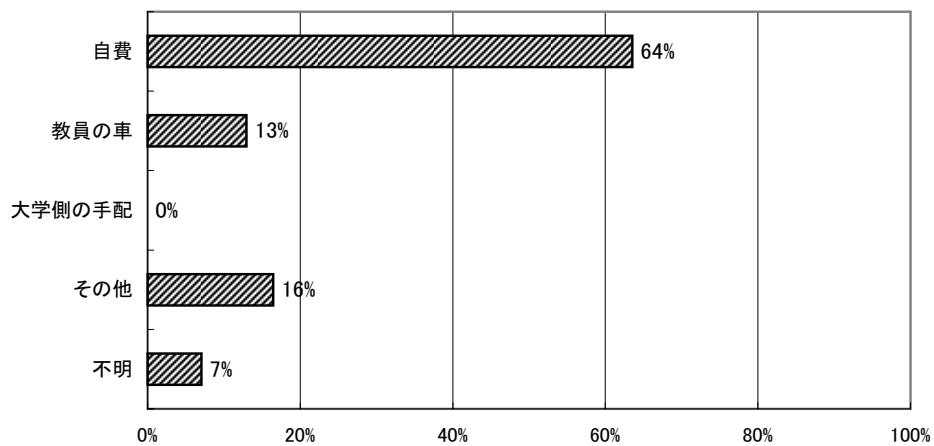
【瀬戸臨海実験所】

- ・ 食事がワンパターンだった。でも最終日の刺身はうまかった。
- ・ 食事のバリエーションを増やして欲しい。
- ・ 食事について、夕食はおいしかったのですが、昼食のお弁当は揚げ物が多くて、重かった。
- ・ 虫が多いのは仕方がない。トイレを洋式にして欲しい。食事はおいしかった。
- ・ 調味料をしっかりとそろえて欲しい。風呂のシャワーとシャワーの間がせまい。部屋においてある虫除けのにおいがきつい。

【その他の施設】

- ・ 洗面、トイレ、お風呂が1つしかないのが、少し不便だった。外食が結構な出費になった。
- ・ 風呂、トイレなどの整備が悪く、不便であった。
- ・ ご飯が少なかった。でも宿泊施設自体は気に入った。
- ・ 食事はおいしかったのですが、量が多くて食べきれず申し訳なかった。

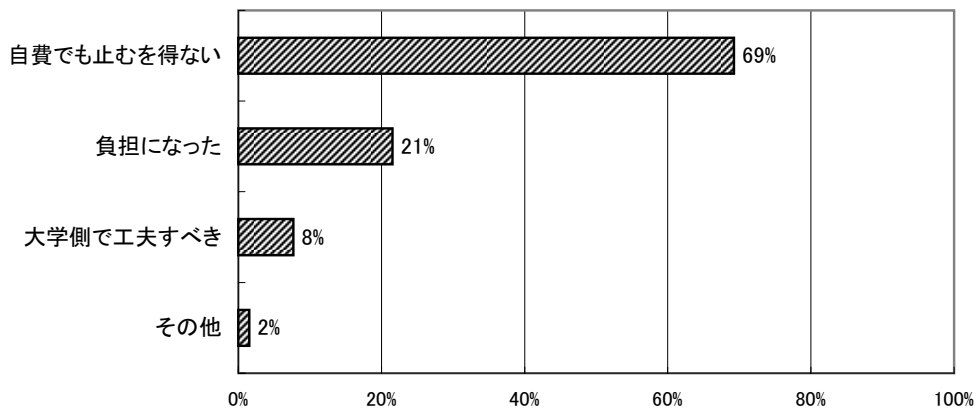
(6)このセミナーの現地集合場所へのアクセスについてうかがいます。



「その他」・・・

- ・行き-自費, 帰り-教員の車
- ・自費+教員の車
- ・自費+大学側の手配

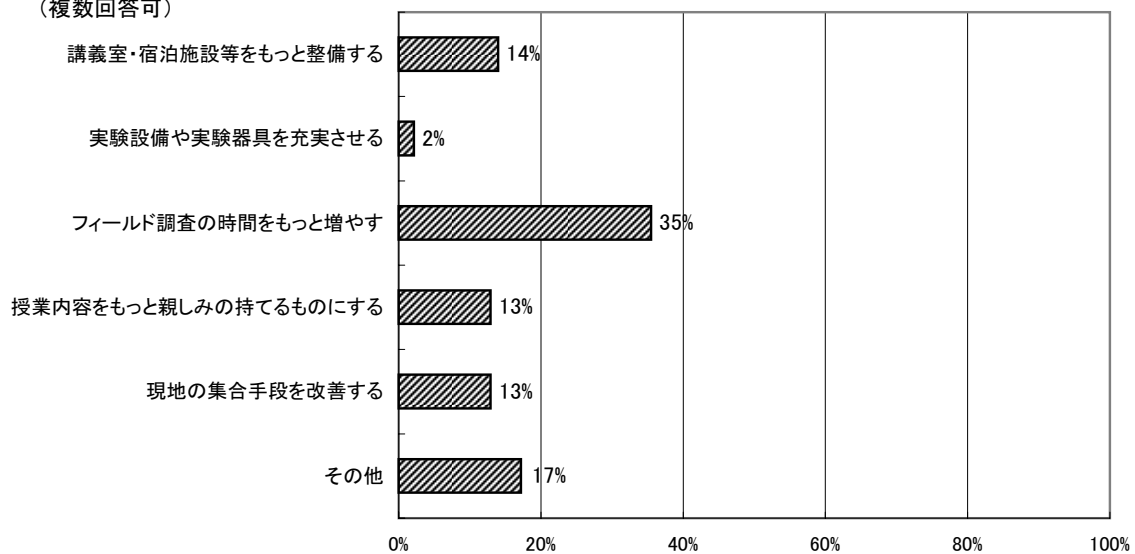
(7)前問(6)で「自費」を選んだ方にうかがいます。



「その他」・・・ 特に問題ない。

Q7 今後、少人数セミナーをさらに充実させるためには、どのようにすれば良いと思いますか。

(複数回答可)



「その他」・・・

- ・発言の機会をさらに増やす。
- ・十分に充実していると思う。
- ・満足です。
- ・もっと多様な分野から受講科目を選択できるようにする。
- ・もっと長期が良い。
- ・フィールドワークは部活がオフの日にして欲しい。
- ・講義中にサンプルなどをもっと見せて欲しい。

Q 8 今回受講された少人数セミナーについて、何ご意見やご希望があれば自由に記入して下さい。

【芦生研究林】

- ・自炊の食事分量が難しかったので、前受講者の食材リストと食べた人数の資料があると良かった。
- ・すごく楽しかった。泊まり実習を通して、参加者の仲も深まった。またやりたい。
- ・日程について、夏休みにより長い期間で開講して欲しかった。
- ・できれば、前期の試験前の時期からずらして欲しかった。長期休みの時にまとまった日程で、もっと長く実習を行いたかった。大学にいては得られないような経験も多く、充実していてとても楽しかったし、良い刺激になった。
- ・すごく楽しい実習でした。2泊3日でしたが、もっと長くいたかったです。
- ・先生をはじめ、研究林の皆さん、一緒に参加した方々みんなとても親切で楽しくおもしろくて、大変お世話になりました。
- ・本当にすばらしかったです。

【紀伊大島実験所】

- ・楽しかった。台所にアリが多くて驚きました。
- ・楽しかった。終わってみると短いと感じた。
- ・授業前に参加者の顔が分からない、というところに今は奇妙な好感を持てます。川か海にもう少し行きたかった。

【舞鶴水産実験所】

- ・あんなに大量の魚を一度に捕まえたのは生まれて初めてなので、とても興奮しました。
- ・全体を通してとても楽しかった。ただ日程が少し短かったので、長期休みなどを利用して日程に余裕をもって受講したかった。
- ・フィールドでしか体験できないことが色々あったので、貴重な講義だった。
- ・とても楽しく、勉強になり参考になって、最高でした。ありがとうございました。またいつか行きたいです。人数はもう少し多くても良いかと思いました。
- ・自分の興味のある授業を少人数で受講できて良かった。色々な少人数セミナーを受けてみたいと思った。
- ・とてもおもしろかった。回遊魚の話などとても参考になりました。
- ・期待していた通り、とても楽しい実習でした。女子が一人だったので色々心配なことが多かったのですが、楽しくできて良かったです。普段のゼミも、教室ではなく j. Pod であったので、うれしかったです。魚や河口域について、色々なことが知れて良かったです。
- ・後期にも何かして欲しい。
- ・講義でみんなに質問して答えさせるという方法はとてもおもしろかったので、大切にしたい方が良いと思う。自分がちょっと書いた質問にも毎回答えて下さったのもうれしかった。短い間でしたが、とても楽しかった。
- ・とても満足のいくセミナーだった。ただ実習の時期がテストの直前で、かなりキツイので、夏休み中に3泊4日くらいでのんびりできたらもっと楽しかった。
- ・初めてシュノーケリング体験をして、いろんな生物と出会えたことに感動しました。魚がもっと好きになりました。少人数だからメンバーと仲良くなれたり、先生とも話す機会が多くて得るものがたくさんありました。

【瀬戸臨海実験所】

- ・ベニクラゲのことを知れて良かった。
- ・水族館やスキndaイビングや磯などを通して、多くの生物に触れ合うことができた。また、それ以外の部分でも楽しいことばかりでした。
- ・理学部の実習と合同というのはおもしろい体験でした。文系なので通常なら絶対に触る機会のない器具で実験できたのは、貴重な体験でした。あえて希望を出すなら、もう少し海洋生物に親しむような観察ができれば良かったと思いました。
- ・スキndaイビングなど今までやったことのないことができて、非常に楽しかったです。その上、解剖などで勉強にもなったので、とても充実した時間が過ごせました。

- ・普段できないことがたくさんできて良かった。非常に有意義な5日間だった。
- ・割と時間に余裕があったため、昼寝をしたり、水族館に行ったりすることができて良かった。

【その他の施設】

- ・とても良い経験になったと思う。本当にありがとうございました。
- ・受け入れ側の都合もあると思うが、実習日程が夏休みの真ん中だったので、少し予定をあけるのが難しかった。夏休みの始めか終わりが良いと思った。

Q 9 当センターのホームページにアクセスしたことがありますか。内容についてどう思われますか。

- ・ないです。これを機に見てみようと思います。
- ・見たことはあるが、内容については覚えていない。
- ・先生のプロフィールがあっっておもしろかった。見た目が良かった。
- ・写真が充実していたと思う。
- ・写真が豊富で見ていて楽しい。
- ・見やすかった。
- ・芦生研究林の「現在の芦生」のページを見るのが楽しかった。
- ・芦生研究林のアクセス案内に衝撃を受けた。
- ・非常にきれいなデザインで、わかりやすい。
- ・紀伊大島実験所HPを見て、大変おしゃれできれいですごく期待して来たところ、うっそうと緑が生い茂る植物園の中にあり驚いた。
- ・紀伊大島実験所HPの内容は良いが、施設までの行き方が大まかでわかりにくかった。
- ・ポケゼミのページが見にくかった。
- ・もうちょっと内容を充実させて欲しい。
- ・研究施設までのアクセスについて、もっと詳しく載せて欲しい。また自分たちの写真も掲載して欲しい。

(2) 外部資金の獲得状況

(金額の単位はすべて千円)

2008 年度 受託研究

委託者	委託研究名	研究担当者	職種	代表者名 (所属)	研究課題名	分担課題名	2008 年度 交付額
京都市	平成 20 年度八丁平植生継続調査	安藤 信	准教授	—	—	—	440
水産庁	平成 20 年度水産基盤整備調査委託事業	宮崎 勝己	講師	鳥羽光晴 (千葉県水産総合研究センター)	ウミグモ対策漁場改善技術開発	ウミグモ寄生生態調査	1,000
広島大学	魚類との相互関係に基づく大型クラゲの発生制御	益田 玲爾	准教授	上 真一 (広島大学)	クラゲ類の大発生予測・抑制技術の開発	魚類との相互関係に基づく大型クラゲの発生制御	2,500
(独)国立環境研究所	CO ₂ 増加が沿岸底生生物と生態系に及ぼす影響に関する研究	白山 義久	教授				7,800
(独)水産大学校	平成 20 年度大型クラゲ発生源水域における国際共同調査委託事業	久保田 信	准教授	上野俊士郎 (水産大学校)	—	—	996
(独)科学技術振興機構	京都大学瀬戸臨海実験所所蔵標本データベース	伊勢戸 徹	助教	—	—	—	2,800
受託研究 計 6 件							15,536

2008 年度 寄附金

寄付者 (団体)	プロジェクト名称	担当教員	職種	2008 年度 交付額
サントリー (株)	森林生態系機能の定量的把握	徳地 直子	准教授	1,000
(財)日本財団	N a G I S A プロジェクトの推進	白山 義久	教授	20,800
(財)日本財団	日本財団「海域陸域統合管理学」研究部門に対する研究助成	山下 洋	教授	21,000
(株)村田製作所	センター共通経費	白山 義久	教授	2,000
(財)日本財団	センター共通経費	白山 義久	教授	360
和歌山県	竹林生態系機能の定量的把握	徳地 直子	准教授	108
アラスカフェアバンクス大学	沿岸生物の生物地理学に関する研究	白山 義久	教授	12,715
(財)京都理学研究協会	海洋生物学に関する研究	白山 義久	教授	400
(財)自然環境研究センター	森林生態系の長期動態に関する研究助成金	徳地 直子	准教授	1,800
(財)自然環境研究センター	森林生態系の長期動態に関する研究助成金	芝 正己	准教授	1,560
(財)自然環境研究センター	森林生態系の長期動態に関する研究助成金	柴田 昌三	教授	1,740
(株)村田製作所	センター共通経費	白山 義久	教授	2,000
(財)阪本奨学会	演習林の研究及び施業運営等の助成	徳地 直子	准教授	700
(財)阪本奨学会	演習林の研究及び施業運営等の助成	寄元 道德	助教	700
(財)阪本奨学会	演習林の研究及び施業運営等の助成	坂野上 なお	助教	700
(財)阪本奨学会	演習林の研究及び施業運営等の助成	柴田 昌三	教授	1,000
(財)阪本奨学会	演習林の研究及び施業運営等の助成	柴田 昌三	教授	500
和歌山県	竹林生態系機能の定量的把握	徳地 直子	准教授	294
(財)美山町自然文化村	芦生研究林の環境保全を目的とする助成	芝 正己	准教授	350
芦生山の家	芦生研究林の環境保全を目的とする助成	芝 正己	准教授	243
寄附金 計 20 件				69,970

2008 年度 科学研究費補助金

交付機関	研究種目	研究者	職種	代表者名 (所属)	研究期間 (年度)	課題番号	研究課題名	分担課題名	交付額 合計 ※予定を 含む	2008 年 度 交付額
(独) 日本 学術振興会	基礎研究 (A)	田中 克	名誉 教授	—	2006-2008	18208019	有明海湾奥部に存続する“大 陸沿岸遺存生態系”の起原と 特性	—	43,420	11,050
(独) 日本 学術振興会	基礎研究 (A) 海外 学術調査	柴田 昌三	教授	—	2008-2011	20255011	インドミゾラム州における 竹類の面積一斉開花枯死 が地域の生態系と焼畑に及 ぼす影響	—	45,760	18,590
(独) 日本 学術振興会	基礎研究 (B)	山下 洋	教授	—	2006-2008	18380115	沿岸海域における陸域起源 有機物の挙動と資源生物生 産に対する役割の解明	—	15,530	4,550
(独) 日本 学術振興会	基礎研究 (B)	白山 義久	教授	—	2007-2009	19310022	古座川水系七川ダムの放水 が串本湾の底生生物群集に 与えるインパクトに関する 研究	—	16,250	4,940
(独) 日本 学術振興会	基礎研究 (B)	徳地 直子	准教授	—	2007-2010	19380086	森林生態系の加齢に伴う窒 素飽和現象の解明と PnET-CN モデルを用いた影響予測	—	19,240	4,420
(独) 日本 学術振興会	基礎研究 (C)	安藤 信	准教授	—	2005-2008	17510025	世界文化遺産(京都)の背後 にある森林景観の回復	—	3,880	1,040
(独) 日本 学術振興会	基礎研究 (C)	益田 玲爾	准教授	—	2006-2008	18580183	飼育下におけるカタクチイ ワシ仔稚魚の行動特性の個 体発生	—	3,400	1,430
(独) 日本 学術振興会	基礎研究 (C)	田川 正朋	准教授	—	2008-2010	20580202	カレイ類の形態異常出現機 構の解明と防除—最適な変 態「前」成長速度の検討—	—	4,420	1,560
(独) 日本 学術振興会	萌芽研究	山下 洋	教授	—	2006-2008	18658079	尾虫類大量培養法の開発と ヒラメ仔魚の成長、発育に対 する尾虫類摂餌の効果	—	2,500	700
(独) 日本 学術振興会	萌芽研究	宮崎 勝己	講師	—	2008-2009	20658045	アサリに寄生し漁業被害を 与えるカイヤドリウミグモ に関する基礎生物学的研究	—	2,500	1,500
文部科学省	若手研究 (B)	深見 裕伸	助教	—	2006-2008	18770013	温帯域イシサンゴ類の総合 的な生態調査および遺伝子 バーコード化計画	—	3,900	1,300
文部科学省	若手研究 (B)	甲斐 嘉晃	助教	—	2007-2009	19770063	カサゴ目魚類における色彩 多型の進化的役割の解明	—	3,710	1,170
文部科学省	若手研究 (B)	佐藤 真行	特任 准教授	—	2007-2009	19710041	サステイナビリティ条件の 経済学的定式化とその実践 における環境評価手法の統 合的研究	—	3,340	1,300
文部科学省	若手研究 (B)	福澤加昌部	教務 補佐員	—	2008-2011	20780116	森林生態系における細根生産量と養 分吸収の空間的変動と影響	—	3,770	1,690
(独) 日本 学術振興会	基礎研究 (A)	中島 皇	講師	丹下健 (東京大学)	2006-2008	18208014	森林生態系における水・物質 動態の流域特性の広域比較 研究	量水観測体制 整備及び広域 比較解析	—	130
(独) 日本 学術振興会	基礎研究 (A)	柴田 昌三	教授	中村太士 (北海道大学)	2007-2009	19208013	再生すべき生態系の抽出、復 元工法並びに科学的評価に 関する学際的研究	里山生態系の 評価と再生技 術	—	650
(独) 日本 学術振興会	基礎研究 (A)	梅本 信也	准教授	武田和義 (岡山大学)	2007-2009	19255009	中国及びその周縁国に分布 する作物資源の遺伝的評価 と開発的研究(第4次)	中国大陸にお けるソルマメ の収集	—	455
(独) 日本 学術振興会	基礎研究 (A)	坂野上なお	助教	山本博一 (東京大学)	2008-2009	20240074	文化財建造物の保存に必要 な木材及び植物性資材の安 定確保の基礎的要件に関す る研究	社寺有林、山 村調査、檜皮 剥皮実験	—	1,105
(独) 日本 学術振興会	基礎研究 (B)	徳地 直子	准教授	大手信人 (東京大学)	2006-2009	18380093	森林流域の水質浄化に関す る生態系機能の解明と評価 手法の確立に関する研究	森林物質循環 調査	—	195
(独) 日本 学術振興会	基礎研究 (C)	中山 耕至	助教	木下泉 (高知大学)	2008-2009	20580203	諫早湾締切・干拓は本当に有 明海異変を引き起こしたの か?	—	—	361
科学研究費補助金 計 20 件										58,136

2008 年度 科学研究費補助金（特別研究員奨励費）

交付機関	研究者	職種	指導教員名	研究期間 (年度)	課題番号	研究課題名	交付額 合計 ※予定 を含む	2008 年 度 交付額
(独) 日本学 術振興会	ISLAM, M. S.	外国人特別 研究員	山下 洋	2006-2008	18・06437	有明海におけるスズキの初期生態と加入 量変動機構に関する研究	2,400	900
(独) 日本学 術振興会	福西 悠一	特別研究員 (DC2)	山下 洋	2008-2009	20・3906	紫外線が海産魚類の卵と仔稚魚の生き残 りに及ぼす影響の解明	1,200	600
(独) 日本学 術振興会	大久保 奈弥	特別研究員 (PD)	深見 裕伸	2008-2010	20・2948	サンゴの種多様性維持を目的としたキク メイシ科サンゴ種苗生産技術の開発	2,400	800
(独) 日本学 術振興会	ROBERT, Dominique	外国人特別 研究員	益田 玲爾	2008-2009	20・08755	海産仔稚魚に対するクラゲの捕食圧とそ の加入強度に対する影響	1,600	800
科学研究費補助金（特別研究員奨励費） 計 4 件								3,100

(3) 2008 年度 フィールド科学教育研究センターにおける主な取り組み（日記）

(1) 2008 年 4 月～

2008 年度新入生向け少人数セミナーを開講

・「C. W. ニコル “アフエンの森” に学ぶ」	(アフエンの森)	柴田 昌三 他
・「フィールド実習 “森は海の恋人”」	(気仙沼)	白山 義久 他
・「木造校舎を造る：木の文化再生へ」	(北白川試験地ほか)	芝 正己 他
・「河口域生態学入門」	(舞鶴水産実験所)	山下 洋
・「海岸生物の生活史」	(瀬戸臨海実験所)	久保田 信
・「海洋生物の多様性」	(瀬戸臨海実験所)	白山 義久
・「魚類心理学入門」	(舞鶴水産実験所)	益田 玲爾
・「原生的な森林の働き」	(上賀茂試験地, 芦生研究林)	中島 皇
・「森のつくりだすもの」	(和歌山研究林)	徳地 直子
・「森里海のつながりを清流古座川に見る」	(紀伊大島実験所)	梅本 信也
・「森林の再生と動態」	(芦生研究林ほか)	安藤 信
・「豊かな森をめざして！」	(芦生研究林)	芝 正己
・「節足動物学入門」	(瀬戸臨海実験所)	宮崎 勝己
・「お魚好きのための魚類研究入門」		田川 正朋 他
・「環境の評価」		吉岡 崇仁

(2) 2008 年 4 月～7 月

全学共通科目（リレー講義）「水圏生物学入門」開講

(3) 2008 年 3 月 25 日～4 月 7 日

瀬戸臨海実験所附属水族館において「日替わり解説ツアー・バックヤードツアー」を開催（3 月 25 日から日替わり（一般 71 人）、バックヤード（小学生以上 107 人））

(4) 2008 年 4 月 15 日～ 2009 年 1 月 20 日

和歌山研究林において、和歌山県立有田中央高等学校清水分校との共催でウッズサイエンスを開講（週 1 回・計 20 回）

(5) 2008 年 4 月 19 日, 5 月 24 日

瀬戸臨海実験所附属水族館において、きのくに県民カレッジ連携講座「水族館の磯採集体験・バックヤード体験学習」開催（一般（小学生以上）5 人）

(6) 2008 年 5 月 1 日

NaGISA プロジェクトに特定有期雇用教員（助教）を採用

(7) 2008 年 5 月 2 日

舞鶴水産実験所が、曹洞宗京都府宗務所婦人会総会における特別講演「日本海から見える食の環境」へ講師派遣

(8) 2008 年 5 月 5 日

和歌山県串本町田原において、紀伊田原湿地の復元をめざす研究会（紀伊大島実験所・紀伊田原ウェットランドの会共催）を開催

(9) 2008 年 5 月 7 日

須崎市立市民文化会館において、シンポジウム「木を“生かして生きる”社会をつくるために」を共催（高知大学大学院黒潮海洋科学研究科・須崎市） 参加者 500 人

(10) 2008 年 5 月 10 日

上賀茂試験地において「2008 年度上賀茂試験地春の自然観察会」を開催 参加者 30 人（応募 59 人）

(11) 2008 年 5 月 14 日

和歌山研究林において、和歌山県立有田中央高等学校清水分校との共催で「SIMIZU タイム」（ふるさと体験）を実施（1 年生 19 人）

(12) 2008 年 5 月 18 日

全日空「私の青空 阿蘇くまもと空港」においてフィールドセミナーを開講

- (13) 2008年 5月 22日
芦生研究林において、地域開放特別事業「学校の目の前を流れる由良川の源流を訪ねる（綾部市立東綾小学校の総合的な学習の時間）」を実施（1年生 16人）
- (14) 2008年 5月 29日
木谷雅人理事が芦生研究林を視察（ランチミーティング）
- (15) 2008年 5月 30日
和歌山研究林において、有田川町立八幡小学校との共催で、総合的な学習の時間「森は友だち森林の町清水」を実施（5年生 15人）
- (16) 2008年 5月 30日
清流の都・静岡創造推進協議会総会において基調講演「清流を都市も含めた森里海連環の視点から考える」
- (17) 2008年 5月 31日
全日空「私の青空 岡山空港・岡崎嘉平太の森」においてフィールドセミナーを開講
- (18) 2008年 5月 31日
芦生研究林において「芦生の森自然観察会 入門編 『春の森を歩きながら樹木観察をしよう』」を開催
参加者 17人（応募者 83人）
- (19) 2008年 6月 4日
白浜町中央公民館において、第1回しらはまの海の生き物から学ぶ（講座）を開催（瀬戸臨海実験所・白浜町中央公民館・白浜町教育委員会と共催）
- (20) 2008年 6月 11日
瀬戸臨海実験所において、第2回しらはまの海の生き物から学ぶ（講座）として、研究施設見学と水族館体験学習を開催（白浜町中央公民館・白浜町教育委員会と共催） 参加者 11人
- (21) 2008年 6月 23日
父島において、小笠原エコツアーを実施（NPO 法人エコロジー・カフェ共催）
- (22) 2008年 6月 23日
舞鶴水産実験所において、京都府立西舞鶴高等学校理数探究科の生徒に対し講義（SPP 連携講座）を実施（44人）
- (23) 2008年 6月 25日
北海道研究林において、標茶町立沼幌小学校との共催で木工教室を実施（全学年 12人）
- (24) 2008年 6月 25日
舞鶴水産実験所が、京都府立海洋高校による舞鶴市竜宮浜周辺ダイビングマップ作成の協力（3年生 18人）
- (25) 2008年 6月 26日
串本町役場古座分庁舎において、講演「南紀古座川一枚岩のヘリトリゴケ」（紀伊大島実験所・古座コミュニティ・カレッジ和歌山県立串本古座高等学校主催、紀伊大島実験所後援）
- (26) 2008年 7月 3日
北海道大学における持続的農業生産に関する国際会議 2008（ICSA2008）において、京都大学生態学研究センターと共同でセッション「Adaptive Management of Biodiversity」を開催
- (27) 2008年 7月 5日
和歌山県古座川町において「第7回古座川シンポジウム」を開催（紀伊大島実験所、古座川流域協議会共催）
参加者 85人
- (28) 2008年 7月 8日
芦生研究林において、水生生物観察会を実施 参加者 8人（知井小学校4年生）
- (29) 2008年 7月 8日
舞鶴水産実験所において、綾部市立東陵中学校に対して総合学習（「中学生由良川サミット」の発表に向けた水質調査等）を実施（1年生 15人）
- (30) 2008年 7月 11日
瀬戸臨海実験所において、海洋観測研究実習船「ヤンチナ」完成披露会を開催（尾池総長他参加）
- (31) 2008年 7月 19日～8月 31日
瀬戸臨海実験所附属水族館において、日替わり解説ツアーと、バックヤードツアーを毎日開催
参加者：日替わり解説ツアー（一般 373人）、バックヤードツアー（小学生以上 368人）

- (32) 2008 年 7 月 22 日
芦生研究林において、美山町第 4 学年合同自然体験教室「美山っ子グリーンワールド」を開催 参加者 37 人
(南丹市美山町内小学校共催)
- (33) 2008 年 7 月 22～24 日
舞鶴水産実験所において、京都教育大学附属高等学校のスーパーサイエンススクール (SSH) クラスの臨海実習
参加者に対して、特別講義と実習 (1 年生 19 人)
- (34) 2008 年 7 月 24～25 日
舞鶴水産実験所が、京都府立西舞鶴高等学校において、サイエンスパートナーシッププログラム (SPP 事業) に
よる講師派遣 (39 人)
- (35) 2008 年 7 月 25 日～27 日
フィールド科学教育研究センター公開講座 2008「森のしくみとその役割」を芦生研究林において開催
参加者 33 人 (応募者 46 人)
- (36) 2008 年 7 月 27～30 日
舞鶴水産実験所が、兵庫県立西宮今津高等学校に対して、「フィールド科学実習」(大江山での森林実習と舞鶴湾
での海洋実習)を実施 (2 年生 22 人)
- (37) 2008 年 7 月 31 日～8 月 2 日
舞鶴水産実験所が、京都府立南陽高等学校において、サイエンスパートナーシッププログラム (SPP 事業)
「南陽高校サイエンスリサーチ科夏季臨海実習」の事前講義や臨海実習 (44 人)
- (38) 2008 年 8 月 2 日
全日空「私の青空 広島空港」においてフィールドセミナーを開講
- (39) 2008 年 8 月 5～9 日
全学共通科目 (1～4 回生対象) 森里海連環学実習 A (芦生研究林ー由良川ー丹後海コース)を開講 (5 人)
- (40) 2008 年 8 月 10 日
京漁連の舞鶴地方卸売市場周辺における「ふるさと海づくり大会」に舞鶴水産実験所が企画展示部門で参加
(京都府と京都府漁業協同組合連合会の主催)。
- (41) 2008 年 8 月 24 日
高知県須崎市において、シンポジウム「仁淀川の森と水を考える」開催 (仁淀川漁業共同組合主催・フィールド
研後援) 参加者 約 400 人
- (42) 2008 年 8 月 24～25 日
芦生研究林が、大学等地域開放特別事業として、森林体験学習を開催 (共催: 和歌山県立有田中央高等学校
清水分校, ANA「私の青空」)。参加者 1 年生 22 人
- (43) 2008 年 8 月 28 日～9 月 5 日
瀬戸臨海実験所において、公開臨海実習 (国立大学法人臨海臨湖実験所長会議 主催)
- (44) 2008 年 8 月 29 日～9 月 4 日
全学共通科目 (1～4 回生対象) 森里海連環学実習 C (夏の北海道実習)を開講
- (45) 2008 年 8 月 30 日
「由良川フォーラム(第 4 回) ～自然と暮らす 自然とつながる～」を綾部市において開催 (京都府中丹広域振興
局・フィールド科学教育研究センター共催) 参加者 200 人
- (46) 2008 年 9 月 6 日
舞鶴水産実験所において、兵庫県立神戸高等学校の生徒に対して実習 (SSH 事業)を実施。参加者 33 人
- (47) 2008 年 9 月 12 日
舞鶴水産実験所が、第八管区海上保安業務に関し感謝状を受贈。
- (48) 2008 年 9 月 19～25 日
全学共通科目 (1～4 回生対象) 森里海連環学実習 B (紀伊半島の森と里と海)を開講 (日本財団助成実習)
- (49) 2008 年 9 月 20 日
舞鶴水産実験所において、京都府立舞鶴西高等学校の生徒に対して指導と講義 (SPP 事業)を実施。参加者 47 人
- (50) 2008 年 9 月 21 日
京都大学ジュニアキャンパス 2008 において、「森の働き 木・水・土から見える「無用の用」」を開講、および、
北白川試験地において樹木識別実習・北白川試験地およびその周辺で樹木を見学。

- (51) 2008 年 9 月 28 日
第 5 回時計台対話集会を開催（生態研と共催）。参加者約 270 人／講演：只木良也（名古屋大学名誉教授）・向井宏（北海道大学名誉教授） パネルディスカッション：吉岡崇仁，上野正博，椿宜高，谷内茂雄，奥田昇（パネラー），益田玲爾（コーディネーター）
- (51) 2008 年 10 月 1 日
海域陸域統合管理学研究部門が発足（日本財団寄附講座）
- (52) 2008 年 10 月 1～3 日
和歌山研究林において，有田川町立八幡中学校との共催で総合的な学習の時間「職業体験学習」を実施（2 年生 3 人）
- (53) 2008 年 10 月 3 日
京都大学シニアキャンパス 2008 の自由な学びの時間において，ミニゼミ「京都大学キャンパスの植物を学ぶ」を実施 参加者 5 人
- (54) 2008 年 10 月 3 日～
全学共通科目（リレー講義）「森里海連環学」を開講（日本財団助成講義）
- (55) 2008 年 10 月 3 日～
全学共通科目（リレー講義）「海域・陸域統合管理論」を開講（日本財団助成講義）
- (56) 2008 年 10 月 3 日～
全学共通科目（リレー講義）「森林学」を開講
- (57) 2008 年 10 月 9, 27 日, 29 日
和歌山研究林において，有田川町産業課との共催で「紀の国森づくり基金活用事業」の一環として町内川下の小学生を対象に「森とあそぶまなぶ」森林体験学習を実施（4 小学校 4, 5 年生計 130 人・教諭他計 31 人）
- (58) 2008 年 10 月 18 日
全日空「私の青空 中部国際空港・八百津めい想の森」においてフィールドセミナーを開講
- (59) 2008 年 10 月 18 日, 12 月 13 日
瀬戸臨海実験所附属水族館において，きのくに県民カレッジ連携講座「水族館の磯採集体験・バックヤード体験学習」（和歌山県教育委員会と共催・参加者 13 人）
- (60) 2008 年 10 月 25 日
芦生研究林において，「芦生の森自然観察会」を実施 参加者 18 人（応募者 33 人）
- (61) 2008 年 10 月 25 日
全日空「私の青空 三宅島空港」においてフィールドセミナーを開講
- (62) 2008 年 10 月 26 日
瀬戸臨海実験所において，和歌山県立向陽高校の生徒に対して実習（SSH 事業）
- (64) 2008 年 11 月 8 日
北白川試験地において，第 3 回京都大学ホームカミングデイ・北部キャンパス見学ツアーを実施
- (65) 2008 年 11 月 8 日
上賀茂試験地において，第 3 回エコの寺子屋を開講 参加者 21 人
- (66) 2008 年 11 月 8 日～9 日
北海道研究林標茶区において，標茶町教育委員会リーダー養成講座「しべちゃアドベンチャースクール」を開催（北海道研究林後援） 参加者 小中高生 14 人
- (67) 2008 年 11 月 15 日
上賀茂試験地において，「2008 年度上賀茂試験地秋の自然観察会」を開催 参加者 30 人（応募者 41 人）
- (68) 2008 年 11 月 15 日
瀬戸臨海実験所において，「白浜の自然観察会」を開催 参加者 11 人
- (69) 2008 年 11 月 24 日
パシフィコ横浜（世界水産学会議）において，サバ大学の教員・大学院生との交流会
- (70) 2008 年 11 月 27 日, 12 月 24 日, 2009 年 1 月 28 日
海域陸域統合管理学部門が，海域陸域統合管理学セミナーを開催（月 1 回）
- (71) 2008 年 11 月 27 日
助成部門「海域陸域統合管理学」の設立記念面談（日本財団理事長・京大総長・フィールド研センター長）

- (72) 2008 年 11 月 29～30 日
放送大学面接授業を瀬戸臨海実験所で開催 参加者 18 人
- (73) 2008 年 12 月 13 日
瀬戸臨海実験所附属水族館において、きのくに県民カレッジ連携講座「水族館の磯採集体験・バックヤード体験学習」(和歌山県教育委員会と共催・参加者 7 人)
- (74) 2008 年 12 月 16～17 日
概算要求「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業」キックオフミーティングを開催
- (75) 2008 年 12 月 25～1 月 7 日
瀬戸臨海実験所附属水族館において、日替わり解説ツアー(水族館の生き物について日替わりで解説)を毎日開催 参加者: 日替わり解説ツアー40 人, バックヤードツアー69 人
- (76) 2009 年 1 月 14 日
有田川町立小川小学校において、有田川町産業課との共催で講義を実施(4 年生 15 人)
- (77) 2009 年 1 月 20 日
和歌山研究林において、和歌山県立有田中央高等学校清水分校との共催でウッズサイエンスを開講
- (78) 2009 年 1 月 31 日
メルパルク京都において、第 1 回神戸大学・京都大学合同市民公開講座を開催(神戸大学大学院海事科学研究科, フィールド研共催 日本財団後援) 参加者約 80 人
- (79) 2009 年 1 月 31 日～2 月 1 日
北海道研究林標茶区において、標茶町教育委員会リーダー養成講座「しべちゃアドベンチャースクール」を開催(北海道研究林後援) 参加者 小中高生 10 人
- (80) 2009 年 2 月 7 日
瀬戸臨海実験所附属水族館において、きのくに県民カレッジ連携講座「水族館の磯採集体験・バックヤード体験学習」(和歌山県教育委員会と共催・参加者 16 人)
- (81) 2009 年 2 月 26 日
和歌山県古座川町において「第 8 回古座川シンポジウム」を開催(紀伊大島実験所, 古座川流域協議会共催) 参加者 42 人
- (82) 2009 年 3 月 7 日
厚岸町情報館「本の森」において地域連携講座「厚岸湖と厚岸湾はなぜ生産性が高いのか?」を開催(厚岸町共催・日本財団後援)
- (83) 2009 年 3 月 14 日
メルパルク京都において、第 2 回神戸大学・京都大学合同市民公開講座を開催(神戸大学大学院海事科学研究科, フィールド研共催 日本財団後援) 参加者約 50 人
- (84) 2009 年 3 月 14 日
京都大学附置研究所・センターシンポジウム「京都からの提言ー21 世紀の日本を考える(第 3 回)」を開催(京都大学附置研究所・センター主催・名古屋名鉄ホール)
- (85) 2009 年 3 月 25 日～31 日
瀬戸臨海実験所附属水族館において「日替わり解説ツアー・バックヤードツアー」を開催(3 月 25 日から 31 日まで, 日替わり(一般 71 人), バックヤード(小学生以上 107 人))
- (86) 2009 年 3 月 25 日～28 日
瀬戸臨海実験所において、2008 年度公開臨海実習(春期)を実施

●●● 2. 各施設における活動の記録 ●●●

(1) 各施設の活動概要

1) 芦生研究林

芦生研究林長 芝 正己

■教育研究

本年度における芦生研究林の利用者総数は延べ 10,880 名であった。このうち教育面を主体とした利用者数は全体の 15.8%を占める 1,723 名（公開講座を含む実習等）で、前年より若干増加した。利用申請総数は 35 件で、そのうち学内からが 22 件（フィールド研：7，農学部等 4，他学部等 11），他大学等からが 13 件（大学：1，その他：12）であった。学内他学部の利用は前年度の 4 件から 11 件に増加し、全学共同利用施設として認知されて来ていることが伺われる。なお、センターの特色ある学生実習の一つとして、森林、里地、都市部の一連の陸域環境と、由良川水系の上・中・下流・河口域の水圏環境との相互作用を実地体験する「森里海連環学実習 A」があるが、芦生研究林での試行メニューとして、NPO 法人「芦生自然学校」のサポートを得た“櫃倉谷のシャワークライミング”を組み込んだ。滝の滑り台や、魚のつかみ取りもあり、由良川の最上流部の溪谷を体感する良い機会となった。

次に、研究を目的とする利用者数は、全体の 12.3%を占める 1,338 名であり、全体で 48 件の利用申請を受け付けた。このうち学内の利用が 30 件（フィールド研：7，農学部等：14，他学部等：9），他大学等からが 18 件（大学：6，官公庁：6，個人：6）であった。センター内のプロジェクトでは、2007 年にニホンジカの食害により裸地化した長治谷のススキ原を回復させるべく、シカ防除柵によるスポット防除を行った。この場所はノジコ、アオジという国内を南北に移動する鳥の中継地点として、毎年集団が確認されている最西端の場所であり、ススキがなくなったことによる影響が懸念されていた。スポット防除により明らかな植生の回復がみられるが、現在残っているススキがある程度回復することで、渡り鳥が復活してくれば、芦生の自然の貴重な役割を再現することになる。今後も特定の希少種や絶滅のおそれの高い種の生息地、多様な種が見られる場所などでスポット防除を行い、その結果をモニタリングしていく計画である。

■社会連携

社会連携としての一般開放事業は、研究林内の自然観察・体験実習、ハイキングなどを目的として、全体で 24 件の申請（前年度 29 件）があった。センターの主催事業として 1991 年以来行ってきた公開講座「森のしくみとその役割」は、今年で 18 回目を迎えた（7 月 25～27 日・受講生 30 名）。これとは別に、芦生研究林主催事業として、「芦生の森自然観察会」を春（5 月 31 日）と秋（10 月 25 日）に実施し、定員 20 名に対し、それぞれ 3 倍強の応募があった。

共同開催事業として継続的に実施している活動で、本年度も引き続き行われたものは、①大学等地域開放特別事業 森林体験学習：和歌山県立有田中央高校清水分校（ANA協力）、②美山町小学校合同自然体験教室「美山っ子グリーン・ワールド」：美山町内小学校第 4 学年、③北桑田高校「郊外森林体験実習プログラム」：京都府立北桑田高校森林リサーチ科学生、であった。さらに、今年度は、京都市教育委員会：長期宿泊・自然体験推進事業の一環として、京都市立葛野小学校自然体験学習の受け入れも行った。過去最多の 86 名という人数のイベントは、無事に終了はしたものの、トイレ等の設備の不備を実感させられた。当研究林ではこの様な社会的要請は今後も続くことが予想されるため、早急な改善対策の検討が必要である。

■施設の特記事項

本研究林内の約 4 割の面積を占める鳥獣保護区（12 から 24 林班域）の設定期限が今年度終了することを受け、研究林を含めた利害関係者による保護区継続の可否が協議された。吉岡崇仁教授を会長とする「芦生地域有害鳥獣対策協議会」による協議の結果、ニホンジカの有害捕獲を実施することを条件に、今後 10 年間の再設定が承認された（2008 年 11 月 1 日発効）。本研究林も当面シカの適正密度管理に協力することを了承した。

2) 北海道研究林

北海道研究林長 安藤 信

■教育研究

北海道研究林は、釧路湿原、阿寒、知床の3つの国立公園と至近距離にあり、その地理的特性を生かして全学共通および農学部の実習が年4回行われている。

「調査研究方法実習Ⅰ」は研究林を拠点に、国有林・知床自然センターの協力の下、世界自然遺産の知床半島や阿寒・釧路湿原国立公園の森林・林業・自然環境を調査し、人と自然の新しい関係を探ることを目的としている。8月3日～7日の5日間、農学部の食料・環境経済学科の2回生8名が参加した。「森里海連環学実習C」は北海道大学と共同で行っているもので、自然度が高い別寒辺牛川の最上流部に近い標茶区から、牧草地として使われている中流、そして下流の厚岸湖にいたる流域の植生、土壌、水質・水生生物調査を通じて、森-里-海の繋がりを学ぶ。8月29日～9月4日の7日間、標茶管理棟と北海道大学厚岸臨海実験所を拠点に、本学理学部、文学部、法学部、農学部、総合人間学部の1～4回生7名と北海道大学理学部、工学部、農学部、水産学部1回生9名の計16名が参加した。「北海道東部の人と自然・研究林実習Ⅲ」は、北方の森林・湿原植生、森林の垂直分布や火山性土壌、道東の林業・林産業の現況を学ぶとともに森林作業を体験する。9月7日～14日の8日間、農学部、医学部、総合人間学部の1～3回生20名が参加した。「北海道東部の厳冬期の自然環境・研究林実習Ⅳ」は、季節凍土が発達する道東において、冬の森林、積雪・凍土の調査法を修得し、環境資源としての森林の役割や持続的な管理について学ぶ。2月23日～3月1日の7日間、農学部、総合人間学部、文学部の1～3回生14名が参加した。

■社会連携

「木工体験学習（沼幌小学校共催）」は、自然の中で木工工作を体験し、木工に対する興味・関心や自然に対する敬愛心を育てることを目的としている。6月25日に小学生12名が参加した。「しべちゃアドベンチャー ジュニアリーダー養成講座（標茶町教育委員会共催）」は、地元にある京都大学研究林を知るとともに、森林の役割や樹木の観察・識別法を学ぶことを目的とする。11月8日～9日に小学生4名と中学生5名、リーダーの高校生5名が参加した。さらに、「冬の野外活動」と題して、1月31日～2月1日にも実施され、ここでは、スノーシューを着用して冬の樹木の様子や雪上の動物の足跡を観察し、厳しい寒さに立ち向かう動植物の知恵を学ぶことが目的とされた。小学生5名と中学生3名、リーダーの高校生2名が参加した。

■施設の特記事項

研究林では、設置以来標茶・白糠の両区で気象観測が続けられてきた。今回、雨量・温度・湿度・風向・風速・日射・日照・地温・積雪深の各要素を自動的に測定し、大気降下物を採取する「総合気象観測システム」が導入された。観測装置の仕様は、アメダスに準拠し、気象庁の観測データの精度を保ち、マイナス35℃の環境でも稼働可能なものである。気象データはデジタルで記録・蓄積され、とりわけ観測場所が管理棟から15km離れた山間部に位置する白糠区では、電話回線を利用してリアルタイムに現地の気象条件を把握することが可能となった。

研究林は冷温帯から亜寒帯の境界部に位置し、夏季は発生する海霧によって低温となり、冬季は積雪量が少なく季節凍土が発達するわが国では特異な気象条件を有する地域である。道東の森林の構造や育成、物質循環、酸性雨の分布・拡散等の解明のための基礎データとして、教育・研究に寄与することが期待される。

3) 和歌山研究林

和歌山研究林長 徳地 直子

■教育研究

8月27日から29日に、全学共通科目ポケットセミナー“森のつくりだすもの”を行った。参加者は1回生3名と他大学からの見学1名であった。和歌山研究林に源流を持つ湯川川が流れ込む有田川の河川水を採取し、pHやECの測定を行い、河川水の流下に伴う変化について学習した。研究林内ではハコヤ尾をルートとした林内観察や造林地での森林調査、森林施業の意義について学び、実際に間伐のための伐木実習を行った。

■社会連携

総合的な学習

○ 和歌山県立有田中央高等学校清水分校共催

2002年度より、清水分校の正式科目ウッズサイエンスを開講している。3学年の4名は、主要な産業である林業について、実習を通して自然のすばらしさに触れ「緑を守ることの大切さ」を理解させることを目的に、測量・刈払い・伐採など様々な林業作業、研究林で行われている研究に関する作業を体験して林業について学習を行った。

○ 和歌山県立有田中央高等学校清水分校

5月14日に1年生19名と引率教員4名が、ふるさとの自然のすばらしさを体験することによって、その良さを知らるとともに、地域社会において豊かに生きる心を育てることを目的に、午前中はハコヤ尾をルートとして森林ウォークを行い、午後は二班に別れて「森林の役割について」の講義と八幡谷樹木園で樹木観察を行った。

8月24日から25日には1年生19名と引率教員3名が、清水を離れて他地域の自然・産業・文化を体験することによって、ふるさとの課題を理解し、その将来について考えることを目的に、芦生研究林を訪れた。長治谷から杉尾峠まで森林散策を行い、夜には文化体験として芦生の火祭り（あげ松）を見学し、翌日は上賀茂試験地を見学した。この行事はANAとの提携により実行されている。

○ 有田川町立八幡小学校

「森は友だち 森林の町清水」環境を課題として、地域の自然に関心を持ち、調査・体験活動などを通して、自然と共に生きることについて考えることを目的に、5年生15名と引率教員2名が5月30日に「森林について」の講義、樹木識別学習、植林体験を、10月20日には間伐作業体験を行った。

○有田川町役場産業課主催「紀の国森づくり基金活用事業」

有田川町の面積の約8割は森林で、森林には温暖化の防止など環境への好影響や森林浴等による癒しの効果、水源の涵養など多面的な機能の重要性を遊びながら学ぶことを目的に、10月9日に「紀の国森づくり基金活用事業」の一環として開催された。「森とあそぶ・まなぶ」を課題として、4・5年生41名・引率教員4名・有田川町職員5名、10月27日に有田川町立田殿小学校4年生29名・有田川町立小川小学校4年生15名・引率教員4名・有田川町職員5名、10月29日に有田川町立御霊小学校4年生45名・引率教員4名・有田川町職員5名・和歌山県職員4名が樹木観察・間伐作業体験を行った。また、2009年1月14日には有田町立小川小学校の4年生に坂野上助教が講義を行った。

○ 有田川町立八幡中学校

「地域の職業を体験する」ことを課題として、勤労の尊さや意義を理解し、望ましい職業観を養うこと、地域についての理解を深め、共によりよく生きていこうとする意欲や態度を育てること、生き方についての自覚や将来設計について考えることを目的に実施される講義である。2年生3名が10月1～3日に造林地プロット調査や枝打作業を行った。

4) 上賀茂試験地

上賀茂試験地長 柴田 昌三

■教育研究

上賀茂試験地では、2008 年度も例年同様にさまざまな研究利用、教育利用があった。研究利用は44 件の申請があり、学内からの申請が4 分の3 を占めた。年間研究利用者数は938 名であった。農学研究科やフィールド研教員による研究が多かったが、最も頻繁に研究者が訪れた研究テーマでは、年間延べ229人日が上賀茂試験地に通ってきた。このほかにも、研究者が年間延べヶ月以上訪れた研究テーマが10件、2 週間以上訪れたテーマが9 件あった。これらのことは上賀茂試験地が本部キャンパスから至近な位置にあり、調査地として最適な立地にあることを改めて示すものである。教育利用は合計29件、延べ1,319人日であった。このうち、学内からの利用は11件であり、フィールド研主催の少人数セミナーが2 件、農学研究科森林科学専攻が5件のほか、農学研究科の地域環境科学専攻、理学研究科、地球環境学堂からの利用であった。また、他大学からは京都精華大学、京都府立大学、京都教育大学、京都造形芸術大学からの利用があった。学外からの教育利用が65%を占めたことは上賀茂試験地の大きな特徴であるといえる。学外からの利用のうち、研究機関以外からの利用は学内と同様の9 件あったが、これらはシニア自然大学、京都樹木医会などのような民間の団体による利用であり、上賀茂試験地が持つ植物や植生を学ぶことを目的として訪れたものであった。2008 年度は農学研究科森林科学専攻の新歓イベントがかつての姿に戻った年でもあった。以上のような利用を総括すると、2008 年度には上賀茂試験地では79 件の利用があり、見学等の利用も含めると延べ2,569 人が訪れた。

■社会連携

社会連携活動として、上賀茂試験地は2008 年度も、春と秋の自然観察会を主催した。それぞれ数多くの応募があり、盛況のうちに終えることができた。応募者の中にリピーターが多かったのも特徴である。主催する活動以外には、京都精華大学や京都園芸倶楽部（京都府植物園）など、学外の団体が主催する観察会等も受け入れた。また、京都大学フィールド研が社会環境活動を目的として協定を結んでいるエコロジー・カフェとのイベントもこの年度で3 回目を迎えた。2008 年度にはテーマを「命のつながり ～水と森と人の生活～」とし、講師に京都大学生態学研究センターの奥田昇准教授を迎えて、試験地主催の観察会とはひと味違う、ハイレベルな講義内容で開催された。教育利用に分類されるが、今年は京都市立市原野小学校並びに京都市立吉祥院小学校へ学習教材として外国産マツ属のマツボックリの提供を行った。

■施設の特記事項

上賀茂試験地では2008 年度もカシノナガキクイムシによるナラ類の枯死が継続した。この年に枯死したのは自生するコナラが8 本である。これに加えて、海外からの導入種である *Quercus rubra* も被害を受けたが、枯死したのは1 本であり、残る2 本はかろうじて枯死を免れた。これらの被害木は、従来は伐採後処分されていたが、環境を考える上で、薪ストーブを導入することとし、有効活用する道を拓いた。なお、薪ストーブの設置は年度末となったため、本格的な使用は2009 年度からとなる。2008 年にはこれ以上のコナラの枯死をできる限り防止する目的で、幹の基部にビニールを巻き付ける防除作業を外国産 *Quercus* 属5 種7 本と林内の境界隣接木のコナラ7 本に施した。マツ枯れも前年同様に被害が続き、2008 年度には287 本を伐倒処理した。

もう一つの上賀茂試験地の悩みの種は、獣害である。イノシシ、サルなどの害がある中で、特に問題が多いのはシカ害である。そこで、2008 年度には、境界部のフェンスやシカネットの強化に加えて、隣接する総合地球環境学研究所との間にある連絡道路にテキサスゲートを設置した。上賀茂試験地としてはこの設置は実験的なものであり、シカなどの野生動物の侵入阻止に効果があるかどうかを検証し、将来的には正門付近などに順次設置していく方針である。

5) 北白川試験地

北白川試験地長 長谷川 尚史

■教育研究

北白川試験地は、フィールド科学教育研究センターの中で唯一本部キャンパス内に所在するフィールドである。面積が小さいため、大規模な試験地設定は不可能であるが、試料をすぐに研究室に持ち帰り分析できることから、本年度も苗畑での植栽試験やガラス室内での鉢植えによる育成試験をはじめ、数多くの教育・研究に利用された。また、講義時間の短い90分の実習など、小規模な実習にも引き続き利用されている。その他、学内の種々のイベントに利用される例も多く、2008年度は、本学新規採用職員を対象とした新採用職員人材プログラムにおける施設見学(22名)、中学生を対象としたジュニアキャンパスの体験学習小ツアーにおける樹木識別実習(18名)、京都大学同窓生を対象とした第3回ホームカミングデイにおける北部キャンパスツアー(定員50名)などに利用された。

■施設の特記事項

2008年度は、前年度に続いて数本のマツクイムシ被害が発生したが、試験地内に残されたウツクシマツは手厚い保護によって被害を免れ個体の維持がされている。今後は後継樹の育成を検討する必要がある。

また、気象観測システムが総長裁量経費によって2009年1月に新設され、データロガーとパーソナルコンピュータを用いた観測が可能となった。観測項目は、温度・湿度、風向・風速、雨量、日射、地温の7項目である。データは10分間隔に測定・蓄積されており、他の施設と同レベルの気象観測および試験地内で行われている研究に活用してもらうための態勢が整った。2009年度に従来の気象観測データと新システムによるデータとの照合を行った上で、公開データの新システムへの全面移行を行う予定である。

6) 徳山試験地

徳山試験地長 中島 皇

■教育研究

次年度から少人数セミナー(ポケゼミ:全学共通科目)を再開するため、宿泊場所、実施日程、ゼミに使うフィールド及びプログラム等の検討を行った。研究では暖温帯常緑広葉樹天然林の調査、檜皮剥皮試験、ヒノキ樹下植栽試験、台風による被害林分モニタリングなどの継続的に行われている長期的な研究の利用があった。また、試験地のデータベースの一つである気象観測装置が更新された。北海道研究林(標茶区・白糠区)、北白川試験地とともにデジタル自動化されたもので、1時間毎の継続的なデータが蓄積されており、他の研究林・試験地と同レベルのデータ収集が可能になった。徳山試験地の少ない技術職員にとっては、正確で、途切れることなくデータを蓄積することが悲願であったが、今回の観測機器の更新は、気象観測業務にとって大きな前進となっている。

■社会連携

前年度にふるさと文化財の森(檜皮)に選定されたヒノキ林の記者発表と現地説明会を4月22日に周南市教育委員会と協力して行った。報道関係4社が参加し、山口県内では初めての設定であるため、新聞等の記事に取り上げられた。地域の期待も大きいようで、檜皮剥皮試験の成果を積み重ねて行くとともに、試験地及びふるさと文化財の森を広く一般に知ってもらうような催しを教育委員会との共催で企画していきたいと考えている。

7) 紀伊大島実験所

紀伊大島実験所長 梅本 信也

■教育研究

紀伊大島実験所は2007年度から古座川プロジェクトの拠点であり、その実地展開を支える古座川合同調査を行う植物班、文化班、魚族班、河川班など諸班参加者同士の情報交換、議論、資料閲覧、簡易宿泊の場として2008年度も積極的に活用された。古座川合同調査は毎月開催され、4月の第29回調査から翌年3月の第40回調査まで合計12回実施された。古座川合同調査は地域連携を前提に行っているため、次項に述べる社会連携と不可分の関係にある。2008年度には古座川河口域に位置する和歌山県立古座高校生物部との共同調査も行われた。合計12回の調査内容は「古座川合同調査報告集 第2巻」、「同第3巻」として出版された。また、古座川プロジェクトの展開を円滑にするために、和歌山県が運営している古座川流域協議会や地域に展開する行政諸機関、和歌山東漁業協同組合各支所との連絡調整を行った。

古座川プロジェクトおよび古座川合同調査で得られた成果を流域関係者に還元し、さらなる認識共有を醸成するために、古座川町中央公民館において紀伊大島実験所ならびに古座川流域協議会共催で2008年7月と2009年2月に第7回及び第8回古座川シンポジウムを開催した。

■社会連携

紀伊大島実験所は、従来の教育、プロジェクト研究、教員研究、地域貢献を意識しての諸活動を、フィールド研と統合した後は、教育・研究・社会連携に書き換えて、さらに関係地域や分野を拡大して活動している。2008年度の延べ利用者数は1000名以上となり、一般見学者、講義実習関係の学生院生、教員や研究者、行政機関職員、マスコミ関係者からの利用は毎月30～50名の規模となった。特に行政関係者からの相談や現地調査依頼が増加した。

■特記事項

古座川は第三紀古座川断層に展開する河川であるが、その東端には日本で一番短い二級河川・ぶつぶつ川がある。和歌山県那智勝浦町に位置する全長13.5mのぶつぶつ川は地域の憩いの場であるだけでなく、今でも生活用水確保の場であり、日常的に野菜洗いや飲料水利用がなされ、流域は石組作りを基本に古風な景観を呈している。古座川プロジェクトぶつぶつ川班の緊急調査で、周辺には合計290種の高等植物が確認され、レッドデータブック級植物も数種含まれている。流域10月下旬に県指定された後、コンクリート工法等による大規模な河川改修工事が行われる計画であったが、那智勝浦町、該当地区住民、古座川プロジェクトぶつぶつ川班が連携し、和歌山県等を説得した結果、伝統的景観を生かして周辺の種多様性保全に配慮しながらの手作業による河川改修へと計画変更、その実施に成功した。伝統文化と里域生物相を尊重しつつの官民学の協働作業の成果であると、各マスコミは報道した。

8) 舞鶴水産実験所

舞鶴水産実験所長 山下 洋

■教育研究

2008年度の舞鶴水産実験所里海生態保全学分野に所属する大学院生の数は、修士課程8名、博士後期課程6名であった。うち3名は、フィリピン、インド、台湾からの留学生であり、そのうちの2名は国費留学生である。これに加えて、4回生3名が舞鶴で卒業研究を行うとともに、外国人特別研究員2名（バングラディシュ、カナダ）、博士後期課程研究指導認定後教務補佐員となった韓国からの留学生1名が在籍し、活発な研究活動を行っている。とくに、森里海連環学研究「若狭湾海域陸域統合プロジェクト（WakWak）」では、徐々に成果が出始めている。舞鶴水産実験所を中心としてフィールド研だけでなく農学研究科とも連携して、多くの教員、学生、院生が、由良川の上流域から河口、丹後海にいたる水域で多様な課題を持って研究を進めた。本年度は、水生昆虫、河口域の物理過程、陸封・両側回遊性エビ類、メイオベントス、マクロベントス、スズキ仔稚魚、ヒラメ仔稚魚、アユ、アミ類、間伐材魚礁などを対象に研究が進められた。また、魚類の初期発育に伴う行動の発達、クラゲをめぐる生態研究、サンゴの共生藻に関する研究、カサゴ目魚類の分類学的研究においても、多くの成果が得られた。2009年3月下旬に開催された平成21年度日本水産学会春季大会において、WakWakに関係する研究成果を9題連続して発表したことが特筆される。

水産実験所では、京都大学の学生・院生を対象とした6コース、他大学2コース、高等学校6コースの合計14コースの実習を実施した。

■社会連携

水産実験所では、社会連携として、JICA研修や地域の催しなどに協力するほか、小・中・高等学校の教員・生徒に対して出前講義等を行った。小中高等学校での講義および市民を対象とした講演は、それぞれ12校および5件におよぶ。これらの中には、サイエンスパートナーシッププログラム（京都府立南陽高校、同西舞鶴高校）、スーパーサイエンスハイスクール（京都教育大学附属高校、兵庫県立神戸高等学校）、見学学習（京都府立海洋高等学校）、出前講座（舞鶴国立高等専門学校）などが含まれる。主な地域との連携活動として、由良川フォーラム、舞鶴市ネイチャーガイド養成講座、京都府ふるさと海づくり大会などに積極的に主催、協力、参加した。とくに、8月30日に綾部市内で開催した第4回由良川フォーラムでは、河合雅雄京大名誉教授と萱場祐一自然共生研究センター長に講演いただき、220名もの参加者を得た。このほか、京都府漁業調整委員、京都府農林水産試験研究機関あり方検討会委員、京都舞鶴立命館地域創造機構運営委員、由良川下流域水面利用調整協議会幹事など、北部京都や舞鶴市の地域産業の活性化と自然環境の管理などにおいて多くの重要な役割を担った。

■施設の特記事項

特記事項として、益田 玲爾・山下 洋（フィールド研舞鶴水産実験所）・松山 倫也（九州大学）「Jack mackerel *Trachurus japonicus* juveniles use jellyfish for predator avoidance and as a prey collector. Fisheries Science 74 (2): 276-284.」が日本水産学会論文賞を受賞したことがあげられる。マアジ稚魚はクラゲを捕食者回避のためだけでなく、餌のコレクターとしても利用することを実験的に証明した論文であり、第1著者のユニークな発想が評価された。舞鶴水産実験所における今後の大きな課題は、実習・研究用舟艇として水産実験所の教育研究活動の核となる緑洋丸の代船建造である。本船は1990年に竣工しすでに19年目に入っており、船体や機関などの不具合の発生件数も増加しつつある。安全な教育環境を維持するためにも早期の代船建造が必要である。

9) 瀬戸臨海実験所

瀬戸臨海実験所長 白山 義久

■教育研究

瀬戸臨海実験所では、理学研究科の協力講座（海洋生物学分科）として、大学院生を受け入れている。2008年度の構成は、修士5名、博士1名である。その他に農学研究科から委託研究学生として修士1名を受け入れた。このうち博士の学生1名、修士の学生3名が年度内に学位申請論文を提出し、博士および修士の学位を取得した。修了した修士の学生2名は平成21年度に博士課程に進学した。また、日本学術振興会のポスドク1名を受け入れた。

理学部の学部生を対象としては、夏季に3コース、春期に2コースの臨海実習を行った。それぞれ、1週間程度の期間、実験所の周囲の環境を利用し海洋環境から生物自体まで幅広い分野を教えた。またポケットゼミを4コース開催した。

研究活動としては、2008年度から、NaGISAプロジェクトでは新たに特定有期雇用教員として、伊勢戸徹助教を採用するとともに、ポスドクも1名を採用し、教育と研究活動の充実を図った。

古座川プロジェクトの一環として、七川ダムの放水が串本湾の底生生物群集に与える影響に関する研究を2007年度に引き続き2008年度も行った。この年度の調査はベースライン調査を1回とダム放流の影響調査を4回実施することができた。調査項目は、CTDセンサーによる一般的な海洋観測、採水による栄養塩分析、海底堆積物の粒度分析、マクロベントスおよびメイオベントスの群集分析、マクロベントスの優占種の分子生物学的分析などである。特にマクロベントスの分子解析にはポスドク1名を採用し実験を進めた。

海洋酸性化に関する環境省地球環境推進費にもとづく研究を開始した。これは海洋の二酸化炭素環境を日周変動・年周変動も含めて詳細に制御する装置を開発し、それを活用して将来の海洋酸性化が海洋生物に与える影響を精密に予測することを目指すものである。2008年度はこの研究を推進するために、ポスドクを1名採用し、装置の完成と装置の性能の確認を実施した。

■社会連携

瀬戸臨海実験所の最大の社会連携は、水族館の通年公開であるが、それ以外には、京大の学生・院生を対象とした実習を13コース（瀬戸臨海実験所主催の臨海実習5コースとポケットゼミ4コースを含む）、他大学の実習を14コース、高等学校・中学校の実習を9コース、放送大学など生涯学習コースを1コース実施した。これらの実習による受け入れは総計（延べ人数）で2,649人・日である。他大学の実習では、10コースについて非常勤講師や実習担当として、また高等学校・中学校の実習においてもSPPおよびSSH事業の一環となっているものを中心に、9コースについて、実際の実習を担当した。

2008年度には4つの研究集会が瀬戸で実施された。また日本学術振興会の事業に協力し、カンサス大学の学生をインターンとして受け入れた。

その他の社会連携として、各種の国の委員会において重要な役割を果たし、研究成果の社会への還元に貢献した。例えば経済産業省のCCS研究会委員として、二酸化炭素の分離回収貯留に関する提言のとりまとめを行った。

■施設の特記事項

2007年度末に就航した海洋観測実習船「ヤンチナ」は、2008年度から本格的に稼働を開始し、理学部の臨海実習において高度な沿岸域の海洋観測を実現した。また、本船により、古座川プロジェクトにおいて、串本湾での観測が随時可能になり、2008年度は5回の観測を行うことができた。

水族館については、看板の改修などを実施した。

(2) 各施設を利用した学生実習等

(学生数・教員等数は、延人数)

芦生研究林

期 間	日数	大学	部局	科 目 名	学年	学生数	教員等数	備考
08.05.04 ～ 08.05.23	3	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「森林の更新と動態」	1回生	17	3	
08.05.04 ～ 08.05.06	3	京都大学	理学部生物科学系	野生生物研究会春合宿		49	0	
08.05.28	1	京都大学	生存圏研究所循環材料創成分野	天然林の見学と実習	修士・博士	6	3	
08.06.21 ～ 08.06.22	2	京都大学	理学研究科生物科学専攻	生物学実習C脊椎動物解剖学実習	3回生	20	4	
08.06.27 ～ 08.06.29	3	京都大学	人間・環境学研究科	文化行為論 2A		21	6	
08.07.03 ～ 08.07.05	3	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「豊かな森をめざして！」	1回生	27	3	
08.07.05 ～ 08.07.07	3	京都大学	アジア・アフリカ地域研究研究科	芦生研究林フィールド調査法実習	D1	60	18	
08.07.11 ～ 08.07.13	3	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「原生的な森林の働き」	1回生	31	3	
08.08.05 ～ 08.08.06	2	京都大学	フィールド研	森里海連環学実習 I A	全回生	14	11	
08.08.25 ～ 08.08.29	5	京都大学	農学研究科森林科学専攻	研究林実習 I	2回生	125	12	
08.09.08 ～ 08.09.11	4	京都大学	生態学研究センター	野外実習第2部	3回生	20	8	
08.09.16 ～ 08.09.19	4	京都大学	農学研究科森林科学専攻	研究林実習 II	3回生	67	8	
08.09.24 ～ 08.09.27	4	京都大学	農学研究科森林科学専攻	森林利用学実習及び実習法	3回生	92	12	
08.10.16 ～ 08.10.17	2	京都大学	農学研究科森林科学専攻	国際交流科目 タイ・カセサート大学学生受入		30	6	
08.11.01 ～ 08.11.03	3	京都大学	理学部生物科学系	野生生物研究会秋合宿		24	0	
08.11.03	1	京都大学	理学研究科生物科学専攻	フィールドワーク実習 ー菌類相から森を考えるー		16	14	
08.11.08 ～ 08.11.09	2	京都大学	工学研究科物質エネルギー化学専攻	芦生研究林の見学会		10	9	
09.02.06 ～ 09.02.09	4	京都大学	フィールド研	暖地性積雪地域における冬の自然環境	全回生	72	4	
08.10.31	1	京都造形芸術大学	日本庭園・歴史遺産研究センター	The Japanese Garden Intensive Seminar		29	6	
計	53		(19件)			730	130	

北海道研究林

期 間	日数	大学	部局	科 目 名	学年	学生数	教員等数	備考
08.08.03 ～ 08.08.07	5	京都大学	農学研究科生物資源経済学専攻	調査研究方法実習 I	2回生	48	20	標茶区・白糠区
08.09.04 ～ 08.09.15	12	京都大学	フィールド研	研究林実習Ⅲ（夏の北海道）／全学共通科目（北海道東部の人と自然）	全回生	212	71	標茶区・白糠区
09.02.22 ～ 09.03.02	9	京都大学	フィールド研	研究林実習Ⅳ（冬の北海道）／全学共通科目（北海道東部の厳冬の自然環境）	全回生	131	42	標茶区・白糠区
08.08.28 ～ 08.09.01	5	京都大学	フィールド研	森里海連環学実習 C（北大との共催）	全回生	79	48	標茶区
計	31		(4件)			470	181	

和歌山研究林

期 間	日数	大学	部局	科 目 名	学年	学生数	教員等数	備考
08.08.26 ～ 08.08.29	4	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「森の作り出すもの」	1回生	19	18	
計	4		(1件)			19	18	

上賀茂試験地

期 間	日数	大学	部局	科 目 名	学年	学生数	教員等数	備考
08.04.12	1	京都大学	農学研究科森林科学専攻	新入生向け見学会	1回生	56	24	
08.05.17	1	京都大学	農学研究科森林科学専攻	森林科学専攻新入生ガイダンス		150	37	
08.05.21 ～ 08.05.27	4	京都大学	理学部生物科学専攻	生物学実習「野外調査法－昆虫の密度推定法」	3回生	68	6	
08.05.28	1	京都大学	農学部地域環境科学専攻	「土壌物理学・水環境工学実験」 土壌の三相分布測定及び浸入能試験実習	3回生	26	1	
08.05.28 ～ 08.07.09	4	京都大学	農学部森林科学専攻	森林生物学実験及び実験法	3回生	88	4	
08.05.29 ～ 08.06.05	2	京都大学	農学部森林科学専攻	森林総合実習及び調査法	3回生	48	10	
08.06.22	1	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「原生的な森林の働き」	1回生	9	1	
08.06.24	1	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「木造校舎を造る：木の文化再生へ」	1回生	8	6	
08.09.30	1	京都大学	地球環境学舎	里山再生論	M1, M2, D1	5	1	
08.10.07	1	京都大学	農学部森林科学専攻	森林科学実習Ⅳ	2回生	54	3	
08.04.21	1	京都精華大学	人文学部環境社会学科	自然教育論	1-3回生	56	1	
08.05.16 ～ 08.12.05	2	京都造形芸術大学	環境デザイン学科	ランドスケープ計画 名園実習	3-4回生	37	5	
08.06.23	1	京都精華大学	人文学部	上賀茂試験地の樹木見学	2回生	12	1	
08.07.07	1	京都精華大学	人文学部環境社会学科	自然教育論	1-3回生	36	1	
08.07.08 ～ 08.07.28	2	京都府立大学	大学院生命環境科学研究科	森林植物学実習	3回生	31	5	
08.09.11	1	京都教育大学	産業技術科学科	栽培と飼育の実践Ⅱ－生命を慈しみ、育む－	1-4回生	13	6	
08.11.11 ～ 08.11.13	3	京都精華大学	人文学部環境社会学科	ネイチャーゲーム講習会	2-4回生	127	3	
計	28		(17件)			824	115	

北白川試験地

期 間	日数	大学	部局	科 目 名	学年	学生数	教員等数	備考
08.04.26	1	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「森林の再生と動態」	1回生	7	1	
08.04.08	1	京都大学	農学研究科食品生物科学選専攻	有機化学実験および実験法	3回生	35	3	
08.04.16	1	京都大学	農学研究科地域環境科学専攻水環境工学分野	「土壌物理学・水環境工学実験」土壌三相分布測定	3回生	25	1	
08.05.23	1	京都大学	理学研究科生物科学専攻植物学教室	少人数セミナー「細胞性粘菌の不思議な世界」	1回生	7	1	
08.05.27	1	京都大学	農学研究科食品生物科学選専攻	有機化学実験および実験法	3回生	54	3	
08.06.15 ～ 08.07.10	2	京都大学	農学研究科森林生態学研究室	森林科学実習Ⅰ	2回生	58	2	
08.09.05 ～ 08.10.20	4	京都大学	農学研究科森林科学専攻	森林水文学・砂防学実験及び実験法	3回生	33	2	
08.11.12	1	京都大学	農学研究科応用生命科学専攻	生物有機化学Ⅲ	3回生	42	1	
08.12.16	1	京都大学	フィールド研	樹木分類、樹木識別	3回生	17	1	
計	13		(9件)			278	15	

紀伊大島実験所

期 間	日数	大学	部局	科 目 名	学年	学生数	教員等数	備考
08.09.01 ～ 08.09.04	4	京都大学	地球環境学舎	里域植生保全論		24	4	
08.09.08 ～ 08.09.12	5	京都大学	農学部等	植物調査法と実習		98	7	
08.09.19 ～ 08.09.25	7	京都大学	フィールド研	森里海連環学実習B		119	49	
計	16		(3件)			241	60	

舞鶴水産実験所

期 間	日数	大学	部局	科 目 名	学年	学生数	教員等数	備考
08.06.06 ～ 08.06.08	3	京都大学	農学部・資源生物科学科ほか	少人数セミナー「河口域生態学入門」	1回生	20	3	
08.07.04 ～ 08.07.06	3	京都大学	農学研究科・応用生物科学専攻	少人数セミナー「魚類心理学入門」		27	3	
08.08.06 ～ 08.08.09	4	京都大学	フィールド研	森里海連環学実習 A		20	37	
08.08.06 ～ 08.08.08	3	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「お魚好きのための魚類研究入門」		15	8	
08.08.20 ～ 08.08.26	7	京都大学	農学部・資源生物科学科	海洋生物科学技術論と実習Ⅰ		91	12	
08.08.26 ～ 08.08.31	6	京都大学	農学部・資源生物科学科	海洋生物科学技術論と実習Ⅱ		137	13	
08.09.08 ～ 08.09.11	4	京都大学	農学研究科・地域環境科学専攻	「水理学実験」の実験実習		128	4	
08.06.23 ～ 08.06.27	5	近畿大学	農学部	環境管理学実験・実習Ⅱ		120	13	
08.09.03 ～ 08.09.06	4	岐阜大学	地域科学部	臨海実習		24	4	
08.09.14 ～ 08.09.19	6	岐阜大学	教育学部	臨海実習		84	14	
08.10.16	1	タイ カセサート大学		施設見学		15	2	
08.10.19 ～ 08.10.20	2	ノルウェー	海洋科学研究所	水産資源学に関する講演と討論		4	0	
計	48		(12件)			685	113	

瀬戸臨海実験所

期 間	日数	大学	部局	科 目 名	学年	学生数	教員等数	備考
08.04.09 ～ 08.04.10	2	京都大学	理学研究科	インターラボ	M1	72	0	
08.05.01 ～ 08.05.05	5	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「海洋生物の生活史」	M1・M2	60	0	
08.06.20 ～ 08.06.21	2	京都大学	防災研究所	土木学会環境水理部会研究集会		14	2	
08.07.30 ～ 08.08.07	9	京都大学	瀬戸臨海実験所	臨海実習第1部・第4部		54	0	
08.08.02 ～ 08.08.07	6	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「海洋生物の多様性」		33	6	
08.08.07 ～ 08.08.11	5	京都大学	人間環境学研究科	海洋化学実習		60	14	
08.08.28 ～ 08.09.05	9	京都大学	理学部	臨海実習1部		99	14	
08.09.01 ～ 08.09.30	5	京都大学	地球環境学学	探求型化学実験－湖と海の化学調査－ (全学共通科目)		45	20	
08.09.08 ～ 08.09.09	2	京都大学	防災研究所	少人数セミナー「空を観る，海を観る， 川を観る」		10	6	
08.09.13 ～ 08.09.16	4	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「節足動物学入門」		12	4	
08.09.24 ～ 08.09.25	2	京都大学	防災研究所	気象海象観測実験		20	10	
09.01.09 ～ 09.01.11	3	京都大学	理学部	生物科学セミナー		3	10	
09.02.27 ～ 09.03.02	4	京都大学	人間環境学研究科	生物学実習Ⅱ（生態学コース）		64	12	
09.03.10 ～ 09.03.15	6	京都大学	理学部	臨海実習第3部		36	9	
09.03.24 ～ 09.03.30	7	京都大学	理学部	臨海実習第2部		72	6	
08.04.05 ～ 08.04.09	5	和歌山大学	教育学部	臨海実習	3回生	60	15	
08.05.19 ～ 08.05.23	5	近畿大学	農学部環境管理学科	環境生態学専門実験・実習	3・4回生， 修士1年	130	10	
08.06.02 ～ 08.06.07	6	奈良女子大学	理学部	臨海実習Ⅱ	3回生，M1	114	14	
08.06.17 ～ 08.06.21	5	奈良教育大学	教育学部	臨海実習（野外実習A-Ⅱ）	2・3回生， M2	70	15	
08.06.29 ～ 08.07.03	5	大阪教育大学	教育学部	臨海実習	3・4回生	74	5	
08.07.11 ～ 08.07.17	7	大阪市立大学	理学部	臨海実習	3回生	140	28	
08.08.07 ～ 08.08.11	5	信州大学	理学部	海洋化学実習		60	10	
08.08.18 ～ 08.08.22	5	関西学院大学	理工学部	臨海実験・演習		115	29	
08.08.28 ～ 08.09.05	9	国立大学	臨海臨湖実験所長会議	公開臨海実習		45	14	
08.09.11 ～ 08.09.16	6	大阪大学	理学部	生物学臨海実習		117	16	
08.09.19 ～ 08.09.21	3	大阪千代田短期大学		磯観察実習		30	3	
08.09.26 ～ 08.09.29	4	京都教育大学		生物学夏期実習Ⅱ		32	4	
08.11.29 ～ 08.11.30	2	放送大学（京都学習センター）		放送大学面接授業（海洋生物の多様性）		0	38	
09.03.24 ～ 09.03.30	7	国立大学	臨海臨湖実験所長会議	公開臨海実習		49	6	
09.03.31 ～ 09.04.03	4	龍谷大学		環境フィールドワーク白浜臨海実習		64	12	
計	149		(30件)			1,754	332	

(3) 各施設を利用した社会連携教育および野外学習等

(学生数・教員等数は、延人数)

芦生研究林

期 間	日数	主催者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備考
08.05.11 ～ 08.12.07	3	兵庫県立尼崎小田高等学校	「自然科学研究」ブナ林の生態、種子調査ー地球温暖化の指標としてー	高校生	23		
08.05.22	1	綾部市立東綾中学校	総合的な学習の時間	1年生	16	5	
08.06.25	1	東海大学付属仰星高等学校	遠足における自然観察と環境教育	高校生	41		
08.07.08	1	京都大学 フィールド研	水生生物観察会	知井小学校 4年生	9	9	
08.07.22	1	南丹市立宮島小学校	美山町第4学年合同自然体験教室「美山つ子グリーンワールド」	美山町内4年生	48		
08.08.24 ～ 08.08.25	2	京都大学 フィールド研	森林体験学習（共催：和歌山県立有田中央高等学校清水分校、ANA「私の青空」）	高校1年生	44	8	大学等 地域開 放特別 事業
08.09.17	1	高島市立朽木西小学校	樹木の葉の観察	小学生	11		
08.10.02	1	京都市立葛野小学校	京都市教育委員会 長期宿泊・自然体験 推進事業	小学生	86		
08.10.09	1	京都市立堀川高等学校	2008 理科&地歴フィールドワーク	高校生	15		
08.10.28	1	京都府立北桑田高等学校森林 リサーチ科	環境科学基礎	1年生	33		
08.04.19 ～ 08.11.24	120	財団法人美山町自然文化村	芦生ネイチャーガイドハイキング	一般	2,983		
08.04.23 ～ 08.05.14	2	びわ湖高島観光協会朽木支所	自然観察会	一般	56		
08.04.25 ～ 08.11.15	49	芦生山の家	芦生研究林の自然観察（ハイキングを認 定ガイドで案内する）	一般	895		
08.05.29	1	美山産官学公連携協議会	美山産官学公連携協議会景観・環境プロ ジェクト	一般	10	2	
08.05.31	1	京都大学 芦生研究林	芦生の森自然観察会入門編『春の森を歩 きながら樹木観察をしよう』	一般	17	11	
08.06.01 ～ 08.12.21	20	NPO法人芦生自然学校	自然観察、自然体験、環境教育	一般	220		
08.06.04	1	神戸シルバーカレッジ	観光開発と自然保護	一般	7		
08.07.25 ～ 08.07.27	3	京都大学 フィールド研	フィールド研公開講座「森のしくみとそ の役割」ー変わりゆく芦生の森と生き物 たちー	一般	91	45	
08.08.03	1	舞鶴の川と海を美しくする会	由良川エコ・ウォッチング	一般	42		
08.09.28 ～ 08.11.06	3	針畑ルネッサンスセンター	自然観察会	一般	31		
08.09.28	1	Nantan健歩会	歴史健康ウォーキング美山・芦生の森ト ロッコ道自然観察	一般	132		
08.10.25	1	京都大学 芦生研究林	芦生の森自然観察会 入門編 『秋の森 を歩きながら樹木観察をしよう』	一般	18	11	
08.10.26	1	京都大学 理学研究科物理学・ 宇宙物理学専攻	理科の探検 RikaTan センスオブワン ダー		16	3	
計		217	(23件)		4,844	94	

北海道研究林

期 間	日数	主催者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備考
08.05.23	1	標茶町立標茶小学校	遠足	3年生	48	1	
08.06.25	1	標茶町立沼幌小学校	木工教室(図工)	全学年	18	5	
08.11.08 ～ 08.11.09	2	標茶町教育委員会	平成20年度ジュニアリーダー養成講座 「しべちやアドベンチャースクール」の 第4講座（ネイチャースクール）	標茶町の小 中高生	28	11	
09.01.31 ～ 09.02.01	2	標茶町教育委員会社会教育課	平成20年度ジュニアリーダー養成講座 「しべちやアドベンチャースクール」の 第5講座（冬の野外学習）	標茶町の小 中高生	20	12	
計		6	(4件)		114	29	

和歌山研究林

期 間	日数	主催者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備考
08.04.15 ～ 09.01.20	20	県立有田中央高等学校清水分校	ウッズサイエンス	3年生	97	44	
08.05.14	1	県立有田中央高等学校清水分校	総合的な学習の時間「SIMIZUタイム」 (森林ウォーク)	1年生	25	7	
08.05.30 08.10.20	2	有田川町立八幡小学校	総合的な学習の時間「森は友だち森林の 町清水」	5年生	34	12	
08.10.01 ～ 08.10.03	3	有田川町立八幡中学校	総合的な学習の時間「職業体験学習」	2年生	9	10	
08.10.09 ～ 08.10.29	3	有田川町産業課	「森とあそぶまなぶ」森林体験学習	4年生、5年 生	159	24	
08.10.26 08.10.26	1	和歌山県森林インストラクター	わかやま森づくり塾現地研修	森林インス トラクター	33		
計		30	(6件)		357	97	

上賀茂試験地

期 間	日数	主催者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備考
08.05.24	1	京都精華大学人文学部環境社会学科	子供楽々塾「自然観察会」	小学生	30	5	大学等 地域開 放特別 事業
08.08.25	1	京都大学 フィールド研	森林体験学習	高校1年	29	6	
08.04.20	1	京都樹木医会	京都樹木医会勉強会「マツ属の生態観察」	京都樹木医 会会員	15		
08.05.10	1	京都大学 フィールド研	上賀茂試験地春の自然観察会	一般	30	9	
08.09.01 ~ 08.09.30	2	NPO法人シニア自然大学花と実の会	自然観察会	NPO会員	9	1	
08.09.10	1	京都園芸倶楽部	園芸クラブ会員の講演と見学	一般	28		
08.09.24	1	NPO法人シニア自然大学茨木バラとカシの会	上賀茂試験地の研究内容・概要の説明とフィールド見学	NPO会員	17	1	
08.10.02	1	京都府立植物園ボランティアグループ	樹木一般 試験地内見学	一般	16		
08.10.14	1	竹林管理ボランティア「竹レンジャー」	伝統ある施設を見学して、竹林管理に有効な竹の生態や管理作業の実際を学ぶ	一般	15		
08.11.07	1	NPO法人シニア自然大学自然と文化科	試験地内の樹木の観察	NPO会員	34	1	
08.11.08	1	NPO法人エコロジー・カフェ	第3回エコの寺子屋	NPO会員	21	2	
08.11.08	1	京都精華大学人文学部環境社会学科	自然観察会「京都精華大学子ども楽々塾」	一般	34	1	
08.11.09	1	京都府ネイチャーゲーム協会	ネイチャーゲームを使った、子ども達への環境学習	一般	25	5	
08.11.15	1	京都大学 フィールド研	上賀茂試験地秋の観察会	一般	30	7	
08.11.25	1	NPO法人シニア自然大学高等科	試験地の見学と実習	NPO会員	30	1	
計	16	(15件)			363	39	

北白川試験地

期 間	日数	主催者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備考
08.04.23	1	園田学園高等学校	2008年度春期課外活動「京都大学北部構内見学」	特別進学 コース1・ 2・3年生	39	4	
08.09.21	1	京都大学 フィールド研	森の働きー木・水・土から見える「無用の用」(京都大学・ジュニアキャンパス)	中学生	18	7	
08.12.09	1	京都大学 農学研究科森林科学専攻	進路指導 集中セミナー	高校1, 2年 生	20	1	
計	3	(3件)			83	12	

舞鶴水産実験所

期 間	日数	主催者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備考
08.07.01 ~ 08.07.08	2	綾部市立東陵中学校	施設見学及び由良川についての学習	中学生	19		
08.07.22 ~ 08.07.24	3	京都教育大学附属高等学校	臨海実習 (SSHクラス)	1年生	57	5	
08.07.24 ~ 08.07.25	2	京都府立西舞鶴高等学校	森と川の調査と分析 (SPPプログラム)	2年生	78	7	
08.07.27 ~ 08.07.30	4	兵庫県立西宮今津高等学校	臨海実習	2年生	88	4	
08.07.31 ~ 08.08.02	3	京都府立南陽高等学校	実習・実験・講義 (SPPプログラム)	1年生	132	6	
08.09.06	1	兵庫県立神戸高等学校	サイエンスツアー (SSHクラス)	高校生	33	2	
08.10.08	1	舞鶴市立倉梯第二小学校	施設見学	小学生	134		
08.10.10 ~ 08.10.30	2	京都府立海洋高等学校	施設見学と講義	高校生	41		
08.11.07	1	舞鶴市立中舞鶴小学校	ウォークラリー	小学生	360		
08.12.24	1	京都府立海洋高等学校ほか	標本館見学	高校生	3		
08.08.20 ~ 08.08.29	7	海上保安学校	港湾測量実習立ち入り		112		
計	27	(11件)			1,057	24	

瀬戸臨海実験所

期 間	日数	主催者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備考
08.05.06	1	和歌山県立向陽高等学校	SSH課題研究に係る磯観察	環境科学科2 年	8		
08.05.31 ~ 08.06.01	2	奈良県立奈良高等学校	SSHサイエンスツアー	1・2年	34		
08.07.18 ~ 08.07.21	4	大阪府立豊中高等学校	平成20年度生物特別臨海実習	1・2年生	68		
08.07.22 ~ 08.07.25	4	滋賀県立膳所高等学校	第39回生物実習旅行	普通科・理 数科1年生	100		
08.08.22 ~ 08.08.24	3	奈良女子大学附属中等教育学校	サイエンス「夏の学校」	中学生	79		
08.08.26 ~ 08.08.28	3	兵庫県立尼崎小田高等学校	SSH臨海実習	高校生	21	3	
08.08.30	1	和歌山県立向陽高等学校	磯観察	高校生	6	1	
08.10.03 ~ 08.10.05	3	兵庫県立姫路飾西高等学校	SSC宿泊研修海洋実習	高校生	66		
08.10.10 ~ 08.10.12	3	兵庫県立姫路飾西高等学校	SSC宿泊研修海洋実習	高校生	66		
08.11.22 ~ 08.11.23	2	NPO法人エコロジー・カフェ	NaGISAサンプリングのソーティング	NPO会員	12	6	
計	26	(10件)			460	10	

●●● 3. フィールド研教職員の活動の記録 ●●●

(1) 新任教員紹介

長谷川 尚史 准教授

里域生態系部門 里山資源保全学分野



5月1日付で里山資源保全学分野准教授に着任いたしました。1999年まで、フィールド科学教育研究センターの前身の一部である農学研究科附属演習林に所属していました。私にとってフィールド科学教育研究センターは、最初に研究者、そして社会人としてのキャリアを積ませていただいた教育研究機関であり、人一倍強い愛着を持っています。

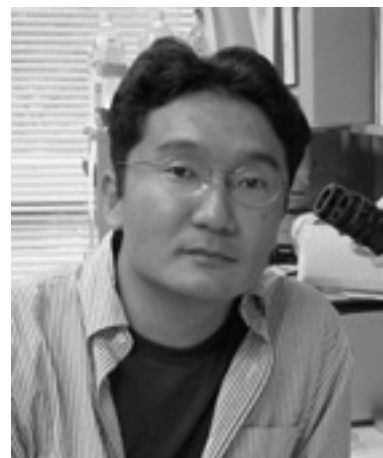
私はこれまで、空中写真の解析、GISを用いた森林管理、森林でのGPS利用技術、素材生産作業のモデル化とコスト評価など、様々な技術的研究を行ってきました。その根底にあるのが、演習林勤務時代に得た「森林を持続的に利用しながらうまく付き合っていくための社会の仕組みとはどのようなものだろうか」という視点です。

環境、経済、社会に関する多くの要因が複雑に絡み合う森林との付き合い方を考える上では、様々な専門分野から得られる自然の機能についての知見をもとに、それぞれをバランスよく、経済的、社会的にも長期的に継続可能な形で発揮させる社会の仕組みづくりが必要です。森里海連環学は、まさにそのような新しい時代の概念であり、フィールド科学教育研究センターは森林と海洋を結ぶ人間活動を考える上で、非常に重要な役割を担った教育研究機関であると考えています。

今後、森林だけでなく様々な分野の専門を学びながら、森里海連環学の発展と新時代の社会づくりに少しでも貢献できれば、と考えておりますので、皆様のご指導とご協力を、どうかよろしくお願いいたします。

伊勢戸 徹 特定助教

NaGISA プロジェクト特定有期雇用教員



NaGISA プロジェクトの特定助教として着任いたしました伊勢戸と申します。私は京都市左京区下鴨の出身で、京都大学の近くで生まれ育ちました。海洋生物への憧れから琉球大学に進学し、ウミウシ類の形態学を学び、卒業後は東京工業大学大学院でホヤの発生学を通して実験生物学の基本を学ぶことができました。しかし、生物学全体を考えると、分類学的重要性への認識に問題があると感じるようになり、崖から飛び降りる心境で、博士課程半ばにして分類学に転向いたしました。

私は分類学を始めるにあたって、あえて人々に関心を持たれていない内肛動物という生物群を対象に選びました。地球上につまらない生物などいるはずありません。そして、まだ価値を見いだされていない生物を科学の舞台に招き入れ、その生物に秘められた価値をひもといていく最初のきっかけを作るのが分類学です。生物多様性という言葉が多用されるようになって久しいですが、その多様性の未知なる部分に光を当てるのが私の役割だと思っています。

また、生物多様性は危急性のある地球規模の環境問題の対象でもあります。その多様性の基礎情報を担う分類学も、国際協力のもとに新たな活動の仕組みを築き上げていかなければいけません。私はNaGISA プロジェクトに関わる中で、特に分類学的視点での貢献をしていくとともに、国際プロジェクトを進めるノウハウを学びたいと考えています。

向井 宏 特任教授

海域陸域統合管理学研究部門



10月から海域陸域統合管理学研究部門の特任教授として赴任してきました。2007年3月にそれまで勤めていた北海道大学を退職して、「海の生きものを守る会」を創設し、沿岸生物と環境の保全運動に取り組んできました。

東大海洋研究所や北海道大学では、主に沿岸のベントスや海草藻場の群集生態学を研究してきましたが、北大の厚岸臨海実験所に行ってから陸と海の関係について関心を持ち、2000年から厚岸水系で陸上生態系と沿岸生態系の相互作用に関する研究を本格的に始めました。その契機は漁業者から「植林しているのに牡蠣の生産が良くならないのは何故？」と問われたことでした。科学がその答えを持っていないのは問題だと思ったのが、この研究を始めるきっかけでした。その後、北大でも組織改編で北方生物圏フィールド科学センターが創設され、多くのフィールド研究者が生態系間の関係に関心を持ってくれるようになりました。

北大に続いて京大でもフィールド科学教育研究センターができ、私と山下さんと相談して、北大と京大の施設がある厚岸水系（京大北海道研究林標茶区と北大厚岸臨海実験所）と古座川水系（北大和歌山研究林と京大紀伊大島実験所・瀬戸臨海実験所）で、森里海連環学の北大・京大合同実習を実施することができました。この実習はその後も続いており、このたび私が現在の職について再びこの実習のまとめ役をやることになったのは、始めた以上最後まで責任をとれといわれているのだと思っています。幸いなことに、この合同実習では両大学の実習生の同窓会も行われているようで、合同実習の成果もこれから期待されるのではないかと喜んでいます。皆様のご協力を今後ともぜひお願いしたいと思います。

佐藤 真行 特任准教授

海域陸域統合管理学研究部門



10月1日付けで海域陸域統合管理学研究部門（日本財団助成部門）に参りました。私はこれまで、経済学、特に環境経済学を研究してきました。9月までは、地球環境学堂において、「京都サステイナビリティ・イニシアティブ」という、様々な分野を融合してサステイナビリティ学を展開するプロジェクトに携わっており、そこでは環境を鑑みた経済発展の持続性の分析も行いました。

本センターで取り組む「海域陸域統合管理学」は、海と陸とを統合的に分析すると同時に、自然科学的視点と社会科学の視点とを統合的に分析するという、非常に挑戦的でやりがいのあるプロジェクトだと思っております。このプロジェクトを通じて、私はフィールド研究が生み出すたくさんの優れた自然科学的知見を、いかに社会経済的意思決定に活かすかを考えていきたいと思います。私の主たる研究課題は、価格の付いていない環境や生態系サービスを、価格の付いている財やサービスとあわせて考えなければならないときに、それらの価値をどのように評価して、どのような社会的意決定を下すかということです。環境経済学は、環境と経済の両方を知る必要がありますが、それは容易なことではありません。しかし、フィールド研に所属できたということは、自然環境を深く知るための最高のチャンスに恵まれたことを意味します。フィールド研の皆様のご指導とご協力に預かれること、心よりお願い申し上げます。

(2) フィールド研関連事業における活動

◆フィールド科学教育研究センター 刊行物

□フィールド研年報

『京都大学フィールド科学教育研究センター 年報 第5号』, 京都大学フィールド科学教育研究センター, 106p, 2008.

□報告書

第4回時計台対話集会「むしに教わる森里海連環学」 講演録：京都大学フィールド科学教育研究センター編集, サイファアソシエーツ株式会社 編集協力, 凸版印刷株式会社 印刷, 96p, 2008.

第5回時計台対話集会「森里海のつながりを生物多様性から考える」 講演録：京都大学フィールド科学教育研究センター編集, サイファアソシエーツ株式会社 編集協力, 凸版印刷株式会社 印刷, 80p, 2008.

□ FSERC News

< No. 14 2008年7月 >

ー目次ー

ニュー ス :	森里海連環学プロジェクト支援室の設置にあたって	(山下 洋)
	第4回時計台対話集会「むしに教わる森里海連環学」	(中島 皇・吉岡 崇仁)
研究ノート :	徳山試験地の檜皮剥皮実験林	(坂野上 なお)
教育ノート :	生命の星, 地球の動物たちの一生から全生物の現在・過去・未来に思いを :	
	少人数セミナー「海岸生物の生活史」より」の開催	(久保田 信)
新人紹介 :		(長谷川 尚史)
		(伊勢戸 徹)
活動の記録 :	2008年3月~6月	
予定 :	第7回古座川シンポジウム	
	フィールド科学教育研究センター公開講座2008	
	第4回由良川フォーラム	
	第5回時計台対話集会	

<No. 15 2008年11月>

ー目次ー

ニュー ス :	第5回時計台対話集会「森里海のつながりを生物多様性から考える」	(長谷川 尚史)
トピックス・研究ノート :		
	和歌山県研究林の間伐材で京都大学「白浜海の家」を新装	(柴田 昌三)
	瀬戸臨海実験所の実習船「ヤンチナ」のお披露目	(白山 義久)
	森里海連環学実習A (芦生研究林-由良川-丹後海コース)	(上野 正博)
研究ノート :	日本海の生物多様性	(甲斐 嘉晃)
新人紹介 :	海域陸域統合管理学研究部門	(向井 宏)
	海域陸域統合管理学研究部門	(佐藤 真行)
活動の記録 :	2008年7月~10月	
予定 :	京都大学・神戸大学合同市民公開講座 第1回「海上輸送と生物多様性」	

<No. 16 2009 年 3 月>

—目次—

ニュース：	木文化プロジェクト平成 21 年度より本格的に始動！	(柴田 昌三)
	2008 年度日本財団寄附講座 京都大学・神戸大学合同市民公開講座『人と海のかかわり』	(佐藤 真行)
	鳥獣保護と有害捕獲	(吉岡 崇仁)
研究ノート：	こどもの森，大人の森？	(徳地 直子)
教育ノート：	海域陸域統合管理学セミナー	(向井 宏)
活動の記録：	2008 年 10 月～2009 年 2 月	

□試験地・研究林情報

『試験地・研究林情報 2007(平成 19)年度』，京都大学フィールド科学教育研究センター森林・里域フィールド管理部，134p，2008.

—目次—

各施設年次報告

2007 年の芦生研究林の動向	(芝 正己)
2007 年の北海道研究林の動向	(安藤 信)
標茶区における野鼠調査と防除	(佐藤 修一)
標茶区におけるトドマツ人工林の鹿害	(勝山 智憲)
2007 年の和歌山研究林の動向	(徳地 直子)
2007 年の上賀茂試験地の動向	(柴田 昌三)
上賀茂試験地における稀少マツ属種の接ぎ木の試み (荒井 亮)	
上賀茂試験地 夏の自然観察会 (大学院生が実物を使ってフィールドで教える) 大学院生の感想と参加者によるアンケートの解析から	(中島 皇・福島 慶太郎)
2007 年の徳島試験地の動向	(中島 皇)
2007 年の北白川試験地の動向	(西村 和雄・柴田 昌三)

プロジェクト研究報告

芦生研究林の天然林における種子・実生動態調査 —2007 年度の報告—

(小嶋 宏和・浅野 善和・伊藤 雅敏・太田 健一・大牧 治夫・長谷川 敦史・藤井 弘明・柳本 順)

芦生研究林の天然林におけるカシノナガキクイムシによるナラ枯れ被害木の状況 (長谷川 敦史・柳本 順)

北海道研究林・標茶区の天然林における種子・実生動態調査 —2007 年度の報告—

(岡部 芳彦・佐藤 修一・勝山 智憲・林 大輔・吉岡 歩・山内 隆之)

北海道研究林・白糠区の天然林における種子・実生動態調査 —2007 年度の報告—

(柳本 順・古本 浩望・渡邊 康弘・岡部 芳彦・佐藤 修一・勝山 智憲・林 大輔・吉岡 歩)

和歌山研究林の天然林における種子・実生動態調査 —2007 年度の報告—

(平井 岳志・長谷川 孝・上西 久哉・細見 純嗣・中川 智之・松場 輝信)

上賀茂試験地のヒノキ天然林における種子・実生動態調査 —2007 年度の報告—

(柴田 泰征・境 慎二郎・大橋 健太・荒井 亮・古田 卓・中根 勇雄)

上賀茂試験地のヒノキ天然林の下層樹木構成 (荒井 亮・山内 隆之・柳本 順・黒田 真人・中川 智之)

徳山試験地の天然林の樹種構成 (秋田 豊・平井 岳志・大吞 和夫)

研修報告

研究資料

業務資料

□森林研究

『森林研究』第77号, 京都大学フィールド科学教育研究センター森林生物圏部門, 138p, 2008.

—目次—

特集 ニホンジカの森林へのインパクト—芦生研究林

「ニホンジカの森林へのインパクト—芦生研究林」企画趣旨

(井上みずき・合田 禄・阪口 翔太・藤木 大介・山崎 理正・高柳 敦・藤崎 憲治)

京都府の多雪地におけるニホンジカ (*Cervus nippon* Temminck) によるハイイヌガヤ (*Cephalotaxus harringtonia* var. *nana*) の採食に見られる積雪の影響 (福田 淳子・高柳 敦)

ニホンジカ (*Cervus nippon* Temminck) の採食によるチマキザサ (*Sasa palmata*) 群落の衰退について

(田中由紀・高槻成紀・高柳敦)

異なる光環境下における草本群落に対する防鹿柵の影響 (石川 麻代, 高柳 敦)

シカの利用頻度が草本群落に及ぼす影響 (合田 禄・高柳 敦)

芦生上谷流域の植物多様性と群集構造—トランセクトネットワークによる植物群集と希少植物の検出—

(阪口 翔太・藤木 大介・井上 みずき・高柳 敦)

日本列島の冷温帯林における30年間の土壌動物相の変化とシカ類の影響の可能性

(齋藤 星耕・水田 瞳・菱 拓雄・塚本 次郎・金子 信博・武田 博清)

シカの食害が森林生態系の物質循環に与える影響：溪流水質の予備調査から

(福島 慶太郎・徳地 直子)

芦生研究林における林道走行中のシカ目撃数のモニタリング

(合田 禄・井上 みずき・高柳 敦)

(総説) 京都大学芦生研究林においてニホンジカ (*Cervus nippon*) が森林生態系に及ぼしている影響の研究—その成果と課題について

(藤木 大介・高柳 敦)

(一般投稿)

スギ大径並材生産を目指した強度間伐の多角的評価：徳島県における選木育林・早期仕上げ間伐を例として

(大塚 和美・長谷川 尚史・野淵 正)

(短報) 成長錐を用いた木片試料採取法の検討—道管形成の季節変化を調べる観点から— (英文)

(高橋 さやか・岡田 直紀・野淵 正)

(資料) 地産地消型木造建築システムの実践—研究林スギ間伐材を利用した大学木造施設の建設—

(小林 広英・松倉 崇・小林 正美)

□瀬戸臨海実験所年報

『瀬戸臨海実験所年報』第21巻, 京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所編集, 日本印刷出版株式会社 印刷, 48p, 2008.

—目次—

記事 1. 概要 2. 臨海実習等 3. 研究会・来訪研究者 4. 水族館記録 5. 水族館観覧者 6. 業績目録

資料 水族館飼育生物 水族館水温

技術・研究報告

和歌山県沿岸で捕獲されたホクロヤッコとハナフエキフ (山本 泰司・加藤 哲哉・太田 満・荒賀 忠一)

瀬戸臨海実験所構内におけるカタバミ (カタバミ科) 花柱3型の季節消長 (久保田 信・梅本 信也)

紀伊半島沿岸産サンゴモドキ類 (細胞動物門, ヒドロ虫綱) 目録 (久保田 信・内田 紘臣)

和歌山県田辺湾で1997年の4月から9月までに採取された日本初記録種を含むヒドロクラゲ類 (細胞動物門, ヒドロ虫綱) (久保田 信)

□瀬戸臨海実験所紀要

『Publications of the Seto Marine Biological Laboratory』Vol. 40 (5/6) , 京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所編集, 日本印刷出版株式会社 印刷, 92p, 2008.

－目次－

- Sexually dimorphic Cubomedusa *Carybdea sivickisi* (Cnidaria: Cubozoa) in Seto, Wakayama, Japan
(Lewis, C., Kubota, S., Migotto, A.E. and Collins, A.G.)
- On three monostiliferous hoplonemertean from the San Juan Archipelago, Washington State, U.S.A
(Iwata F.)
- A new genus and a new species of pelagic ostracods of subfamily Halocypridinae from the North Pacific
(Chavtur, V.G. and Stovbun, G.C.)
- Pelagic ostracods of the genera *Halocypris* and *Fellia* (subfamily Halocyprinae) from the North Pacific
(Chavtur, V.G. and Stovbun, G.C.)
- Photosymbiotic ascidians from Nakanoshima Island and Takarajima Island (the Tokara Islands, Ryukyu Archipelago, Japan) with remarks on the status of *Diplosoma midori* (Tokioka, 1954).
(Oka, A.T. and Hirose, E)

□21 世紀 COE プログラム成果報告書

『昆虫科学が拓く未来型食料環境学の創成 2004-2009』, 京都大学大学院農学研究科・フィールド科学教育研究センター, 中西印刷株式会社 印刷, 122p, 2009.

－目次－

メンバー

研究拠点形成のための活動

研究成果 推進メンバー研究業績 (2004-2009)

まとめ

◆フィールド研主催事業

1) 公開講座 2008「森のしくみとその役割」(芦生研究林)

日時: 2008 年 7 月 25 日(金)13 時 ~27 日(日)12 時 (2 泊 3 日)

会場: 芦生研究林(京都府南丹市美山町芦生)

実行委員会委員長: 吉岡崇仁

(プログラム)

- | | | |
|-------------|----------------|------------------|
| 7 月 25 日 講義 | 芦生研究林の概要と芦生の森 | 芝 正己 |
| | ナラ枯れとカシノナガキイムシ | 山崎 理正 (農学研究科 助教) |
| | 芦生研究林の鳥類相とその変化 | 梶田 学 (日本鳥類学会 会員) |
| | 樹木識別入門 | 小嶋 宏和・長谷川 敦史 |

7 月 26 日 野外実習 森林の観察・体験学習(天然林内での講義並びに実習)

吉岡, 柴田, 芝, 徳地, 長谷川, 中島, 坂野上, 高柳, 梶田, 山崎, 他職員

7 月 27 日 講義 自然保護地域とシカ増加問題 高柳 敦 (農学研究科 講師)

2) 第 5 回時計台対話集会「森里海のつながりを生物多様性から考える」

日時: 2009 年 9 月 28 日 (土) 13:30~17:00

会場: 京都大学百周年時計台記念館百周年記念ホール

企画責任者: 長谷川 尚史

(プログラム)

- | | |
|----------------------|--------------------|
| 講演 「原生林も里山も地域の宝」 | 只木 良也 (名古屋大学名誉教授) |
| 「水と砂の流れと生物多様性」 | 向井 宏 (北海道大学名誉教授) |
| パネルディスカッション コーディネーター | 益田 玲爾 (京都大学フィールド研) |

パネラー

吉岡 崇仁・上野 正博（京都大学フィールド研）
椿 宜高・谷内 茂雄・奥田 昇（京大生態研）

会場との対話

司会 天野 礼子（アウトドアライター）

3) 神戸大学・京都大学合同市民公開講座「人と海のかかわり～人・社会・自然を考える～」(京都市)

(神戸大学大学院海事科学研究科共催 日本財団後援 2回開催)

第1回 日時：2009年1月31日(土) 13:30～16:30

会場：メルパルク京都

(プログラム)

講演1「船舶バラスト水問題」

三村 治夫（神戸大学大学院海事科学研究科）

講演2「密航する海の生物たち：外来海洋生物の日本での現状と対策」

岩崎 敬二（奈良大学教養部）

パネルディスカッション パネラー

三村 治夫（神戸大学大学院海事科学研究科）

岩崎 敬二（奈良大学教養部）

山下 洋（京都大学フィールド研）

石田 廣史（神戸大学大学院海事科学研究科）

第2回 日時：2009年3月14日(土) 13:30～16:30

会場：メルパルク京都

(プログラム)

講演1「日常生活に由来する新しい汚染」

田中 宏明（京都大学大学院工学研究科）

講演2「海で意図的に使用される化学物質は環境に安全か？」

岡村 秀雄（神戸大学大学院海事科学研究科）

パネルディスカッション パネラー

田中 宏明（京都大学大学院工学研究科）

岡村 秀雄（神戸大学大学院海事科学研究科）

吉岡 崇仁（京都大学フィールド研）

石田 廣史（神戸大学大学院海事科学研究科）

4) 地域連携講座「厚岸湖と厚岸湾はなぜ生産性が高いのか？」

日時：2009年3月7日(土) 13:30～

会場：本の森厚岸情報館

企画責任者：向井宏

(プログラム)

「鉄がつなぐアムール川とオホーツク海～『巨大』魚付き林という考え方」

大西 健夫（総合地球環境学研究所）

「厚岸湖の生産を支えるものとその保全」

向井 宏（京都大学フィールド研）

「アマモ場はなぜ重要なのか？」

仲岡 雅裕（北海道大学北方生物圏フィールド
科学センター 厚岸臨海実験所）

「地域資源としての厚岸湖～農業と漁業の交わる場所」

川辺 みどり（東京海洋大学）

5) 第4回由良川フォーラム～自然と暮らす 自然とつながる～(綾部市)

(京都府中丹広域振興局共催)

日時：2008年8月30日(土) 13時～16時30分

会場：綾部市中央公民館（京都府中丹文化会館横）

企画責任者：山下 洋

(プログラム)

特別講演 「里山放棄はなにをもたらしたか」

河合 雅雄（京都大学名誉教授）

報告 「人と野生動物との共生に向けた取り組み」～バッファゾーン整備による獣害対策事例～

京都府中丹広域振興局

報告 「由良川での新発見」
講演 「川を見る 生物から流域まで」

上野 正博（京都大学フィールド研）
萱場 祐一（独）土木研究所自然共生研究センター長）

◆フィールド研共催・後援事業

- 1) 全日空「私の青空・森づくり活動」において、森林・環境教室「京都大学フィールドセミナー（青空塾）」を開講

2008年5月18日	阿蘇くまもと空港の森／熊本空港	芝 正巳
5月31日	岡崎嘉平太の森／岡山空港	柴田 昌三
8月2日	アサヒの森／広島空港	吉岡 崇仁
10月18日	八百津の森／中部国際空港	吉岡 崇仁
10月25日	アカコッコの森／三宅島空港	柴田 昌三

- 2) 小笠原エコツアー

共催：NPO 法人エコロジー・カフェ
2008年6月19～24日 （父島）
講義・指導

白山 義久・伊勢戸 徹

- 3) 森里海学びツアー in 志津川・気仙沼

共催：NPO 法人エコロジー・カフェ
協賛：(財)日本財団

2008年8月19日（火）～23日（土）

8月19日	オリエンテーション・懇親交流会（志津川・南三陸町自然環境活用センター）
8月20日	フィールド海洋生物調査「NaGISA project」（南三陸町戸倉）
8月21日	森里海連環学の講義（気仙沼）
8月22日	森里海連環学のフィールド実習（「海は森の恋人運動」の発祥の森を視察）
8月23日	森里海連環学のフィールド実習（カキに付着する生物の観察他）

講師：畠山 重篤（社会連携教授）、白山 義久、伊勢戸 徹、畠山 信（牡蠣の森を慕う会 上席研究員）
横浜 康継（南三陸町自然環境活用センター 所長）他

- 4) 第3回エコの寺子屋「命のつながり ～水と森と人の生活～」(講義／フィールド学習)

共催：NPO 法人エコロジー・カフェ

2008年11月8日 上賀茂試験地

講義「水がつなぐ京の暮らしと琵琶湖の関係」 奥田 昇 准教授
(生態学研究センター)

フィールド学習「上賀茂試験地の里地・里山で水の環を垣間見る」

柴田 昌三

- 5) 後援：シンポジウム「仁淀川の森と水を考える」(高知県土佐市)

主催：仁淀川漁業協同組合

2008年8月24日 （高知県須崎市）

- 6) シンポジウム「木を“生かして生きる”社会をつくるために」

共催：高知大学大学院黒潮海洋科学研究科・須崎市

日時：2008年5月7日(水) 13:30～16:20

会場：須崎市立市民文化会館大ホール

(プログラム)

(第1部 「“森里海連環”の心を求めて」)

挨拶 笹岡 豊徳（須崎市長）

来賓講話 「“天災は忘れた頃にやってくる”に学ぶために」

尾池 和夫（京都大学総長）

基調講演 「“森里海連環学”を誕生させた心」

田中 克（フィールド研名誉教授）

- 講演1 「海から見える”森里海”連環」 白山 義久
 講演2 「川の物質循環—栄養塩を中心に—」 深見 公雄（高知大学理事（教育担当））
 （第2部 「木を”生かして生きる”社会をつくるために」）
 事例紹介「わが社が須崎市と取り組むバイオマス発電」 片岡 政之
 （住友大阪セメント（株）高知工場 環境課長）
- 文部科学省への提案をふまえたディスカッション
 「わが国初の”森と川と海”をフィールドにする仁淀川での壮大な実験は、どんな社会の形成を教えるか」
 柴田 昌三
 天野 礼子（アウトドアライター）
 来賓コメント 相良 祐輔（高知大学学長）
- 7) 「清流の都・静岡創造推進協議会」総会における基調講演「清流を都市も含めた森里海連環の視点から考える」
 2008年5月30日 （静岡市・マイホテル竜宮）
 講演 柴田 昌三
- 8) 持続的農業生産に関する国際会議2008（ICSA2008）におけるセッション「Adaptive Management of Biodiversity」
 共催：京都大学生態学研究センター
 2008年7月3日 （北海道大学）
 発表 白山 義久・吉岡 崇仁・柴田 昌三
- 9) 京都大学ジュニアキャンパス2008「森の働き ー木・水・土から見える『無用の用』ー」
 講師 中島 皇
 2008年9月21日 （北白川試験地・フィールド研第一会議室）
- 10) 京都大学シニアキャンパス2008の自由な学びの時間におけるミニゼミ「京都大学キャンパスの植物を学ぶ」
 講師 柴田 昌三
 2008年10月3日 （吉田キャンパス内）
- 11) サバ大学ボルネオ海洋研究所の教員・大学院生との交流会
 2008年10月24日 （パシフィコ横浜（世界水産学会議））
- 12) 第3回京都大学ホームカミングデイ・北部キャンパス見学ツアー
 2008年11月8日 （北白川試験地）
 講師 長谷川 尚史（北白川試験地長）
- 13) 第4回 京都大学附置研究所・センターシンポジウム「京都からの提言—21世紀の日本を考える」
 （京都大学附置研究所・センター主催）
 2009年3月14日 （名古屋・名鉄ホール）
 サブテーマ「学問のつながりのユニークさ：それがつくる明るい未来」
 （益川敏英京都大学名誉教授他5人の講演とパネルディスカッション）

◆各施設等主催共催事業

1) 芦生研究林

学校の目の前を流れる由良川の源流を訪ねる（綾部市立東綾中学校・総合的な学習の時間・地域開放事業）	5月22日
芦生の森自然観察会 入門編「春の森を歩きながら樹木観察をしよう」	5月31日
水生生物観察会（知井小学校4年生）	7月8日
美山町第4学年合同自然体験教室「美山っ子グリーンワールド」（南丹市美山町内小学校共催）	7月22日
京都市教育委員会長期合宿・自然体験推進事業（葛野小学校・地域開放事業）	10月2日
2008理科&地歴フィールドワーク（堀川高校・地域開放事業）	10月9日

- 芦生の森自然観察会「秋の森を歩きながら樹木観察をしよう」 10月25日
環境科学基礎（北桑田高校森林リサーチ科・地域開放事業） 10月28日
- 2) 北海道研究林
木工教室（標茶町立沼幌小学校との共催） 6月25日
平成20年度ジュニアリーダー養成講座「しべちやアドベンチャースクール」第4講座
（標茶町教育委員会社会教育課との共催） 11月8～9日
平成20年度ジュニアリーダー養成講座「しべちやアドベンチャースクール」第5講座
（標茶町教育委員会社会教育課との共催） 1月31日～2月1日
- 3) 和歌山研究林
ウッズサイエンス（和歌山県立有田中央高等学校清水分校との共催）計20回 4月15日～1月20日
「SIMIZU タイム」（ふるさと体験）（和歌山県立有田中央高等学校清水分校との共催） 5月14日
総合的な学習の時間「森は友だち森林の町清水」（有田川町立八幡小学校との共催） 5月30日・10月20日
芦生研究林にて森林体験学習（和歌山県立有田中央高等学校清水分校） 8月24日～8月25日
（協力：全日空）
総合的な学習の時間「職業体験学習」（有田川町立八幡中学校との共催） 10月1日～10月3日
「森とあそぶまなぶ」森林体験学習（有田川町産業課との共催） 計4回 10月9日～1月14日
（町内4小学校を対象に）
- 4) 上賀茂試験地
2008年度上賀茂試験地春の自然観察会 5月10日
2008年度上賀茂試験地秋の自然観察会 11月15日
- 5) 北白川試験地
なし
- 6) 徳山試験地
ふるさと文化財の森(文化庁)設定に関する記者発表 4月22日
- 7) 紀伊大島実験所
古座川合同調査（第29回調査～第40回、毎月開催）
第7回古座川シンポジウム「紀伊半島の下を地震波で覗いて見えてきたもの」 7月5日
（古座川流域協議会と共催・和歌山県古座川町）
第8回古座川シンポジウム「古座川プロジェクト中間報告」（古座川流域協議会と共催）2月26日
古座コミュニティ・カレッジにおいて、「南紀古座川一枚岩のヘリトリゴケ」を講演 6月26日
（和歌山県立串本古座高等学校主催，紀伊大島実験所後援，梅本）
紀伊田原湿地の復元をめざす研究会を開催 5月5日
（紀伊大島実験所・紀伊田原ウェットランドの会共催・和歌山県串本町田原）
- 8) 舞鶴水産実験所
SPP事業 京都府立南陽高等学校サイエンスリサーチ科夏季臨海実習 7月19日，31日～8月2日
SPP事業 京都府立西舞鶴高等学校理数探究科 6月23日，7月24・25日，9月20日
SSH事業 京都教育大学附属高等学校 7月22～24日
SSH事業 兵庫県立神戸高等学校 9月6日
京都府立海洋高校による舞鶴市竜宮浜周辺ダイビングマップ作成協力 6月25日
綾部市立東陵中学校に対し総合学習（「中学生由良川サミット」の発表に向けた水質調査等） 7月8日
兵庫県立西宮今津高等学校フィールド科学実習（大江山での森林実習と舞鶴湾での海洋実習） 7月27～30日
京漁連の舞鶴地方卸売市場周辺における「ふるさと海づくり大会」に企画展示部門で参加
（京都府と京都府漁業協同組合連合会の主催） 8月10日
舞鶴市ネイチャーガイド養成講座（舞鶴市社会教育課事業） 11月11日～2月7日
京都府立海洋高校栽培環境コース総合学習 10月10～30日

9) 瀬戸臨海実験所

「日替わり解説ツアー」および「バックヤードツアー」	3月25日～4月7日
きのくに県民カレッジ連携講座「水族館の磯採集体験・バックヤード体験学習」(和歌山県教育委員会と共催)	4月19日, 5月24日, 6月7日, 10月18日, 12月13日, 2月7日
SSH 事業実習 和歌山県立向陽高校	5月6日
SSH 事業実習 奈良県立奈良高校	5月31日～6月1日
第1回しらはまの海の生き物から学ぶ(講座)(白浜町中央公民館・白浜町教育委員会と共催)	6月4日(白浜町中央公民館)・6月11日(研究施設見学と水族館体験学習)
海洋観測研究実習船「ヤンチナ」完成披露会	7月11日
日替わり解説ツアーと、バックヤードツアー	(毎日開催) 7月19日～8月31日
SSH 事業実習 滋賀県立膳所高校	7月22～25日
SSH 事業実習 兵庫県立尼崎小田高校	8月26～28日
公開臨海実習(国立大学法人臨海臨湖実験所長会議 主催)	8月28日～9月5日
SSC コース 姫路飾西高等学校	10月3日～10月5日(A班)・10月10日～12日(B班)
白浜の自然観察会	11月15日
日替わり解説ツアー	(毎日開催) 12月25日～1月7日
日替わり解説ツアー	(毎日開催) 3月25日～3月31日

10) 海域陸域統合管理学研究部門

海域陸域統合管理学セミナー

第1回 杉本 亮「内湾域の富栄養化と物質循環 ～伊勢湾を例にして～」	11月27日
第2回 佐藤 真行「環境の経済分析とプロジェクト評価」	12月24日
第3回 向井 宏「バナナとエビとジュゴン」	1月28日
第4回 鎌内 宏光「森林生態系と海洋生態系が河川に与える影響」	2月25日
第5回 三田村 啓理(京大情報学研究科)	3月25日
「バイオリギングで観る水圏生物の行動」	

◆フィールド研関連刊行物編集委員会等

1) 「森林研究」編集委員(フィールド研教員のみ)

柴田 昌三(委員長)・吉岡 崇仁・安藤 信・芝 正己・徳地 直子・中島 皇・寄元 道德・坂野上なお

2) 瀬戸臨海実験所 Publications of the Seto Marine Biological Laboratory 編集委員(フィールド研教員のみ)

白山 義久(委員長)・久保田 信・宮崎 勝己・大和 茂之・深見 裕伸

(3) 研究成果

◆著書

森林生物圏部門

■吉岡 崇仁

吉岡 崇仁：中尾 正義・銭 新・鄭 躍軍 編，持続可能な発展と環境評価，中国の水環境問題 開発のもたらす水不足，勉誠出版，東京，185-207，2009.

吉岡崇仁：大西文秀編，フィールド科学と環境教育，GIS で学ぶ日本のヒト・自然系，弘文堂，東京，122，2009.

■徳地 直子

Tokuchi, N., Fukushima, K. and Katsuyama, M. : Taniguchi, M., Burnett, W. C., Fukushima, Y., Haigh, M. and Umezawa, Y. (ed), actors controlling stream water chemistry in ten small forested watersheds with plantation forests of various proportions and ages in central Japan, From Headwaters to the ocean, CRC Press, Leiden, 75-82, 2008.

Katsuyama, M., Fukushima, K. and Tokuchi, N.: Taniguchi, M. Burnett, W. C., Fukushima, Y., Haigh, M. and Umezawa, Y. (ed), Effects of various rain-fall-runoff characteristics on streamwater stable isotope variations in forested headwaters, From Headwaters to the ocean, CRC Press, Leiden, 51-56, 2008.

Fukushima, K., Tokuchi, N., Tateno, R. and Katsuyama, M. : Taniguchi, M., Burnett, W. C., Fukushima, Y., Haigh, M. and Umezawa, Y. (ed) , Water yield and nitrogen loss during regrowth of Japanese cedar forests after clearcutting, From Headwaters to the ocean, CRC Press, Leiden, 97-104, 2008.

■中島 皇

中島 皇：藤崎 憲治・西田 律夫・佐久間 正幸編，4-1-2 フィールド教育の実践 フィールドで伝えられること，フィールドから伝えられること，昆虫科学が拓く未来，京都大学学術出版会，京都，489-497，2009.

里域生態系部門

■山下 洋

山下 洋：田中 克・田川 正朋・中山 耕至編，カレイ類稚魚成育場としての河口域の役割，稚魚学 多様な生理生態を探る，生物研究社，東京，108-114，2008.

■柴田 昌三

柴田 昌三：藤井 透編，資源として竹を理解する，竹の基礎科学と高度利用技術，シーエムシー出版，東京，17-34，2008.

■田川 正朋

田中 克・田川 正朋・中山 耕至：稚魚 生残と変態の生理生態学，京都大学学術出版会，京都，387p，2009.

田中 克・田川 正朋・中山 耕至：稚魚学 多様な生理生態を探る，生物研究社，東京，365p ，2008.

岡田 のぞみ・田川 正朋：田中 克，田川 正朋，中山 耕至編，ヒラメの変態と眼の移動機構，生物研究社，東京 ，131-140，2008.

青海 忠久・田川 正朋：田中 克，田川 正朋，中山 耕至編，異体類の変態と体色異常，生物研究社，東京，141-153，2008.

■益田玲爾

益田 玲爾：田中 克・田川 正朋・中山 耕至編，稚魚の心理を読む，稚魚学 多様な生理生態を探る，生物研究社，東京，346-351，2008.

■梅本 信也

梅本 信也：鷺谷 いずみ監修，水辺の里、海辺の里，消える日本の自然，恒星社厚生閣，東京，51-54，2008.

梅本 信也：里域植物相調査ノート，ユニバース印刷，長岡京市，73p. ，2008.

■中山耕至

田中 克・田川 正朋・中山 耕至：稚魚学 多様な生理生態を探る，生物研究社，東京，365p ，2008.

田中 克・田川 正朋・中山 耕至：稚魚 生残と変態の生理生態学，京都大学学術出版会，京都，387p，2009.

基礎海洋生物学部門

■久保田 信

村上 龍男：久保田 信 監修，山形 加茂海岸のクラゲ，東北出版企画，山形県鶴岡市，122pp，2008.

■宮崎 勝己

宮崎 勝己：石川 良輔編，バイオディバーシティシリーズ 6. 節足動物の多様性と進化，裳華房，東京，2-10，11-27，110-113，2008.

■白山 義久

Yasin, Z., Kwang, S.Y., Shau-Hwai, A.T. and Shirayama, Y.: Field Guide to the ECHINODERMS (Sea Cucumbers and Sea Stars) of Malaysia, Kyoto University Press, Kyoto, 104p, 2008.

Rahayu, D.L. and Wahyudi, A.J.: Susetiono and Shirayama, Y. (eds.), Common Littoral Hermit Crabs of Indonesia, Kyoto University Press, Kyoto, 93p, 2008.

海域陸域統合管理学研究部門

■向井 宏

向井 宏：鷺谷 いづみ監修，消える日本の自然～写真が語る 108 スポットの現状～，恒星社厚生閣，東京，2008.

◆原著論文・総説（査読あり）

森林生物圏部門

■吉岡 崇仁

藤平 和俊・大須賀 公一・吉岡 崇仁・林 直樹：制御理論を応用した持続可能な開発のための教育の方法論とその有効性の確認，環境教育，18（1），17-28，2008.

Takano, K., Ishikawa, Y., Mikami, H., Igarashi, S., Hino, S. and Yoshioka, T.: Fungal infection for cyanobacterium *Anabaena smithii* by two chytrids in eutrophic region of large reservoir Lake Shumarinai, Hokkaido, Japan., Limnology, 9, 213-218, 2008.

■芝 正己

千葉 巨樹・板谷 明美・石川 知明・芝 正己：わが国の地形を考慮した水辺管理区域の設定とその影響— 三重研宮川流域を対象として，中部森林研究，57，215-218，2008.

坂本 朋美・芝 正己・川村 誠：日吉型団地化施業の導入における現状と課題，森林利用学会誌，23(1)，3-10，2008.

■徳地 直子

Tokuchi, N., and Fukushima, K.: Long-term influence of stream water chemistry in Japanese cedar plantation after clear-cutting using the forest rotation in central Japan, Forest Ecology and Management, 257(8)，1768-1775, 2009.

藍川 昌秀・平木 隆年・駒井 幸雄・梅本 諭・徳地 直子：集水域における硫黄の流入流出の収支バランス，大気環境学会誌，43(1)，23-30，2008.

福島 慶太郎・徳地 直子：シカの食害が森林生態系の物質循環に与える影響：溪流水質の予備調査から，森林研究，77，77-87，2008.

Fukushima, K., and Tokuchi, N.: Factors controlling the acid-neutralizing capacity of Japanese cedar forest watersheds in stands of various ages and topographic characteristics, Hydrological Processes, 23(2)，271, 2009.

Ueda, U.M., Tokuchi, N., and Ogawa, R.: High nitrate reductase activity in sprouts of *Phylllostachys pubescens*, Journal of Forest Research, 14, 55-57, 2008.

Arai, S., Ishizuka, S., Ohta, S., Ansori, S., Tokuchi, N., Tanaka, N., and Hardjono, A.: Potential N₂O emissions from leguminous tree plantation soils in the humid tropics, Global Biogeochemical Cycles, 22, GB2028, 2008.

Toda, T., Takeda, H., Tokuchi, N., Ohta, S., Wacharinrat, C., and Kaitpraneet, S.: Comparison of nitrogen content in tree litterfall in three dry dipterocarp forests under different fire regime in northeast Thailand, Tropics, 17, 199-208, 2008.

Koyama, L., Tokuchi, N., Fukushima, K., Terai, M., and Yamamoto, Y. : Seasonal changes in nitrate use by three woody species: the importance of the leaf-expansion period, *Trees*, 22, 851-859, 2008.

■ 寄元 道德

Hirayama, K. and Sakimoto, M. : Clonal structure and diversity of *Cryptomeria japonica* along a slope in a cool-temperate, old-growth mixed forest in the snowy region of Japan, *Canadian Journal of Forest Research*, 38, 2804-2813, 2008.

里域生態系部門

■ 山下 洋

Masuda, R., Yamashita, Y. and Matsuyama, M. : Jack mackerel *Trachurus japonicus* juveniles utilize jellyfish for predator avoidance and as a prey collector, *Fisheries Science*, 74, 276-284, 2008.

Mendiola, D., Yamashita, Y., Matsuyama, M., Alvarez, P. and Tanaka, M. : *Scomber japonicus*, H. is a better candidate species for juvenile production activities than *Scomber scombrus*, L, *Aquaculture Research*, 39, 1122-1127, 2008.

Okumura, Y. and Yamashita, Y. : Quantification of terrestrial dioxins discharged from four major rivers in Miyagi Prefecture into Sendai Bay, Japan, between 1999 and 2002, *Fresenius Environmental Bulletin*, 17 (5) , 530-535, 2008.

Kanaji, Y., Watanabe, Y., Kawamura, T., Xie, S., Yamashita, Y., Sassa, C., and Tsukamoto, Y. : Multiple cohorts of juvenile jack mackerel *Trachurus japonicus* in waters along the Tsushima Warm Current, *Fisheries Research*, 95, 139-145, 2009.

■ 柴田 昌三

中西 麻美・稲垣 善之・深田 英久・柴田 昌三・大澤 直哉: ヒノキの雄花生産量に土壤条件と強度間伐が及ぼす影響: 森林立地, 50(2) , 167-173, 2008.

本江 美智子・藤原 道郎・山本 聡・大藪 崇司・美濃 伸之・柴田 昌三: 淡路島北部における竹林拡大の現状と竹林タイプ別管理: *Hikobia*, 15, 193-204, 2008.

寺井 裕美・柴田 昌三・日野輝明: 草食性哺乳類がミヤコザサの地上部と地下部に与える影響 - 採食排除後4年目の調査から: *日本緑化工学会誌*, 34, 516-523, 2009.

■ 益田 玲爾

Masuda, R. : Ontogenetic changes in the ecological function of the association behavior between jack mackerel *Trachurus japonicus* and jellyfish, *Hydrobiologia*, 616(1) , 269-277, 2008.

Masuda, R. : Seasonal and interannual variation of subtidal fish assemblages in Wakasa Bay with reference to the warming trend in the Sea of Japan, *Environmental Biology of Fishes*, 82(4) , 387-399, 2008.

Masuda, R., Yamashita, Y. and Matsuyama, M. : Jack mackerel *Trachurus japonicus* juveniles use jellyfish for predator avoidance and as a prey collector, *Fisheries Science*, 74(2) , 276-284, 2008.

Bell, J., Leber, K., Blankenship, H. L., Loneragan, N. and Masuda, R. : A New Era for Restocking, Stock Enhancement and Sea Ranching of Coastal Fisheries Resources, *Reviews in Fisheries Science*, 16(1-3) , 1-9, 2008.

■ 梅本 信也

梅本 信也 : 紀伊大島におけるススキとチガヤの里域植物誌, *熊野誌*, 55, 163-171, 2008.

■ 長谷川 尚史

福井遼・杉本和也・大塚和美・長谷川尚史・前田多恵子 : 集材作業における繊維ロープの利用可能性, *森林利用学会誌*, 23(4) , 255-258, 2009.

大塚和美・長谷川尚史・野瀬正: スギ大径並材生産を目指した強度間伐の多角的評価: 徳島県における選木育林・早期仕上げ間伐を例として, *森林研究*, 77, 109-121, 2008.

Tachiki, Y., Yoshimura, T., Hasegawa, H., Sakai, T. and Nakamura, F. : DeltaForest: a navigation system for the forest resources monitoring project using PDA and GPS. , *Journal of the Japan Forest Engineering Society*, 23(2) , 41-52, 2008.

■中西 麻美

中西 麻美・稲垣 善之・深田 英久・柴田 昌三・大澤 直哉:ヒノキの雄花生産量に土壤条件と強度間伐が及ぼす影響, 森林立地, 50(2) , 167-173, 2008.

Hirota, I., Nawata, E., Nakanishi, A., and Sipasak, S. : Allometric equations to estimate the aboveground biomass of four bamboo species in shifting cultivation fields in northern Laos (北部ラオス焼畑地域に生育するタケ4種の地上部バイオマス推定式), Bamboo Journal, 25, 18-25, 2008.

■中山 耕至

Kikko, T., Kai, Y. and Nakayama, K. : Relationships among tributary length, census population size, and genetic variability of white-spotted charr, *Salvelinus leucomaenis*, in the Lake Biwa water system, Ichthyological Research, 56(1) , 100-104, 2009.

Kikko, T., Kai, Y., Kuwahara, M. and Nakayama, K. : Genetic diversity and population structure of white-spotted charr (*Salvelinus leucomaenis*) in the Lake Biwa water system inferred from AFLP analysis, Ichthyological Research, 55(2) , 141-147, 2008.

■甲斐 嘉晃

Kikko, T., Kai, Y., Kuwahara, M. and Nakayama, K. : Genetic diversity and population structure of white-spotted charr (*Salvelinus leucomaenis*) in the Lake Biwa water system inferred from AFLP analysis. , Ichthyological Research, 55(2) , 141-147, 2008.

Kikko, T., Kuwahara M., Iguchi, K., Kurumi, S., Yamamoto, S., Kai, Y., and Nakayama, K. : Phylogeography of white-spotted charr (*Salvelinus leucomaenis*) in the Lake Biwa water system Inferred from Mitochondrial DNA Sequences. , Zoological Science, 25, 146-153, 2008.

Kikko, T., Harada Y., Takeuchi, D., and Kai, Y. : Interpopulation variation in egg size of fluvial white-spotted charr, *Salvelinus leucomaenis*. , Fisheries Science, 74, 935-937, 2008.

Kai, Y. and Nakabo, T. : Taxonomic review of the *Sebastes inermis* species complex (Scorpaeniformes: Scorpaenidae). , Ichthyological Research, 55, 238-259, 2008.

Akihito, Akishinomiya, F., Ikeda, Y., Aizawa, M., Makino, T., Umehara, Y., Kai, Y., Nishimoto, Y., Hasegawa, M., Nakabo, T., and Gojobori, T. : Evolution of the Pacific and the Sea of Japan populations of the two gobiid species, *Pterogobius elapoides* and *Pterogobius zonoleucus*, based on morphological and molecular analyses. , Gene, 427, 7-18, 2008.

Kikko T., Kai, Y., and Nakayama, K. : Relationships among tributary length, census population size and genetic variability of white-spotted charr, *Salvelinus leucomaenis*, in the Lake Biwa water system. , Ichthyological Research, 56(1) , 100-104, 2009.

■上野 正博

Iguchi, A., Ito, H., Ueno, M., Maeda, T., Minami, T. and Hayashi, I. : Molecular phylogeny of the deep-sea *Buccinum* species (Gastropoda: Buccinidae) around Japan; inter- and intraspecific relationships inferred from mitochondrial 16SrRNA sequences, Molecular Phylogenetics and Evolution, 44, 1342-1345, 2007.

■Robert, Dominique

Robert, D., Castonguay, M. and Fortier, L. : Effects of intra- and inter-annual variability in prey field on the feeding selectivity of larval Atlantic mackerel (*Scomber scombrus*) , Journal of Plankton Research, 30, 673-688, 2008.

Robert, D., Castonguay, M. and Fortier, L. : Effects of preferred prey density and temperature on feeding success and recent growth in larval mackerel of the southern Gulf of St. Lawrence, Marine Ecology Progress Series, 377, 227-237, 2009.

Castonguay, M., Plourde, S., Robert, D., Runge, J.A. and Fortier, L. : Copepod production drives recruitment in a marine fish, Canadian Journal of Fisheries and Aquatic Sciences, 65, 1528-1531, 2008.

Duplisea, D.E. and Robert, D. : Prerecruit survival and recruitment of northern Gulf of St. Lawrence Atlantic

cod. , ICES Journal of Marine Science, 65, 946-952, 2008.

基礎海洋生物学部門

■白山 義久

石田 洋・渡辺 雄二・白山 義久:ベンチックチャンバーによる深海ベントス群集へのCO₂影響(海洋理工会平成19年度春季大会シンポジウム特集 CO₂海洋隔離技術の進展—ケーススタディから見える有効性と課題),海洋理工会誌, 14(1), 73-80, 2008

Kinjo, S., Shirayama, Y., Wada, H. : Evolutionary history of larval skeletal morphology in sea urchin Echinometridae (Echinoidea : Echinodermata) as deduced from mitochondrial DNA molecular phylogeny, Evolution & development, 10(5), 632-641, 2008

Suzuki, G., Hayashibara, T., Shirayama, Y. and Fukami, H. : Evidence of species specific habitat selectivity of *Acropora* corals based on identification of new recruits by two molecular markers, Marine Ecology Progress series, 355, 149-159, 2008.

■久保田 信

久保田 信:日本初記録の小型の鉢クラゲ *Atorella vanhoeffeni*(刺胞動物門, 鉢クラゲ綱, 冠クラゲ目), 日本生物地理学会会報, 63, 125-127, 2008

久保田 信・秋山 仁・山崎悠介:キヨヒメクラゲ(有触手綱, カブトクラゲ目, キヨヒメクラゲ科)の第二番目の記録, 日本生物地理学会会報, 63, 129-131, 2008

久保田 信:中国青島産コノハクラゲ(ヒドロ虫綱, 軟クラゲ目)の生活環と型の決定, 日本生物地理学会会報, 63, 145-149, 2008

久保田 信:和歌山県白浜町“北浜”へ2007年11月に打ち上がった稀少種クロハコフグ(ハコフグ科), 漂着物学会誌, 6, 20, 2008

久保田 信・樫山 嘉郎・中西 弘樹:和歌山県白浜町番所崎およびその近隣海岸へ夏季の短期間に集中漂着した熱帯起源の植物散布体, 漂着物学会誌, 6, 25-27, 2008

Kubota, S. : Constant timing of medusa release in bivalve-inhabiting hydrozoans of the genus *Eugymnanthea* (Hydrozoa: Leptomedusae: Eirenidae), Journal of the Marine Biological Association of the United Kingdom, 88(8), 1607-1609, 2008.

Kubota, S. : Basal-disc creeping combined with rotation, an undescribed behaviour with preferred directionality in bivalve-inhabiting hydrozoans (Cnidaria: Hydrozoa: Leptomedusae), Journal of the Marine Biological Association of the United Kingdom, 88(8), 1735-1739, 2008.

Kubota, S., Pagliara, P. and Gravili, C. : Fluorescence distribution pattern allows to distinguish two species of *Eugymnanthea* (Leptomedusae: Eirenidae), Journal of the Marine Biological Association of the United Kingdom, 88(8), 1743-1746, 2008.

Kawamura, M. and Kubota, S. : Influences of temperature and salinity on asexual budding by hydromedusa *Proboscoidactyla ornata* (Cnidaria: Hydrozoa: Proboscoidactylidae), Journal of the Marine Biological Association of the United Kingdom, 88(8), 1601-1606, 2008.

Lewis, C., Kubota, S., Migotto, A.E. and Collins, A.G. : Sexually dimorphic cubomedusa *Carybdea sivickisi* (Cnidaria: Cubozoa) in Seto, Wakayama, Japan, Publications of the Seto Marine Biological Laboratory, 40, 5/6, 1-8, 2008.

■宮崎 勝己

Kakoi, S., Kin, K., Miyazaki, K. and Wada, H. : Early development of the Japanese spiny oyster (*Saccostrea kegaki*): Characterization of some genetic markers, Zoological Science, 25, 455-464, 2008.

■大和 茂之

Yamaguchi, S., Yusa, Y., Yamato, S., Urano, S., and Takahashi, S. : Mating group size and evolutionarily stable pattern of sexuality in barnacles, Journal of Theoretical Biology, 253(1), 61-73, 2008.

Kobayashi, N., Yamato, S., Harino, H. and Kitano, M. : A bioassay using sea urchin egg development to identify

organotin pollution in sea water, Coastal marine science, 32(1) , 77-81, 2008.

Harino, H., Eguchi, S., Yamamoto, Y., Kurokawa, Y., Kawai, S., Arai, T., Ohji, M., Yamato, S., Kobayashi, N. and Miyazaki, N. : Distribution of Organotin Compounds in Representative Coastal Areas from Japan: A Review, Coastal marine science, 32(1) , 88-95, 2008.

■ 深見 裕伸

Fukami, H., Chen, C. A., Budd, A. F., Collins, A., Wallace, C., Chuang, Y., Chen, C., Dai, C., Iwao, K., Sheppard, C., and Knowlton, N. : Mitochondrial and Nuclear Genes Suggest that Stony Corals Are Monophyletic but Most Families of Stony Corals Are Not (Order Scleractinia, Class Anthozoa, Phylum Cnidaria) , PLoS ONE, 3(9) , e322, 2008 .

Fukami, H. : Short review: Molecular phylogenetic analyses of reef corals, Galaxea, Journal of Coral Reef Studies, 10, 47-55, 2008.

Nunes, F., Fukami, H., Vollmer, S. V., Norris, R. D., and Knowlton, N. : Re-evaluation of the systematics of the endemic corals of Brazil by molecular data, Coral Reefs, 27(2) , 423-432, 2008.

Suzuki, G., Hayashibara, T., Shirayama, Y. and Fukami, H. : Evidence of species specific habitat selectivity of *Acropora* corals based on identification of new recruits by two molecular markers, Marine Ecology Progress series, 355, 149-159, 2008.

■ 伊勢戸 徹

Iseto, T., Sugiyama, N. and Hirose, E. : A New Sponge-Inhabiting Loxosomella (Entoprocta: Loxosomatidae) from Okinawa Island, Japan, with Special Focus on Foot Structure, Zoological Science, 25, 1171-1178, 2008.

■ 鈴木 豪

Suzuki, G., Hayashibara, T., Shirayama, Y. and Fukami, H. : Evidence of species specific habitat selectivity of *Acropora* corals based on identification of new recruits by two molecular markers, Marine Ecology Progress series, 355, 149-159, 2008.

海域陸域統合管理学研究部門

■ 向井 宏

Sasil-Orbita, M. L. W. and Mukai, H. : Ontogenic change in the seedling photosynthetic activity of four temperate seagrass species in Northern Japan, Asia Life Sciences, 18, 99-110, 2009.

Hori, M., Suzuki, T., Monthum, Y., Srisombat, T., Tanaka, Y., Nakaoka, M. and Mukai, H. : High seagrass diversity and canopy-height increase associated fish diversity and abundance, Marine Biology (Online published) , 2009.

■ 佐藤 真行

佐藤真行・新山陽子 : 食品購買時の提示情報量と消費者の選択行動, フードシステム研究, 14・3, 13-240, 2008.

Ida, T., Kinoshita, S., and Masayuki, S. : Conjoint Analysis of Demand for IP Telephony: A Case in Japan, Applied Economics, 40, 1279-1287, 2008.

■ 杉本 亮

Sugimoto, R., Kasai, A., Miyajima, T. and Fujita, K. : Nitrogen isotopic discrimination by water column nitrification in a shallow coastal environment, Journal of Oceanography, 64, 39-48, 2008.

Sugimoto, R., Kasai, A., Miyajima, T. and Fujita, K. : Nitrogen isotope ratios of nitrate as a clue to the origin of nitrogen on the pacific coast of Japan, Continental Shelf Research, 29, 1303-1309, 2009.

管理技術部

■ 境 慎二郎

Tsujita, K., Sakai, S., and Kikuzawa, K. : Does individual variation in fruit profitability override color differences in avian choice of red or white *Ilex serrata* fruits?, Ecological Research, 23(2), 445-450, 2008.

■ 佐藤 修一

高橋 絵里奈・高橋 さやか・柳本 順・柳 直文・佐藤 修一・竹内 典之 : エゾシカ防除柵内外のササ稈数の推移と実生の消長ー京都大学フィールド科学教育研究センター北海道研究林白糠区における10年間の推移ー, 日本森林学会北海

道支部論文集, 57, 61-63, 2009.

■柳 直文

高橋 絵里奈・高橋 さやか・柳本 順・柳 直文・佐藤 修一・竹内 典之 : エゾシカ防除柵内外のササ稈数の推移と実生の消長ー京都大学フィールド科学教育研究センター北海道研究林白糠区における10年間の推移ー, 日本森林学会北海道支部論文集, 57, 61-63, 2009.

■柳本 順

高橋 絵里奈・高橋 さやか・柳本 順・柳 直文・佐藤 修一・竹内 典之 : エゾシカ防除柵内外のササ稈数の推移と実生の消長ー京都大学フィールド科学教育研究センター北海道研究林白糠区における10年間の推移ー, 日本森林学会北海道支部論文集, 57, 61-63, 2009.

◆原著論文・総説（査読なし）

森林生物圏部門

■芝 正己

Shiba, M. : Confronting Sustainable Forestry in an Era of Uncertainty and Change? , Invited Paper for DAAD Summer School Program in TUM, 1-11, 2008.

里域生態系部門

■山下 洋

江口 さやか・稲葉 法子・白石 有希・上野 正博・益田 玲爾・山下 洋・山本 義和 : 京都府舞鶴湾内の重金属汚染実態調査ー鉛汚染の現状把握を中心にー, 神戸女学院大学論集, 55(2), 118-131, 2008.

■柴田 昌三

柴田 昌三 : 竹林を通してみる里山再生に関する試み, ELR(応用生態工学会・日本緑化工学会・日本景観生態学会)2008 公開シンポジウム「自然再生の課題と展望」講演要旨集, 4-8, 2008.

Shibata, S., Ikeda, K., Lulmuanpuia, C., Suyama, Y., Saito, T., Hasegawa, H., Nishiwaki, A. and Makita, A. : Mautam - *Melocanna baccifera* flowering - Ecological characteristics and influence to the juhm agriculture, Proceedings of International Conference, Improvement of Bamboo Productivity and Marketing for Sustainable Livelihood, 155-161, 2008.

■梅本 信也

久保田 信・梅本 信也 : 瀬戸臨海実験所構内におけるカタバミ（カタバミ科）花柱3型の季節消長, 瀬戸臨海実験所年報, 21, 37-38, 2008.

■長谷川 尚史

Shibata, S., Ikeda, K., Lulmuanpuia, C., Suyama, Y., Saito, T., Hasegawa, H., Nishiwaki, A. and Makita, A. : Mautam - *Melocanna baccifera* flowering - Ecological characteristics and influence to the juhm agriculture, Proceedings of International Conference, Improvement of Bamboo Productivity and Marketing for Sustainable Livelihood, 155-161, 2008.

■上野 正博

井口 亮・伊藤 寛治・高井 晋平・上野 正博・前田 経雄・南 卓志・豊原 治彦・林 勇夫 : 日本周辺に生息する深海性エゾバイ・エゾボラ属の遺伝的な種内分化と種間関係に関する研究（日本海を中心に）, 海洋と生物, 178, 2008.

基礎海洋生物学部門

■久保田 信

久保田信・内田絃臣: 紀伊半島沿岸産サンゴモドキ類（細胞動物門、ヒドロ虫綱）目録, 瀬戸臨海実験所年報, 21, 39, 2008.

久保田信: 和歌山県田辺湾で1997年の4月から9月までに採取された日本初記録種を含むヒドロクラゲ類（細胞動物門、ヒドロ虫綱）, 瀬戸臨海実験所年報, 21, 40-48, 2008.

久保田信・梅本信也: 瀬戸臨海実験所構内におけるカタバミ（カタバミ科）花柱3型の季節消長, 瀬戸臨海実験所年報, 21, 37-38, 2008.

海域陸域統合管理学研究部門

■佐藤 真行

Sato, M., Samreth, S., and Yamada, K. : A simple numerical study on sustainable development with Genuine Saving, ISER Discussion Papers, Osaka University, 728, 1-10, 2008.

Sato, M. and Samreth, S. : Assessing Sustainable Development by Genuine Saving Indicator from Multidimensional Perspectives, MPRA papers, Munich University, 9996, 1-14, 2008.

Sato, M. : Ability to Choose in Environmental Valuation Methods, KSI Communications, Kyoto University, 8, 1-18, 2008.

管理技術部

■太田 満

山本 泰司・加藤 哲哉・太田 満・荒賀 忠一:和歌山県沿岸で捕獲されたホクロヤッコとハナフエキフ, 瀬戸臨海実験所年報, 21, 35-36, 2008.

■加藤 哲哉

山本 泰司・加藤 哲哉・太田 満・荒賀 忠一:和歌山県沿岸で捕獲されたホクロヤッコとハナフエキフ, 瀬戸臨海実験所年報, 21, 35-36, 2008.

■山本 泰司

山本 泰司・加藤 哲哉・太田 満・荒賀 忠一:和歌山県沿岸で捕獲されたホクロヤッコとハナフエキフ, 瀬戸臨海実験所年報, 21, 35-36, 2008.

◆その他（一般誌・報告書等）

森林生物圏部門

■吉岡 崇仁

吉岡 崇仁 : 京都大学フィールド科学教育研究センター・生態学研究センター編, シカをまもること 植生を守ること, 第5回時計台対話集会講演録「森里海のつながりを生物多様性から考える」, 34-39, 2009.

■安藤 信

安藤 信 : 平成20年度 八丁平植生調査報告 (森林植生), 1-69, 2009.

■芝 正己

芝 正己 : 芦生からの便り 第6回 宿舎今昔, 教職員情報, 京大生協, 72, 8, 2008.

芝 正己 : 芦生からの便り 第7回 (美山), 教職員情報, 京大生協, 73, 8, 2008.

芝 正己 : 芦生からの便り 第8回 (自然観察会), 教職員情報, 京大生協, 74, 8, 2008.

芝 正己 : 芦生からの便り 第9回 (インフラ整備), 教職員情報, 京大生協, 75, 8, 2008.

芝 正己 : 芦生からの便り 第10回 ある女の子の話, 教職員情報, 京大生協, 76, 8, 2008.

芝 正己 : 芦生からの便り 最終回 (体にしみこむ記憶), 教職員情報, 京大生協, 77, 8, 2008.

芝 正己 : 森林生産再生支援ツールとしての森林認証・実行コードクロスモデルの構築, 平成18~19年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C) (2)) 18580145 成果報告書, 1-111, 2008.

■中島 皇

中島 皇・福島 慶太郎 : 上賀茂試験地夏の自然観察会 (大学院生が実物を使ってフィールドで教える) 大学院生の感想と参加者によるアンケートの解析から, 研究林・試験地情報 2007 (平成19) 年度, 27-35, 2008.

中島 皇 : 2007 年徳山試験地の動向, 研究林・試験地情報 2007 (平成19) 年度, 36-40, 2008.

中島 皇・吉岡 崇仁 : 第4回時計台対話集会「むしに教わる森里海連環学」, 京都大学フィールド科学教育研究センターニュースレター, 14, 2, 2008.

■鎌内 宏光

鎌内 宏光 : シンポジウム「外房地域における森里海連関学の今後の展開」の報告, 陸水学雑誌, 69, 155-157, 2008.

鎌内 宏光・小川 安紀子 : ワークショップ「生態学関連データベースにおける最近の動向と今後の展望」の報告, 日本生態学会誌, 58(2), 131-136, 2008.

岸本 直之・藤井 智康・関野 樹・伴 修平・中野 伸一・飯泉 佳子・吉田 恭司・千賀 有希子・鎌内 宏光・丹野 忠弘・奈良 郁子・渡邊 隆広：陸水学会の2007年問題：陸水学会の現状と今後を考える，陸水学雑誌，69，63-72，2008.

里域生態系部門

■山下 洋

山下 洋：学生を連れてフィールドに出る，Kanrin（日本船舶海洋工学会誌），21，15，2008.

山下 洋：アメリカ合衆国の遊漁と放流，平成20年度栽培漁業技術中央研修会テキスト集，社団法人 全国豊かな海づくり推進協会，1-6，2008.

Antonio, E. S., Ueno, M., Kasai, A., Kurikawa, Y., Ishihi, Y., Yokoyama, H., and Yamashita, Y. : Isotopic evidence of seasonal variation in feeding niche of riverine gastropods, International Workshop Sato-Umi, New Concept that Increase Biological Productivity and Biodiversity. Abstract, 99-104, 2008.

■柴田 昌三

柴田 昌三：日特振 荒廃竹林及び竹林整備状況調査報告から 提言 日本の竹林の現状と問題点を解決するためには何が必要なのか，特産情報，30(4)，16-20，2008.

柴田 昌三：日特振 荒廃竹林及び竹林整備状況調査報告から(2) 提言 日本の竹林の現状と問題点を解決するためには何が必要なのか，特産情報，30(5)，16-19，2008.

柴田 昌三：竹林を通してみる生物多様性，京都大学環境報告書2008ダイジェスト版，2008.

柴田 昌三：珍しい果実のなる熱帯の竹—四十八年ごとに花が咲き、枯れるタケ・・・メロカンナ(Melocanna baccifera) —，竹，105，21，2008.

Muranaga, Y. and Shibata, S. : Vegetation landscape of mountain agro-ecosystem in Hong Ha, central Vietnam, Proceedings of the 4th International Conference on Landscape and Ecological Engineering, 152, 2008.

■梅本 信也

梅本 信也他：古座川合同調査報告集 第2巻，ユニバース印刷，長岡京市，2，146p.，2008.

梅本 信也他：森里海連環学実習B(紀伊半島編) フィールドガイド2008年版，ユニバース印刷，長岡京市，75p.，2008.

梅本 信也：現地報告③古座川流域圏，第4回時計台対話集会「むしに教わる森里海連環学」，京大フィールド研，京都市，76-81，2008.

■長谷川 尚史

長谷川 尚史・有賀 一広・板谷 明美・岩岡 正博・櫻井 倫・佐々木 達也・鈴木 秀典・鈴木 保志・仁多見 俊夫・野瀬 光弘・山口 浩和：IUFRO All-D3 Conference 2008「天然資源利用に向けて環境的に健全な技術を探る」報告（研究集会編），森林利用学会誌，2008.

Hasegawa, H., Sugimoto, K., and Niinaga, S. : Development of forest harvesting models using system dynamics with consideration of tree size, Pathways to Environmentally Sound Technologies for Natural Resource Use, 2008.

Yoshimura, T., Hasegawa, H. and Sakai, T. : Accuracy variation of GPS measurements by using an extendable GPS antenna pole under forest canopy, Proceedings of the 31st Annual Meeting of the Council on Forest Engineering: Addressing Forest Engineering Challenges For the Future, 247, 2008.

Yoshimura, T., Hasegawa, H. and Sakai, T. : Accuracy variation of dual-frequency GPS surveying under forest canopy by using an extendable GPS antenna pole, Proceedings of the 29th Asian Conference on Remote Sensing, 2008.

■中西 麻美

中西 麻美：広葉樹および針葉樹林生態系の資源獲得量に対する資源利用効率と一次生産の変動予測，平成17-19年度 科学研究補助金 基盤研究(C) (課題番号：17580127) 研究成果報告書，1-78，2008.

■上野 正博

上野 正博：由良川フォーラムとWakWakプロジェクト，JRRN Newsletter，16，2008.

上野 正博：京都大学フィールド科学教育研究センター・生態学研究センター編，農林水産業も生物多様性にとってマイナス面を持つ，第5回時計台対話集会講演録「森里海のつながりを生物多様性から考える」，40-45，2009.

基礎海洋生物学部門

■白山 義久

白山 義久: (プロジェクト最前線) 海洋生物のセンサスー京都大学フィールド科学教育研究センター, シーダー(地球環境情報から考える地球の未来), 0, 59-60, 2009

白山 義久: 地球上に生物は何種類いるのだろうか, ミルシル, 2009 年 2 月号, 22-25, 2009

■久保田 信

久保田 信: あなたにとっての幸せって?, TOKYO GRAFFITI, 52, 37, 2009.

久保田 信・堀田拓史: 稀少なクシクラゲの 1 種 *Lobatolampea tetragona* の小型成体および未成熟個体, Kuroshio Bioshere, 5, 17-21, 2009.

久保田 信: 和歌山県田辺湾から採集された最小の触手数を有する日本産ベニクラゲ (ヒドロ虫綱, 花クラゲ目) のクラゲの形態とその成長, 南紀生物, 50(1), 161-162, 2008.

久保田 信: 海面を滑走するアメンボの追加記録, KINOKUNI, 73, 8-9, 2008.

久保田 信: サツマゴキブリ (マダラゴキブリ科) を田辺市新庄総合公園の山道で発見, KINOKUNI, 73, 10, 2008.

久保田 信: 和歌山県白浜町沿岸における生きたホシダカラガイ (腹足綱, タカラガイ科) の 5 例目個体, くろしお, 27, 11-12, 2008.

久保田 信: 京都大学瀬戸臨海実験所構内で穂の中軸が二股に分かれた 2 例目のエノコログサ (イネ科), くろしお, 27, 14, 2008.

久保田 信: 日本の唄の歌詞に登用された鳥類一般の唄, くろしお, 27, 17-19, 2008.

久保田 信: 2008 年 10 月に連続出現したヤママユ (ヤママユガ科) の雌雄の成虫, KINOKUNI, 74, 23-24, 2008

久保田信: 白浜町のすばらしい多様な自然 ～特に海洋生物～, 環境保全協議会ニュース (白浜町環境保全協議会), 2009
檜山嘉郎・久保田信・田名瀬英朋: 和歌山県白浜町で初めて発見された若いグンバイヒルガオ (ヒルガオ科), Kuroshio Bioshere, 5, 23-25, 2009.

檜山嘉郎・牟田 理・久保田 信: クラゲの図案に登用された紙幣, くろしお, 27, 16, 2008.

新稲一仁・久保田 信: 和歌山県白浜町の海岸に漂着したサケガシラ (フリソデウオ科) の最近の記録, 南紀生物, 50(2), 252, 2008

Uchida, H., Tanase, H. and Kubota, S. : An extraordinarily large specimen of the polychaete worm *Eunice aphroditois* (Pallas) (Order Eunicia) from Shirahama, Wakayama, central Japan, Kuroshio Bioshere, 5, 9-15, 2009

■宮崎 勝己

宮崎 勝己: 書評「シリーズ 21 世紀の動物科学 第 2 巻 動物の多様性」, 生物科学ニュース, (443), 7-8, 2008.

海域陸域統合管理学研究部門

■向井 宏

向井 宏: 「里海」という言葉への警告, 月刊「むすぶ-自治・ひと・くらし-」, ロシナンテ社, 454, 24-28, 2008.

向井 宏: 京都大学フィールド科学教育研究センター・生態学研究センター編, 水と砂の流れと多様性, 第 5 回時計台対話集会講演録「森里海のつながりを生物多様性から考える」, 19-30, 2009.

企画研究推進部門

■福澤 加里部

福澤 加里部: 現地研究会「森林管理のあり方と物質循環研究」に参加して, 森林立地, 50(1), 51-53, 2008

技術管理部

■秋田 豊

秋田 豊・平井 岳志・大谷 和夫: 徳山試験地の天然林の樹種構成, 京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007 年度, 2, 71-73, 2008

■浅野 善和

小嶋 宏和・浅野 善和・伊藤 雅敏・太田 健一・大牧 治夫・長谷川 敦史・藤井 弘明・柳本 順: 芦生研究林の天然林における種子・実生動態調査ー2007 年度の報告ー, 京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007 年度, 2, 47-50, 2008.

■荒井 亮

荒井 亮：上賀茂試験地における稀少マツ属種の接ぎ木の試み, 京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007 年度, 2, 25-26, 2008.

荒井 亮・山内 隆之・柳本 順・黒田 真人・中川 智之：上賀茂試験地のヒノキ天然林の下層樹木構成, 京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007 年度, 2, 68-70, 2008.

柴田 泰征・境 慎二郎・大橋 健太・荒井 亮・古田 卓・中根 勇雄：上賀茂試験地のヒノキ天然林における種子・実生動態調査－2007 年度の報告－, 京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007 年度, 2, 64-67, 2008.

■伊藤 雅敏

小嶋 宏和・浅野 善和・伊藤 雅敏・太田 健一・大牧 治夫・長谷川 敦史・藤井 弘明・柳本 順：芦生研究林の天然林における種子・実生動態調査－2007 年度の報告－, 京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007 年度, 2, 47-50, 2008.

■上西 久哉

平井 岳志・長谷川 孝・上西 久哉・細見 純嗣・中川 智之・松場 輝信：和歌山研究林の天然林における種子・実生動態調査－2007 年度の報告－, 京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007 年度, 2, 60-63, 2008.

■太田 健一

小嶋 宏和・浅野 善和・伊藤 雅敏・太田 健一・大牧 治夫・長谷川 敦史・藤井 弘明・柳本 順：芦生研究林の天然林における種子・実生動態調査－2007 年度の報告－, 京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007 年度, 2, 47-50, 2008.

■大呑 和夫

秋田 豊・平井 岳志・大呑 和夫：徳山試験地の天然林の樹種構成, 京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007 年度, 2, 71-73, 2008

■大橋 健太

柴田 泰征・境 慎二郎・大橋 健太・荒井 亮・古田 卓・中根 勇雄：上賀茂試験地のヒノキ天然林における種子・実生動態調査－2007 年度の報告－, 京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007 年度, 2, 64-67, 2008.

■大牧 治夫

小嶋 宏和・浅野 善和・伊藤 雅敏・太田 健一・大牧 治夫・長谷川 敦史・藤井 弘明・柳本 順：芦生研究林の天然林における種子・実生動態調査－2007 年度の報告－, 京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007 年度, 2, 47-50, 2008.

■岡部 芳彦

岡部 芳彦・佐藤 修一・勝山 智憲・林 大輔・吉岡 歩・山内 隆之：北海道研究林・標茶区の天然林における種子・実生動態調査－2007 年度の報告－, 京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007 年度, 2, 54-56, 2008.

■勝山 智憲

勝山 智憲：標茶区におけるトドマツ人工林の鹿害, 京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007 年度, 2, 12-14, 2008.

岡部 芳彦・佐藤 修一・勝山 智憲・林 大輔・吉岡 歩・山内 隆之：北海道研究林・標茶区の天然林における種子・実生動態調査－2007 年度の報告－, 京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007 年度, 2, 54-56, 2008.

■黒田 真人

荒井 亮・山内 隆之・柳本 順・黒田 真人・中川 智之：上賀茂試験地のヒノキ天然林の下層樹木構成, 京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007 年度, 2, 68-70, 2008.

■小嶋 宏和

小嶋 宏和・浅野 善和・伊藤 雅敏・太田 健一・大牧 治夫・長谷川 敦史・藤井 弘明・柳本 順：芦生研究林の天然林における種子・実生動態調査－2007 年度の報告－, 京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007 年度, 2, 47-50, 2008.

■境 慎二郎

柴田 泰征・境 慎二郎・大橋 健太・荒井 亮・古田 卓・中根 勇雄：上賀茂試験地のヒノキ天然林における種子・実生動態調査－2007 年度の報告－, 京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007 年度, 2, 64-67, 2008.

■佐藤 修一

佐藤 修一：標茶区における野鼠調査と防除, 京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007 年度, 2, 10-11, 2008.

岡部 芳彦・佐藤 修一・勝山 智憲・林 大輔・吉岡 歩・山内 隆之：北海道研究林・標茶区の天然林における種子・実

生動態調査－2007年度の報告－，京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007年度， 2， 54-56， 2008.

■柴田 泰征

柴田 泰征・境 慎二郎・大橋 健太・荒井 亮・古田 卓・中根 勇雄：上賀茂試験地のヒノキ天然林における種子・実生動態調査－2007年度の報告－，京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007年度， 2， 64-67， 2008.

■中川 智之

荒井 亮・山内 隆之・柳本 順・黒田 真人・中川 智之：上賀茂試験地のヒノキ天然林の下層樹木構成，京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007年度， 2， 68-70， 2008.

平井 岳志・長谷川 孝・上西 久哉・細見 純嗣・中川 智之・松場 輝信：和歌山研究林の天然林における種子・実生動態調査－2007年度の報告－，京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007年度， 2， 60-63， 2008.

■長谷川 敦史

長谷川 敦史・柳本 順：芦生研究林の天然林におけるカシノナガキクイムシによるナラ枯れ被害木の状況，京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007年度， 2， 51-53， 2008.

小嶋 宏和・浅野 善和・伊藤 雅敏・太田 健一・大牧 治夫・長谷川 敦史・藤井 弘明・柳本 順：芦生研究林の天然林における種子・実生動態調査－2007年度の報告－，京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007年度， 2， 47-50， 2008.

■長谷川 孝

平井 岳志・長谷川 孝・上西 久哉・細見 純嗣・中川 智之・松場 輝信：和歌山研究林の天然林における種子・実生動態調査－2007年度の報告－，京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007年度， 2， 60-63， 2008.

■林 大輔

岡部 芳彦・佐藤 修一・勝山 智憲・林 大輔・吉岡 歩・山内 隆之：北海道研究林・標茶区の天然林における種子・実生動態調査－2007年度の報告－，京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007年度， 2， 54-56， 2008.

■平井 岳志

平井 岳志・長谷川 孝・上西 久哉・細見 純嗣・中川 智之・松場 輝信：和歌山研究林の天然林における種子・実生動態調査－2007年度の報告－，京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007年度， 2， 60-63， 2008.

秋田 豊・平井 岳志・大谷 和夫：徳山試験地の天然林の樹種構成，京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007年度， 2， 71-73， 2008.

■藤井 弘明

小嶋 宏和・浅野 善和・伊藤 雅敏・太田 健一・大牧 治夫・長谷川 敦史・藤井 弘明・柳本 順：芦生研究林の天然林における種子・実生動態調査－2007年度の報告－，京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007年度， 2， 47-50， 2008.

■古田 卓

柴田 泰征・境 慎二郎・大橋 健太・荒井 亮・古田 卓・中根 勇雄：上賀茂試験地のヒノキ天然林における種子・実生動態調査－2007年度の報告－，京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007年度， 2， 64-67， 2008.

■細見 純嗣

平井 岳志・長谷川 孝・上西 久哉・細見 純嗣・中川 智之・松場 輝信：和歌山研究林の天然林における種子・実生動態調査－2007年度の報告－，京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007年度， 2， 60-63， 2008.

■松場輝信

平井 岳志・長谷川 孝・上西 久哉・細見 純嗣・中川 智之・松場 輝信：和歌山研究林の天然林における種子・実生動態調査－2007年度の報告－，京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007年度， 2， 60-63， 2008.

■柳本 順

柳本 順・古本 浩望・渡邊 康弘・岡部 芳彦・佐藤 修一・勝山 智憲・林 大輔・吉岡 歩：北海道研究林・白糠区の天然林における種子・実生動態調査－2007年度の報告－，京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007年度， 2， 57-59， 2008.

荒井 亮・山内 隆之・柳本 順・黒田 真人・中川 智之：上賀茂試験地のヒノキ天然林の下層樹木構成，京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007年度， 2， 68-70， 2008.

小嶋 宏和・浅野 善和・伊藤 雅敏・太田 健一・大牧 治夫・長谷川 敦史・藤井 弘明・柳本 順：芦生研究林の天然林における種子・実生動態調査－2007年度の報告－，京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007年度， 2， 47-50， 2008.

長谷川 敦史・柳本 順：芦生研究林の天然林におけるカシノナガキクイムシによるナラ枯れ被害木の状況，京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007年度， 2， 51-53， 2008.

ルド研 研究林・試験地情報 2007 年度, 2, 51-53, 2008.

■吉岡 歩

岡部 芳彦・佐藤 修一・勝山 智憲・林 大輔・吉岡 歩・山内 隆之: 北海道研究林・標茶区の天然林における種子・実生動態調査 -2007 年度の報告-, 京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007 年度, 2, 54-56, 2008.

■山内 隆之

岡部 芳彦・佐藤 修一・勝山 智憲・林 大輔・吉岡 歩・山内 隆之: 北海道研究林・標茶区の天然林における種子・実生動態調査 -2007 年度の報告-, 京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007 年度, 2, 54-56, 2008.

荒井 亮・山内 隆之・柳本 順・黒田 真人・中川 智之: 上賀茂試験地のヒノキ天然林の下層樹木構成, 京大フィールド研 研究林・試験地情報 2007 年度, 2, 68-70, 2008.

◆学会発表 (発表要旨集合む)

森林生物圏部門

■吉岡 崇仁

吉岡 崇仁・松川 太一・栗山 浩一・勝山 正則: 森林伐採によって引き起こされる流域の環境変化に関する選択型実験, 環境科学会 2008 年会, 2008.

Yoshioka, T.: Linkages in forested watershed environments, Sustainability on Food, Feed, Fiber, Water, Energy: Science, Technologies, and Global Strategies, International Council of Sustainable Agriculture (ICSA), 2008.

Yoshioka, T.: Environmental Consciousness, Inner and Outer, The Futurability of Islands: Beyond Endemism and Vulnerability, The 3rd RIHN International Symposium, 2008.

前川 英城・吉岡 崇仁・松川 太一: 伐採を含む森林利用評価と森林への関心, 環境科学会 2008 年会, 2008.

林 直樹・吉岡 崇仁: 次世代に向けた森林の利用に関する意識調査 -一人々にとっての「身近な森林」-, 環境科学会 2008 年会, 2008.

高野 敬志・日野 修次・五十嵐 聖貴・吉岡 崇仁・関野 樹: 北海道朱鞠内湖の底泥表面および水層中のケイ藻密度, 日本陸水学会第 73 回大会, 2008.

藤平 和俊・大須賀 公一・吉岡 崇仁・林 直樹: 制御理論を応用した ESD の方法論と実践例, 第 19 回日本環境教育学会, 2008.

勝山正則・大手信人・福島慶太郎・柴田英昭・吉岡崇仁: アジアモンスーン地域における溪流水質予測モデルの適用と水文学的改良, 日本水文学資源学会, 2008.

松川 太一・吉岡 崇仁・松村 綾子: 誰が、何を環境問題として認識しているのか -身近な環境問題に関する自由回答データの分析-, 第 81 回 日本社会学会大会, 2008.

福澤 加里部・新井 宏受・徳地 直子・鎌内 宏光・福島 慶太郎・吉岡 崇仁・柴田 昌三・山下 洋: 仁淀川における流下過程での溶存・浮遊物質濃度と炭素・窒素安定同位体比の変化, 日本地球惑星科学連合 2008 年大会, 2008.

福澤 加里部, 徳地 直子, 新井 宏受, 長谷川 尚史, 吉岡 崇仁: 仁淀川流域における河川水質の集水域間の変動と流下過程での変化 炭素・窒素を中心に, 第 120 回日本森林学会大会, 2009.

谷尾 陽一, 福島 慶太郎, 谷 誠, 和田 孝志, 吉岡 崇仁: 森林小流域の河道特性 溪流内の Transient Storage (一時貯留), 第 120 回日本森林学会大会, 2009.

■安藤 信

中村 真介・呉 初平・安藤 信: 京都・東山におけるシイ林伐採後の更新状況, 第 120 回日本森林学会, Pa3-27, 2009.

■芝 正己

芝 正己, 坂本 朋美, シェラー マルクス: 日独における森林認証の舞台裏, 第 120 回日本森林学会大会, 2009.

Shiba, M.: Certification Approach than the regime of codes of forest practice for managing the interactions between forest harvesting and other forest resource value?, Abstract of Presentation for IUFRO ALL-3 Conference, 85, 2008.

坂本 朋美・芝 正己: 日本における CoC 認証市場の展開 -紙パルプ業界における FSC-CoC 認証の動向分析, 第 59 回日本森林学会関西支部講演要旨, 112, 2008.

坂本 朋美, 芝 正己, 速水 亨, Markus Schaller : 河畔域の保全と管理法について FSC 認証森林における解析事例から, 第 120 回日本森林学会大会, 2009.

三浦 きさと・芝 正己 : 森林認証制度と認証製品に対する消費者の意識 アンケートの結果から, 第 120 回日本森林学会大会, 2009.

高橋 智之, 板谷 明美, 石川 知明, 芝 正己 : GIS による森林景観を考慮した森林伐採計画, 第 120 回日本森林学会大会学術講演集, Pb1-34, 2009.

Itaya, A. and Shiba, M. : Estimation of Forest Resources in the Riparian Buffer Zone, Abstract of Presentation for IUFRO ALL-3 Conference, 88, 2008.

■徳地 直子

徳地 直子・大手 信人:アカマツ林の衰退と栄養塩循環の変化, 日本生態学会第 56 回全国大会, 2009

徳地 直子:同位体トレーサーと土壌酵素活性を用いた森林土壌窒素動態の把握, 第 122 回生存圏シンポジウム「生存圏萌芽・融合ミッションシンポジウム」, 2008

比嘉 史奈子・福島 慶太郎・兼子 伸吾・徳地 直子・井鷲 裕司: TRFLP 法に基づく林齢の異なるスギ人工林の土壌微生物多様性評価, 第 120 回日本森林学会大会, 2009

上田 実希・徳地 直子:アカマツ稚樹における冬季の硝酸態窒素の吸収と配分, 第 120 回日本森林学会大会, 2009

鎌内 宏光・新井 宏受・福島 慶太郎・福澤 加里部・土居 秀幸・富永 浩史・近藤 千眞・徳地 直子:河川の流下に伴う食物網の炭素窒素安定同位体比の変化-仁淀川の例, 第 120 回日本森林学会大会, 2009

福澤 加里部・徳地 直子・新井 宏受・長谷川 尚史・吉岡 崇仁:仁淀川流域における河川水質の集水域間の変動と流下過程での変化 炭素・窒素を中心に, 第 120 回日本森林学会大会, 2009

福島 慶太郎・坂井 百々子・徳地 直子:シカによる下層植生の食害が森林生態系の物質循環に与える影響, 第 120 回日本森林学会大会, 2009

臼井 伸章・小川 遼・福島 慶太郎・徳地 直子:竹林拡大に伴う現存量と純生産量の変化, 日本生態学会第 56 回全国大会, 2009

白濱 圭通・福島 慶太郎・徳地 直子:土地利用と水質が有田川水系の水質に与える影響, 日本生態学会第 56 回全国大会, 2009

上田 実希・水町 衣里・徳地 直子:コナラ稚樹における展葉に伴う硝酸態窒素の吸収と配分, 日本生態学会第 56 回全国大会, 2009

佐藤 拓哉・徳地 直子・鎌内 宏光・新妻 靖章・渡辺 勝敏・金岩 稔・山田 英幸・山本 裕典・原田 泰志:寄生者を介した森から川へのエネルギー補償とその場所的変異, 日本生態学会第 56 回全国大会, 2009

■中島 皇

中島 皇・坂野上 なお・秋田 豊 : 京都大学徳山試験地の概要, 瀬戸内海研究フォーラム in 福岡, 2008.

寄元 道徳, 秋田 豊, 平井 岳志, 大呑 和夫, 中島 皇 : 瀬戸内海西部の照葉樹林における林木の空間分布パターン, 第 120 回日本森林学会大会, 2009.

■寄元 道徳

寄元 道徳・秋田 豊・平井 岳志・大呑 和夫・中島 皇 : 瀬戸内海西部の照葉樹林における林木の空間分布パターン, 第 120 回日本森林学会, Pc3-28, 2009.

森下 和路・寄元 道徳 : 森林性低木 3 種における定着基質と樹冠アーキテクチャーの違いによる共存, 第 40 回種生物学会, 12, 2008.

松山 周平・寄元 道徳 : 異なる光条件下に生育する雌雄異株性ヤマウルシの繁殖投資とコスト, 第 56 回日本生態学会, PB2-645, 2009.

國永 知裕・平山 貴美子・寄元 道徳・高原 光 : 冷温帯スギ・落葉広葉樹混交林におけるブナの更新過程, 第 56 回日本生態学会, PB1-301, 2009.

森下 和路・平山 貴美子・寄元 道徳 : 低木種の分布を指標にした多雪地のスギ造林適地判定の可能性, 第 120 回日本森林学会, Pa3-37, 2009.

■坂野上 なお

坂野上 なお：プレカット材需要の構造変化について—京都市のプレカット工場を事例として—，第120回日本森林学会大会学術講演集，C27，2009.

川村 誠・坂野上 なお・長谷川 正：林業イノベーションの展開方向—人工林材の生産と流通の狭間で—，2008 年 林業経済学会 秋季大会，2008.

■鎌内 宏光

鎌内 宏光，新井 宏受，福島 慶太郎，福澤 加里部，土居 秀幸，富永 浩史，近藤 千真，徳地 直子：河川の流下に伴う食物網の炭素窒素安定同位体比の変化—仁淀川の例，第120回日本森林学会大会，2009.

鎌内 宏光：河川における落葉分解過程での水生不完全菌類群集の変化，日本陸水学会第73回大会，2008.

鎌内 宏光：落葉分解におけるCN比と樹種の違い，日本生態学会第56回全国大会，2009.

鎌内 宏光：河川における落葉分解過程での水生不完全菌類群集の変化，生物地球化学研究会2008年研究集会，2008.

里域生態系部門

■山下 洋

山下 洋・益田 玲爾・桑原 久実・明田 定満：温帯性沿岸魚類への温暖化影響，2008 年度水産海洋学会シンポジウム「地球温暖化とその沿岸・沖合海洋生態系への影響—検知と予測—」要旨集，15，2008.

山下 洋：森と里がはぐくむ海の幸，金沢大学里山プロジェクトシンポジウム「SATOYAMAの生物多様性保全—森・川・海のつながりを活かした人のいとなみ—」要旨集，7，2008.

山下 洋：森里海連環学。「森・川・里・海」流域間連携と総合的管理，平成19年度瀬戸内海環境保全セミナー・合同研修会，1-6，2008.

山下 洋：大学における取り組み「学生を連れてフィールドへ行こう」，沿岸環境関連学会連絡協議会第19回ジョイントシンポジウム，3-4，2008.

山下 洋：京大フィールド研の森里海連環学と教育研究活動，第56回日本生態学会 講演要旨集，169，2009.

高橋 宏司・益田 玲爾・山下 洋：報酬訓練によるマアジ稚魚の学習能力の個体発生，2008 年度日本水産学会春季大会 講演要旨集，38，2008.

大嶋 真鎌・上原 伸二・栗田 豊・米田 道夫・富永 修・山下 洋：仙台湾・常磐海域におけるヒラメの年級群水準と浮遊期の成長速度との関係，2008 年度日本水産学会春季大会 講演要旨集，58，2008.

秋山 諭・上野 正博・山下 洋：若狭湾西部由良川河口域におけるナカザトハマアミの分布密度とサイズの季節変化，2008 年度日本水産学会春季大会 講演要旨集，58，2008.

尾本 直隆・古屋 康則・陳 炳善・山下 洋・中川 雅弘・野田 勉：クロソイにおける生殖腺の性分化過程と飼育水温が性比に及ぼす影響，2008 年度日本水産学会春季大会 講演要旨集，191，2008.

江口 さやか・稲葉 法子・白石 有希・山本 義和・上野 正博・益田 玲爾・山下 洋：京都府舞鶴湾における環境実態調査—鉛汚染の現状把握—，2008 年度日本水産学会春季大会 講演要旨集，202，2008.

福澤 加里部・新井 宏受・徳地 直子・鎌内 宏光・福島 慶太郎・吉岡 崇仁・柴田 昌三・山下洋：仁淀川における流下過程での溶存・浮遊物質濃度と炭素・窒素安定同位体比の変化，日本地球惑星連合大会，J172-P004，2008.

宮島 悠子・益田 玲爾・鎌田 遼・山下 洋：カワハギの飼料としてのミズクラゲの有効性，2009 年度日本水産学会春季大会 講演要旨集，20，2009.

大畑 亮輔・益田 玲爾・上野 正博・福西 悠一・山下 洋：アユ及びマダイ仔魚の対捕食者戦略における濁度の重要性—クラゲに濁りは通用しない—，2009 年度日本水産学会春季大会 講演要旨集，54，2009.

谷本 尚史・黒木 洋明・山下 洋：尾虫類大量培養のための大型培養装置の開発，2009 年度日本水産学会春季大会 講演要旨集，71，2009.

谷本 尚史・黒木 洋明・内木 敏人・芳賀 穰・佐藤 秀一・竹内 俊郎・山下 洋：アミノ酸組成からみた尾虫類の魚類初期餌料としての有効性，2009 年度日本水産学会春季大会 講演要旨集，71，2009.

鈴木 健太郎・杉本 亮・笠井 亮秀・上野 正博・山下 洋：森と里と海のつながり 7. 由良川水系における懸濁態有機物と土地利用との関係，2009 年度日本水産学会春季大会 講演要旨集，156，2009.

笠井 亮秀・栗川 喜朗・上野 正博・山下 洋：森と里と海のつながり 8. 由良川河口域の物理・化学・基礎生産過程，

- 2009 年度日本水産学会春季大会 講演要旨集, 156, 2009.
- Islam, M. S. ・山下 洋・上野 正博・笠井 亮秀 : 森と里と海のつながり 9. 由良川河口域におけるスズキ仔魚の成長と生残, 2009 年度日本水産学会春季大会 講演要旨集, 157, 2009.
- 富士 泰期・笠井 亮秀・鈴木 啓太・上野 正博・山下 洋 : 森と里と海のつながり 10. 由良川河口域におけるスズキ稚魚の食性および回遊, 2009 年度日本水産学会春季大会 講演要旨集, 157, 2009.
- 秋山 諭・Antonio E. S. ・上野 正博・山下 洋 : 森と里と海のつながり 11. 由良川河口域におけるニホンハマアミの食性, 2009 年度日本水産学会春季大会 講演要旨集, 157, 2009.
- 益田 玲爾・鳥越 賢・芝 正己・山下 洋・田中 克 : 森と里と海のつながり 14. 木製魚礁の集魚効果の持続性と近隣の魚類相への影響, 2009 年度日本水産学会春季大会 講演要旨集, 158, 2009.
- 江口 さやか・薄元 志保・山本 沙織・芳村 碧・山本 義和・上野 正博・益田 玲爾・山下 洋 : 京都府舞鶴湾における環境実態調査～生物試料を用いた鉛汚染の現状把握～, 2009 年度日本水産学会春季大会 講演要旨集, 199, 2009.
- 奥村 裕・坂見 知子・村岡 大祐・神山 孝史・鈴木 敏之・山下 洋 : 一級河川から仙台湾へ流入するダイオキシン類の動態, 2009 年度日本水産学会春季大会 講演要旨集, 249, 2009.
- Islam, M. S., Ueno, M., and Yamashita, Y. : Evidence of growth-selective survival in larval Japanese sea bass *Lateolabrax japonicus*, 31st Annual Larval Fish Conference, Abstract, 105, 2008.
- Suzuki, K., Sugimoto, R., Kasai, A., Ueno, M., and Yamashita, Y. : Origin of particulate organic matter in the Yura River, Japan, EMECS (Environmental Management of Enclosed Coastal Seas)-8, Abstract, 96-97, 2008.
- Kurikawa, Y., Kasai, A., Ueno, M., and Yamashita, Y. : Seasonal variation in seawater intrusion and primary production in the Yura Estuary, Japan, EMECS (Environmental Management of Enclosed Coastal Seas)-8, Abstract, 130-131, 2008.
- Antonio, E. S., Ueno, M., Kasai, A., Kurikawa, Y., Ishihi, Y., Yokoyama, H., and Yamashita, Y. : Isotopic evidence of seasonal variation in feeding niche of riverine gastropods, EMECS (Environmental Management of Enclosed Coastal Seas)-8, Abstract, 222, 2008.
- Kanaji, Y., Watanabe, Y., Kawamura, T., Xie, S., Sassa, C., Tsukamoto, Y., and Yamashita, Y. : Early growth and hatchdate distributions of juvenile jack mackerel *Trachurus japonicus* in waters along the Tsushima Warm Current, 5th World Fisheries Congress, Abstracts, 121, 2008.
- Antonio, E. S., Ueno, M., Kasai, A., Kurikawa, Y., Ishihi, Y., Yokoyama, H., and Yamashita, Y. : Isotopic benthic community structure from downstream to offshore of Yura River, 5th World Fisheries Congress, Abstracts, 233, 2008.
- Kasai, A., Antonio, E. S., Kurikawa, Y., Ueno, M., and Yamashita, Y. : Hydrodynamics and ecosystem in the Yura Estuary, 5th World Fisheries Congress, Abstracts, 250, 2008.
- Fukunishi Y., Masuda R., Shimizu D., Aritaki M., and Yamashita Y. : Comparison of UV-B tolerance in early life stages of slime flounder *Microstomus achne* and spotted halibut *Verasper variegatus*, 7th International Flatfish Symposium, Abstracts, 29, 2008.
- Oshima, M., Uehara, S., Kurita, Y., Yoneda, M., Tominaga, O., Tomiyama, T., and Yamashita, Y. : Factors influencing year-class strength of Japanese flounder *Paralichthys olivaceus* off the Pacific coast of northern Japan, 7th International Flatfish Symposium, Abstracts, 44, 2008.
- Wada, T., Yamada, T., Shimizu, D., Aritaki, M., Sudo, H., Yamashita, Y., and Tanaka, M. : Successful stocking of highly depleted species, spotted halibut *Verasper variegatus* in Myako Bay, Japan: evaluation by post-release surveys and commercial landings, 7th International Flatfish Symposium, Abstracts, 46, 2008.
- Fairchild, E. A., Stottrup, J., and Yamashita, Y. : A comparative study of flatfish enhancement programs, 7th International Flatfish Symposium, Abstracts, 46, 2008.
- Uehara, S., Kurita, Y., Tomiyama, T., Yoneda, M., Osima, M., and Yamashita, Y. : Pre- and post-settlement processes in determining yearclass strength of Japanese flounder off the Pacific coast of northern Japan, 7th International Flatfish Symposium, Abstracts, 57, 2008.

Fuzinami, Y., Shimizu, D., Okouchi, H., and Yamashita, Y. : Relationship between the return rate decrement of Japanese flounder hatchery-juveniles and fisheries management in Miyako Bay, Japan, 7th International Flatfish Symposium, Abstracts, 58, 2008.

Antonio, E. S., Ueno, M., Kasai, A., Kurikawa, Y., Ishihi, Y., Yokoyama, H., and Yamashita, Y. : Consumption of organic matter by benthic communities determined by stable isotope analysis from downstream of Yura River to offshore of Tango Sea 森と里と海のつながり 12. 安定同位対比分析による由良川下流～丹後海におけるベントスの有機物利用, 2009 年度日本水産学会春季大会 講演要旨集, 157, 2009.

■柴田 昌三

中西 麻美・稲垣 善之・深田 英久・柴田 昌三・大澤 直哉 : ヒノキの雄花生産量に土壤条件と強度間伐が及ぼす影響, 日本森林学会関西支部大会, 2008.

稲垣 善之・酒井 敦・中西 麻美・柴田 昌三・深田 英久 : 2004 年に接近した台風がヒノキ林の落葉の時期と量に及ぼす影響, 第 60 回日本森林学会関東支部大会, 2008.

齋藤 智之・池田 邦彦・C.H. モンブイヤ・陶山 佳久・西脇 亜也・蒔田 明史・柴田 昌三 : タケ類の一斉開花直前の個体群構造—インド・ミゾラム州における *Melocanna baccifera*, 日本生態学会第 56 回全国大会, 2009.

松尾 歩・陶山 佳久・齋藤 智之・住吉 千夏子・齋藤 誠子・井鷲 裕司・柴田 昌三・鈴木 準一郎・西脇 亜也・蒔田 明史 : チュウゴクザサの一斉開花個体群を対象とした遺伝的多様性解析, 日本生態学会第 56 回全国大会, 2009.

陶山 佳久・齋藤 智之・西脇 亜也・蒔田 明史・柴田 昌三 : インド・ミゾラム州に分布するタケ (*Melocanna baccifera*) の一斉開花・更新時を対象とした分子生態学的解析, 日本生態学会第 56 回全国大会, 2009.

齋藤 誠子・井鷲 裕司・住吉 千夏子・柴田 昌三・陶山 佳久・松尾 歩・蒔田 明史・西脇 亜也 : 一斉開花年の異なるチュウゴクザサ集団の遺伝的組成の比較, 第 120 回日本森林学会大会, 2009.

住吉 千夏子, 井鷲 裕司, 松尾 歩, 陶山 佳久, 齋藤 智之, 齋藤 誠子, 柴田 昌三, 西脇 亜也, 鈴木 準一郎, 蒔田 明史 : 一斉開花したチュウゴクザサ個体群における遺伝子流動, 第 120 回日本森林学会大会, 2009.

中西 麻美, 稲垣 善之, 柴田 昌三, 深田 英久, 大澤 直哉 : ヒノキの窒素利用に土壤 CN 比と伐採が及ぼす影響, 第 120 回日本森林学会大会, 2009.

■田川 正朋

田川 正朋・有瀧 真人 : ヌマガレイの変態異常と甲状腺ホルモンの変態より前の T4 分泌が左右性を決定する可能性—, 2008 年度日本水産学会春期大会要旨集, 188 (#1123), 2008.

田川 正朋・有瀧 真人 : カレイ類の左右非対称性 (表と裏) は甲状腺ホルモンの作用時期によって決定される, 2008 年度 日本動物学会第 79 回大会, 122(3p048), 2008.

Tagawa, M. and Aritaki, M. : Improper timing of thyroid hormone increase induces higher occurrences of malformed juveniles during the metamorphosis of three flatfishes: Proposal of ‘timing hypothesis’ for malformation mechanism., 5th World Fisheries Congress, (1c05), 2008.

神田 哲・沖増 英治・田川 正朋・乾 靖夫 : 魚類の初期発育時における赤血球群の動態と甲状腺ホルモン, 第 33 回日本比較内分泌学会大会, (p-82), 2008.

高田 奈尚・田川 正朋・青海 忠久 : ササウシノシタの変態に及ぼす甲状腺ホルモンの影響の解析, 第 30 回稚魚研究会, (#9), 2008.

■益田 玲爾

益田 玲爾・鳥越 賢・芝 正己・山下 洋・田中 克 : 森と里と海のつながり 14. 木製魚礁の集魚効果の持続性と近隣の魚類相への影響, 2009 年度日本水産学会春季大会 講演要旨集, 158, 2009.

Masuda, R. : Survival strategies in jack mackerel, chub mackerel and Japanese anchovy larvae and juveniles in the context of population replacement., 5th World Fisheries Congress (Yokohama, Japan), 120, 2008.

山下 洋・益田 玲爾・桑原 久実・明田 定満 : 温帯性沿岸魚類への温暖化影響, 2008 年度水産海洋学会シンポジウム「地球温暖化とその沿岸・沖合海洋生態系への影響—検知と予測—」要旨集, 10, 2008.

宮島 悠子・益田 玲爾・鎌田 遼・山下 洋 : カワハギの飼料としてのミズクラゲの有効性, 2009 年度日本水産学会春季大会 講演要旨集, 20, 2009.

大畑 亮輔・益田 玲爾・上野 正博・福西 悠一・山下 洋：アユ及びマダイ仔魚の対捕食者戦略における濁度の重要性
～クラゲに濁りは通用しない～，2009 年度日本水産学会春季大会 講演要旨集， 54， 2009.

江口 さやか・薄元 志保・山本 沙織・芳村 碧・山本 義和・上野 正博・益田 玲爾・山下 洋：京都府舞鶴湾における
環境実態調査～生物試料を用いた鉛汚染の現状把握～，2009 年度日本水産学会春季大会 講演要旨集， 199， 2009.

Fukunishi, Y., Masuda, R., Shimizu, D., Aritaki, M., and Yamashita, Y. : Comparison of UV-B tolerance in early life
stages of slime flounder *Microstomus achne* and spotted halibut *Verasper variegatus*, 7th International Flatfish
Symposium, Abstracts, 29, 2008.

■長谷川 尚史

長谷川 尚史，吉村 哲彦：樹冠下において GPS アンテナ高が測位精度および Fix 確率に与える影響，第 120 回日本森林
学会学術講演集， 2009.

長谷川 尚史：森林所有者の意識と施業提案—低コスト化と収益予測，森林計画学会・森林利用学会合同シンポジウム
「森林管理・計画技術と生産・利用技術の連環性への展望」， 2009.

Hasegawa, H., Sugimoto, K., and Niinaga, S. : Development of forest harvesting models using system dynamics with
consideration of tree size, IUFRO All-D3-Conference, 2008.

福井 遼・杉本 和也・大塚 和美・長谷川 尚史・前田 多恵子：集材作業における繊維ロープの利用可能性，第 15 回森
林利用学会学術研究発表会， 2008.

大塚 和美，長谷川 尚史，前田 多恵子：針葉樹コンテナ苗を用いた再生林のコスト試算，第 120 回日本森林学会学術
講演集， 2009.

福澤 加里部，徳地 直子，新井 宏受，長谷川 尚史，吉岡 崇仁：仁淀川流域における河川水質の集水域間の変動と流
下過程での変化 炭素・窒素を中心に，第 120 回日本森林学会大会， 2009.

Yoshimura, T., Hasegawa, H., and Sakai, T. : Accuracy variation of GPS measurements by using an extendable GPS
antenna pole under forest canopy, The 31st Annual Meeting of the Council on Forest Engineering: Addressing
Forest Engineering Challenges For the Future, 2008.

Yoshimura, T., Hasegawa, H. and Sakai, T. : Accuracy variation of dual-frequency GPS surveying under forest canopy
by using an extendable GPS antenna pole, The 29th Asian Conference on Remote Sensing, 2008.

■中西 麻美

中西 麻美・稲垣 善之・深田 英久・柴田 昌三・大澤 直哉：ヒノキの雄花生産量に土壌条件と強度間伐が及ぼす影響，
第 59 回日本森林学会関西支部大会， 2008.

中西 麻美・稲垣 善之・柴田 昌三・大澤 直哉：異なる斜面位置のヒノキ林における繁殖器官への窒素投資，第 119
回日本森林学会大会， 2008.

中西 麻美，稲垣 善之，柴田 昌三，深田 英久，大澤 直哉：ヒノキの窒素利用に土壌 CN 比と伐採が及ぼす影響，第
120 回日本森林学会大会， 2009.

中西 麻美：間伐でヒノキの雄花生産は減らせるか？，第 120 回日本森林学会大会， 2009.

稲垣 善之・酒井 敦・中西 麻美・柴田 昌三・深田 英久：2004 年に接近した台風がヒノキ林の落葉の時期と量に及ぼ
す影響，第 60 回日本森林学会関東支部大会， 2008.

稲垣 善之・中西 麻美・深田 英久：2004 年の台風がヒノキ林における落葉窒素供給に及ぼす影響とその後の回復，日
本地球惑星科学連合 2008 年大会， 2008.

稲垣 善之，中西 麻美，深田 英久：ヒノキ人工林における間伐施業と生態系サービス，第 120 回日本森林学会大会，
2009.

稲垣 善之・倉本 恵生・酒井 敦・中西 麻美・深田 英久：ヒノキ林の窒素循環：気象条件の影響，第 119 回日本森林
学会大会， 2008.

■上野 正博

坂本 三和・上野 正博・山下 洋：京都府伊佐津川における両側回遊性ミゾレスマエビの成長と成熟，日本水産学会大
会， 2007.

秋山 諭・上野 正博・山下 洋：若狭湾西部由良川河口域におけるナカザトハマアミの分布密度とサイズの季節変化，

日本水産学会大会, 2008.

江口 さやか・山本 義和・上野 正博・益田 玲爾・山下 洋 : 京都府舞鶴湾における環境実態調査, 日本水産学会大会, 2008.

福井 くにこ・中原 紘之・上野 正博 : 若狭湾に流入する河川の環境と底棲藻類相, 日本水産学会大会, 2009.

鈴木 健太郎・杉本 亮・笠井 亮秀・上野 正博・山下 洋 : 由良川水系における懸濁態有機物と土地利用の関係, 日本水産学会大会, 2009.

栗川 喜朗・笠井 亮秀・上野 正博・山下 洋 : 由良川河口域の物理・化学・基礎生産過程, 日本水産学会大会, 2009.

Islam, M. S.・山下 洋・上野 正博・笠井 亮秀 : 由良川河口域におけるスズキ仔魚の成長と生残, 日本水産学会大会, 2009.

富士 泰期・笠井 亮秀・鈴木 啓太・上野 正博・山下 洋 : 由良川河口域におけるスズキ仔稚魚の食性および回遊, 日本水産学会大会, 2009.

秋山 諭・Antonio, E. S.・上野 正博・山下 洋 : 由良川河口域におけるニホンハマアミの食性, 日本水産学会大会, 2009.

江口 さやか・山本 義和・上野 正博・益田 玲爾・山下 洋 : 京都府舞鶴湾における環境実態調査, 日本水産学会大会, 2009.

大須賀 宣孝・笠井 亮秀・益田 玲爾・上野 正博 : 炭素・窒素安定同位体比分析及び飼育実験によるアイゴの摂餌選択性の解明, 2008 年度 水産学会 (春季), 2009.

Antonio, E. S., Ueno, M., Kasai, A., Kurikawa, Y., Ishihi, Y., Yokoyama, H. and Yamashita, Y. : Isotope evidence of seasonal variation in feeding nich of river and brackish gastropods, EMECS8 (Shanghai, China), 2008.

Sakamoto, M., Ueno, M. and Yamashita, Y. : Life history and habitat conservation of an amphidromous shrimp in Japan, International Symposium on Integrated Coastal Zone Management, 2007.

Antonio, E. S., Ueno, M., Kasai, A., Kurikawa, Y., Ishihi, Y., Yokoyama, H., and Yamashita, Y. : Consumption of organic matter by benthic communities, 日本水産学会大会, 2009.

Kasai, A., Antonio, E. S., Kurikawa, Y., Ueno, M. and Yamashita, Y. : Hydrodynamics and ecosystem in the Yura Estuary, 5th World Fisheries Congress (Yokohama, Japan), 2008.

Kurikawa, Y., Kasai, A., Ueno, M. and Yamashita, Y. : Seasonal variation in seawater intrusion and primary production in the Yura Estuary, Japan, EMECS8 (Shanghai, China), 2008.

Suzuki, K., Sugimoto, R., Kasai, A., Ueno, M. and Yamashita, Y. : Origin of particulate organic matter in the Yura River, Japan, EMECS8 (Shanghai, China), 2008.

■中山 耕至

中山 耕至・郭 又哲・鄭 忠勲・鈴木 啓太・田中 克 : ミトコンドリア DNA 分析による有明海産と韓国産エツの遺伝的比較, 2008 年度日本魚類学会年会, 2008.

唐崎 佑・鈴木啓太・中山 耕至・田中 克 : 河川流量の増加がエツ仔稚魚の生残に与える影響, 2008 年度日本魚類学会年会, 2008.

飯野 浩太郎・兼松 陽太・鈴木 啓太・唐崎 佑・中山 耕至・田中 克 : 有明海筑後川河口域におけるアリアケヒメシラウオおよびアリアケシラウオ仔稚魚の分布機構, 2008 年度日本魚類学会年会, 2008.

三輪 一翔・原田 慈雄・中山 耕至 : 和歌山県古座川河口域周辺におけるカマキリ及びウツセミカジカ (カジカ小卵型) 仔稚魚の分布, 2008 年度日本魚類学会年会, 2008.

鈴木 啓太・笠井 亮秀・杉本 亮・中山 耕至・田中 克 : 夏期の有明海筑後川の高濁度汽水域における粒状有機物の動態-流量変動の影響, 2009 年度日本水産学会春季大会, 2009.

鈴木 啓太・中山 耕至・田中 克 : 有明海特産ツノナガハマアミ *Hyperacanthomysis lonbistrostris* の水平分布と個体群動態, 2009 年度日本水産学会春季大会, 2009.

三輪 一翔・原田 慈雄・中山 耕至・田中 克 : 和歌山県古座川におけるカジカ小卵型仔稚魚の回遊生態, 2009 年度日本水産学会春季大会, 2009.

■甲斐 嘉晃

甲斐 嘉晃・中坊 徹次 : 日本海から得られたクサウオ科コンニャクウオ属 *Careproctus* の 1 未記載種, 日本動物分類学

会第 44 回大会 (横浜国立大学), 2008.

甲斐 嘉晃・中坊 徹次 : *Sebastes steindachneri* Hilgendorf, 1880 は *S. wakiyai* (Matsubara, 1934) と *S. paradoxus* Matsubara, 1943 の古参同物異名., 日本魚類学会 2008 年度年会 (愛媛大学), 2008.

武藤 望生・甲斐 嘉晃・中坊 徹次 : キチジ (カサゴ目:フサカサゴ科) にみられる形態的 2 型, 日本魚類学会 2008 年度年会 (愛媛大学), 2008.

坂井 恵一・甲斐 嘉晃・K. Clements・中坊 徹次 : イスズミ属 7 種の分子系統, 日本魚類学会 2008 年度年会 (愛媛大学), 2008.

亀甲 武志・片岡 佳孝・吉岡 剛・佐野 聡哉・菅原 和宏・久米 弘人・氏家 宗二・岡村 貴司・宮本 敦史・原田 泰志・甲斐 嘉晃 : 秋季に放流されたイワナ稚魚の放流効果, 日本魚類学会 2008 年度年会 (愛媛大学), 2008.

Orr JW, Kai, Y., and Baldwin, Z. : New snailfishes (Liparidae) of the genera *Careproctus* and *Paraliparis* from the North Pacific Ocean and Bering Sea, Joint Meeting of Ichthyologists and Herpetologists, 2008.

Orr, J. W., Kai, Y., and Nakabo, T. : Snailfishes (Liparidae) of the *Careproctus rastrinus* complex from the North Pacific Ocean, Bering Sea, and Sea of Japan, Annual Meeting of the Gilbert Ichthyological Society, 2008.

■Robert, Dominique

Robert, D. : Copepod nauplius production drives recruitment of Atlantic mackerel (*Scomber scombrus*) in the southern Gulf of St. Lawrence, Canada, 5th World Fisheries Congress (Yokohama, Japan), 120, 2008.

基礎海洋生物学部門

■白山 義久

Shirayama, Y. : Monitoring Large Scale Marine Ecosystem Changes – Strategy and its Application, 1st World Conference on Marine biodiversity (Valencia, Spain), 2008.

西本 篤史・三戸 彩絵子・白山 義久:陸棚上の沈木に付随する生物相における食物網, 2008 年春季日本海洋学会講演要旨集, 2008

伊勢戸 徹・白山 義久: NAGISA プロジェクトの成果と分類学からみた課題, 北海道大学シンポジウム「海と陸の間: 日本の命があふれるところ – 海岸線の生物多様性研究 –, 2008

鈴木 豪・林原 毅・白山 義久・深見 裕伸: ミドリイシ属サンゴ幼生の選択的着生について, 日本生態学会第 56 回全国大会, 2009

伊勢戸 徹・白山 義久: NaGISA: 世界の沿岸域の生物多様性を比較する国際プロジェクト, 相模湾ゴールドエンタライアングルワークショップ (東京大学海洋アライアンス, 海洋研究開発機構, 防災科学技術研究所主催), 2008

Suzuki, G., Hayashibara, T., Shirayama, Y., and Fukami, H. : Species specific habitat selectivity of *Acropora* larvae in subtropical reefs, 11th International Coral Reef Conference, 2008

Suzuki, G., Hayashibara, T., Shirayama, Y., and Fukami, H. : Strong genetic structure of the widespread coral *Acropora hyacinthus* in the peripheral region of Indo-Pacific reefs, 11th International Coral Reef Conference, 2008

Nojiri, Y., Shirayama, Y., Kimoto, H., Egashira, T., and Kinoshita, K. : An ocean acidification simulation experiment with benthic animals using a precise pCO₂ control system, 2nd International Symposium on The Ocean in the High-CO₂ World, Oct. 6-9, 2008, Monaco., 2008.

■久保田 信

久保田 信: 二枚貝共生性カイヤドリヒドラ類 (ヒドロ虫綱, 軟クラゲ目) に関する最近の生物学的研究, シンポジウム『我が国における刺胞動物研究』(東大海洋研究所), 2008.

小林 亜玲・五箇 公一・久保田 信: コノハクラゲの生物地理学, 第 63 回日本生物地理学会年次大会, 2008.

上野 俊士郎・永松 公明・花本 大輔・永井 英治・奥泉 和也・河村 真理子・久保田 信: エチゼンクラゲの平衡胞重量及び平衡石数の齢形質としての検討, 2008 年日本プランクトン学会・日本ベントス学会合同大会, 2008.

小林 亜玲・五箇 公一・久保田 信: コノハクラゲの遺伝的分化と分布拡大プロセス, 日本生態学会第 56 回大会 (ESJ56), 2009.

小林 亜玲・五箇 公一・久保田 信: コノハクラゲ (ヒドロ虫綱, 軟クラゲ目) の国内分布拡大プロセス, シンポジウム『我

が国における刺胞動物研究』(東大海洋研究所), 2008.

河村 真理子・久保田 信:出芽性ヒドロクラゲの生態, シンポジウム『我が国における刺胞動物研究』(東大海洋研究所), 2008.

Kishida, T., Kubota, S. and Hikida, T. : A comparison of odorant receptor gene repertoires between terrestrial and aquatic tetrapods , Fifth Conference on Secondary Adaptation of Tetrapods to Life in Water, National Museum of Nature and Science, Tokyo, Japan, 2008.

■宮崎 勝己

宮崎 勝己・土屋 仁・鳥羽 光晴・小林 豊 : アサリに内部寄生するカイヤドリウミグモの生活史に関するいくつかの知見, 日本動物学会第 79 回大会, 2008.

■深見 裕伸

深見 裕伸・鈴木 豪 : 分子から見た日本温帯域の造礁性イシサンゴ類の特異性, 日本サンゴ礁学会第 11 回大会, 2008.

深見 裕伸・林原 毅・石岡 昇・北野 倫夫・鈴木 豪・妹尾 浩太郎・Kerr, MA : 沖ノ島島とその周辺地域のミドリイシ類の遺伝的比較, 日本サンゴ礁学会第 11 回大会, 2008.

Fukami, H., Nomura, K., Iwao, K., Hayashiabara, T., Suzuki, G., Iwase, F., and Knowlton, N. : Regional specific relationships of species in the genus *Favia*, 11th International Coral Reef Conference, 2008.

鈴木 豪・林原 毅・深見 裕伸 : ミドリイシ属サンゴ幼生の選択的着生について, 日本生態学会第 55 回大会講演要旨集, 55, 187, 2008.

平田 智法・小栗 聡介・市場 康之・平田 しおり・深見 裕伸・山岡 耕作 : 高知県横浪半島池ノ浦における底質組成と魚類相の変化, 2008 度日本魚類学会年会, 2008.

鈴木 豪・林原 毅・白山 義久・深見 裕伸 : ミドリイシ属サンゴ幼生の選択的着生について, 日本生態学会第 56 回全国大会, 2009.

座安 佑奈・野村 恵一・深見 裕伸:温帯域のオオトゲキクメイシ属の種の実態調査, 日本サンゴ礁学会第 11 回大会, 2008.

Suzuki, G., Hayashibara, T., Shirayama, Y., and Fukami, H. : Species specific habitat selectivity of *Acropora* larvae in subtropical reefs, 11th International Coral Reef Conference, 2008.

Suzuki, G., Hayashibara, T., Shirayama, Y., and Fukami, H. : Strong genetic structure of the widespread coral *Acropora hyacinthus* in the peripheral region of Indo-Pacific reefs, 11th International Coral Reef Conference, 2008.

Huang, D., Meier, R., Todd, P. A., Fukami, H., and Chou, L. M : Phylogeny of Faviidae Corals Based on Molecular and Morphological Data, 11th International Coral Reef Conference, 2008.

Knowlton, N., Fukami, H., Chen, A., and Budd, A. : Mitochondrial and Nuclear Genes Suggest that Stony Corals Are Monophyletic but Most Families of Stony Corals Are Not, 11th International Coral Reef Conference, 2008.

Lien, Y. T., Fukami, H., Chen, A., and Yamashita, Y. : Diversity of symbiotic algae (Zooxanthellae) in zooxanthellate corals from temperate Japan, 11th International Coral Reef Conference, 2008.

■伊勢戸 徹

伊勢戸 徹・杉山 渚・広瀬 慎美子・広瀬 裕一 : 海綿共生性内肛動物の 17 未記載種、および未記載種の分子情報の有用性について Seventeen undescribed loxosomatids associating sponges from Japan with remarks of the utility of molecular data for starting point of their taxonomy, 日本動物学会第 79 回大会要旨集, 118, 2008.

伊勢戸 徹・杉山 渚・広瀬 裕一 : 沖縄および白浜から見つかった多種の海綿共生性のロクソソメラ (内肛動物門・ロクソソマ科) (予報), 日本動物分類学会第 44 回大会要旨集, 23, 2008.

伊勢戸 徹・白山 義久 : NaGISA : 世界の沿岸域の生物多様性を比較する国際プロジェクト, 相模湾ゴールドトラリアングルワークショップ (東京大学海洋アライアンス, 海洋研究開発機構, 防災科学技術研究所主催), 2008.

伊勢戸 徹・白山 義久 : NAGISA プロジェクトの成果と分類学からみた課題, 北海道大学シンポジウム「海と陸の間 : 日本の命があふれるところ ―海岸線の生物多様性研究―」, 2008.

広瀬 慎美子・杉山 渚・伊勢戸 徹・広瀬 裕一 : COI 遺伝子が示す海綿共生性単体性内肛動物(*Loxosomella* spp.)の種多様性と系統 Partial sequences of COI reveal remarkable species-diversity of the solitary entoprocts

associating sponges., 日本動物学会第 79 回大会要旨集, 118, 2008.

杉山 渚・伊勢戸 徹・広瀬 裕一 : 海面上に生息する単体性内肛動物の生殖様式の季節変動と個体群動態 Seasonal change of reproduction and population dynamics of solitary entoprocts inhabiting a sponge., 日本動物学会第 79 回大会要旨集, 133, 2008.

■鈴木 豪

鈴木 豪・林原 毅・白山 義久・深見 裕伸 : ミドリイシ属サンゴ幼生の選択的着生について, 日本生態学会第 56 回全国大会, 2008.

鈴木 豪・深見 裕伸 : 温帯で優占するエンタクミドリイシにおける隠蔽種の存在, 2008 年度 日本サンゴ礁学会, 2008.

深見 裕伸・林原 毅・石岡 昇・北野 倫・鈴木 豪・妹尾 浩太郎・AM Kerr : 沖ノ島とその周辺地域のミドリイシ類の遺伝的比較, 2008 年度 日本サンゴ礁学会, 2008.

林原 毅・渋谷 拓郎・鈴木 豪・家久 侑大・鈴木 清 : 枝状サンゴ群集の再生のための技術開発, 2008 年度 日本サンゴ礁学会, 2008.

Suzuki, G., Hayashibara, T., Shirayama, Y. and Fukami, H. : Species specific habitat selectivity of *Acropora* larvae in subtropical reefs, 11th International Coral Reef Symposium, 2008.

Suzuki, G., Hayashibara, T., Shirayama, Y. and Fukami, H. : Strong genetic structure of the widespread coral *Acropora hyacinthus* in the peripheral region of Indo-Pacific Reefs, 11th International Coral Reef Symposium, 2008.

Fukami, H., Nomura, K., Iwao, K., Hayashibara, T., Suzuki, G., Iwase, F., and Nowlton, N. : Regional specific relationship of species in the genus *Favia*, 11th International Coral Reef Symposium, 2008.

海域陸域統合管理学研究部門

■向井 宏

向井 宏 : ジュゴンの摂餌に関する知見, 海洋理工学会 2008 年度秋期大会 (京都).

向井 宏 : 海洋保護区をつくろう-海の生物多様性保全に向けて-, 第 5 回 OWS 海のセミナー.

Mukai, H. : Change of production system in an estuary by land use and raining pattern, 5th World Fisheries Congress (Yokohama, Japan).

Hirayama, T., Ogura, G., Mukai, H. and Otaishi, N. : Seasonal change of ingredient on the seagrass in Okinawa, Japan, The 11th Pacific Science Inter-Congress (Tahiti).

Nakaoka, M., Whanpetch, N., Tanaka, Y., Mukai, H., Suzuki, T., Nojima, S., Kawai, T. and Aryuthaka, C. : Impacts of a tsunami disturbance on biodiversity of seagrass communities in the Andaman Sea, Thailand, 5th World Fisheries Congress (Yokohama, Japan).

■佐藤 真行

佐藤 真行・上野 健太・植田 和弘 : 災害リスクと環境リスクの複合的経済評価, 環境経済・政策学会, 2009.

佐藤 真行 : 持続可能な発展の測定と環境の評価, 第 8 回 KSI 学内ワークショップ「グローバル・サステナビリティの構想と展望～社会経済戦略の改編と技術戦略～」, 2009.

Sato, M. : Economic Valuation of Environment and Environmental Damages, Environmental Training Course for Electric Power Industry, 2009.

■杉本 亮

杉本 亮・笠井 亮秀・宮島 利宏・藤田 弘一 : 伊勢湾における無機態窒素の挙動と低次生産機構の解明 -d15N 結合生態系モデルによる低次生産機構の解明-, 2008 年度 海洋学会 (春季), 2008.

杉本 亮・笠井 亮秀・宮島 利宏・藤田 弘一 : 陸棚域から伊勢湾への外海起源窒素の流入過程, 2008 年度 水産海洋学会, 2008.

Sugimoto, R., Kasai, A., Miyajima, T. and Fujita, K. : Modeling phytoplankton production in Ise Bay, Japan - application of nitrogen isotopes to identification of DIN sources, EMECS8 (Shanghai, China), 2008.

笠井 亮秀・杉本 亮・宮島 利宏・藤田 弘一 : 安定同位体比を用いた陸棚域における硝酸態窒素の起源推定, 2008 年度 水産海洋学会, 2008.

Suzuki, K., Sugimoto, R., Kasai, A., Ueno, M. and Yamasahita, Y. : Origin of particulate organic matter in the Yura

River, Japan, EMECS8 (Shanghai, China), 2008.

企画研究推進部門

■福澤 加里部

福澤 加里部・新井 宏受・徳地 直子・鎌内 宏光・福島 慶太郎・吉岡 崇仁・柴田 昌三・山下 洋：仁淀川における流下過程での溶存・浮遊物質濃度と炭素・窒素安定同位体比の変化，日本地球惑星連合大会，J172-P004，2008.

福澤 加里部：根箱を用いたミズナラとクマザサの細根動態パターンの解析，第29回根研究集会，158，2008.

福澤 加里部・徳地 直子・新井 宏受・長谷川 尚史・吉岡 崇仁：仁淀川流域における河川水質の集水域間の変動と流下過程での変化—炭素・窒素を中心に—，第120回日本森林学会大会，L23，2009.

福澤 加里部・壇浦 正子・兼光 修平：ミズナラとササの細根生産速度と根呼吸速度の季節変化，第56回日本生態学会大会，451，2009.

柴田 英昭，福澤 加里部：北海道北部における森林生態系の物質循環と生態系サービスの関係：森林施業と環境要因の相互影響，第120回日本森林学会大会，2009.

鎌内 宏光，新井 宏受，福島 慶太郎，福澤 加里部，土居 秀幸，富永 浩史，近藤 千眞，徳地 直子：河川の流下に伴う食物網の炭素窒素安定同位体比の変化—仁淀川の例，第120回日本森林学会大会，2009.

管理技術部

■秋田 豊

寄元 道徳，秋田 豊，平井 岳志，大呑 和夫，中島 皇：瀬戸内海西部の照葉樹林における林木の空間分布パターン，第120回日本森林学会大会，2009.

■荒井 亮

荒井 亮：上賀茂試験地における種子交換業務，平成20年度京都大学総合技術研究会，2009.

■大呑 和夫

寄元 道徳，秋田 豊，平井 岳志，大呑 和夫，中島 皇：瀬戸内海西部の照葉樹林における林木の空間分布パターン，第120回日本森林学会大会，2009.

■加藤 哲哉

加藤 哲哉：京都大学白浜水族館における一般参加型体験学習イベントの実践，平成20年度京都大学総合技術研究会，2009.

■小嶋 宏和

小嶋 宏和：芦生研究林の天然林における種子・実生動態調査，平成20年度京都大学総合技術研究会，2009.

■佐藤 修一

佐藤 修一：北海道研究林施設紹介，平成20年度京都大学総合技術研究会，2009.

■中川 智之

中川 智之：和歌山研究林の施業・業務紹介，平成20年度京都大学総合技術研究会，2009.

■長谷川 敦史

長谷川敦史・柳本順：芦生研究林の天然林におけるカシノナガキイムシによるナラ枯れ被害木の状況，平成20年度京都大学総合技術研究会，2009.

■平井 岳志

寄元 道徳，秋田 豊，平井 岳志，大呑 和夫，中島 皇：瀬戸内海西部の照葉樹林における林木の空間分布パターン，第120回日本森林学会大会，2009.

■柳本 順

柳本 順：北海道研究林白糠区におけるエゾシカの生息動向，平成20年度京都大学総合技術研究会，2009.

長谷川 敦史・柳本 順：芦生研究林の天然林におけるカシノナガキイムシによるナラ枯れ被害木の状況，平成20年度京都大学総合技術研究会，2009.

(4) 教育活動

◆全学共通科目

フィールド研は、学内共同教育研究施設として京都大学の全学共通科目へ多くの講義を行っている。集中講義として開講する実習が4科目、リレー講義を4科目、新入生向け少人数セミナー（ポケゼミ）を今年度は15科目開講した。さらに、農学部提供している講義を2科目、全学共通科目としても履修できるようにしている。また、他部局が提供する全学共通科目3科目に教員を非常勤講師として派遣している。（B群：自然科学系科目・A群：人文・社会科学系科目）

（講義・実習：B群）

講義名	担当教員（敬称略）	科目	対象	開講期	単位
森里海連環学実習 A	山下，芝，益田，上野，中西，甲斐ほか	実習	全回生	前期集中	2
森里海連環学実習 B	梅本，徳地，久保田，宮崎，大和，深見	実習	全回生	前期集中	2
森里海連環学実習 C	吉岡，安藤，甲斐，坂野上，中山	実習	全回生	前期集中	2
水圏生物学入門	白山，山下，久保田，益田，田川，宮崎，上野，大和，深見ほか	講義	全回生	前期	2
森里海連環学－森里海のつながりと分断－	山下，白山，柴田，吉岡，芝，徳地，中島，畠山，C.W. ニコルほか	講義	全回生	後期	2
海域・陸域統合管理論	白山，向井，柴田ほか	講義	全回生	後期	2
森林学	柴田，吉岡，徳地，芝，長谷川，安藤，中島，寄元，坂野上ほか	講義	全回生	後期	2
暖地性積雪地域における冬の自然環境	中島	実習	全回生	後期集中	1
北海道東部の人と自然	安藤，坂野上ほか（農学部講義と合同）	実習	全回生	前期集中	2
北海道東部の厳冬期の自然環境	安藤ほか（農学部講義と合同）	実習	全回生	後期集中	2

（少人数セミナー：B群）

講義名	担当教員（敬称略）	科目	対象	開講期	単位
お魚好きのための魚類研究入門	田川，中山	ゼミ	1回生	前期	2
C.W. ニコル “アフアの森” に学ぶ	柴田，長谷川	ゼミ	1回生	前期集中	2
フィールド実習 “森は海の恋人”	白山	ゼミ	1回生	前期集中	2
河口域生態学入門	山下	ゼミ	1回生	前期集中	2
海岸生物の生活史	久保田	ゼミ	1回生	前期集中	2
海洋生物の多様性	白山	ゼミ	1回生	前期集中	2
魚類心理学入門	益田	ゼミ	1回生	前期	2
原生的な森林の働き	中島	ゼミ	1回生	前期集中	2
森のつくりだすもの	徳地	ゼミ	1回生	前期集中	2
森里海のつながりを清流古座川に見る	梅本	ゼミ	1回生	前期集中	2
森林の再生と動態	安藤	ゼミ	1回生	前期集中	2
節足動物学入門	宮崎	ゼミ	1回生	前期集中	2
豊かな森をめざして！	芝	ゼミ	1回生	前期集中	2
木造校舎を造る：木の文化再生へ	柴田，芝，田中（名誉教授）ほか	ゼミ	1回生	前期	2

(少人数セミナー：A・B群)

講義名	担当教員（敬称略）	科目	対象	開講期	単位
環境の評価	吉岡	ゼミ	1回生	前期	2

(他部局提供科目への協力：B群)

講義名	担当教員（敬称略）	科目	対象	開講期	単位
探求型化学実験－湖と海の化学調査－	久保田ほか（総合人間学部提供科目）	実験	全回生	前期集中	2
生物圏の科学－生命・食糧・環境－	山下，吉岡，安藤，徳地ほか （農学部提供科目）	講義	全回生	後期	2
基礎生物学A	白山ほか（理学部提供科目）	講義	主として1・2回生	前期	2

なお，フィールド研の非常勤講師として，全学共通科目の講義の教員を担当していただいている方は，次の通りである。

全学共通科目における非常勤講師

森里海連環学－森里海のつながりと分断－	畠山 重篤（社会連携教授）
	C.W. ニコル（社会連携教授）
	藤原 建紀（京都大学大学院農学研究科・教授）
	浅野 耕太（京都大学人間・環境学研究科・教授）
	竹門 康弘（京都大学防災研究所・准教授）
	中野 孝教（京都大学防災研究所・非常勤講師）
森林学	川村 誠（京都大学大学院農学研究科・准教授）
海域・陸域統合管理論	磯崎 博司（明治学院大学・教授）
	有路 昌彦（アミタ株式会社持続可能経済研究所・主席研究員）
	松田 治（広島大学・名誉教授）
	萱場 祐一（（独）土木研究所自然共生研究センター長）
水圏生物学入門	陀安 一郎（京大大学生態学研究センター・准教授）
	鰐坂 哲朗（京都大学大学院農学研究科・教授）
	加藤 真（京都大学地球環境学堂・教授）
木造校舎を造る：木の文化再生へ	小林 正美（京都大学地球環境学堂・教授）

◆大学院教育・学部教育

フィールド研は、協力講座として、京都大学大学院農学研究科へ3分野、理学研究科へ1分野が参画して、大学院教育および学部教育を行っている。また、大学院地球環境学堂へも科目を提供している。なお、フィールド研河口域生態学分野は、フィールド研に農学研究科から現在参画している流動分野であり、農学研究科では応用生物科学専攻海洋生物増殖学分野として位置づけられている。

協力講座としての教員配置と学生数（2008年4月現在）

	専攻	分野	教員	ポスドク など	博士後期 課程	修士課程	学部生 (4回生)
農学研究科	森林科学専攻 森林資源学講座	森林育成学分野	柴田 昌三（教授） 安藤 信（准教授） 徳地 直子（准教授） 長谷川 尚史（准教授） 寄元 道德（助教）	2	3(5)	5(1)	2
		森林情報学分野	吉岡 崇仁（教授） 芝 正己（准教授） 中島 皇（講師） 坂野上 なお（助教）	0	2	1	2
	応用生物科学専攻	海洋生物増殖学分野 （流動分野）	田川 正朋（准教授） 中山 耕至（助教） 中坊 徹次 （総合博物館教授）	0	1	5(1)	4
		里海生態保全学分野 ＜舞鶴水産実験所＞	山下 洋（教授） 益田 玲爾（准教授） 上野 正博（助教） 中西 麻美（助教） 甲斐 嘉晃（助教）	2	6	8(1)	0 (+3)
	（講義担当教員として協力）		梅本 信也（准教授）	-	-	-	-
理学研究科	生物科学専攻	海洋生物学分科 ＜瀬戸臨海実験所＞	白山 義久（教授） 久保田 信（准教授） 宮崎 勝己（講師） 大和 茂之（助教） 深見 裕伸（助教）	1	0(1)	5	0

（）内は、休学中の学生数・+は、他分野所属だが当該分野で指導している学生数

大学院での提供科目

大学院農学研究科 農学専攻

講義名	担当教員（敬称略）	科目	対象	開講期	単位
雑草学専攻実験	梅本ほか	I 45	修士1・2回生	通年	10

大学院農学研究科 森林科学専攻

講義名	担当教員（敬称略）	科目	対象	開講期	単位
森林情報学特論Ⅰ	吉岡，中島	Ⅱ113	修士1・2回生	後期	2
森林育成学特論Ⅰ	柴田，長谷川	Ⅱ115	修士1・2回生	後期	2
森林情報学専攻演習	吉岡，芝，中島，坂野上	Ⅱ207	修士1・2回生	通年	8
森林育成学専攻演習	柴田，安藤，徳地，長谷川，寄元	Ⅱ208	修士1・2回生	通年	8
森林情報学専攻実験	吉岡，芝，中島，坂野上	Ⅱ307	修士1・2回生	通年	10
森林育成学専攻実験	柴田，安藤，徳地，長谷川，寄元	Ⅱ308	修士1・2回生	通年	10

大学院農学研究科 応用生物科学専攻

講義名	担当教員（敬称略）	科目	対象	開講期	単位
海洋生態学特論	山下	IV225	修士１・２回生	前期集中	2
海洋資源生物学演習	田川，中山ほか	IV307	修士１・２回生	通年	6
里海生態保全学演習	山下，益田，上野，中西，甲斐	IV317	修士１・２回生	通年	6
海洋資源生物学専攻実験	田川，中山ほか	IV407	修士１・２回生	通年	12
里海生態保全学専攻実験	山下，益田，上野，中西，甲斐	IV418	修士１・２回生	通年	12

大学院理学研究科 生物科学専攻動物学系

講義名	担当教員（敬称略）	科目	対象	開講期	単位
形態機能系統特論Ａ	白山，久保田，宮崎，大和，深見	8006	修士１・２回生	前期	2
形態機能系統特論Ｂ	白山，久保田，宮崎，大和，深見	8007	修士１・２回生	後期	2
海洋生物学特論	白山，久保田，宮崎，大和，深見	8040	修士１・２回生	前期	2
海洋生物学ゼミナールＡ	白山，久保田，宮崎，大和，深見	8091	修士１回生	前期	2
海洋生物学ゼミナールＢ	白山，久保田，宮崎，大和，深見	8092	修士１回生	後期	2
海洋生物学ゼミナールＣ	白山，久保田，宮崎，大和，深見	8093	修士２回生	前期	2
海洋生物学ゼミナールＤ	白山，久保田，宮崎，大和，深見	8094	修士２回生	後期	2

大学院地球環境学舎 環境マネジメント専攻

講義名	担当教員（敬称略）	科目	対象	開講期	単位
里山再生論	柴田ほか	3507	修士１・２回生	後期集中	1
里域植生保全論	梅本	3563	修士１・２回生	前期集中	2

学部での提供科目

農学部 森林科学科

講義名	担当教員（敬称略）	科目	対象	開講期	単位
森林基礎科学Ⅳ	柴田，吉岡ほか	E106	1回生	後期	2
森林育成学	柴田，徳地，長谷川，寄元	E128	3回生	後期	2
森林植物学	安藤	E129	3回生	後期集中	2
森林資源管理学	芝，坂野上	E130	3回生	後期	2
森林環境学	吉岡，中島	E131	3回生	後期	2
森林科学実習Ⅳ	芝，徳地，長谷川，中島ほか	E214	2回生	後期	1
森林総合実習及び実習法	安藤，芝，中島，寄元，坂野上ほか	E221	3回生	前期	2
研究林実習Ⅰ	フィールド研教員ほか	E236	2回生	後期集中	1
研究林実習Ⅱ	徳地ほか	E237	3回生	後期集中	1
研究林実習Ⅲ	安藤，坂野上ほか	E238	3回生	前期集中	2
研究林実習Ⅳ	安藤ほか	E239	3回生	後期集中	2

農学部 資源生物科学科

講義名	担当教員（敬称略）	科目	対象	開講期	単位
資源生物科学概論Ⅲ	山下，田川ほか	A107	2回生	後期	2
動物生理学	田川ほか	A113	2回生	前期	2
海洋生物科学技術論と実習Ⅰ	田川，益田，上野，中山，甲斐ほか	A205	2回生	前期集中	2
海洋生物科学技術論と実習Ⅱ	山下，上野，甲斐ほか	A206	2回生	前期集中	2
植物調査法と実習	梅本ほか	A208	2回生	前期集中	2
海洋生物生態学	山下，田川，益田，上野，中山，甲斐	A224	3回生	前期	2
海洋生物生理学	田川	A248	3回生	後期	2
海洋生物資源学演習	田川，中山ほか	A512	4回生	通年	2
資源生物科学実験及び実験法Ⅰ	田川，中山ほか	A239	3回生	前期	6
資源生物科学実験及び実験法Ⅱ	田川，中山ほか	A240	3回生	後期	6

理学部 生物科学科

講義名	担当教員（敬称略）	科目	対象	開講期	単位
海洋生物学	白山	2705	2 回生	前期	2
無脊椎動物学	白山, 久保田, 宮崎	2708	2 回生	後期	2
臨海実習第 1 部	白山ほか	2733	2 回生	夏期集中	2
臨海実習第 2 部	白山ほか	3767	3 回生	春期集中	2
臨海実習第 4 部	白山ほか	3769	3 回生	夏期集中	2
海洋生物学（課題研究）	白山, 久保田, 宮崎, 大和, 深見	5707	生物科学課題研究	通年	12

◆学位授与

（森林情報学分野）

学士 上田 菜由： 京都市雲ヶ畑地域における森林管理の現状と今後の展望

（森林育成学分野）

学士 白濱 圭通： 土地利用と地質が有田川水系の水質に与える影響

修士 齊藤 誠子： 一斉開花年の異なるチュウゴクザサ個体群の集団構造

池田 邦彦： 履歴の異なる焼畑休閑林でのタケ類メロカンナ・バクシフェラの一斉開花後更新初期過程

課程博士 福島 慶太郎： Process and Mechanism of Change in Nitrogen Cycling during a Forest Development after Clear-cut in Japanese Cedar Plantations スギ人工林の皆伐および植栽後の成立にともなう窒素循環の変化とそのメカニズム

（海洋生物増殖学分野）

学士 西本 麻梨絵： 東アジア産のハゼクチ *Acanthogobius hasta*（スズキ目ハゼ科）2 型についての研究

辻 寛人： 由良川天然遡上アユの孵化時期と成長

宮島 悠子： カワハギの餌料としてのミズクラゲの有効性

佐久間 啓： 若狭湾西部丹後海のベントス群集

修士 三輪 一翔： 和歌山県古座川河口域周辺におけるカマキリ *Cottus kazika* 及びカジカ小卵型 *Cottus pollux* SE 仔稚魚の分布・分散の比較

唐崎 佑： 有明海筑後川におけるエソの産卵および仔稚魚の生残に河川流量が及ぼす影響

（里海生態保全学分野）

修士 高橋 宏司： マアジ *Trachurus japonicus* の学習能力の個体発生

Yi-Ting Lien: Investigation of genetic variation of endosymbiotic algae in reef corals among climatic zones

鈴木 健太郎： 由良川水圏における水生昆虫群集と環境との関係

課程博士 陳 炳善： Study of Seed Production and Stock Enhancement Technologies of the Black Rockfish *Sebastes schlegelii* Based on Physiological and Ecological Characteristics

（海洋生物学分科）

修士 北野 裕子： オウギガニの形態の左右非対称性と行動との関連性についての研究

豊田 史子： 有櫛動物クラゲムシ類のミトコンドリアゲノム多様性についての研究

課程博士 河村 真理子： 田辺湾におけるヒドロクラゲ群集と沿岸海洋環境の相互関係

小林 亜玲： 日本産カイヤドリヒドラ類の生態学および生物地理学的研究

◆公開臨海実習

公開臨海実習は、文部科学省の財政的支援を受けて、国立大学法人臨海臨湖実験所長会議に所属する施設が開講する実習であり、フィールド研では瀬戸臨海実験所が1989年度から夏と春の2回、実習題目「海洋無脊椎動物の多様性と進化」を実施している。研究船ヤンチナや実験所の磯での試料採集と分別、光学顕微鏡を用いた詳細な形態観察、附属水族館での大型動物観察などを通じて、できるだけ多様な動物門を対象とした上で、特定の分類群について形態的特徴から系統関係や進化過程を推定する実習がおこなわれる。参加学生（原則として2回生以上）の所属機関の長に対して、受講を証明する書類（2単位相当・評価付き）が発行される。2008年度は、夏期（8月28日～9月5日）に5名（日本獣医生命科学大学2名・群馬大学・富山大学・東京大学大学院）、春期（2009年3月24～30日）に7名（東京海洋大学・北里大学・京都大学農学部・東北大学・新潟大学・酪農学院大学・高知大学）が参加した。

◆他大学・各種学校の講義・実習

（高校生以下を対象とする講義などは、(6)社会貢献活動 参照）

森林生物圏部門

吉岡 崇仁 人間環境大学「基礎生物学A・B」
奈良教育大学大学院「生態科学特論」
芝 正己 京都府立大学「生物生産環境学特論Ⅰ」非常勤講師（集中講義）
中島 皇 京都教育大学「栽培と飼育の実践Ⅱ－いのちを育み、慈しむ－」

里域生態系部門

山下 洋 三重大学生物資源学部「水圏環境生物学」非常勤講師（集中講義）
柴田 昌三 琉球大学「森林生産環境学特別講義Ⅱ」非常勤講師（集中講義）
大阪産業大学「環境と市民活動－広がる竹林と取り組む人々－「竹林は生態系の破壊者なのか？」」
益田 玲爾 岐阜大学教育学部臨海実習
高知大学総合研究センター・研修講座講師
国立舞鶴高等専門学校 講義
長谷川尚史 名古屋大学「精密林業論」（集中講義）
甲斐 嘉晃 近畿大学農学部実習

基礎海洋生物学部門

白山 義久 放送大学学園・非常勤講師（面接授業担当）
久保田 信 大阪市立大学理学部 臨海実習
大阪大学理学部 臨海実習
宮崎 勝己 奈良教育大学教育学部臨海実習
大阪教育大学教育学部臨海実習
大和 茂之 関西学院大学・臨海実習 8月18～22日

(5) 学会等における活動

◆学会役員・シンポジウム企画等

森林生物圏部門

- 吉岡 崇仁 第15回生態学琵琶湖賞選考委員（生態学会関係）
(財)自然環境研究センター・モニタリングサイト1000 陸水域調査検討会委員
第120回日本森林学会大会におけるイブニングセミナー「森林流域環境と人間社会のつながりの理解にむけて」コーディネーター(勝山 正則・館野 隆之輔・吉岡 崇仁)
- 徳地 直子 日本生態学会 会計監事
日本森林学会評議員
第120回日本森林学会大会におけるシンポジウム「物質循環を基礎にした森林生態系サービスの理解と新しい森林施業の模索」コーディネーター(藤巻玲路・徳地直子)
- 安藤 信 日本森林学会北海道支部 評議員
- 芝 正己 国際林業工学会誌(IJFE) 国際編集員
森林利用学会 理事
日本森林学会関西支部 学会誌編集委員
国際森林研究機関連合(IUFRO) Division3 S3.06.00 座長・S3.06.02 副座長
米国林業工学協議会(COFE) USA 国際会員・学会誌(IJFE) 国際編集員
地盤-車両系国際学会(ISTVS)国際会員
森林計画学会・森林利用学会合同シンポジウム「森林管理・計画技術と生産・利用技術の連環性への展望」事務局・コーディネータ
- 鎌内 宏光 日本陸水学会将来計画検討委員
日本長期生態学研究ネットワーク (JaLTER) 情報管理委員
第120回日本森林学会大会におけるテーマ別シンポジウム「森林と河川のつながり：物質循環、生物多様性、土地利用に関する最近の研究」コーディネーター(鎌内 宏光・福澤 加里部・佐藤 拓哉)
シンポジウム「外房地域における森里海連関学の今後の展開」コーディネーター(仲岡 雅裕・大手 信人・鎌内 宏光)、於：東京大学千葉演習林・千葉大学小湊実験所

里域生態系部門

- 山下 洋 日本水産学会 水産増殖懇話会委員
水産海洋学会 学会賞受賞候補推薦委員・編集委員・国際誌編集委員
Fisheries Oceanography 編集委員
日本プランクトン学会幹事
平成21年度日本水産学会春季大会ミニシンポジウム「水産実験所から始まる新しい水産研究と教育」企画責任者(山下 洋・宮台 俊明・古谷 研・石松 惇)
5th World Fisheries Congress セッション6e「Monitoring and sustainable environmental management」企画責任者(Shingo Hiroishi and Yoh Yamashita)
7th International Flatfish Symposium 企画委員(H. Cabral, J. Stotttrup, R. Nash, A. Rijnsdorp, H. van der Veer and Y. Yamashita)
- 柴田 昌三 日本緑化工学会 理事
日本造園学会 理事
日本森林学会 評議員
日本生態学会 保全生態学研究編集委員
竹文化振興協会 Bamboo Journal 編集委員

竹類勉強会 会長
竹文化振興協会 参与 研究誌編集委員会委員
京都竹文化振興財団 評議員
竹資源有効活用コンソーシアム アドバイザー
グリーン購入コンソーシアム アドバイザー
大阪 CDM ネットワーク アドバイザー
近畿竹資源有効活用コンソーシアム アドバイザー取りまとめ役幹事
NPO 法人環境資源開発研究所 副理事長
セニード(Center for Nepal Environmental and Educational Development)後援会 会長
World Bamboo Organization : Member of Board of Directors

田川 正朋 日本水産学会 平成 20 年度水産学教育推進委員会委員 平成 20 年度出版委員会委員

益田 玲爾 Journal of Plankton Research 編集委員

梅本 信也 日本雑草学会 用語委員

長谷川 尚史 IUFRO-A11-D3 実行委員

森林利用学会理事・編集委員

森林計画学会企画委員

森林生産システム研究会主事

森林空間利用研究会主事

森林生産システム研究会 (宍粟市 森林利用学会との共催)

森林計画学会・森林利用学会合同シンポジウム「森林管理・計画技術と生産・利用技術の連環性への展望」
において話題提供 長谷川尚史「森林所有者の意識と施業提案—低コスト化と収益予測」

中山 耕至 日本魚類学会 電子情報委員

甲斐 嘉晃 日本魚類学会 評議員・電子情報委員

日本動物分類学会 Species Diversity 編集委員

基礎海洋生物学部門

白山 義久 動物分類学会評議員・賞選考委員

日本線虫学会編集委員

日本海洋学会沿岸環境部会編集委員

Census of Marine Life Scientific Steering committee, member

日本生態学会第 56 回全国大会 (2009 年 3 月 19 日, 盛岡) におけるシンポジウム「森・里・海のつながりを探る: 陸域研究者と海域研究者の連携に向けて」企画者 (仲岡 雅裕, 向井 宏, 白山 義久)

持続的農業生産に関する国際会議 2008 (ICSA2008) において, 京都大学生態学研究センターと共同でセッション「Adaptive Management of Biodiversity」を開催 (7 月 3 日, 北海道大学)

久保田 信 漂着物学会誌編集委員

大和 茂之 南紀生物同好会編集委員

海域陸域統合管理学研究部門

向井 宏 日本生態学会第 56 回全国大会 (2009 年 3 月 19 日, 盛岡) におけるシンポジウム「森・里・海のつながりを探る: 陸域研究者と海域研究者の連携に向けて」企画者 (仲岡 雅裕, 向井 宏, 白山 義久)

企画研究推進部門

福澤 加里部 第 120 回日本森林学会大会におけるテーマ別シンポジウム「森林と河川のつながり: 物質循環、生物多様性、土地利用に関する最近の研究」コーディネーター (鎌内 宏光・福澤 加里部・佐藤 拓哉)
シンポジウム「外房地域における森里海連関学の今後の展開」コーディネーター (仲岡 雅裕・大手 信人・鎌内 宏光), 於: 東京大学千葉演習林・千葉大学小湊実験所

◆受賞歴

里域生態系部門

益田 玲爾・山下 洋

年月：2009 年 3 月

受賞者名：益田玲爾・山下 洋（フィールド研）・松山 倫也（九州大学）

授賞内容：平成 20 年度 日本水産学会論文賞「Jack mackerel *Trachurus japonicus* juveniles use jellyfish for predator avoidance and as a prey collector」（マアジ稚魚はクラゲを捕食者回避のためおよび餌のコレクターとして利用する） *Fisheries Science* 74 (2): 276-284.

管理技術部

秋田 豊 年月日：2008 年 9 月 18 日

受賞者名：秋田 豊

授賞内容：平成 20 年度全国大学演習林協議会 第 10 回森林管理技術賞 受賞

その他 年月日：2008 年 9 月 12 日

受賞者名：舞鶴水産実験所

授賞内容：第八管区海上保安業務に関し感謝状を感謝状受贈

(6) 社会貢献活動

◆学外委員会委員等

森林生物圏部門

吉岡 崇仁 芦生地域有害鳥獣被害対策協議会 会長

徳地 直子 国土交通省国土計画局・国土計画推進研究会国土管理研究会委員

財団法人防災研究協会・非常勤研究員

天王山森林整備推進委員会・会長

西山森林整備推進委員会・会長

京都市環境委員会・委員

安藤 信 京都伝統文化の森推進協議会専門委員

財団法人阪本奨学会理事

標茶町林業推進協議会委員

標茶町緑化推進委員

芝 正己 日本森林管理協議会 FORSTA 理事

財団法人阪本奨学会理事

全国演習林協議会表彰委員会委員

近畿中国森林管理局森林・林業交流研究会審査委員

森林技術協会京都大学支部長

FSC International 委員（事務局：ドイツ・ボン）

坂野上 なお 滋賀県森林審議会委員

里域生態系部門

- 山下 洋 独立行政法人水産大学校・外部評価委員
社団法人マリノフォーラム 21・検討会委員
京都府漁業調整委員
国土交通省由良川下流水面利用協議会委員
京都府農林水産試験研究機関あり方検討会委員
藻場資源調査等推進委託事業（水産庁）評価委員
先端技術を活用した農林水産研究高度化事業（農水省）評価委員
京都まいづる立命館地域創造機構運営委員
里山里海サブ・グローバルアセスメント執筆委員
- 柴田 昌三 「緑の公共事業アクションプラン」策定に係る政策検討会議（京都府）委員
森林総合研究所関西支所内交付金プロジェクト評価委員
文化的景観（富山の屋敷林景観）検討委員会（富山県砺波市，文化庁）委員
治水防災事業推進委員会（（社）土地防災研究所）委員
竹林管理体系策定事業委員会（日本特用林産振興会，林野庁）委員
木津東部丘陵持続可能都市整備構想検討会（関西文化学術研究都市推進機構）委員
熊本県御船町バイオマス等未活用エネルギー事業調査検討委員会委員長
高知市春野町竹資源活用検討委員会委員
岸和田市竹資源利活用検討委員会オブザーバー
- 田川 正朋 （独）水産総合研究センター・「遺伝子環境ストレス指標による地域資源の健康度診断法の開発」評価委員
- 益田 玲爾 水産総合研究センタープロジェクト研究「マグロ類の人工種苗による新規養殖技術の開発」外部評価委員
水産総合研究センタープロジェクト研究「クラゲ類の魚類餌料としての評価，防除対象から餌料生物への転換」外部評価委員
- 長谷川 尚史 京都市産業観光局・森林バイオマス資源活用検討委員会委員
兵庫県平成 20 年度全県プロジェクト（森林整備）委員
和歌山県「木の国」低コスト林業推進プロジェクト（アドバイザー）
岡山県東部森林・所有者データベース運営委員会（委員長）
- 中西 麻美 京都府中丹広域振興局・京都府中丹地域戦略会議委員
特定非営利活動法人森林再生支援センター 理事

基礎海洋生物学部門

- 白山 義久 財団法人京都理学研究協会・評議員
国際湿地保全連合日本委員会・検討会委員
財団法人地球環境産業技術研究機構・「CO2 海洋隔離技術委員会」委員
海洋政策研究財団・総合的海洋政策研究委員会委員
石油天然ガス・金属鉱物資源機構・海底熱水鉱床開発促進化技術検討委員会委員
国立遺伝学研究所・GBIF 日本ノード委員会委員
独立行政法人石油天然ガス・金属鉱物資源機構・環境影響評価ワーキンググループ委員
財団法人自然環境研究センター・検討委員
日本エヌ・ユー・エス株式会社・海底下 CCS に係るモニタリング手法の高度化分科会検討員
日本エヌ・ユー・エス株式会社・海底下 CCS に係る環境影響評価手法の高度化分科会検討員
日本エヌ・ユー・エス株式会社・海底下 CCS に係る環境管理手法の高度化分科会検討員
神戸大学自然科学系先端融合研究環・外部評価委員
大阪市・大阪市環境影響評価専門委員会委員
科学技術振興機構・国際科学技術協力推進委員
海洋政策研究財団・「わが国の海洋教育体系に関する研究委員会」委員

海洋研究開発機構・IOC 協力推進委員会 海洋環境・生物国内専門部会委員
久保田 信 和歌山県立自然博物館協議会委員
大和 茂之 (財)天神崎の自然を大切にする会評議員

海域陸域統合管理学研究部門

向井 宏 日本学術会議連携会員 (自然環境保全再生分科会委員・生態科学分科会委員)
環境省地球環境研究企画委員会第3分科会委員
環境省特殊案件等環境影響審査調査 (三河湾神野西地区埋立事業に係わる環境影響基礎調査) 検討委員
厚岸町厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究奨励補助金審査委員
厚岸町史編集委員会特別協力員
国際湿地保全連合日本委員会・モニタリング 1000 アマモ場調査検討会委員

管理技術部

佐藤 修一 標茶町文化財専門委員兼標茶町郷土館運営審議委員

◆高校生までを対象としたプログラム

森林生物圏部門

安藤 信 木工教室：標茶町立沼幌小学校 (6月25日) (標茶区共催)
平成20年度ジュニアリーダー養成講座「しべちやアドベンチャースクール」
第4講座：標茶町教育委員会社会教育課 (11月8日～9日) (標茶区共催)
第5講座：標茶町教育委員会社会教育課 (1月31日～2月1日) (標茶区共催)
芝 正己 南丹市美山町小学校合同自然体験教室グリーンワールド・南丹市美山町4小学校
北桑田高等学校森林リサーチ科・「環境科学基礎」・実地研修
大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎・学校設定科目「生命論 (環境)」・実施研修
徳地 直子 自然観察会 (3回) 小学生対象・和歌山研究林
自然観察会 (2回) 高校生対象・和歌山研究林・芦生研究林
森林体験学習 (和歌山県立有田中央高校清水分校 協力：全日空)
中島 皇 京都大学ジュニアキャンパス 2008「森の働き 一木・水・土から見える『無用の用』」
寄元 道德 京都大学オープンキャンパス
坂野上 なお 「ウッズサイエンス」 (和歌山県立有田中央高校清水分校)
「森林学習会」 (有田川町立小川小学校)

里域生態系部門

山下 洋 京都府立南陽高等学校 (サイエンスリサーチ科1年生) に対して臨海実習「海浜生物の多様性を探る」
京都府立西舞鶴高等学校において、サイエンスパートナーシッププログラム (SPP 事業) による指導
田川 正朋 京都府教育委員会・科学探偵士
益田 玲爾 京都教育大学附属高等学校 臨海実習
京都府立南陽高校 臨海実習
私立日星高等学校 講義
京都府立福知山高等学校 講義
京都教育大学附属高等学校 講義
舞鶴市立福井小学校 講義
舞鶴市立池内小学校 科学探偵士
京丹後市立伊根小学校 科学探偵士
中西 麻美 京都府西舞鶴高校 SPP 事業 副講師 (事前授業・学習発表報告)
京都府南陽高校 SPP 事業 副講師 (7月31日～8月2日：実習講師)
兵庫県立西宮今津高等学校・実習 講師

- 上野 正博 綾部市立東陵中学校に対し総合学習（「中学生由良川サミット」の発表に向けた水質調査等）
SPP 事業 京都府立南陽高等学校サイエンスリサーチ科夏季臨海実習
SSH 事業 京都教育大学附属高等学校
フィールド科学実習（大江山での森林実習と舞鶴湾での海洋実習）兵庫県立西宮今津高等学校
SSH 事業 兵庫県立神戸高等学校
京都府立西舞鶴高等学校において、サイエンスパートナーシッププログラム（SPP 事業）による指導
- 甲斐 嘉晃 京都府南陽高校 SPP 事業 講師（7 月 19 日：事前授業，7 月 31 日-8 月 2 日：実習講師）
兵庫県立神戸高校実習 副講師
舞鶴市倉梯第 2 小学校 施設見学対応
京都府海洋高校 講義・施設見学
京都府立西舞鶴高等学校において、サイエンスパートナーシッププログラム（SPP 事業）による指導

基礎海洋生物学部門

- 久保田 信 滋賀県立膳所高等学校・生物実習旅行 講師
大阪府立豊中高等学校・生物特別臨海自習における講師および事後講座
兵庫県立姫路飾西高等学校長期宿泊体験学習 A 班(22 名)・B 班(22 名)
福井県立丹南高等学校・臨海実習
私立済美高等学校・サイエンスプロジェクトにおいて講演
和歌山県立日高高等学校・SSH 講師
奈良県立奈良高等学校・SSH 講師
- 宮崎 勝己 滋賀県立膳所高等学校・SSH 生物実習旅行
大阪府立豊中高等学校・SPP 生物特別臨海実習
奈良県立奈良高等学校・SSH サイエンスツアー
兵庫県立尼崎小田高等学校・SSH 臨海実習
和歌山県立向陽高等学校・SSH 生物調査
奈良県立奈良北高等学校・理数科校外研修
奈良女子大学附属中等教育学校・サイエンス夏の学校
田辺市天神崎にて和歌山県立向陽高校 SSH 調査
- 大和 茂之 田辺市天神崎にて和歌山県立日高高校 SSH 講師
- 深見 裕伸 滋賀県立膳所高等学校・生物実習旅行 講師

◆社会人等を対象としたプログラム

森林生物圏部門

- 吉岡 崇仁 青空塾「森の価値と意識」，ANA 私の青空 広島空港「アサヒの森」（広島県庄原市）
青空塾「次世代に向けた森の利用に関する人々の意識」，ANA 私の青空，中部国際空港「めい想の森」（岐阜県八百津町）
第 5 回時計台対話集会「森里海のつながりを生物多様性から考える」において，パネルディスカッションにパネラーとして参加
「森林利用に伴う流域環境変化と住民の意識」平成 20 年度京都大学森林科学公開講座「森が拓く未来」
「海洋・河川における化学物質の管理」，京都大学・神戸大学合同市民公開講座，パネルディスカッション
京都大学フィールド科学教育研究センター公開講座（芦生）実行委員長
- 安藤 信 「京都市周辺森林の景観を考慮した森林の再生」，第 3 回シイノキ・シンポジウム（京都府立大学）（講演）
京都大学・厚岸町地域連携講座「厚岸湖と厚岸湾はなぜ生産性が高いのか？」（閉会挨拶）
- 芝 正己 京都大学フィールド科学教育研究センター芦生研究林「春の自然観察会」講師
京都大学フィールド科学教育研究センター芦生研究林「秋の自然観察会」講師
神戸シルバーカレッジ・「観光開発と自然保護」・実地研修

- ANA「私の青空」青空塾 阿蘇くまもと空港の森（熊本空港）・青空塾講師
 四国森林管理局・四国の森づくり協議会主催、地域材利用促進シンポジウム：基調講演「地域材利用促進と新たな需要開拓について」・コーディネータ
 京都大学フィールド科学教育研究センター公開講座（芦生）講師（講義及び野外実習）
 徳地 直子 京都大学フィールド科学教育研究センター公開講座（芦生）講師（野外実習）
 長岡京市里山再生市民フォーラムによる「里山講演会」において講演「竹林と森林のしくみ」（3月7日）
 寄元 道德 京都大学フィールド科学教育研究センター公開講座（芦生）講師（野外実習）
 坂野上 なお 京都大学フィールド科学教育研究センター公開講座（芦生）講師（野外実習）

里域生態系部門

- 山下 洋 舞鶴ネイチャーガイド養成講座講師
 平成20年度兵庫県JF役職員研修会講師
 第4回由良川フォーラム実行委員長
 京都大学・神戸大学合同市民公開講座（1月31日）、パネル・ディスカッション
 柴田 昌三 シンポジウム「木を”生かして生きる”社会をつくるために」「京都大学が仁淀川流域で計画している森里海連環学調査研究」（講師）
 京都大学フィールド科学教育研究センター上賀茂試験地一般公開自然観察会（講師）
 京都大学竹の環プロジェクト「竹林管理と筍の収穫」（講話）
 平成20年度清流の都・静岡創造推進協議会総会「清流を都市も含めた森里海連環の視点から考える」（基調講演）
 ANA「私の青空」青空塾 岡崎嘉平太の森（岡山空港）「岡山の緑を築いてきた人々」（講師）
 竹の高度利用研究センター閉所記念講演会「竹と環境」（基調講演）
 竹文化振興協会年次総会情報交換会「珍しい果実のなる熱帯の竹—48年ごとに花が咲き、枯れるタケ・メロカンナ(Melocanna baccifera)」（講師）
 大阪自然環境保全協会さとやまSTEP-UP研修Vol.2 竹林の講義と実地見学「竹林管理の知識—竹林の現状と管理手法—」（講師）
 第二回京都府政策ベンチャー研究会「竹によるベンチャーの可能性」（講師）
 森林再生支援センターシンポジウム「かしこい植樹・かしこい市民」（パネラー）
 国際協力ステーション2008活動報告会「セニード後援会の活動と成果」（話題提供）
 吹田市博物館フォーラム「竹と市民」「竹に魅せられた少年—40年後に日本・世界の竹を吹田から見る—」（講演）
 ELR2008 福岡 公開シンポジウム「自然再生の課題と展望」「竹林を通してみる里山再生に関する試み」（話題提供）
 高知新聞文化教室「自然に学ぶ森里海連環学」「京都大学が仁淀川流域でやろうとしている研究」（講義）
 京都大学フィールド科学教育研究センター第5回時計台対話集会「森里海のつながりを生物多様性から考える」（総合司会）
 京都大学竹の環プロジェクト「なぜ竹林を管理するのか」（講話）
 ANA「私の青空」青空塾 アカコッコの森（三宅島空港）「孤島に植物を持ち込むということ」（講話）
 第3回エコの寺子屋「命のつながり～水と森と人の生活～」において、フィールド学習「上賀茂試験地の里地・里山で水の環を垣間みる」（講師）
 全国竹産業連合会全国大会分科会（コーディネーター）
 京都大学シニアキャンパス2008の自由な学びの時間において、ミニゼミ「京都大学キャンパスの植物を学ぶ」（講師）
 京都大学フィールド科学教育研究センター上賀茂試験地一般公開自然観察会（講師）
 三豊市 竹の資源化に関する考察（基調講演）
 シニア自然大学「京都大学上賀茂試験地の位置づけ」

- 竹の利活用ワークショップ竹キャラバン「竹の利活用方法」
 第1回「風雅のまちづくり」国際シンポジウム「サステイナブルシティ 景観と緑化」(京都大学)
 (コメンテーター)
 京都府農商工連携セミナー「竹で第6次産業は構築できるか」(講師)
 京都大学フィールド科学教育研究センター公開講座(芦生)講師(野外実習)
 益田 玲爾 舞鶴の川と海を美しくする会 講師
 舞鶴市ネイチャーガイド養成講座 講師
 財団法人日本ナショナルトラスト主催 サイエンスカフェ at 駒井家住宅 講師(京都市 7月12日)
 「海への感謝 in 能登」において講演「魚の目から見た地球温暖化」参加者約70人(のと海洋ふれあい
 センター(石川県) 9月27日)
 京都府生活協同組合連合会主催「2008・京都・たべるといせつフォーラム がんばれ日本農業! 漁業!」に
 において、講演「環境と食・京都の海の定点観測から〜魚料理も多数紹介〜」(ハートピア京都 10月15日)
 東舞鶴ロータリークラブ 講師(1月22日)
 第5回時計台対話集会「森里海のつながりを生物多様性から考える」において、パネルディスカッション
 にコーディネーターとして参加
 テレビ番組出演 NHK 総合テレビ 「海の日特集 魚が消える?」において、海水温の変化の解説、舞鶴
 産サワラの料理他(7月21日)
 テレビ番組出演 関西テレビ 「Sーコンセプト・オサカナの科学」において、サワラの生息域の北限に
 ついて解説(8月24日)
 長谷川 尚史 第3回京都大学ホームカミングデイ・北部キャンパス見学ツアー
 京都大学フィールド科学教育研究センター第5回時計台対話集会「森里海のつながりを生物多様性から考
 える」(企画)
 京都大学フィールド科学教育研究センター上賀茂試験地春の自然観察会(講師)
 京都大学フィールド科学教育研究センター上賀茂試験地秋の自然観察会(講師)
 京都府平成20年度京都府森林と林業のつどい(コーディネーター)
 和歌山県低コスト搬出間伐勉強会(講師・コーディネーター)
 日本林業再生の道PartIV パネルディスカッション
 兵庫県平成20年度低コスト作業システム研修(講師)
 兵庫県指導林家制度発足30周年記念シンポジウム(コーディネーター)
 京都大学フィールド科学教育研究センター公開講座(芦生)講師(野外実習)
 上野 正博 第4回由良川フォーラムにおいて、報告「由良川での新発見」
 第5回時計台対話集会「森里海のつながりを生物多様性から考える」において、パネルディスカッション
 にパネラーとして参加

基礎海洋生物学部門

- 白山 義久 高知新聞カルチャー教室講師(横浪林海実験所「森の中の”森里海連環”」 8月9日)
 シンポジウム「木を”生かして生きる”社会をつくるために」「海から見える”森里海”連環」
 (講師 5月7日)
 海の生き物から学ぶ講演会「人間社会と海洋環境 人の心に木を植える」(白浜町中央公民館・瀬戸臨海
 実験所 主催)
 エコロジーカフェ第5回シンポジウムにて講演「海洋生物の多様性について」(東京大学)
 小笠原エコツアー(NPO法人エコロジー・カフェと共催)
 森里海学びツアー in 志津川・気仙沼(NPO法人エコロジー・カフェと共催)
 テレビ番組出演 読売テレビ「ズームイン!! SUPER」コーナー「五十嵐竜馬がゆく」(関西ローカ
 ル枠)で、白浜水族館・バックヤードツアーの紹介(8月8日)
 森から海の連環を考えるシンポジウム(紋別市)にてパネラー(緑の循環森林認証で地域おこし協議会

- 主催 紋別市 7 月 4 日)
- 久保田 信 CD 「生命 (いのち) の星 ―森里海のつながり―」リリース
 白浜町国際交流会(参加者 12 名 7 月 29 日)
 京都大学 11 月祭にて本部講演「生活史逆転を何度でも実行できるベニクラゲの神秘」
 海の生物を守る会「白浜海岸の自然観察会と講演会」において観察会の講師 (11 月 15 日)
 講演「生き物の変化から環境問題考える」(白浜町環境保全協議会主催 1 月 17 日)
 臨海実習(大阪府・兵庫県の高校教員対象)の講師
 阪神貝類談話会講師
 テレビ番組出演 TBS「どうぶつ奇想天外!」でベニクラゲの生態について解説(4 月 27 日)
 テレビ番組出演 TVO かがく de ムチャミタス 「光るクラゲでノーベル賞」 (12 月 13 日)
 テレビ番組出演 フジテレビ ザ・ベストハウス 123 (3 月 5 日)
 テレビ番組出演 NHK 総合 生活ほっとモーニング 「にっぽん体感こだわり旅」白浜魅力的な所探訪
 (3 月 12 日)
 テレビ番組出演 NHK 「関西人のプライド」 白浜温泉などの紹介が中心 (3 月 14, 16 日)
- 深見 裕伸 和歌山県田辺湾のリーフチェックへの参加(和歌山県南部町)
- 伊勢戸 徹 森里海学びツアー in 志津川・気仙沼(NPO 法人エコロジー・カフェと共催)
 小笠原エコツアー(NPO 法人エコロジー・カフェと共催)
 「第 4 回南紀白浜学びツアー」(NPO 法人エコロジー・カフェと共催)

海域陸域統合管理学研究部門

- 向井 宏 APN 国際セミナーにて講演「沿岸域の生物多様性におよぼす陸とのつながり」(神戸 2 月 1 日)
 地域講演会・植樹(益田 2 月 20 日)
 ラジオ番組出演 K B S 京都/笑福亭晃瓶のほっかほかラジオ 嘶の朝ごはん (2 月 27 日)
 海の生き物を守る会 第 4 回観察会および講演会において講演(瀬戸臨海実験所 11 月 15 日)
 京都大学・厚岸町地域連携講座「厚岸湖と厚岸湾はなぜ生産性が高いのか?」において、講演「厚岸湖の
 生産を支えるものとその保全」(3 月 7 日)
 第 5 回時計台対話集会「森里海のつながりを生物多様性から考える」において、講演「水と砂の流れと
 生物多様性」
- 佐藤 真行 京都大学・神戸大学合同市民公開講座「海上輸送と生物多様性」において、総合司会
 京都大学・厚岸町地域連携講座「厚岸湖と厚岸湾はなぜ生産性が高いのか?」において、パネルディスカ
 ッション
 京都大学・神戸大学合同市民公開講座、「海洋・河川における化学物質の管理」、パネルディスカッション

管理技術部

- 秋田 豊 ラジオ番組取材協力 FM (JFN38 局)「コスモ アースコンシャス アクト ずっと地球で暮らそう。」に
 おいて、徳山試験地が文化庁「ふるさと文化財の森」の指定を受けたことを紹介(5 月 7 日)
- 小嶋 宏和 京都大学フィールド科学教育研究センター公開講座(芦生)講師(樹木識別入門)
- 長谷川 敦史 京都大学フィールド科学教育研究センター公開講座(芦生)講師(樹木識別入門)

(7) 国際活動

◆国際研究プロジェクト

基礎海洋生物学部門

- 白山 義久 NaGISA Sampling Workshop 開催(日本・父島(小笠原))
 NaGISA Sorting Workshop 開催(日本・白浜)
 NaGISA Western Pacific Conference 出席(インドネシア・ジャカルタ Novotel Mannga Dua(Jakarta

- Indonesia) , 10月25日～10月29日)
 JSPS NaGISA Bivalve Taxonomy Training Workshop の開催 (マレーシア・ペナン Universiti Sains Malaysia, 3月8日～3月10日)
- 伊勢戸 徹 NaGISA Sorting Workshop 開催 (日本・白浜, 11月22～23日)
 NaGISA Steering Group Workshop で発表等 (ベネズエラ・カラカス Universidad Simon Bolivar, 8月8日～8月13日)
 NaGISA Western Pacific Conference 出席 (インドネシア・ジャカルタ Novotel Mannga Dua(Jakarta Indonesia) , 10月25日～10月29日)
 JSPS NaGISA Bivalve Taxonomy Training Workshop の開催 (マレーシア・ペナン Universiti Sains Malaysia, 3月7日～3月11日)
- 原田 百聞 NaGISA Sorting Workshop 開催 (日本・白浜, 11月22～23日)
 NaGISA Western Pacific Conference 出席 (インドネシア・ジャカルタ Novotel Mannga Dua(Jakarta Indonesia) , 10月25日～10月30日)
 JSPS NaGISA Bivalve Taxonomy Training Workshop の開催 (マレーシア・ペナン Universiti Sains Malaysia, 3月7日～3月11日)

◆国際学会

森林生物圏部門

- 芝 正己 IUFRO DIV3 国際シンポ (日本・札幌, 6月15～21日)

里域生態系部門

- 柴田 昌三 4th International Conference on Landscape and Ecological Engineering (台湾・台北 中国文化大学, 11月22～24日)
- 長谷川 尚史 IUFRO A11-D3 国際シンポ (日本・札幌, 6月15～21日)
- 田川 正朋 第5回世界水産学会議 (日本・横浜, 10月20～24日)
- 山下 洋 第7回国際異体類生態学シンポジウム (ポルトガル・セシンプラ Cine Teatro Joao Mota, 11月2～8日)
 第5回世界水産学会議 (日本・横浜, 10月20～24日)
- 深見 裕伸 国際サンゴ礁学会 11th International Coral Reef Symposium (国際珊瑚礁シンポジウム) 2008 (米国・マイアミ Broward County Convention Center, 7月7～11日)

基礎海洋生物学部門

- 白山 義久 第5回世界水産学会議 セッション議長 (日本・横浜, 10月20～24日)
- 鈴木 豪 11th International Coral Reef Symposium (国際珊瑚礁シンポジウム) 2008 において発表後, エクスカーションに参加 (米国・フロリダ Broward County Convention Center, 7月5～18日)

海域陸域統合管理学研究部門

- 向井 宏 第5回世界水産学会議 (日本・横浜, 10月20～24日)
- 杉本 亮 第8回世界閉鎖性海域環境保全会議 (エメックス) において, 伊勢湾の窒素循環に関する研究成果の発表 (中国・上海エバーブライト国際会議場, 10月26～30日)

◆海外調査

森林生物圏部門

- 中島 皇 寒地における森林と環境に関する調査・資料収集/カナダ国の国立公園における信絵員保全に関する調査・資料収集 (カナダ・アルバータ大学/ジャスパー国立公園, 2月20日～3月2日)

里域生態系部門

- 柴田 昌三 台湾の竹産業視察 (台湾・南投県, 11月20～21日)
 竹類開花地における調査 (インド・ミゾラム大学, 4月19～24日)

- 竹類開花に関する情報収集及びポカラ山岳博物館訪問（ネパール・カトマンズ及びポカラ，12月1～6日）
 竹類開花地における調査（インド・ミゾラム大学，2月22日～3月4日）
 長谷川 尚史 ミゾラム州における竹類の一斉開花枯死の調査（インド・ミゾラム大学，10月2～9日）
 中西 麻美 農業生態系，特に焼畑休閑林の变化解析のための資料収集（ラオス・ウドムサイ周辺，2月24～28日）
 甲斐 嘉晃 カサゴ目魚類の標本調査（米国・ワシントンDC 国立自然史博物館，11月9～15日）

◆在外研究

里域生態系部門

田中 克(名誉教授)

アカメ仔稚魚の塩分適応に関する実験（マレーシア・サバ大学，5月13～29日）

基礎海洋生物学部門

- 久保田 信 刺胞動物門の系統分類学的研究（中国・西北大学，4月17～20日）
 大型クラゲの発生調査研究（韓国・ソウル周辺海域，9月22～26日）
 大和 茂之 台湾におけるカワリヌマエビ属及び共生動物の研究打ち合わせ及び採集調査（台北・大甲溪・雲林・高雄
 周辺）（科研費基盤研究B 課題番号1931050「外来個体群の進入・分散に伴う淡水エビ類の遺伝子汚染と
 共生システムの攪乱」）（台湾・台湾特有生物研究保育中心，9月8～16日）

◆その他出張研修

森林生物圏部門

- 芝 正己 ミュンヘン工科大学 Yokoso TUM Summer School に参加（ドイツ・Technische University Munich，9
 月26日～10月13日）

里域生態系部門

- 柴田 昌三 竹資源に関する国際会議出席 International Conference “Improvement of Bamboo Productivity and
 Marketing for Sustainable Livelihood”（インド・ニューデリー Ashok Hotel，4月15～18日）
 山下 洋 学位審査（オランダ・ワグeningen大学，9月13～17日）

基礎海洋生物学部門

- 伊勢戸 徹 CoML 科学推進委員会に出席（米国・ロングビーチ The Queen Mary，1月31日～2月7日）
 白山 義久 JSPS 拠点大学交流事業 ナショナル・コーディネーター会議に出席（マレーシア・マラッカ Renaissance
 Hotel Melaka，5月18～20日）
 ロンドン条約科学者会合サイエンスデーで発表（エクアドル・グアヤキル Simon Bolivar 国際会議場，5
 月21～23日）
 The Ocean in a High-CO2 World Symposium に出席して発表（フランス（モナコ）・Musée Oceanographique，
 10月4～9日）
 World Marine Biodiversity Congress に参加して発表（スペイン・バレンシア Barcelo Valencia Hotel，
 11月10～19日）
 CoML 科学推進委員会に出席（米国・ロングビーチ The Queen Mary，1月31日～2月7日）
 CoML と生物多様性条約との協力関係構築のための話し合いに参加（カナダ・モントリオール Convention
 on Biological Diversity(Office)，3月6～7日）
 DINRAC Forcal Point Meeting に出席（中国・北京 Fragrant Hill Empark Hotel，5月12～15日）
 CoML 事業打ち合わせ（米国・Census of Marine Life 財団事務局，4月27日～28日）
 原田 百聞 CoML 科学推進委員会に出席（米国・ロングビーチ The Queen Mary，1月31日～2月7日）

海域陸域統合管理学研究部門

- 向井 宏 海域陸域統合的管理及び2010年度国際シンポジウム開催のための打ち合わせ（タイ・カセサート大学，1
 月11～17日）

佐藤 真行 海域陸域統合的管理及び2010年度国際シンポジウム開催のための打ち合わせ（タイ・カセサート大学，1月11～17日）

◆招聘外国人学者

里域生態系部門

Gwak Woo-Seok（郭 又哲 カク ウ ソク）（日本学術振興会）／「スズキ属魚類の核DNAの分析：交雑個体群の探索」に関する研究（韓国・国立慶尚大学校 海洋科学大学 海洋生命科学科助教授（京大農学部博士課程卒業），6月24日～8月19日，中山 耕至）

◆外国人共同研究員

里域生態系部門

Md. Shahidul Islam 日本学術振興会外国人特別研究員（バングラディシュ，山下 洋）
Robert, Dominique 日本学術振興会外国人特別研究員／海産仔稚魚に対するクラゲの捕食圧とその加入強度に関する影響（カナダ・Laval 大学 生物学部博士課程修了，2008年7月16日～，益田 玲爾）

基礎海洋生物学部門

Reft Abigail Julia（日本学術振興会国際交流事業（サマープログラム）（米国・カンサス大学 海洋生物学専攻大学院生，6月28日～8月19日，久保田 信）

◆留学生

森林育成学分野

呉 初平 私費留学生（農学研究科博士課程3年）（中国，柴田 昌三／安藤 信）
Alex Souza 国費留学生（ブラジル，柴田 昌三／長谷川 尚史）

里海生態保全学分野

陳 炳善 私費留学生（韓国，山下 洋）
Emily Sucaldito Antonio 国費留学生（フィリピン，山下 洋）
Chaitanya Kumar Bhandare 国費留学生（インド，山下 洋）
Yi-Ting Lien（連怡婷） 私費留学生（台湾，山下 洋）

●●● 4. 資料 ●●●

(1) 職員配置表

平成21年 1月 1日現在

区 分	教 授	准教授	講 師	助 教	事務職員	技術職員	非常勤職員
流動分野研究室		田 川 正 朋		中 山 耕 至			黒 河 七 葉 子
研究室	吉 岡 崇 仁						植 田 晶 子 中 野 泰 美 岡 佳 史 子 村 上 彩 子
企画情報室	センター長 (室長〔兼〕) 白 山 義 久					(兼)○山内 隆之 △柳 直文 (兼)向 昌宏 (育)中村はる奈 榎田 盤 新 裕史 向 昌宏	上 野 亜 紀
森里海連環学 プロジェクト支援室	(室長〔兼〕) 山 下 洋						福 澤 加 里 部
海域陸域統合管理学 研究部門	(特任) ◇ 向 井 宏	(特任) ◇ 佐 藤 真 行					杉 本 亮 麻 生 佳 穂 里
事務部					(専門員) 仲 豊 廣 大谷 啓子		山 本 み ゆ き
図書室							
芦生研究林		(研究林長) 芝 正 己			(掛長) 長 野 敏 (主任) 石 田 将 人	○藤井 弘明 △紺野 絡 △浅野 善和 伊藤 雅敏 太田 健一 長谷川敦史 小嶋 宏和 (再)大牧 治夫	山 口 サ ト 子 中 野 は る み
北海道研究林		(研究林長) 安 藤 信			(掛長) 川 合 忍 (主任) 福 田 光 宏	[標茶区] ○佐藤 修一 △岡部 芳彦 勝山 智憲 林 大輔 吉岡 歩 [白糠区] △柳本 順 (再)古本 浩望	川 村 由 紀 枝
和歌山研究林		☆(研究林長) 徳 地 直 子		☆ 坂 野 上 な お		○長谷川 孝 △上西 久哉 △平井 岳志 △細見 純嗣 中川 智之 (再)松場 京子	松 場 輝 信
上賀茂試験地	(試験地長) 柴 田 昌 三					◎境 慎二朗 △柴田 泰征 △大橋 健太 (休)黒田 真人 荒井 亮 古田 卓	
徳山試験地			☆(試験地長) 中 島 皇			○秋田 豊	近 森 道 子 石 丸 美 由 希
北白川試験地		★(試験地長) 長 谷 川 尚 史		寄 元 道 徳		◎山内 隆之 鬼塚 恵美 西岡 裕平	北 村 伊 都 子
紀伊大島実験所		(実験所長) 梅 本 信 也					
舞鶴水産実験所	(実験所長) 山 下 洋	益 田 玲 爾		上 野 正 博 中 西 麻 美 甲 斐 嘉 晃	(主任) 松 尾 壽 雄	○佐藤 一夫 △志賀 生実	亀 井 ま り 子 松 尾 春 美 荻 野 文 代 山 下 正 枝 陳 炳 善
瀬戸臨海実験所	(実験所長) 白 山 義 久	久 保 田 信	宮 崎 勝 己	大 和 茂 之 深 見 裕 伸 ◆ 伊 勢 戸 徹	(掛長) 大 坪 博 史 (主任) 原 田 晶 夫 (主任) 田 中 雅 浩 (再)谷坂美和子	◎山本 善万 △山本 泰司 △津越 健一 加藤 哲哉 興田喜久男 (再)太田 満	興 田 道 子 杉 野 晴 美 鈴 木 豪 閑 原 百 聞

☆勤務地:京都

★勤務地:上賀茂試験地

◎技術長

○技術班長

△技術主任

(育)育休

◆特定有期雇用職員

(兼)兼務

(再)再雇用

(休)休職

◇有期雇用研究員

(2) 常設委員会名称及び委員一覧

平成 20 年 9 月 9 日現在

＜教授が担う委員会＞

将来構想企画委員会	白山・山下・柴田・吉岡
教育研究評価委員会	白山・山下・柴田・吉岡
施設・設備整備委員会	白山・山下・柴田・吉岡

＜教授が当面委員長を務める委員会＞

教育プログラム委員会	○山下・徳地・田川・長谷川・中島・宮崎
研究プログラム委員会	○吉岡・安藤・芝・梅本・益田
広報委員会	○柴田・久保田・梅本・寄元・坂野上・甲斐・横田
人権問題対策検討委員会	○白山・山下・柴田・吉岡・徳地・益田・小坂
情報セキュリティー委員会	○白山・上野(幹事)・中山・横田

＜准教授・講師・助教が委員長を務める委員会＞

施設・設備整備委員会ワーキンググループ	
遠隔講義システム等整備WG	○芝・宮崎・安藤・坂野上・上野
連携棟新営WG	○梅本・久保田・田川・中西
社会連携委員会	○長谷川・中島・益田・大和
国際委員会	○益田・中西・深見・芝
労働安全衛生委員会	○徳地・坂野上・甲斐・大和

(○ は、委員長)

技術職員の在り方検討委員会(役職指定)

センター長・副センター長・総務課長・技術長

危機管理委員会

全教授・各施設長・技術職員(若干名)

(3) 全学委員会等

平成 20 年 9 月 9 日現在

＜部局長が対応する委員会＞

教育研究評議会	大学評価委員会	全学共通教育委員会
研究所長会議	全学情報セキュリティー委員会	地球環境学堂・学舎協議会
生態学研究センター・協議員会・外部評価委員		総合技術部委員会

＜他の教員が対応する委員会＞

大学評価委員会 点検・評価実行委員会	山下
全学共通教育システム委員会 少人数教育部会	益田
全学共通教育システム委員会 生物学部会	田川
学生の安全対策検討WG	吉岡
教室系技術職員の在り方検討WG	柴田
シニアキャンパス実施検討委員会	柴田
ジュニアキャンパス実施検討委員会	吉岡
総合博物館運営委員会	芝
生態学研究センター運営委員会	徳地
国際交流委員会	柴田
国際交流センター協議委員会	柴田

情報環境機構 KUINS 利用負担金検討委員会	芝
地球環境学堂三才学林協議員	柴田
施設整備委員会吉田キャンパス整備専門委員会	吉岡

〈その他学内委員会等〉

国際交流会館小委員会	柴田
農学研究科コンピュータ援用物理系実習室管理運営委員	芝
北部構内交通委員	寄元

(4) 運営委員会

区分	平成 20 年度
議長	白山 義久（フィールド研センター長）
1 号	山下 洋（フィールド研教授）
	柴田 昌三（フィールド研教授）
	吉岡 崇仁（フィールド研教授）
2 号	渡辺 勝敏（理学研究科准教授）
	谷 誠（農学研究科教授）
	森本 幸裕（地球環境学堂教授）
	河野 泰之（東南アジア研究所）
	椿 宜高（生態学研究センター教授）
	大野 照文（総合博物館教授）

(5) 協議員会

区分	職名	平成 20 年度
1 号	フィールド研センター長	白山 義久
2 号	フィールド研教授	山下 洋
	フィールド研教授	柴田 昌三
	フィールド研教授	吉岡 崇仁
3 号	高等教育研究開発推進機構長	北村 隆行
	理学研究科長	加藤 重樹
	理学研究科動物学教室教授	堀 道雄
	農学研究科長	奥村 正悟
	農場長	米森 敬三
	学術情報メディアセンター長	中村 裕一
	地球環境学堂長	嘉門 雅史(～H20. 9. 30) 小林慎太郎(H20. 10. 1～)
	生態学研究センター長	大串 隆之
	総合博物館長	山中 一郎

(6) 新聞・雑誌等に掲載された記事

センターに関する記事

年月日	掲載面	掲載紙	タイトル	内容・キーワード等
2008年4月1日	朝刊 5面	紀伊民報	白山義久「カタユレイボヤ 遺伝子は全て解明」 (*連載 38)	白浜水族館
2008年4月8日	朝刊 5面	紀伊民報	深見 裕伸「ハナギンチャク まるでミノムシ」 (*連載 39)	白浜水族館
2008年4月15日	朝刊 5面	紀伊民報	久保田 信「ミズクラゲ 大きく姿変える季節」 (*連載 40)	白浜水族館
2008年4月22日	朝刊 5面	紀伊民報	加藤 哲哉「サクラダイ 雌が雄になる魚」 (*連載 41)	白浜水族館
2008年4月22日	朝刊 27面	京都新聞	10日に京大上賀茂試験地で「春の自然観察会」	上賀茂試験地
2008年4月24日	朝刊 15面	中国新聞	檜皮供給で「文化財の森」に 京都大徳山試験地県内初の選定	徳山試験地
2008年4月29日	朝刊 5面	紀伊民報	山本 泰司「チゴガニ 干潟の小さなダンサー」 (*連載 42)	白浜水族館
2008年4月1日	No. 633	京大広報	隔地施設紹介	紀伊大島実験所
2008年5月13日	朝刊 5面	紀伊民報	加藤 哲哉「エイラクブカ どこ違う？軟骨魚と硬骨魚」 (*連載 43)	白浜水族館
2008年5月17日	朝刊 13面	紀伊民報	白良浜に深海魚 シマガツオ捕獲	白浜水族館
2008年5月20日	朝刊 5面	紀伊民報	大和 茂之「いろいろなエビ類 エビの腹部はなぜ長い」 (*連載 44)	白浜水族館
2008年5月27日	朝刊 5面	紀伊民報	深見 裕伸「ヤツマタスナギンチャク 砂の鎧まとう刺胞動物」 (*連載 45)	白浜水族館
2008年5月1日	5月号	らいふすてーじ (京都大学生協)	フィールド科学教育研究センター (ACADE見IC No. 159)	フィールド研 (組織紹介)
2008年5月1日	No. 634	京大広報	間伐材を用いた「サイコロベンチ」を設置	和歌山研究林
2008年6月3日	朝刊 13面	紀伊民報	海の生き物に生き物テーマに講演会 4日と11日、白浜	瀬戸臨海実験所
2008年6月3日	朝刊 5面	紀伊民報	宮崎 勝己「群泳する小型魚たち 口を開けて呼吸と採餌」 (*連載 46)	白浜水族館
2008年6月6日	朝刊 23面	毎日新聞 (京都丹波・丹後版)	舞鶴・福井小5、6年生 地元の海、魚について学ぶ 研究所の准教授招き	舞鶴水産実験所
2008年6月10日	朝刊 5面	紀伊民報	久保田 信「オオカワリギンチャク 変わった特徴多く持つ」 (*連載 47)	白浜水族館
2008年6月14日	朝刊 18面	日本経済新聞	原生の森林浴「緑と水、五感で味わう」	芦生研究林
2008年6月17日	朝刊 5面	紀伊民報	白山 義久「サメハダホシムシ ロの近くに肛門がある訳」 (*連載 48)	白浜水族館
2008年6月24日	朝刊 5面	紀伊民報	加藤 哲哉「タツノオトシゴの仲間 人気者の影に飼育員の苦労」 (*連載 49)	白浜水族館
2008年7月1日	朝刊 5面	紀伊民報	宮崎 勝己「ナマコ どっちが口で どっちが肛門？」 (*連載 50)	白浜水族館
2008年7月8日	朝刊 5面	紀伊民報	伊勢戸 徹「生き物バラエティー 水族館と動物園 どっちが多様？」 (*連載 51)	白浜水族館
2008年7月15日	朝刊 5面	紀伊民報	久保田 信「サカサクラゲ 海水浄化の長命クラゲ」 (*連載 52)	白浜水族館
2008年7月22日	朝刊 5面	紀伊民報	大和 茂之「イワホリコツブムシ 島を浸食する虫」 (*連載 53)	白浜水族館
2008年7月26日	朝刊 4面	紀伊民報	リュウゼツラン開花 串本	紀伊大島実験所
2008年7月29日	朝刊 23面	京都新聞 (関西広域版)	森の役割やシカ食害学ぶ 京大研究林で講座 今回は野外実習も	芦生研究林
2008年7月30日	朝刊 1面	紀伊民報	南方系のウニ増加 生物相に異変 田辺市天神崎	瀬戸臨海実験所
2008年7月30日	朝刊 1面	紀伊民報	タコクラゲ 8本足でゆらゆら 京大白浜水族館で展示	白浜水族館
2008年8月6日	朝刊 5面	紀伊民報	白山 義久「動物と共生する藻類 持ちつ持たれつ」 (*連載 54)	白浜水族館
2008年8月8日	5面	名古屋タイムス	こだわりB級スポット 京大白浜水族館 変な生物に海の神秘	白浜水族館
2008年8月10日	朝刊 11面	紀伊民報	新しい研究実習船を導入 白浜 京大の研究センター	瀬戸臨海実験所
2008年8月16日	朝刊 25面	京都新聞	自然と人かかわり考える 30日に綾部で「由良川フォーラム」	由良川フォーラム
2008年8月22日	朝刊 5面	紀伊民報	白山 義久「タコアシサンゴ 悠久の時を過ごす動物」 (*連載 55)	白浜水族館
2008年8月27日	朝刊 5面	紀伊民報	山本 泰司「イボヤギ 昼間、満開にさせるために・・・」 (*連載 56)	白浜水族館
2008年9月4日	朝刊 5面	紀伊民報	山本 泰司「スズメダイ類の産卵 雄が卵の世話と保護」 (*連載 57)	白浜水族館
2008年9月10日	朝刊 5面	紀伊民報	加藤 哲哉「ヒモムシ類 実は進化した生き物!？」 (*連載 58)	白浜水族館
2008年9月13日	朝刊 1・3面	朝日新聞	ぶらっと沿線紀行 駅で水着に着替えたら JR紀勢線古座駅	紀伊大島実験所
2008年9月17日	朝刊 5面	紀伊民報	久保田 信「強烈な毒のイラモ 海藻のような風変わり動物」 (*連載 59)	白浜水族館

2008年9月24日	朝刊 5面	紀伊民報	白山 義久「トコブシ 「流れ子」と呼ばれるアワビの仲間」 (*連載 60)	白浜水族館
2008年9月25日	朝刊 23面	京都新聞(北部版)	出会いスケッチまち歩き 京大水産実験所近辺	舞鶴水産実験所
2008年9月25日	朝刊 28面	朝日新聞(丹後丹波版)	由良川水流解析調査貢献で感謝状 京大舞鶴水産実験所	舞鶴水産実験所
2008年9月30日	夕刊 1面	舞鶴市民新聞	京大水産実験所に感謝状	舞鶴水産実験所
2008年9月1日	No. 637	京大広報	瀬戸臨海実験所の実習船「ヤンチナ」をお披露目	瀬戸臨海実験所
2008年9月1日	No. 637	京大広報	白浜海の家竣工披露式を挙行	和歌山研究林
2008年10月1日	朝刊 5面	紀伊民報	深見 裕伸「ニホンアワサンゴ 海に咲くカスミソウ」 (*連載 61)	白浜水族館
2008年10月4日	朝刊 21面	毎日新聞社(京都版)	「森・里・海は一体」 京大名誉教授 田 中 克さん「連環学」提唱, 本に	センター
2008年10月10日	朝刊 21面	毎日新聞(和歌山版)	魅力知り, 自然大切に 石垣小児童 水質浄化機能など森林の役割学ぶ	和歌山研究林
2008年10月11日	朝刊 1面	有田タイムス	紀の国森づくり基金活用事業 森林の機能や大切さ体で学ぶ 児童ら間伐体験に四苦八苦	和歌山研究林
2008年10月15日	朝刊 12面	紀伊民報	伊勢戸 徹「アカオニヒトデ 控えめにとげとげなヒトデ」 (*連載 62)	白浜水族館
2008年10月21日	朝刊 8面	紀伊民報	大和 茂之「ヤドカリ 左右不相称の体」 (*連載 63)	白浜水族館
2008年10月30日	朝刊12面	紀伊民報	宮崎 勝己「ウニ類 体に何がある？」 (*連載 64)	白浜水族館
2008年11月1日	朝刊	紀伊民報	人間社会と海洋環境 5日, 白浜で講演会	瀬戸臨海実験所
2008年11月5日	朝刊 27面	朝日新聞(京都版)	水・森・人学ぶ エコの寺子屋 8日開催	センター
2008年11月11日	朝刊8面	紀伊民報	深見 裕伸「ベニクラゲムシ 泳げないクシクラゲ」 (*連載 65)	白浜水族館
2008年11月12日	朝刊11面	紀伊民報	大西洋の熱帯魚捕獲 クイーンエンゼルフィッシュ 白浜沿岸 飼育者が放流か	白浜水族館
2008年11月12日	朝刊28面	朝日新聞(和歌山版)	白浜沖にカリブの熱帯魚 漁師が発見 観賞用を放つ？	白浜水族館
2008年11月20日	朝刊14面	紀伊民報	久保田 信「ベニクラゲ 特集展示で見る神秘の生態」 (*連載 66)	白浜水族館
2008年11月26日	朝刊12面	紀伊民報	加藤 哲哉「魚のひれ 使い方さまざま」 (*連載 67)	白浜水族館
2008年11月26日	朝刊12面	朝日新聞	白浜に南方から来客? 「ハナフエフキ」捕獲	白浜水族館
2008年12月4日	朝刊14面	紀伊民報	山本 泰司「ヤドカリとイソギンチャクの共生 イソギンチャクは非常食」 (*連載 68)	白浜水族館
2008年12月4日	朝刊12面	紀伊民報	海の生き物学ぼう 参加者募集	白浜水族館
2008年12月10日	朝刊12面	紀伊民報	伊勢戸 徹「コケムシ 苦のように美しい動物」 (*連載 69)	白浜水族館
2008年12月11日	朝刊20面	毎日新聞(和歌山版)	ハナフエフキ県内で初の捕獲 京大水族館で保存	白浜水族館
2008年12月17日	朝刊12面	紀伊民報	大和 茂之「オキアミとアミ エビのようでエビではない」 (*連載 70)	白浜水族館
2008年12月25日	朝刊12面	紀伊民報	白山 義久「シロウリガイ 毒を餌に変える二枚貝」 (*連載 71)	白浜水族館
2008年12月25日	-	南紀州新聞	住民管理のおかげで貴重種も 「ぶつぶつ川」の植物調査を報告 那智勝浦町	紀伊大島実験所
2008年12月25日	-	紀伊民報	日本一短い川に256種確認, 貴重な種も ぶつぶつ川の植物調査	紀伊大島実験所
2009年1月7日	朝刊12面	紀伊民報	宮崎 勝己「生物標本DB化でもっと光を」 (*連載 72)	白浜水族館
2009年1月14日	朝刊12面	紀伊民報	白山 義久「サツマハオリムシ 分子生物学の発展で変わる動物門」 (*連載 73)	白浜水族館
2009年1月21日	朝刊11面	紀伊民報	3メートルの巨大ゴカイ 白浜の漁港でオニソメ	瀬戸臨海実験所
2009年1月22日	朝刊12面	紀伊民報	加藤 哲哉「水族館の餌 ベレット, オキアミ, 塩ワカメ・・・」 (*連載 74)	白浜水族館
2009年1月29日	朝刊12面	紀伊民報	白山 義久「イガイの仲間 食用貝, 所変われば厄介者」 (*連載 75)	白浜水族館
2009年2月5日	朝刊12面	紀伊民報	宮崎 勝己「駐車場の旧水槽 水槽に見る水族館の進化」 (*連載 76)	白浜水族館
2009年2月19日	朝刊12面	紀伊民報	白山 義久「ウミシダの仲間 腕の「花」広げる” ろ過食者 ”」 (*連載 77)	白浜水族館
2009年2月25日	朝刊10面	紀伊民報	白山 義久「線虫の仲間 地球の真の“支配者”」 (*連載 78)	白浜水族館
2009年3月11日	朝刊10面	紀伊民報	大和 茂之「甲殻類のまとめ いろいろな足」 (*連載 79)	白浜水族館
2009年3月12日	朝刊	北海道新聞	森, 川, 藻が支える湖と湾	厚岸町・センター連携講座
2009年3月14日	朝刊1面	紀伊民報	白浜の海岸に漂着 珍種の熱帯魚 ヌメリテンジクダイ	瀬戸臨海実験所
2009年3月19日	朝刊12面	紀伊民報	白山 義久「ムラサキウニ 忍び寄る海洋酸性化の危機」 (*連載 80)	白浜水族館

(注 *連載 のタイトルは, 「水族館へ行こう! 京都大学白浜水族館」)

教職員に関する記事

年月日	掲載面	掲載紙	タイトル	教職員
2008年4月5日	9面	京大学生新聞	フィールドで本物体験を	白山義久
2008年8月10日	2面	オホーツク新聞	住民に深まる環境意識こそ、地域の宝もの パネルディスカッション「森から海の連環を考える」より 上下	
2008年8月15日	3面			
2008年7月5日	-	北海道新聞・北海民友新聞・オホーツク新聞	洞爺湖サミットリンケージシンポジウム「森から海の連環を考えるシンポジウム」	白山義久・竹内典之（名誉教授）
2008年5月12日	朝刊 27面	京都新聞	掘って食べて竹林すっきり 京大桂で120人参加	柴田昌三
2009年	No. 13	独立行政法人日本万国博覧会記念機講「森発見」	竹林の可能性を探る	益田玲爾
2008年6月15日	朝刊 3面	毎日新聞	森と水土里のフォーラム 農地育む森林と水	
2008年6月26日	朝刊 22面	京都新聞（丹波中丹 版）	感動をダイビングマップに 海洋高生が魚観察 舞鶴・竜宮浜漁港周辺イカ卵など撮影	久保田信
2008年9月29日	朝刊 18面	北陸中日新聞	日本海側「南方系の魚増加」 能登町 魚の生態学び清掃	
2008年11月21日	朝刊 22面	京都新聞（北部版）	クラゲから生態系読み解く	田川正朋
2008年8月29日	朝刊 1面	紀伊民報	珍しい金色のクラゲ 白浜臨海に60匹漂着	
2008年9月号	pp. 124-125	「Newton」	身近な“？”の科学「クラゲ」	
2008年9月13日	朝刊 1面	紀伊民報	ながーい マングローブ種子が漂着	
2008年9月18日	朝刊 1面	紀伊民報	生きたホシダカラ捕獲 白浜で珍しい南方の貝	
2008年10月25日	夕刊 10面	朝日新聞（関西版）	神秘のチカラ ぶかり広がる ベニクラゲ 「不老不死」注目、歌も	
2008年10月25日	夕刊 1面	朝日新聞（九州版）	「不死身クラゲ」下関・長崎の水族館に登場 研究者、魅力発信CD	
2008年11月16日	2面	京都大学新聞	11月祭、今年の企画は？ 本部講演「生活逆転を何度でも実行できるベニクラゲの神秘」	
2008年11月28日	朝刊15面	紀伊民報	グンバイヒルガオ発芽 白浜 漂着の南国植物	
2009年1月21日	朝刊10面	紀伊民報	温暖化で生き物変化 久保田准教授が講演 白浜	
2009年3月25日	12面	紀伊民報	海の不思議 この子誰の子 「ブラヌラ」	
2009年版	32・33頁	堀場製作所会社案内「abiroh」	Interview-#02 永遠に生き続ける神秘のクラゲ	
2008年12月12日	朝刊	両丹日日新聞	「すごい」「おもしろい」 魚の赤ちゃんの不思議 成仁小5年生 科学探偵士に学ぶ	
2008年	-	南海電鉄 環境社会報告書 2008	トップインタビュー・鉄道会社が果たす社会貢献のかたちとは—	徳地直子
2008年5月26日	朝刊 26面	京都新聞	京の山景観守れ シイ拡大で対策シンポ「マツ再生実験も報告」 府立大	安藤信
2008年8月6日	朝刊 10面	紀伊民報	サンゴの産卵始まる 田辺・天神崎沖	深見裕伸
2008年10月25日	朝刊 25面	京都新聞（北部版）	日本海丸ごと知りたい 永遠の謎解き調査楽しむ	上野正博
2008年4月24日	6面	両丹日日新聞 別冊TOWN TOWN	日本海に遊ぶ 海は何色？	上野正博
2008年5月28日	11面		日本海に遊ぶ 大発見…かも？	
2008年6月25日	6面		日本海に遊ぶ 放流は誰のため	
2008年7月24日	6面		日本海に遊ぶ エンゲル係数を上げよう	
2008年8月27日	3面		日本海に遊ぶ サル学から里山へ	
2008年9月25日	3面		日本海に遊ぶ 生物多様性って何だ？	
2008年10月22日	6面		日本海に遊ぶ 海のエコラベル	
2008年11月27日	6面		日本海に遊ぶ アユ対クラゲ	
2008年12月17日	6面		日本海に遊ぶ 魚の群れ	
2009年1月28日	6面		日本海に遊ぶ エチオピア	
2009年2月21日	6面		日本海に遊ぶ 手抜き家事はエコ	
2009年3月21日	6面		日本海に遊ぶ 寿司！鮓！鮓！	
2008年12月6日	朝刊 3面	朝日新聞	「森が育む豊かな海」 基調講演 温暖化解決の糸口にも	田中克（名誉教授）・畠山重篤（社会連携教授）
2008年5月27日	朝刊 3面	毎日新聞	「森は海の恋人」運動を始めて20年 畠山 重篤さん -	畠山重篤（社会連携教
2009年2月26日	朝刊15面	毎日新聞	水と緑の地球環境 森林再生で海を豊かに（横浜でJISE市民環境フォーラム開催）	
2008年9月1日	17頁	京都大学広報誌「紅萌」	京都大学をささえる人々 山本善万	山本善万（技術職員）
2008年10月16日	朝刊 1面	紀伊民報	独特な形 ヒトエガイ 白浜 網不知湾	加藤哲哉（技術職員）

(7)各施設利用者数(2008年度)

(所属) (目的) (利用者)	京都大学					他大学				
	教育		研究		その他	教育		研究		その他
	教職員等	学生	教職員等	学生		教職員等	学生	教職員等	学生	
芦生研究林	197	684	308	712	2	14	53	71	62	0
北海道研究林白糠区	44	134	31	0	4	0	0	4	0	0
北海道研究林標茶区	147	293	24	0	5	7	43	3	0	8
和歌山研究林	109	16	43	77	0	2	3	16	28	0
徳山試験地	4	0	5	0	6	0	0	0	0	0
上賀茂試験地	124	513	241	273	32	21	319	28	64	24
北白川試験地	19	286	670	1,490	69	0	0	6	2	11
紀伊大島実験所	39	178	9	144	0	7	63	18	1	0
舞鶴水産実験所	110	852	315	5,472	117	28	260	17	34	5
瀬戸臨海実験所	145	647	69	2,301	91	153	1,107	233	331	0
計	938	3,603	1,715	10,469	326	232	1,848	396	522	48

(所属) (目的) (利用者)	教育研究機関等			一般			合計
	教育	研究	その他	教育	研究	その他	
芦生研究林	246	51	46	562	180	7,750	10,938
北海道研究林白糠区	0	1	0	0	4	16	238
北海道研究林標茶区	82	4	0	52	109	31	808
和歌山研究林	324	16	28	2	9	53	726
徳山試験地	6	0	0	0	0	70	91
上賀茂試験地	0	44	40	342	288	216	2,569
北白川試験地	0	7	0	83	10	68	2,721
紀伊大島実験所	0	76	0	14	150	0	699
舞鶴水産実験所	700	33	22	4	3	481	8,453
瀬戸臨海実験所	385	199	0	106	88	66,414	72,269
計	1,743	431	136	1,165	841	75,099	99,512

(注)

2008年度年報より、利用者数における最上位の分類を所属の4区分とした。

そのため、前号までの教育利用及び研究利用における「教職員等」の値は所属別に4区分され、「学生」の集計値は、京大・他大学の2区分に分割された。

また、前号までの「一般利用」は、利用者の所属別に目的「その他」で集計している。

なお、前号までの「公開講座等イベント」欄は廃し、イベントの目的に応じて、教育や「その他」に含まれている。

(8) 人事異動 (2008 年度)

氏 名	新 職 名	旧 職 名	異動年月日
太 田 満	瀬戸臨海実験所・技術職員(再雇用)	瀬戸臨海実験所・技術主任	2008. 4. 1
大 牧 治 夫	芦生研究林・技術職員(再雇用)	芦生研究林・技術主任	〃
柳 本 順	北海道研究林・技術主任	芦生研究林・技術主任	〃
大 坪 博 史	瀬戸臨海実験所・掛長	農学研究科経理課・主任	〃
深 尾 秀 正	工学研究科経理事務センター・専門職員	瀬戸臨海実験所・掛長	〃
向 昌 宏	森里海連環学プロジェクト支援室・企画情報室(兼)・技術職員	企画情報室・技術職員	〃
柳 直 文	企画情報室・技術主任	北白川試験地・技術職員	〃
模 田 盤	企画情報室・技術職員(採用)		〃
長谷川 尚史	准教授(採用)	農学研究科・助教	2008. 5. 1
伊 勢 戸 徹	特定有期雇用教員(NaGISA プロジェクト)・助教(採用)	琉球大学・非常勤講師	〃
柴 田 昌 三	教授	北白川試験地長(兼)・教授	2008. 6. 1
長谷川 尚史	北白川試験地長(兼)・准教授	准教授	〃
新 裕 史	企画情報室・技術職員(臨時任用)		〃
杉 本 亮	時間雇用教職員(海域陸域統合管理学研究部門)・教務補佐員(採用)		2008. 8. 1
原 田 百 聞	NaGISA プロジェクト・教務補佐員(採用)		2008. 9. 22
向 井 宏	有期雇用教職員(海域陸域統合管理学研究部門)・特任教授(採用)	北海道大学・名誉教授	2008. 10. 1
佐 藤 真 行	有期雇用教職員(海域陸域統合管理学研究部門)・特任准教授(採用)	地球環境学堂・助教	〃
西 岡 裕 平	北白川試験地・技術職員(採用)		〃
福澤 加里部	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター森林圏ステーション 助教	森里海連環学プロジェクト支援室・教務補佐員	2009. 2. 1
仲 豊 廣	定年退職	事務室・フィールド担当専門員	2009. 3. 31
長 野 敏	定年退職	芦生研究林・掛長	〃
佐 藤 一 夫	定年退職	舞鶴水産実験所・技術主任	〃
山 本 善 万	定年退職	瀬戸臨海実験所・技術主任	〃

(9) 規程の改正等

- ・「特任教員の称号を授与する研究員に関する申し合わせ」(平成 20 年 9 月 10 日制定)
- ・「京都大学フィールド科学教育研究センター海域ステーション瀬戸臨海実験所水族館観覧規定」の一部改正(平成 21 年 1 月 21 日改正・2 月 18 日改正)
- ・「京都大学フィールド科学教育研究センター長候補者推薦内規」の一部改正(平成 21 年 2 月 9 日改正)
- ・「京都大学フィールド科学教育研究センターの内部組織に関する内規」の一部改正(平成 21 年 3 月 18 日改正)
- ・「京都大学フィールド科学教育研究センター管理技術部組織規定」の一部改正(平成 21 年 3 月 18 日改正)

京都大学フィールド科学教育研究センター 年報 第6号
平成21年10月30日発行

発 行 京都大学フィールド科学教育研究センター
〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

印 刷 株式会社 北斗プリント社
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2

